

# 憑依拒否

茶ゴス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

色んな物を引き連れてリリカルな世界にやってきたのは転生者。

「え？憑依？嫌です拒否します。」

その結果生まれた最強人物。

原作とはかけ離れた舞台上で繰り広げるのは何か。

なお転生者は出ない模様。

更になのは様にも秘密が……

# 目次

始まってしまった	1
出会ってしまった	5
気付いてしまった	21
やりすぎてしまった	33
目を付けられてしまった	49
外伝：開放	58
外伝：忘却	68
閑話：そんな僕の日常	78
触れ合ってしまった	81
そして時は流れ	87
類は友を呼ぶ	95

加減を間違えると大変な事になる	100
閑話：高町なのはの独白	111
現れたのは白黒	120
夏、海、ピクニック	130
閑話：夢の世界の話	138
魔法少女リリカルなのは	
第1話「それは必然な出会いだった」	143
第2話「彼女の呪文はリリカルだった」	159
第3話「街は危険じゃなかった」	170

第4話「2人目の魔法少女と遭遇して しまった」	188	第12話中編「襲撃は突然に」	282
第5話「ゼロ」	202	第12話後編「神に抗う愚か者」	297
第6話「それは二度目の対峙だった」	212	第13話「随分と都合のいい事」	309
外伝：理由	217	外伝：願い	319
第7話「現れたのは執務官」	225	外伝：同族	341
第8話「それは、まずいことになりそう で」	235	外伝：捕縛	352
第9話「決戦場は上」	246	空白期第1期	357
第10話「それぞれの決意」	257	公認試練	369
第11話「偽物と本物」	271	猫屋敷	369
第12話前編「宿命を閉ざす時」	282		

山の中の決戦	381	現実編第4話「それぞれの思惑なの」	
魔法少女リリカルなのはA's		463	
序章	387	夢想編第5話「蒼光」	479
夢想編第1話「投影」	391	現実編第5話「格闘戦は苦手なの」	489
現実編第1話「はじまりは突然になの」	405	夢想編第6話「狐耳」	500
夢想編第2話「作家」	413	現実編第6話「反省会なの」	508
現実編第2話「戦いの嵐、ふたたびなの」	422	夢想編第7話「選定」	514
夢想編第3話「盟友」	433	現実編第7話「私も…そこへ」	532
現実編第3話「再会、そして大騒動なの」	446	夢想編第8話「騎士」	540
夢想編第4話「終焉」	456	現実編第8話「暗躍するプレシアさんなの」	547

第9話「クリスマス・イブ」	556
第10話「選ばれた者達」	571
第11話「総力戦」	583
第12話前編「夜の終わり」	593
第12話後編「旅の終わり」	607
第13話「まさか、こんなに眠っているとは」	618
後日談「返事」	626
番外編：もしも優が聖杯戦争に召喚されたなら	647
死亡	667
数年後	677
魔法少女リリカルなのはStriker	

S

第1話「派遣魔導師」	684
第2話「成長」	700
第3話「見本？」	710





## 始まってしまった

あれは夏の暑い日のことだった。当時幼稚園児だった私はその日も友人と遊び、日が暮れた頃に迎えに来た親の車の中で眠っていたのだ。

そこで私は夢を見た。幾多の世界を破壊した者と世界を救った者、世界を手に入れた者。その者たちの記憶を：

それから何か異変を感じた。夢の中だというのにそれはとてつもなく寒気がし、恐怖…というよりは憎悪するであろう物を感じ取った。

後からわかったが、これは他者が私の身体を依代に現界する前兆だったらしい。私は無意識というよりも反射的にそれに抗い拒否したのだ。

幸運なことにその者の気配はすぐに消え失せた。しかし、この身体にはあるものが残ってしまった。幾つもの記憶と人物の意思が

どうやら、私に取り憑こうとした人物が持つていたものらしく、状況を把握している者によると神様に転生なるものをさせて貰った者が望んだ力の副産物として多くの人物の意思が宿っていたようだ。

私に取り憑こうとした者、転生者は既にこの世界からは追い出されたらしく。今は違

う世界に行つたのか消え失せてしまつたのかはわからないらしい。

なんとしても私自身の身体を乗っ取られなくて済んだことに安堵してから私は気づいた。

何故ここまで冷静……いや、思慮深いのだろうか。

それについても私に宿る人物が推測を立ててくれた。宿る者の記憶を見て体験してしまつたために、精神が成熟してしまつたのでは？とのことだ。

だが、私自身の記憶は鮮明だ。先ほどまで遊んでいた内容は幼稚に感じつつも楽しかつたと思つている。

それこそが成熟した証だと指摘されてしまつた。

なるほど、幼稚だと考えてしまうのが既に一幼稚園児の思考ではないと？

馬鹿を言うな。いかに私の知識の奥底が見えないにしろ未だに私が幼稚園児であることには何ら変わりはないのだ。

このようなことを思考できる幼稚園児がいないと指摘しようが、そこに存在する以上どうしようもない事には変わりない。

それに、ある程度の子供っぽさを出していれば少し大人な雰囲気を纏つた子供であると考えられる程度だろう。

そう言つた事を告げると、私に宿つた人物は驚いたような表情で指摘してきた。

危機感が足りない所を見るに、感情面はあまり成熟していないと見えると

なんとアンバランスな精神なのだろうか。知識面や精神面が成熟しつつ感情面などは子供のまま

頭を抱えている私（夢）に対してさらに追い打ちを掛けるようにある者が高笑いを上げて告げた

「オレの知識がある程度なわけがなからう。既にお前の頭脳は人智を超え神をも討つ可能性を持つているぞ」

その人物は黄金の鎧をガシャガシャ鳴らしながら高笑いして私の奥底へ消えていった。

随分と自意識が高い人物のようだが、もしもだ。万が一あの人物が言っていた事が事実だとするならばだ

私、普通の幼稚園児じゃなくなってしまったのじゃないのか？

第2の地球の歴史とか恐竜が居た時代の人口とかって中学生あたりで習うよね？

肯定を期待しながらこちらを苦笑いして見ている人物に聞いてみたが、そのままの表情で頭を振られた

なんとという事をしてくれたのでしょうか。

転生者へ呪詛を呟きつつ私は夢の中から目覚め、未だに走っている車から流れる景色を見た。

あのUFOはどこへ向かっているのだろうか

それが私という物語の始まりだったのだ

## 出会ってしまった

転生者憑依未遂事件の日から一夜明けて僕は幼稚園に行くために制服に着替えていた。

精神的に成熟しようとして僕が幼稚園児であることには変わりはない。その為幼稚園、小学校、中学校と最低でもそれくらいの義務教育を終えないといけない。

そう言うのと通うのが嫌だというように聞こえるが、実際の所感情面は未だに成熟しておらず特にそんな考えには至らず、今日は何で遊ぼうかな？と考える程度だった。

まあ、遊ぶ前にやっておきたいことが見つかったため、今日は遊べないかもしれない。それには心底がっかりしたが仕方ない。恐らくは必要となることである。

昨日帰ってきてから就寝し、その時に見た夢で僕の中にいる人達と会った。

取り敢えずは自己紹介とこれからの事を話し合ってみた。その結果色んな事と問題点が発覚してしまったのだ。

まずは話せた人物たちから名前と年齢を聞いた。

話せたというふうにはまだまだ僕の中には色んな人がいるらしく、勘弁してくれと感じてしまったのは仕方ないだろう。

話せた人たちは年齢から順に

カイウス・クォールズ 18歳

エミル・キャスタニエ 19歳

シング・メテオライト 19歳

ルドガー・ウイル・クルスニク 20歳

ルカ・ミルダ 22歳

ヴェイグ・リユングベル 22歳

ルーク・フォン・ファブレ 23歳

セネル・クーリツジ 23歳

カイル・デユナミス 23歳

アスベル・ラント 23歳

ジュード・マテイス 24歳

ユーリ・ローウエル 24歳

・ロイド・アーヴィング 25歳

リッド・ハーシエル 25歳

クレス・アルベイン 26歳

スタン・エルロン 27歳

以上16人だったわけだが、見事に日本人などはいなかった。

聞く所によるとどうやら異世界の住人らしい。しかも全員が何かしらの偉業を成し終えた人達ばかりで、僕としてはとても軽口を叩こうとすら思えなかった。

本人達から言われたため、タメ口で話してはいたけど

また、スタンさんとカイルさんが親子であるように、時間をも超越して僕に宿っているらしい。ジュードさんがルドガーさんを見てすごく嬉しそうにしてたのは印象的だった。

そして異世界人だから言葉が通じるのか？と考えたが、どうやら全員が意思であり本人ではないため種族などはあまり意味を持たないそうだった。

この中には昨日高笑いしていた金色の鎧の人は居なかった。

とまあ、僕の中の人達の説明はここまでにして、この人達は少しだけ転生者が転生する世界：つまりこの世界のことを知っていた。

何でも次元空間により多数の世界と行き来でき、魔法という概念が存在するのだとか。

結構危険な事もありそうなので力を付けるべきだとクレスさんが言っていた。

僕はクレスさん達が習得している技は形だけは使えるらしく、後はある程度師事を受けることにより戦いの基本はどうとでもなるこの事

しかし、夢の中でしか出来ないため、起きている間はこの世界の魔法を修得するために動いたほうがいいと言われた。

使える力は出来るだけ使う方がいいと言っていたけど、同時に力の使い方を間違っ  
てはいけないとも言われた。

これが夢の中の会議で決まった事であり、僕がやるべきことは魔法の習得なわけだ

しかし、何の情報もなく手探りなわけで、どうすればいいのかがわからないという問題が発生してしまっているのだ。

まあ、あまり焦る必要は無いと言われたので気長にやっっていこうと思っている。

だけど、昨日は色々とありすぎたため情報を整理するために今日は時間を使うだろう。

その為にノートと鉛筆を母親に買ってもらうように頼んだ所、少し疑問に思っていたようだが特に問題もなく了承してくれた。幼稚園に送る時に買ってくれるとのこと。

その事に感謝して、またいつかプレゼントでもしようかな？と考えた。



ノートに変な事を書き込んでいようが所詮は子供の書物。中学生あたりが書きそうな内容もあるため特に問題視はされないだろう

まあ、極力見られないようにすることには変わりないけど。

帽子を被った所で母親に呼ばれたため、玄関へ向かう。今日はいいことあるのかな？



途中コンビニでノートと鉛筆を購入した母は僕に渡した後幼稚園に向かった。

母親は僕の送迎には車を使用している。僕は流れる景色を見つつ自身のスペックを確かめていた。

通常よりも細部まで見える視力

その気になればすれ違う対向車の車内に置かれたCDのタイトルを気軽に見ることの出来る動体視力

あまりのハイスペックさに少し目眩がしたがこれからはこの身体で生きていくのだ。

文句を言う無駄なことはない。

と、一人遊びをしていた所で幼稚園に着いた。母親は僕を降ろした後、少し先生と話をして帰っていった。

先生は他の園児達の面倒も見なくてはならないため、僕に教室に行くように言った後、入り口に向かった。

足早に教室へ向かい、そそくさと制服を着替えた僕は早速持ってきた新品のノートへ書いていく。鉛筆は教室に置かれていた鉛筆削りを使用して削りながら文章を書く

まず最初に異世界について、次に僕に宿った人達の記憶からの情報、その後昨日出てきた金ピカさんについての考察

最後は魔法について考えうることをまとめていくつもりだ。

取り敢えずは朝の休憩時間は異世界についての纏めが非ぬ方向（異世界の概論とその定義、発生する仮定）に行ってしまった所で終わってしまった。

書いている間も友達が話しかけてきたり、遊びに誘ってきたりしたが、明日誘ってと断りノートを書いていた。

興味津々で僕のノートを見ていた子もいたけどいまいちわからない文章が続いていたため、次第に興味も薄れていき外へ遊びに行っていた。

ある一人を除いては

幼稚園の制服にたかまちと書かれた名札をつけた人物。高町なのはは前々から周りの子とは違った子だと認識していた。

精神が成熟した今だからこそ言えるが、あの立ち振舞は同年代の子供と遊ぶというよりは、自分の子供と遊ぶ親のような感じだ。

僕と同じ様に憑依を拒否したのか？とも考えたが、初めて会った時から変わらなかつたため高町なのは自体の人格がそうなのだとは結論付ける

その高町なのはは、僕が書いているノートの内容に驚いているようだ。漢字も使われているから読めもしないだろうが、その後は興味深そうに僕のことを見ていた。

後から考えてみたが、漢字を使っている時点で幼稚園児としてはおかしい部類に入るな。両親の耳に入ったら色々とまずいことにもなる。先生方に見られて無くて助かつた

昼休憩、僕は今日食事当番では無かつた為、他の園児がお弁当を運んでくるのを残つた友達たちと一緒に話しながら教室で待っていた。

もうそろそろ来るかな？と思っていった時だった。僕は一人の女の子に話しかけられる

そう、高町なのはだ

何故か変なテロップが頭のなかで流れたが、特に気にも止めずに返事をする。

話の内容は質問と回答だ。

質問の内容は「朝に書いていた難しい文章は何だったの？」

それに対して僕は「親が読んでいた本の内容を書いていた」と回答した

高町はそう、と言うと自分の席に戻って他の女の子と話し始めた。

少し警戒して言い訳したが考えすぎだったか？と思った所で食事当番が弁当を持ってきた。今日は好物のサンドイッチだ

因みに好きな中身はチーズだと言っておこう

昼食を食べ終えて自由時間。友達に朝に「今日は遊べない」と伝えていたため、僕には何も言わずに外へ遊びに行つた

僕はノートを取り出し書き込んでいく。幸いにも先生方は折り紙で遊んでいる子達につきつきりだ。今ここには僕以外には高町なのはしからない。

寧ろ何故高町なのはがここにいるのが疑問に思うけど考えていても仕方ないので情報をまとめていく

クレス・アルベイン

一人称僕

時空剣技が使える

片手で剣を振るう

スタン・エルロン

一人称俺

ソーディアン・ディムロスのマスター

炎の技や術を使える

片手で剣を振るう

カイル・デュナミス

一人称俺

風の技や術を使える

片手で剣を振るう

リッド・ハーシエル

一人称俺

極光術を使える

片手で剣や斧を振るう

腕に盾を装着

ロイド・アーヴィング

一人称俺

二刀流剣士

左右の手で剣を振るう

ヴェイグ・リユングベル

一人称俺

氷の技を使える

両手で大剣を振るう

セネル・クーリツジ

一人称俺

格闘技を使用

グローブを拳に付けて殴る

ルーク・フォン・ファブレ

一人称俺

剣技、術、超振動を使える

片手で剣を振るう

カイウス・クロールズ

一人称俺

獣となれる

片手で剣を振るう

ルカ・ミルダ

一人称僕

炎の技を使える

両手で大剣を振るう

エミル・キャスタニエ

一人称僕

精霊の力を使える

片手で剣を振るう

シング・メテオライト

一人称俺

光の技を使える

盾形ソーマから剣を取り出す

ユーリ・ローウエル

一人称俺

狼をイメージした剣技を使える

片手で剣や刀を振るう

アスベル・ラント

一人称俺

抜刀術帯刀術を使える

片手で剣や刀を振るう

ジュード・マティス

一人称僕

護身術が使える



グローブを拳に付けて殴る

ルドガー・ウイル・クルスニク

一人称俺

武器を持ち替える事が出来る

骸殻<sup>ガイカク</sup>を使える

双剣、双銃、ハンマー、槍を使用

戦闘スタイルを書き込み、今度はキンピカさんの情報を書き込んでいく

一人称俺

金色のゴツゴツした鎧

人知を超えた知識

自意識<sup>ジイシキ</sup>が高い

これだけしか無いか。じゃあ続いて魔法に関して

情報によればこの世界での魔法は科学の延長線上のものらしい

魔力を消費し魔法を発動出来る

科学の延長線上ということから何かしらの機械を使用して発動する？  
魔力にはランクがある

とここまで書いた所でずっとこちらを見ていた高町なのはがノートの内容に驚いていた。

なんだろう、またよくわからないから驚いているのかな？それにしても様子が…と、いきなり手を掴まれた

そのまま高町なのはは僕を引っ張り人気のない所へ。え？一体どういうこと？ノートは持つてるから他の人には見られる心配は無いけど…

「少しいいかな？」

息を上げながらこちらを見てくる高町なのはに言い知れぬプレッシャーを感じつつ  
頷く

「どうして魔法の事を知っているの？」

なんだっけ？こういう子の事なんて言うんだっけ？不思議ちゃん？

大人っぽい感じが中学生だとは思わなかったよ。僕から見たらあまり大差ないけど  
さ

少なくとも僕の周りでは魔法が常識ではないことは理解している

だから高町なのはが本当の魔法という物を知っているのはあまり考え難い  
でも万が一本当の魔法のことを知っているならば…

「どうしてって、皆知ってるでしょ？僕も使ってみたいよ。何でも出来そうだし」

しらを切れればいいだけの事。まだ力不足の現段階で実物に触れる危険性は避けるべきだからね

高町なのはは僕の回答にポカンとした表情を浮かべた

「君も魔法使ってみたいの？」

「え？…う、うん。使ってみたいな」

高町なのはは首を傾げながらそう返答した。

反応から察するに、万が一がありえるかもしれない。これからは警戒しないといけな  
いかもしれない

「仲間だね！……ええつと高町？」

「あ、なのはって呼んでくれていいよ」

「わかったよ、なのはちゃん！僕は優って呼んでね！」

スラスラと返答していきながら考える。まあ、警戒はするけど友達が増えることにな  
るかもしれないし、別に今の状況が酷いってわけでもないね

これが、僕となのはちゃんの出会いだった

## 気付いてしまった

高町なのはによるアプローチ事件から1日が経過した。既にある程度の計画を立てた僕は友人と遊んでいた。

遊んでいたのだが…

「うわ、はえええ…」

「すっげえ」

人外と化してしまった僕が友人と遊ぶのはとても大変で、どれだけ手加減してもその違いが明確に出てしまう。

現在は鬼ごっこ中なのだが、わざと転んだ時以外に鬼にはなっていない。なんだろう  
か、無性に悲しくなってきた。

でも泣かない。男の子だから

「……………」

もう一つ悲しいことがある。何故かとは言わないが魔法少女疑惑（スタンさん談）をかけられている大人な幼女、高町なのはちゃんが事あるごと、いや寧ろずっと僕の方を見ているのだ。

それを見ていた先生はなのはちゃんがそう言った事に興味を持つのは珍しいと興奮していた。恋？恋なのね？って言ってたけど、幼稚園児って恋とかするもののかな？少なくとも僕はいまいちわからないや。

今一番好きなのは母さんだし。次は勿論父さんだよ

まあ、わからないことをいつまでも考えるのは意味のないことだね。やってくる鬼から逃げつつちらりとなのはちゃんの方を見る。

ん？…今何か変なもの感じた気がするけど…

気のせいかな

滑り台の手すりにジャンプして掴まり、そのまま滑り台の上に登る。直ぐに鬼も登ってくるが、今度は滑り台を走って降りる

遠くから危ないからやめなさいとの声が聞こえた。失敗失敗

今度はジャングジムへ一足で届くだけの場所に手を伸ばし、そのまま腕の力で自分

の身体を持ち上げる。思ったよりも自分の体重が軽いことに気付いたんだけど、流石に片手で持ち上げたのは驚いたかな。

鬼は違う子を追いかけに行っただようでこちらには来ていない。僕はジャングルジムの頂上に登り上から見回す。

ブランコに乗りながらどちらが高く漕げるか勝負している女の子

砂山をぺたぺたしている男の子

鬼を挑発してすつ転んでいる友人

白熱したドッジボールを繰り広げている先生と男の子達

花壇の花を見て何かを話している女の子達

こちらをじーつと見ているのはちゃん

地面に半分埋まったタイヤを跳び箱に見立てて跳んでいる男の子

憑依なんて無ければもつと自然に混ざれたのかな。

何か込み上げる物を感じて目が熱くなる。視界が少し歪んでしまったため、服で目を擦って誤魔化す

なんだよ、さつきは泣かないって決めてたのにふと考えこむとこれだ。いけないな、これじゃあ。

3秒間だけ服を目に押し付けた後ジャングルジムを飛び降りる

鬼になった友人を挑発してそのまま逃げる。  
なんと言われようと僕は僕なんだから

「まて！ゆう！」

「またないよ！」

今という時間はきつとかけがえの無い物だと思っから。



「何であの子泣いてたんだろ」

先程からおよそ子供とは思えない動きをしている少年、藤崎優君は先程ジャングルジ



ムの天辺で涙を流していた。

突拍子もなく泣いていた事に疑問を抱いた私は更に混乱する。

昨日あの子が書いていたノート、普通に漢字を使ってよくわからないことを書いていた。

でも、その中であの子はいきなり魔法について書き始めたのだ。

地球ではまず見ることの出来ない魔法。将来的に私が深く関わっていく世界を何故知っているのだろうか

彼に聞いただけだしてみたが、返答は期待していたものではなかった。子供らしい憧れを言われただけだったのだ

だけど、それじゃあ昨日のノートは納得出来ない。彼は親の持っている本の内容を書いていたと言っていたけど、まずその時点でおかしい

どうして幼稚園児が本の中身をノートへ書くのか。

内容も一貫性の無いものばかりだったのにそれが書籍化しているとは到底思えない。

彼の親が魔法に関わっているのかも知れないが、私の勘だと彼自身が何かを隠している気がする。

でも、少しわかりやすく魔力を出しても気付かない彼は本当に魔法について知っているのだろうか。

「藤崎、優」

彼の名前を呟いた。

もう少し彼を知るべきだと思う。彼が涙を流していた理由、あのノート真相、私が結婚出来るのかどうか。

気になったら行動あるのみだね



幼稚園が終わり、僕を含め何人かの親が迎えに来たと先生が言った。

制服に着替えていた僕はそのまま鞆を持って先生のところへ歩いて行く。

少し遅れて何人かの子が先生の前にやってきた。その中にはこちらを見ているのはちちゃんの姿もあり……

「……」

未だに無言で見てくるので取り敢えず笑顔を向けといた。

それに先生は何故かいい顔をしてそのまま僕達を連れて行く

何やら激しく勘違いされた気がしたけど気にはいられないか

そう言えば今日のご飯はチーズカツだって言ってたな。今から楽しみだ

後、ルドガーさんの料理が美味しいらしいからぜひ食べて見たいんだけど。どうしたらいいのだろうか

廊下を歩き、入り口に差し掛かった所で何人かの親が話している姿が見える。

その中にはスーツを着て猫を撫でくりまわしている母の姿も見える。何か一人だけ

浮いている気がしなくともないけど、気にせず先生にさようならと言って母のそばに  
寄る

「お母さん、にゃんこ可愛いね」

「ん？ 優か。そうだな、可愛いだろ？ 雅人さんがアレルギーじゃないのなら飼っていた  
と思うな」

母は僕の頭を撫でてそう笑った。雅人とは父の名前で軽度の猫アレルギーを持って  
いる。

軽度だから毛くらいじゃあ問題はないけど、流石に猫自体がいるとしんどいらしい

「じゃ、帰るか。今日は約束通りチーズカツだからな」

「やったあ！」

母に手を引かれ歩いて行く。気分はウキウキしているのが自分でもわかる。美味し  
いものに期待するのは人外になっても変わらない

「優くんー！」

と、駐車場へ向かう僕を呼び止める声。振り向くとそこにはなのはちちゃんと美人な女性が。どこと無くななのはちやんに似ている所から察するに姉かな？

なのはちゃんは僕の目の前まで来ると少し息を吸ってこう言った。

「明日の土曜日一緒に遊ぼう？」

うん。ただの遊びのお誘いだった。実は少し警戒していたというのは秘密だ。

漢字書いてた所暴露されたらどうなるかわかったものじゃないしね

それよりも休みの日の遊びかあ。僕は母の顔を見て遊んで良いのか聞いてみる

「ああ、遊んできていいよ。土曜日は私も雅人さんも仕事だから丁度いいしね。優が病院に来たと言って言うなら別だけどさ」

そうなのだ。基本的に土曜日は母親の仕事場に連れてかれて時間を潰すのだ。託児所があるからそこまで苦にはならないけど、今の僕にはどれだけ苦になるか

「それじゃあ私の家で遊ぼうよ！」

まあ、親がないから僕の家は除外して外かなのはちゃんの家くらいしか選択肢はないしね。

でもいきなり家にお邪魔してもいいのだろうか…

「ウチは大歓迎よ。なんなら泊まっていつでもいいしね」

いや、お姉さん。いきなりお泊りってハードル高くないですか？

母もすっかり乗り気だし、このままじゃお泊りコース待った無し

って、何か話の様子的にお姉さんってのはしっくりこないな。どっちかというところ…母親？

「いいの？お母さん」

わお、本当に母親だったよ。見た目は全然そうは見えないんだけど…

「じゃ土曜日はお願いします」

「いえいえ、責任を持って預からせていただきます」

世の中不思議なこともあるもんだと感じながらうんうん唸っていると僕のお泊りが決定したようだ。

まあ、別に断る理由もないからいいんだけどね。せっかく出来た友達とは仲良くしたいし

それから、行く時間を決めて僕と母は帰路についた

僕は手を振るのはちゃんに手を振り返しながら車に乗り込んだ

帰り道、車の中で母はこう言った

「可愛い子捕まえて、やるじゃん。優」

母よ、それは幼稚園児に言う台詞だろうか。



## やりすぎてしまった

どうしてこうなってしまったのだろうか。今はただそれだけしか考えられない眼前に佇むのは木刀を両手に持ち息を吐いて集中している青年

顔は大変整っており、格好いいお兄さんといった感じだろうか

少し視線をずらすと僕とお兄さんを見ているこれまた若々しい男性

あれで3児の父親だというのだから本当に驚きだ。高町家は若返りの秘術でも持っているのではないのか？と考えたがよくよく考えて見れば自分に宿ってる人達も見た目と年齢は噛み合っていない

あれかな、普通はある程度成長したら見た目の成長も止まるのだろうか。いや、そんなことはないと思う

両手に持つ木刀を握りしめる

僕の背丈にはあまりあっているとは言えず、始まったもいない今は木刀の先が地面についてしまっている。

始まったら逆手に持ち替えるけどね

夢での修行を始めてまだ間もない。クレスさん達の剣技を習得するにはまだまだ時

間が足りないわけで……今回は少しだけ教えてもらったルドガーさんの剣技を使おうと思おう

ただ使うぶんには問題はないけれど、使いこなせているわけではない。寧ろ未だに把握しきれていない自分自身の身体能力でどうなってしまうのかが心配だ。

ああ、本当に……どうしてこうなってしまったのだろうか

◇

遊びのお誘いby高町なのは事件からあつという間に土曜日となり、僕は着替えと父から渡された紅茶の葉を鞆に詰めて道を歩いていった。

事前に高町家の場所は地図で把握しており、両親に自分で行けると言って家を出た。道中首から下げた水筒に入ったお茶を飲みながら考える。

一人で歩くのって楽しいな。いつもは母と父のどちらかがすぐ隣に立って歩いていた。

そうでなくても幼稚園の先生だとか、大人が絶対にいたのだ。でも今は僕一人歩いている。いつもとは違うふうに見える景色に心が踊りながら歩を進めていく

今ならどこまでも行ける気がする。幸か不幸か、僕は人外級の身体能力を持っている。

それは体力にもいえるようで、どれだけ歩いても疲れない。それはとても悲しいことだと思う。みんなと違うのは格好いいけど寂しい

でも、僕は絶対に独りになることはない。

昨日の夜、ユーリさんに言われた

「お前がどう思われようが関係ねえよ。絶対にお前を大事にしてくれる奴が現れる。少なくともここにいるだろ？」

いまいちわかんなかったけど、簡単に言うとうーりさん達がずっと友達で居てくれるってことだった。

友達が離れていくのは悲しいとは思うけど、ユーリさん達がいるから僕は独りにはならないと言われた。

また泣いちゃった

でも、もう泣かないと思う。だって頼りになる人達がいるんだから

少し感傷に浸っているという幼稚園児らしからぬ事をやってしまっていた僕の目の前を黒猫が横切る

綺麗な毛並みに澄んだ瞳。ピンと立った尻尾を振りながら歩くその姿はとても凛々しくて

取り敢えず捕まえることにした

地面を踏みつけ走る

景色が後ろに流れていく。それはいつも見ている車の外よりも速くて、空気は壁のよう感じてしまう程だった

それでも僕の目は黒猫を捉えている。

猫が驚きその身を屈めようとしているのがわかる。

でも、猫が足に力を入れて地面を蹴るよりも速く僕は猫を捕まえた

「ニャッ」

両手で包むように捕まえたけど、衝撃は消しきれなかったらしく猫は少し苦しそうな

声を上げた。

僕は直ぐに猫に謝り、その頭を撫でた

その手触りは心地よく、その毛並みは近くで見れば見るほど綺麗だった。

爪を立てて離れようとするけど、まだまだ離さない。好奇心は猫をも殺すとはよく言ったものだと思う

……使い方が違うね

そのまま撫で続けていたけどあまり高町家の人を待たすわけにもいかないため、名残惜しいけど猫を手放す

猫は一度こつちを見た後そのまま走り去っていった。また会えるかな？



高町家に着いて迎えてくれたのはなのはちちゃんとお姉さんの美由希さんだった。僕が紅茶の葉を美由紀さんに渡した後、なのはちちゃんから両親は喫茶店で今も仕事をしていると聞かされた。

少し遊んだ後はその店、翠屋に行くらしい。なのはちちゃんが言うにはシュークリームがとても美味しいから今から楽しみだ。

取り敢えずなのはちちゃんの部屋へ向かう。美由希さんは途中で「後はごゆっくり」と告げた後リビングらしき所に行ってしまった。

なのはちちゃんがドアを開けて僕が入る。

女の子の部屋にはいるのは始めてだけど、思っていたよりも普通かな？もつとぬいぐるみで溢れかえっているのかと思っていたよ

というよりもお姉さんが居るのに幼稚園児で自分の部屋があるって凄いな。何か大きな道場みたいな建物もあつたし、もしかしたら高町家はお金持ちかもしれない。

いつかは僕もお金稼がないとね。借金しちやったりしたら大変だし

……何故かルドガーさんの泣き声が聞こえた気がした

なのはちちゃんはベッドに座り、僕は勉強机の椅子に座った

「……………」

「……………」

【拜啓、父さん 沈黙が痛いです】

なのはちゃんは一切何がしたくて僕を遊びに誘ったのだろうか。もしかして何も考えていなかったのかな？

じゃあ、僕が提案したほうがいいのかもしれないけど…

「何して遊ぶ？なのはちゃん」

「うーん。何しようか」

何も考えていなかったようだ。

じゃあ、折角だしこの大きい家でかくれんぼでも

「それはダメだと思うの。あまりお兄ちゃんの部屋とか行ったらいけないし」

「ダメかあ。じゃあ外で鬼ごっこ？」

「なのはいいけど、足遅いからつまんないと思うよ？」

なんというダメだし。なのはちゃんはどうして僕を呼んだのだろうか

「なのはね、優君とお喋りしたかったの」

「お喋り？」

「うん」

聞く前に目的を言われてしまった。というよりも言ってくれた。

それにしてもお喋りするためにわざわざ家に呼ぶって、女の子だったら普通なのか  
なあ

まあいいか

「優君って魔法があるって信じてる？」

また魔法かあ。これはやっぱりなのはちゃんは魔法の関係者と見てもいいのかなあ



とすればもしかして高町家全員が関係者かも

そして、魔法について探っている僕を倒すために招き入れたのかもしれない

「信じるよ。だってそつちの方が素敵でしょ？」

「うん、そうだよね。」

「じゃあ、今度は僕から聞こうかな」

僕を追い詰めるつもりかもしれないけど、そうはいかない。取り敢えず牽制

「どうして、僕に聞いたのかな？」

「え？聞きたかったからだけど？」

……普通に返答がそのまま返ってきて驚いた

「うーん。理由が知りたかったんだけど……」

「何か、優君は普通の男の子とは”違う”気がしたの」

…改めて言われると悲しくなるね。自覚はしているけどね  
だけど

「じゃあなのはちちゃん。普通ってなに？」

「え？」

なのはちゃんはキョトンとした顔でこちらを見ている

僕はあくまで平静を保ちながらこの質問を行った。昨日のユーリさんの言葉がなかったら少なくとも今みたいに平静を保ってなんかは居られなかったと思う。

「…僕はあまりわからないんだよね。自分が普通だとかどうかなんて。だって、友達と僕の違いを見つけるのは出来るけど僕は「普通の人」というものを見たことがないから比べられないよ」

「……………」

少し意地悪な質問だったかな。幼稚園児が答えるような内容では無いし、大人でも答えを持たない人もいると思う。

寧ろ、子供だからこそありのままに言えるのかもしれない  
だけどなのはちゃんは少し顔を伏せて考えている。その様子はとても幼稚園児の行  
動とは違う

だからこそ、気付いたのだ。

なのはちゃんはこの質問の意味をわかっているのだと  
答えのない質問に。

だからこそ、僕は少し同族意識を持つてしまった。この子もまた、”違う”んだって  
「そんなことより、ゲームでもしない？」  
「う、うん！」



なのはちやんが言ったとおり、翠屋のシュークリームはとても美味しいほんのり香る甘さに生地の上つとり感。ベタベタしているわけではなくて、さくつとしつとりと言うもの

こんな美味しいシュークリームは食べたことがないと言うと、なのはちやんは自分の事のように喜んでいた。

紅茶を飲みながら、さつきやったゲームについてなのはちやんと話す。

意外にもなのはちやんはゲームが好きなようで、その操作は慣れているようだった。僕がしたことのないゲームだったので教わりながらやっていたのだけど、とてもおもしろかった。今度母に頼むのもいいのかもしれない

ゲームの話も終わり、幼稚園での出来事について話し始めた所で、一人の男の人が近づいてきた。

誰だろうと思っていると、なのはちやんから高校生のお兄さんの高町恭也さんと紹介された。軽く挨拶をして話をする

正直話す事がなくなってきたので助かった。時々僕を見る目が怖かったけど気のせいだと思う。

恭也さんと話し込む。なのはちゃんよりも話しやすいのは内緒だ。僕には兄弟がないからよくわからないけど、兄がいるのはこんな感じなのかとも感じた。暫くするとなのはちゃんも話したのになのはちゃんも話した。

折角遊びに誘ってくれたのに本人をほったらかしにしたらいけないよね。

そう言った時に恭也さんに普通の男の子よりも大人だと言われた時は少し胸が傷んだ。

まあ、言われても仕方ないので、さつきよりは気にならずに受け答えることが出来た。

途中で美由希さんも加わって話し込んでると、翠屋の閉店時間となり、高町家に帰った。

高町家に着いたら、またなのはちゃんの部屋に行き、2人でトランプをしてご飯の時間まで遊んだ。

一番最初にスピードをしたのだけど、あつという間に僕が勝ってしまい、スピードは1度しかしなかった。

それから色んな事をしたけど最終的にはトランプタワーを作る遊びに落ち着いた。

絶妙なバランスで組み立てられてくランプタワーも6段目を作ろうとしたのだが、ここでランプの数が足りなくなると言うトラブルが発生。

2人してどうしようかと相談しながらあれやこれやをしていると、ランプタワーは音も立てずに崩れてしまった。

結構苦勞していた物があっさり倒れてしまつて、何だかおかしくなつてしまい、なのはちゃんと顔を見合わせて笑つた。

そのタイミングで美由希さんがやつてきて夕飯が出来たと言つてきた。僕となのはちゃんはランプを片付けると一緒にリビングへ向かい夕食の用意がされているテーブルの前にある椅子に座る。

先に席についていた若い男の人がなのはちゃんの父親の土郎さんらしく、今日は楽しんでいきなさいと言われた。

少しして桃子さんが席に座り、夕飯を食べ始めた。

食事はとても美味しく、パクパクと食べ進めていく僕は、その様子を見ている桃子さんにいっぱい食べてねと言われた。

食事の後はお風呂に入り既に瞼が重くなり始めていた僕はなのはちゃんの部屋に敷

かれた布団に倒れこみ夢の世界へと旅立った



「また変わった子をなのは連れてきたんだな」

「ああそうだね。あの年にしては随分と落ち着いている気はするけど、概ねいい子だったね」

「確かに。だけど一緒に風呂入った時に気付いたんだけどさ。随分と筋肉の付き方が綺麗だった。無駄が一切無いような」

「なるほど。一度稽古を付けるのもいいかもしれないね」

「まあ、程々にしてあげてよ？父さん」

「わかってるさ」



翌朝目を覚ました僕はまだ眠っているのはちゃんを起こさないように部屋を抜け出した

そして好奇心旺盛な男の子よろしく高町家の探検をし始めた僕を道場に居た恭也さんが捕まえ、運動をしようって事で道着に着替えさせられて一緒に木刀を振るったりしていた後に土郎さんが恭也さんと試合してみようと言出し文頭に至るわけだ。

いや、幼稚園児と木刀で試合するって普通じゃありえないと思うんだけどね。



## 目を付けられてしまった

人生最初の戦い。自分よりも大きな体躯で実力も相当なものだと予測できる恭也さんの動きを見る。

まっすぐこちらを射抜くように見る目から察するにこちらの出方を見ているのだろう。恭也さんからすれば僕に稽古を付けているようなものなのだから当たり前ではあるけど…

両手の木刀を逆手に持ち替えた後、走りだす。ドタドタと幼稚園児の走るであろうスピードで

それに恭也さんは反応し、迎撃の体勢なのか一歩後ろに下がった。僕はそのままスピードを変えずに恭也さんとの距離の所まで走る。

恭也さんの足を注視し、力が加わったのを確認したと同時にこちらも足を精一杯踏みしめて加速する。

「舞斑雪ー！」

「なっ!？」

脇をすり抜けるように加速し、それと同時に薙ぐ

しかし、恭也さんはとつさに横に跳び木刀を避けた。

更に足に力を込めて切り返す。まだ成功率は高いとは言えないが何故か必ず成功する気がする。

「斑雪返し!」

ノークッションで繰り出された技に恭也さんはかわしきれず、右手に持った木刀で防いできた。まだ僕が未熟とはいえこれを防ぐなんて。どんな反射神経しているのだろうか

だけど、恭也さんはガードのために足が止まっている。

再度床を踏みしめて今度は前に回転して跳びながら切り返す

「重裂波!」

両手の木刀を思いっきり叩きつけるようにして振り下ろす。

回転の力も加わり、恭也さんの体勢が少しだけ崩れた

「虎牙破斬！」

切り上げ、切り下ろし、着地。なんとか形にはなったといったものだけど、なんとか成功

切り上げは脇腹、切り下ろしは肩へ当たった。そして地面を踏みしめて両手に力を入れる

「双針乱舞！」

双剣での乱舞。ルドガーさんのおきで真っ先に教えられた技だけど、一番習得には時間がかかりそうな技

だけど、それだけあってとても強力なものらしく、ここぞという時に使っていけと言われた。

身体を回転させ、両手の木刀での切り上げ

左手で切り下ろし、右手で切り上げに続き左手で切り上げ

回転するように右手、左手での切り下ろし

少し跳び上がりつつ右手での切り上げ

交差させるように両手での切り下ろし

最後に蹴り上げつつ後方へのバックステップと発動させるのだが…

「あつ」

最初の切り上げで木刀がすっぽぬけて、あらぬ方向へ回転しながら飛んでいき、カランと音を立てて道場の床に落ちてしまった

その切り上げも恭也さんにガードされていて、なんとも言えない雰囲気となつてしまった

「…そっ、まで」

土郎さんの言葉とともに一気に疲れと痛みが身体を襲う

おそらくは未だに身体が技についていけないのだろう。

僕の腕はプルプルと震えて握力もないようなもの。足の筋も痛めたようで、歩くのが億劫だ。

だけど、もうちよつとで勝てそうだったのに

「凄いよ！優君！」

いつの間にかいた美由希さんが近付いてきて僕を抱きかかえる。結構力あるんだね  
それより、少し汗かいたんだけどいいのかな？

「お前は何処かで剣術でも習っていたのか？」

恭也さんが木刀を持ったまま近付いてきた。そのタイミングで美由紀さんにはおろ  
してもらい、恭也さんに視線を向ける

どうだろうか、一応は習ったみたいなものだけど…

ここで習ってないというのは無理があるかな。技名も叫んでたし

「うん。ルドガーさんが教えてくれたんだ。使い方は教えてもらえたけどまだ使いこな

せなくて」

「そうか。だけど気をつけろよ？まだ身体が出来てないのにそれだけ動くのはよくないからな」

「そうなの？」

まだ筋が張ってるけどそこまで酷いってわけじゃあ無いんだけどさ。まあ、使いこなすには反復は必要そうだけど

っと、恭也さんと話していると審判をしていた土郎さんが僕の頭を撫でてきた。一体どうしたんだろうか

「君に教えた人の流派は何て名前かわかるかい？」

流派か。ええっと、クレスさんはアルベイン流でルークさんはアルバート流、他の人は名前が無かったんじゃないやなかったっけ？しかも、大半が我流だったと思うし。

今回のルドガーさんの技に名前は無かった筈だ

「無いよ。ルドガーさんの我流だし」

「我流でそこまでの使い手がこの辺りにいるとはね。もしよければ会うことは出来ないかな？」

うん。無理だね

なんたつてルドガーさん達つて僕の中にいるんだし

「無理だよ。だつてもういないし」

「いない？」

「うん。遠い遠い所へ行っちゃったんだ」

夢の世界に行かないと会えないんだよね。

だけどユーリさん曰く繋がりが強くなつてくると普通に話せるようになるらしい

「……そうか」

「……？」

何故だろうか。土郎さんの目が少し優しくなつて撫でてる手も僅かに触り方が柔ら

かくなつた

少し勘違いされてる気もするけど、まあ気にする必要もないか

「美由希、優君を風呂に連れて行ってあげなさい。」

「わかつたよお父さん」

美由希さんはまた僕を抱きかかえて歩き出す。

美由希さんが僕を見る目も優しかったのは何故だろうか。



「……大丈夫か？ 恭也」

「ああ、父さんと稽古した時の方が痛むよ。体重が無いから威力がそこまで乗っていないってのは正直助かった」

「逆を言えば、お前にそれだけのダメージを出したのが単純な腕力だけだったというこ



とだが」

「なのはと同じ年とは思えないな」

「あの子に剣を教えた人、ルドガーさんと言ったか。聞いたこともない名前だ」

「最後に出そうとした技の初動の速さは神速を使った父さん並だったよ」

「わかっている。おそらくあの子は身体能力だけでなく、動体視力や反射神経も優れているのだろう」

「優れているレベルでは無い気がするけど」

「勿論それだけでは無いさ。あの技の一つ一つがあの子を昇華させていたのだと思うね。まあ、まだ身体がついていけてないようだけども」

「あの年であの強さなんだ。将来的には相当な実力を持つな」

「僕を悠々に越えていくだろうね。それを間違った使い方をしなければいいけど」

「ああ。だけど父さん、優が言っていたルドガーさんと言うのは」

「……名前からして外国人だろうし海外にいるのだと思う。しかし、優君が言った時にした目はもう会えないと言っているようだった」

「…父さん」

「ああ、優君がいいと言うのなら、彼をこの道場に通わせたいね」

## 外伝：開放

あれはいったい何時の事だろうか。

僕が友達と遊び、笑い、怒り、泣いたあの日常を奪われたのは

忘れられる筈もない日のことなのに、憎しみや悲しみがまったく感じることが出来なくなってしまった

転生者。僕から全てを奪い、僕の居場所に平然とした顔で居座るイレギュラー

僕は力と知識を携えた藤崎優の冒険を見続けることしか出来ない。ただ、目の前に映る画面を見て、何も思えずにただ記憶が刻み込まれていくだけ

高町なのという少女に近付き、フエイト・テスタロツサという少女に近付き、八神はやてという少女に近づく藤崎優を僕はただ見るだけ

少女たちに相手にされずに憤慨する藤崎優転生者がいる。

自分の力に酔いしれる藤崎優転生者がいる

そして、ただ生きたいと願う藤崎優ぼくがいる

——願わくば誰か、僕を助けてくれ

『…いいだろう』



「なのは、ジュエルシードは封印出来たのか？」  
「うん、出来たよ藤崎君」

魔法による激闘を終えた少年と少女は地面に転がる宝石、ジュエルシードに近付き会話を話す。

少女が少し迷惑そうにしているのに気付かず少年は心底嬉しそうに話を弾ませた。自分の剣技を見てくれたか？カッコ良かったら？

借り物の力を振りかざすだけの少年は少女の思いに気付かない

先の戦闘、最終的に封印できたのは少女のおかげなのだ。少年の剣技は確かに素晴らしいが、火力不足なためジュエルシードの鎮圧化には向いていないのだ

どんどん冷たくなってくる少女の視線を、何かと勘違いした少年は地面に落ちたジュエルシードを拾い上げる

「結構綺麗だよな、ジュエルシードって」

「う、うん」

少女に見せびらかすように宝石を掲げる少年に小動物は危険だと伝える。

しかし、少年は平気平気と答えてジュエルシードを片手で弄りながら笑う。

そんな少年を見て少女が更に冷たい視線を向けた時だった

ジュエルシードがまばゆい光を出しながら宙に浮いたのは

少年たちは、また暴走したのかと考え臨戦態勢に入る。

しかし小動物は疑問に思う。ジュエルシードとは持ち主の願いを歪んだ形で叶えてしまう物。ならば今回の願いの対象は藤崎優なのではないのか？

それは間違いなく正解の答だった。

正しくは、本来の藤崎優という少年の願いなのだが、運が良かったのかもしれないし”誰か”が細工をしたのかもしれない

だが、ジュエルシードは間違いなく少年の願いを正しく叶えたのだ

『生きたい』という願いを

ジュエルシードが放つ光が収まると、そこには少年とそっくりな存在がいた

藤崎優

「何だよ、俺の偽物か。確かにそれなら多少は強いかもしれないけど…な！」

少年は一足で目の前の敵に近づくと、その手に持つ武器を振るい攻撃する。対する敵はそれをつまらなそうに見つめ、腕を振るい少年を吹き飛ばした

「がつー！」

少年は岩に激突し、肺の空気が全て出たような錯覚を覚える。

苦しい

まるで鈍器で殴られたような衝撃を受けた少年は、手のひらを見つめて何かを確認している敵を睨みつける

「何するんだよー！」

八つ当たり気味の少年の言葉に、敵はぴくりと反応し少年を見つめる。

それだけで多大な負荷が少年に襲いかかった。

なんという威圧感、なんという圧力

息をするのも苦しい中、敵はその口を初めて開いた

「喋るな雑種」

更に増す威圧感。敵は心底苛ついているかのように少年を睨む。

少女と小動物は理解する。眼前の敵は自分たちでは到底倒しきれぬ相手では無いと少年は気付く、人を雑種と呼ぶ自分と関係のある人物を

「お前、ギルガメッシュか」

「……」

帰ってきたのは言葉ではなく、無数の武器だった。

敵の後ろの空間を波紋を出しながら現れる武器の数々に少年と少女は戦慄する。

あれがいつ飛んで来てもおかしくない状況。その状況に精神力と体力がガリガリと削られているのが自分でわかっていたのだ

「…な、何で王の財宝を俺が使えないんだよ！」

少年はそれでも敵へと叫ぶ。

神様に頼んだ特典にはギルガメツシユの蔵もあつた筈だが、少年には使うことが出来なかつた。

理由は至つて簡単。ギルガメツシユがそれを良としなかつたのだ

「貴様のような偽物に私の宝物を使う資格などないわ、たわけ」

ただ淡々と告げるギルガメツシユに少年は憤慨し襲いかかる  
それをギルガメツシユは蹴り飛ばすことで中断した。

「お、俺のどこが偽物だつてんだよ！」

腹部を蹴られ、激しい痛みが走る腹を押さえる少年はギルガメツシユが告げた内容の意味がわからずに叫ぶ

ギルガメツシユは目を細めて、少年の身体に視線を向けた

「我が出てきた理由を特別に教えてやろう」



指を一本立てて少年へと向けたギルガメッシュは告げた

「本物の藤崎優が我に助けを乞うたからだ」

「本物……？」

「貴様に数年前、居場所を奪われた童子の事だ」

それを聞き、少年は思い当たるフシがあるのか顔をしかめる。

そんなものは知るか、この肉体に憑依させたのは神の都合だと内心で叫ぶ少年にギルガメッシュは冷ややかな視線を送った

「難儀なものよな。己は何も考えることは出来ずにただ、貴様がしていることを記憶していくという日々を数年に渡り送ったのは」

少年は困惑した。彼の知るギルガメッシュは自尊心に溢れ、他人の事を考えることなどしない人物なのだ。

だが、前の人物は何だ？自身に乗っ取った少年の身を憂いでいるではないか。いった

いどういう事だ？

そう。少年はその考え事態が間違いだつたのだ

ギルガメツシュとは自らを裁定者と呼び、人類の進化のために不老になろうとも考えるほど人の事を考えているのだ。

自らが上に立ち、眼下にいる民たちを見守り制裁を加える。そう言つた事をしてきた故に何の罪もない子供が虐げられ、助けを乞うのを助けないはずはない。

自身の宝物を勝手に使おうとする相手だという理由も多々にあるが、それでもなお。その根底は藤崎優という少年を生かすためである

「貴様がいかに力に酔いしれようとも構わぬ。だがな、私の宝物に手を出すなど不敬にも程がある。それにな、我に助けを乞う愚か者がいるのだ。そのような無礼者、馬鹿我が救わずして誰が救う」

ギルガメツシュは不敵に笑うと自らの宝物庫に手を入れ剣を引き出す。

「選定の剣、メロダック原罪。貴様には過ぎた逸品だが特別だ。この剣にて葬り去つてやろう」

「な、何を言っているんだ！」

「誇るがいい、転生者よ。本来ならその不敬、自決を持つて償うべきなのだが。我に引導を渡されるのだ」

ギルガメツシユはその手に持つ剣を振るい、光の奔流を生んだ

「うわあああああ!!!」

その奔流は藤崎<sup>転生者</sup>優を容赦なく飲み込んでいった

## 外伝：忘却

ギルガメツシユの放った一撃に藤崎優転生者はこの世界から退場させられた。

元々がイレギュラーだったためか藤崎優転生者が消えた事により世界の修正が加わり、彼がしたこと全てが消失した

「…あれ？どうしてなのはたおれていたの？」

少女もまた先程までの出来事を忘れ、眼前に転がるジュエルシードを首を傾げながら拾い上げる。

何はともあれジュエルシードを封印することに成功したことには変わりないと少女は息をはいた

「何か変な気もするけど、気にしないでいいよね、ユーノ君」

「う、うん。僕もそう思うよ」

少女の肩に乗る小動物も戸惑いながらではあるが、ジュエルシードの封印が成功したことに安堵の息を漏らし、少女に同意した

と、ここで彼女たちは気づいた。目の前に少年が倒れていることを

「だ、大丈夫!?!」

少女はジュエルシードの戦闘に巻き込まれてしまったのではないかと考え、少年に駆け寄る。

見たところ外傷は無く、ただ気を失っているだけであつたのだが、少女にはそんな事がわかる筈もなく、小動物へ助けを求めた

「大丈夫だよ、少し気を失ってるだけみたいだし、安全な場所に連れて行って目が覚めるまで待とう」

少女は頭を縦に振ると、少年の両脇を抱えて歩き出す

「お、重いいい」

しかし、少女の力では運ぶことは出来ず、結局少女は、その場に少年を寝かせ、自分も地面に座って少年が目をさますのを待った。



数分後、少年は目を覚ました。

虚ろな目で周囲を見渡すその様子に少女は安堵し、その場で立ち上がり少年へと手を伸ばす。

「大丈夫？」

少年は少女の事をぼーっと見つめると、自分の手に視線を移し何かを確かめるかのよ

うに両手を握ったり開いたりし始めた。

少女は少し困惑し差し出した手を引っ込めると、少年は両手を上に掲げて呟いた

「生きてる。僕生きてる」

瞳から涙をポロポロと流しだした少年を見て少女は慌てる。何処か痛い所でもあるのか、何か自分が悪いことでもしてしまったのか

『落ち着いてなのは』

オロオロとしている少女に小動物が念話で話しかける。

少年が起きたために、不用意に話すことは出来ずに念話にしたようだが、頭に直接響くその言葉が幸を成し、少女は驚くほどあっさりと落ち着いた。

再度少年の方を見ると少年はプルプルと足を震わせながら立ち上がるようとしている

「生きてるんだ、俺、僕生きてるんだ」

眩きながら立ち上がろうとする姿は少しだけ不気味に見えて、少女は気負いしてしま  
う。

一体この少年は何者なのだろうか。そんな疑問が少女の中を駆けまわる

「つ危ない！」

思考に意識を向けすぎたのか、バランスを崩した少年に気付くのが一歩遅れて倒れる  
少年に手が届かなかった。

顔から豪快に転けてしまった少年に少女は恐る恐る近付き安否を確認する

「…痛い」

両手を地面につけ、顔をあげた少年は、鼻をうったのか血がぼたぼたと流れている。

「だ、大丈夫？」

少女が再度心配そうに聞くが、少年には全く聞こえていないようで、その鼻をおさえ



て嬉しそうに生きてる、生きてると呟いている。

等々少女も少年に何かを言うのを諦めて見守っていると、少年は立ち上がり、覺束ない足取りで歩き出した。

少女は家に帰るのだらうと思い、そのまま少年が歩いて行く姿を見守る。

あれだけ話しかけても反応してくれない不気味な相手を追いかけるのは少女には出来なかつたのだ。

小動物も同じようで、特に少女に何も言わずに少年が歩いて行く姿を見送った



少年は記憶にある道を歩く。

自分ではない者が歩いた道。

見慣れていないけど見慣れたそこを歩き少年が向かうのは自分の家

自分が見たことが有り、ずっと見させられていた家に辿り着いた少年はインターホンを鳴らして両親が出るのを待つ

一体何時ぶりに会うのだろうか。少年はそう思いながらウキウキと気分を高揚させてドアが開くのを待つ。

ガチャリと音が立ち、ドアが開かれる。

開けたのは一人の少年だった

少年はこちらを不思議そうな顔で見てる

・少年は声を震えさせて問う

「君は誰？」

ドアを開けた少年は不思議そうに答える

「僕は藤崎優だよ？君は？」

少し顔が似ている自分を見て、少年は駈け出した。  
どうして、どうして、どうして

どうして藤崎優ほくがいるんだ！



——イレギュラーを消した影響か、本来の人格者も忘却され修正として新たな藤崎優が誕生するとはな

黄金を纏った王はつまらなそうに片手に持つワイングラスを傾け、涙を流しながら転んでは立ち上がり駆け出してボロボロになっていく少年を見守る

——これではまるで道化としか言いようが無いな。道化ならばそこいらのワカメにでも任せればいいものを。童子には童子らしくさせるべきであろう

手に持ったワイングラスはその握力により割れてしまい、中身のワインが手にかかっ  
てしまう。それに機嫌を悪くした王は眼前に立つ者へと視線を向けた

——奇しくも同じ状況。どう思っているのだ？

その者は少年を見つめかつての自身を思い浮かべる。

誘拐され、抜け出し、家にたどり着くと待っていたのは、別の自分を息子と言う両親  
だった

——特に思うことなどはない

赤い髪を翻してその者は奥へと消えていった

——つまらない

王もまた、その様子に落胆の声をあげ奥へと消えていった

## 閑話：そんな僕の日常

目の前で揺れる尻尾

その動きに習ってゆらゆらと揺れる僕の頭

猫は奇怪な動きをする僕を見て何を思っているのかはわからないけど、確かに僕の反応を見て尻尾を揺らしている

高町家に泊まりに行ってから数ヶ月が経った現在。昼間から公園にやって来た僕は猫と視線をかわしながらぼーっとしていた。

高町家から帰る時に士郎さんに道場に通わないか？と聞かれたがこれを断った。

理由としては、剣術については問題も無いほど恵まれた環境にいるのに、更に剣の教えを乞うよりも、魔法とかそう言った部類へと力を伸ばした方がいいと考えたからだ。

未だにこの世界での魔法は分からない状態でだけど、スタンさんやルークさん、カイルさんに魔術について習い、僕の保有魔力から発動する事は出来た。

そこで自分の魔力を知覚する事が出来ただけで、そこで一つ問題が起こった。

以前幼稚園でなのはちゃんから感じた変なもの。それが魔力だったのだ

それがわかった時点で魔力は隠した方がいいとの事で、極力なのはちゃんの前では魔

術を使用することは無かった

まあ、スタンさんとルークさん2人の魔術はどちらも周囲の物が燃えてしまおうとか自然破壊万歳な魔術ばっかだったため、カイルさんから習った魔術以外の魔術の鍛錬は夢の中で行っている

他に起きて行っているのは、クレスさんから教えて貰った集気法の練習と自分の身体能力の確認だ。

ここまでして鍛える必要はあるのだろうか？と僕が疑問に思っただけ聞いてみたが、満場一致で鍛えておいて損は無いと言われた

まあ、それには僕も賛成だから何も言わなかったけどね

今は猫を捕まえては愛でてを繰り返している

猫からしたらたまったもんじゃ無いと思うだろうけど、集気法を使いながら撫でてると、少し漏れ出す気が気持ちいいのか、目を細めて大人しくしている

そのためかわからないけど、今では猫が向こうからやって来るほどだ。

それを見た友人は僕の事を猫魔人と呼んでいた。恐らくは7つの玉を集める少年漫画の影響を受けてそう言ったのだろう。

友人は幼稚園児なのに漫画好きだからね。

幼稚園児なら読めない字もあって漫画にはあまり興味は持たないと思うんだけどな。

そんな事を考えていると、1匹の猫が僕の後ろから近付き、僕の背中から頭に向かって登り出す

地味に背中に爪を立てられて痛い。まあ、気にする程でも無いと思うので無視していたら、他にもどんどん猫が集まってきた

それから、他の子供が突貫してくるまで、僕は猫の集団、猫玉に埋まっていた

そんな僕の日常



## 触れ合ってしまった

目が覚めると辺り一面草原だった。

字面にするとここままで不自然なものはないと思う。だけど言葉の通りの状況に陥ってしまっているのだ。

確か普通に家で寝て、夢の中でエミルさんと組手してから目を覚ました筈なんだけど現在は寝た時の格好でこの場にいる。裸足で草の上に立つのつくづくいたいね。

変に澄んだ空気をしているこの場所は、とてもこの世のものであるとは感じれなくて

：

「どうとう( )までやって来たようですね。転生者」

だからこそ、後ろに立っている人物に気付くことが遅れてしまった

殺気を帯びた言葉に息を呑んで振り返る。

金髪を後ろに束ねている男の人が鎧を着て立っていた。

男からは惜しみもなく殺気が漏れていて、今にもどうにかしてしまいそうに感じてし

まう。

「ただ、それよりも気になることをこの男は言った。

僕の事を転生者と呼んだのだ。

勘違いにも程がある。憑依は間違はなく拒否できたのだ。確かにそのせいで色々とおかしくなってしまうているけれど、僕は元々の人格であるということには変わらない筈だ。

「この男はきつと勘違いをしているのだろう。そう考えると怒りが湧いてくることも無くなった

「違うよ。僕は転生者なんかじゃないよ」

「とぼけても無駄です。既に知っていますから。あなたが私の剣を使おうとしていることを」

「一体この人は何を言っているのだろうか。」

「これ、本当の事をこの人が知ったらどうなるのだろうか」

「この剣を貴方のような人に渡すことなど出来ません。だから貴方はここで倒させても

らう」

男は両腕で何かを握ると、右足を半歩後ろに下げて構えた  
ちよつと、僕何も持っていないんですけど

「覚悟して下さい！」

その言葉とともに男が目の前に現れた。嘘、早いつてレベルではないぞ！  
眼前に迫る彼の持つ何かに嫌な気配を感じ、とつさに身体を捻ることで躲す。

そして息をつく間もなく第2波の攻撃が迫ってくる。

さつきよりも集中しているためか腕の振りはよく見える。しかし、相変わらず得物を  
見ることは出来ないため、後手に回ってしまう

後ろに飛び退いて躲したのだが、相手は再度こちらへ接近してくる

「どうしたのですか転生者。貴方の實力はそんなものですか！」

「はなしを、きいてよ！」

振り下ろしを間一髪避けて、次の横薙ぎをバックステップで躲し、そのまま相手の後ろに回り込む。

ジュードさんの得意技術である集中回避。覚えておいてよかった

「クッー」

男は話を聞く様子もなく振り向きざまに攻撃してくる。

それをもう一度集中回避して背後に回り込む。

間合いが分からないため、必要以上に避けないといけないのは不利だ。長時間戦えば得物の長さとかが感覚で見えてくるかも知れないけれど恐らくはそこまで打ち合う程、僕の実力では難しいだろう。

これってどうしようもないのかもしれない。

だけどそれでそうやすやすとやられるつもりもない。

僕はまだ生きていたいんだ。たとえば人外となったとしても、僕はここに生きているのだから。

それでも僕を殺そうと言うのなら、僕は戦う。

戦って、戦って、生き延びなければならぬ！

「貴方がどうして僕に攻撃しているのかはわからない。だけど僕を殺すというのなら、全力で抵抗する！」

そう僕が叫んだと同時に空気が震えた。いや空間が震えたという表現が正しいか。空に亀裂が走り、轟音を立てて何かが現れた。

黒い鎧に背中から生えた白い帯。鎧の所々に走る白い線  
僕は見たことがある。記憶の中にある物語の一つである人物が至った力。

その人物、ルドガー・ウィル・クルスニクが槍を携えやってきたのだ

「……貴方は何者ですか」

「……」

ルドガーさんは言葉を発す事もしないまま相手の方向を見ている。

顔も見えないため考えを読み取ることが出来ないが、一つだけわかったことがある

「僕を、助けに？」

そう、声を漏らすとルドガーさんは何も言わずに頷き、槍を相手に向ける。

「そう、ですか。邪魔をすると言うのなら、貴方も排除させて貰う」

相手の男も見えない得物を構えて臨戦態勢をとる。

空気が静まり返り沈黙が場を支配する。

先程まであった亀裂はいつの間にか無くなつて太陽が照りつける。

何かを拍子に2人の戦いは始まるのだろう。

息を飲む。ルドガーさんの凄さは知っているけど相手も相当凄い人だと思う。この

2人が戦えばどうなるのだろうか。

僕には全く想像もつかない。

「……貴様がここへ来るのは少しばかり尚早であろう」

突然背後から声が聞こえ、僕の意識は途切れた

## そして時は流れ

あの不思議な体験から暫くして幼稚園を卒園した僕は、小学生となった。

あの男の人のことをルドガーさんに聞いてみても苦笑いをするだけで詳しくは教えられなかった。ルドガーさんの隣にいるユーリさんは呆れた顔で、その男の人を「餌付けされたライオンだ」と言っていたのは少し気にはなつたかな。

あれから特にあの夢の世界に行くこともなかつただけど、今思えばまだ僕が会っていない宿つた人達がいる所なのだろう。

ランドセルに教科書を入れた後、新品の筆箱を入れる。

幼稚園を卒園するまでは特になのはちやんとは特別仲が良かったわけじゃなかった。寧ろ魔力関係がバレるのを警戒してた僕が避けてたつてのもあるかもしれない。

ジーンズを履いて薄手のトレーナーに袖を通す

まあ、小学校も違うらしいのでこれからは無闇に警戒する必要も無くなり、心は軽くなつたと言える。

あと、僕が行くであろう小学校のことを話した時のなのはちやんの顔は印象的だったな。小さな声で血痕出来ないかなって物凄く不気味な言葉が聞こえたんだけど

血痕なんて言葉を使う幼稚園児はなのはちやんくらいじゃないのかな？

なにはともあれ、これからは気楽に出来るってわけではないけれど幼稚園時代よりはマシな生活を送る事ができるようになつたと考えておこう。



これが1年前の僕の独白である。

現在僕は私立聖祥大学付属小学校の職員室に居た。

1年生の間は海鳴小学校に通っていた僕だけど、授業やテスト諸々で満点を取り続ける僕に先生が何を思ったのか小学生高学年の範囲の問題を僕に渡してきた。

あの時は何も考えていなかった、というよりもどの程度が小学生低学年の範囲であるのか理解していなかった僕はその問題を難なく解いた。

それから中学入試、高校入試、大学入試の問題を渡され、それをも解いてしまった。

流石に大学入試の問題を解いている時にはおかしいことに気付き点数を下げたんだけど、高校入試の問題で満点を叩きだした僕を先生が母に私立への転校を提案。金銭面については向こうが奨学金を支払うと既に言っていたように母はこれを承諾。

御馳走が出た時はびっくりしたな。転校するって言われて。

通う場所はそこまで遠くないし引越しもしないから今の友人たちとも普通に遊べると聞き、僕はこれを承諾。

まさか、あののはちやんが通う学校とは思っていなかった僕は、編入試験を受けた帰りに見覚えのあるツインテールを見て嘖然としたね。

編入試験の結果は満点。この問題は聖祥学園の生徒達も同時期に受けた問題で、満点は僕の他にもう1人いると教えられた。

うん、普通に頭がいい子いるし特に目立つことはなさそうだ。

僕は先生に連れられて教室へ向かう。まずは教室でクラスメイトへ転校生である僕を紹介してから始業式にをするために体育館に行くらしい。そこで全校生徒の前で自己紹介をさせられるらしいんだけど

どのクラスになのはちやんが居てもバレることに変わりは無いのですね。わかりません。

編入試験から暫く時間もありません、その間に完全に開き直った僕は軽い足取りで歩く。今日は早めに終わるんだから家に帰って友人とバケモンするんだ。

『軽い現実逃避はそれくらいにして、もう教室につくよ』

頭のなかでジュードさんに言われて思考を現実に戻す。

半年くらい前だったかな。夢の中でしか会えなかった人達がこうやって起きている間も話をできるようになったのは。まだあの草原で戦った男の人には会っていないけれど、その人達ともじきにあうことになるだろうってルークさんにも言われた。

「じゃあ、藤崎君はここで待っていてね。少ししたら私が呼ぶから中には行ってきて自己紹介するんだよ？」

先生に言われて頷いた僕は少し息を吐く。大丈夫、自己紹介はスタンさんが飽きて寝ちやうくくらいまで練習したんだ。これくらいなら問題はないだろう

『スタンさん、最初から寝てたけどね』

うん、わかってるよジュードさん。一度も練習してないけど言ってみただけなんだから

そう、頭の中で変な問答をしていると騒がしかった教室が静まり返り先生が僕を呼ぶ

声が聞こえた。

普通にドアをガラガラあけてクラスメイト達の前へ進む。

クラスメイト達を一瞥するとそこには興味津々な目で見てくるカラフル集団がえ？金髪やら色んな髪の色多すぎじゃないか？ここは日本では無かったのか。

じゃあ自己紹介も英語の方がいいよね。多分日本語よりも世界的にはわかりやすいと思うし。

「Hello everyone. My name is Yu Fujisaki.  
I changed school from Uminari Elementary  
School. Nice to meet you.」

これなら大分簡単な英語だし日本人の子や英語圏じゃない子でもわかるだろう。

「……藤崎君？どうして英語なの？」

「え？いや、黒髪の人少ないから外国人にもわかりやすく英語がいいのかな？って思ったんですけど」

どうして先生は頭を抑えているのか。

クラスメイト達は口を開けてこっちを見ている。え？まさかみんな日本人なの？

『当たり前だ。ほら、もう一回日本語で自己紹介しとけ』

ユーリさんに言われたのなら仕方ない。僕は一度咳払いをして改めて自己紹介をした

「皆さん始めまして。海鳴小学校から転校してきた藤崎優です。色々と迷惑をかけるかもしれないけれど、仲良くしてね？」

クラスメイト達は先程の事は無かったかのように拍手してくれた。

うん。いい人達みたいで良かったよ。一時はどうなるかと思っただけど何とかかなったね。

そこで僕は気付いてしまった

何やら笑顔でこちらを見てくるな警戒対象のはちゃんに

これからどうなることやら

## 類は友を呼ぶ

「ねえ、どうして転校してきたの？」

「母さんと父さんに言われたからだね」

「誕生日いつ？」

「5月の29だよ」

「血液型は？」

「O型」

「星座は？」

「餃子」

「好きな人とかいる？」

「母さんと父さん」

「好きな食べ物は？」

「チーズだよ」

「将来の夢とかある？」

「平穏な生活かな」

質問が多すぎる。律儀に全部答えてるから疲れてきたんだけど。

そう思っていると金髪の少女が手をパンパンと叩いて近づいてきた

「そんなに殺到したら転校生も困るでしょうが。質問は一人一人順番にしなさい。後ア  
ンタは双子座でしょ」

「巧妙に隠した冗談を見破られるとは思わなかったよ」

殺到してきたクラスメートを宥めてくれた女の子にそう言うとき周りから「え？隠して  
たの？」って声が聞こえた。なんだ、みんな気付いてたのか。

それならツツコミ入れてくれても良かったんだけどな



「まあいいわ。それにみんな。自分の名前伝えないと覚えてもらえないわよ？」

その言葉にハツとするクラスメート達。嫌な予感がする。  
再度クラスメートが殺到したのは言うまでも無いだろう

◇

それから開放されたのは10分後の事だった。見たものを忘れない僕は殺到したクラスメートの名前と顔を記憶した。特に身体的には疲れていないけれど精神的には疲れてしまった僕は机に突っ伏している。

バスが来るまではまだ時間があるらしく、それまでは教室で各々待機しているらしく結構残っている子達はいた。

先程まで殺到していたクラスメート達はもう一度金髪の女の子が止めてくれ。今は

僕の周りにはいない。

じゃあ、僕の近くには今誰がいるのかって？

そう、高町なのはだ

無性に走り出したくなつた僕をなのはちゃんが止める。そして一言、また逢えたね  
一体僕に会つて何をしたいのだろうか。僕の血で血痕を残すとなつたら全力で逃げ  
させてもらうよ

そんななのはちゃんを見て呆れているのは金髪の女の子。名前をアリサ・バニングス  
バニングスさんと呼んだけれど、なのはちゃんと友達だからアリサと呼びなさいと言  
われた。

その隣でなのはちゃんを見て少し驚いた顔をしているのは月村すずかさん。髪の毛  
の色が紫つて見たこと無い

すずかちゃんにも名前前で呼んでほしいと言われてこれを承諾。

アリサちゃんには「随分となのはと仲がいいわね」と皮肉を言われたんだけど、主に  
魔法関係で苦手というか気の抜けない相手だということを除けば友達であることには

変わりなく。それは純粹に嬉しいと言っておいた。

すずかちゃんは「なのはちやんとすずかちゃんって積極的なんだね」って言っていたけどどういこうことなのだろうか。頭の中でカイルさんが微妙な笑いをしていた理由は後で聞いておくとしようかな。

あと、すずかちゃんも変な感じがしたから、もしかしたら魔法関係者なのかもしれない。

魔力を出している雰囲気は無さそうだけど

取り敢えず、なのはちやんとすずかちゃんを前にする時は気を抜かないようにすべきだと思いました。

あれ？ 作文？

## 加減を間違えると大変な事になる

転校してから暫く経ち、特に話し相手が居ないという事もなく順調といえる学園生活を送っている僕は、1年に一度ある危機に瀕していた。

まあ、隠すこともないので言うけど、体力測定の日がやってきたのだ。

1年前はもう少しでとんでもない事になりそうだったが、なんとか乗り切った。

それでも力加減は難しく、気を抜くと大変な事になってしまう。

今年ももつと上手くやれるように頑張らないと

そのことを頭に入れつつ先生の話に耳を傾ける。僕達のクラスはまず外の種目からみたいだ。

外では50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げの3種目

中では握力、上体起こし、長座体前屈、反復横跳びの4種目

後日シャトルランをすることのこと。

この中で気をつけるものは立ち幅跳び、ソフトボール投げ、握力の3種目だ。

それ以外はやり過ぎたと思えばすぐに修正出来るからね。でも、この3種目は一度間違えるとそのまま数字となって出ちやうから大変だ。

「なあなあ、優君って運動得意なの？」

前に座る男の子、浜田君がぐるりとこちらへ向き聞いてくる。

ここで運動は出来ないと行ってしまふのは良くない。運動が出来ると認識されるほうが、万が一に力加減を間違えた場合でも驚きが少なくなるからね。

だからここでの僕の答えは

「勿論。走るのだって大好きだよ」

事実、鬼ごっことか身体を動かすのは好きだ。注意して動かなければいけないけど、それを抜いても好きだと言える。

浜田君はじゃあ勝負しようと言って笑ってきた。それに僕は了承する。勝負と言うからには負けるわけにはいかない。

さて、調整が大変になった気もするけど、気にしちやいけないよね。

『何でハードル上げてるのさ』

勝負には逃げれないよ。カイルさん

それから怪我をしないようにと先生に言われてみんなで服を着替え始める。誰にも見られないように半袖と長ズボンの体操服に帽子を着けた僕は廊下に出る。みんなで固まって運動場に向かうらしく、全員が着替え終わるのを待たなければいけないらしい。まあ、誰か迷子になったら可哀想だしね。

後、僕が誰にも見られないように着替えた理由は足にある。実は今朝から重りを足につけてるからなんだ。少しでも記録を下げるのに苦労しないようにと考えて僕が作った物だけどこれが結構上手く出来たもので、お気に入りだ。

作り方は簡単で、靴下にポケットをつけて、そこにゴミ捨て場で拾った鉄塊を切り取ってポケットに収納して行って、上からもう一つ大きい靴下をかぶせて固定させたもの。

それに、小さなバンドに鉄を固定させたものを作った。

ルークさんとかにかかれば木刀で金属を斬ることも出来るみたい。まあ、僕は木刀で斬れないからハサミを使ったけど

重さを測ってみたら靴下のは一つで3kg、両足分で6kg。バンドのは一つで2kg

g両足合わせて4kgの計10kgだった。

因みにバンドのは太ももにつけています。

少し動きにくいけど、これくらいなら問題なく動けてしまうからどっちみち力加減は間違えられない。

幸いにも体操服の長ズボンは少し大きめのを買って貰ったのであまり違和感はないと思う。中の競技の時には外すけれど、外での競技ではずっとつけてすることになる。

あまり足に負担をかけるのは良くないよとルカさんに言われたけど、負担も感じないので大丈夫だと言った。

そして待つこと5分。最後の女の子が出てきて教室に誰も居ないことを先生が確認すると僕達を連れて運動場へ向かう。

卓郎君とバケモンについて話しつつみんなに付いていく。

ゲームは運動の次に好きかな。運動は純粹に楽しいけど注意しないといけない。でもゲームなら注意しなくても楽しめるから

下駄箱に辿り着いた辺りで話は体力測定の事になり、卓郎君とも勝負をすることに  
なった。

卓郎君は大人しくて髪の毛が紫色の誰かさんにかっこいい所を見てもらいたいよう

だけど、それはそれ、これはこれで勝負には勝たせてもらおうよ。

にしても、3人で勝負かあ。できたらクラスで1番を狙いたいなあ。

まあ、僕よりも先にする人達には負けないようにするけど

【50m走】

僕より先に走ってて一番早いのはすずかちゃん。タイムは7.6秒  
すずかちゃんって本当に小学生？随分と早いんだなあ。

まあ、それくらいを目安に走ろうか

1回目結果6.9秒

もう少し遅く走らないと



2回目結果6.7秒

あれ？さつきより速くなってる…

【立ち幅跳び】

この種目でも現在トップはずかちゃんの195cm  
うん。ずかちゃんにも何か秘密がありそうだ。

さて、この競技は慎重にいかないと

1回目結果150cm

ちよつと加減しすぎたかな

2回目結果227cm

……ま、まあ許容範囲許容範囲

## 【ソフトボール投げ】

言うまでもなくトップはずかちゃんの26m

ここでひらめいた僕。上方向に投げれば記録はそんなに大きくならないのでは？

1回目結果25m

うん、いい感じいい感じ

2回目結果38m

……指が引つかかった



外の競技は散々な結果に終わり、意気消沈中の僕。浜田君と卓郎君は悔しがってたけ

ど、ごめんね。今は結構落ち込んでるんだ。

体育館に向かう前に体育館シューズを取りに教室へ向かう。そこで、ばれないように重りをランドセルへシユート。少しの浮遊感を感じる身体に心は若干壊れ気味の僕を窘めるユウリさんとクレスさん。

すみません、本当に力加減って難しいです。

【握力】

これは他の人がどれくらいかってのはわからなかったため、基準はわからなかった。

右結果 42 kg

こんなものでいいのかな？

左結果 58 kg

少しやりすぎかも…

## 【上体起し】

これは2人ペアでやる種目で僕は古山さんとペアだった。

先に古山さんがやりたいとのこと足を抑えてあげる。30秒間の間にどれだけ出来るのかを測る競技だけど、みんなのを見た感じ結構ゆつくりじゃないといけなかも

古山さんは17回。話によると女の子の平均よりは多いみたい。

このグループでの最高回数は浜田君の25回だった。

僕も気合入れていこうか。すずかちゃんも一緒に計測するから様子見て頑張ろう。

## 結果39回

いや、すずかちゃんも33回と中々だったんだよ？一緒くらいを目安に気持ち多めにしたらこうなったんだ。まあ、これはそこまで酷い結果では無いと思う

因みに僕の足を抑えてた古山さんは、大変だったと言っていた。ごめんねと謝ったら、凄いのが近くで見れたから別にいいと言ってくれた。あと、重りを外した理由がこ

れ。足を抑えられる時にバレちゃうからね。

凄いの範疇で済んでる所を見ると、そこまで力加減は間違えてないのかな？

【長座体前屈】

癒やし種目。特に気にすることもなく出来る唯一の競技

まあ、普段から身体を動かしてるから柔らかめなのは確かだけど、それでも全力でやって結果がおかしいレベルにはならないんだよね。

結果 43cm

女の子にはこれくらいの記録の子がちらほらいたし、この種目は問題ないね

【反復横跳び】

記録 55回

最後の方で速度落としてなかったら大変なことになってたかもしれない。

これだけ、1日でやった種目なんだけど、家に帰ってから力加減が出来ていないとヴェイグさんに言われた。

もつと修行しないとイケないとも言われたので、素直に頷いておいた。

後日、先生とかから運動部への勧誘が来たのは避けられないことだったのかもしれない。

それと、なのはちちゃんを通して土郎さんからサッカーチームに入らないか？との勧誘もあつたけど断った。

今は力加減をどうにかしないとイケない。

あと、何故かすずかちゃんの視線が痛かったです。

## 閑話：高町なのはの独白

【なのは side】

こんにちわ、私なのは。小学2年生の将来的には魔法少女になる女の子。どうしてわかるのかって？

夢で見たの。ジュエルシードを封印したり、フェイトって子と仲良くしたり、はやてちゃんと仲良くしたり、管理局というところで働いたりするなのはを。

最初はお父さんがいなくて家族みんながなのはから離れていつちやつてると感じていたストレスが原因で見た幻想だと思っていたの。

でも、夢で使っていたようにしてみたら魔法を使うことが出来たの。簡単なバインドだけしか出来なかったけど、夢で感じた魔法を覚えたてのなのはよりも上手く出来ていたの。

レイジングハートなしでの話だけ。

それで夢での出来事はきつと正夢、というか本当のことなんだとわかったの。

夢のようにお父さんは帰ってきて、お母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんもなのはから

離れて行かなかったから。

そして思ったの。

”夢でみた私、結婚してないって”

お父さんとお母さんはいつも幸せそうだからなのかも結婚したいの。フエイトちゃんやユーノ君は夢で見たせいで結婚相手というよりは親友と感じちゃうの。

娘がいるのに旦那さんがいないなんて嫌なの。だから、私は決めたの

“絶対に結婚するって”

幼稚園に通ってる時に不思議な男の子に出会ったの。

ノートに一心不乱に漢字で文章を書いている男の子。夢のお陰でちよつぱり大人になったなのにも少し読めたんだけど、内容はあまりわからなかった。

でも、一つだけわかったこと、男の子、藤崎優君は魔法について何かを知っていること。

本人は否定していたけどずっと見ていた限り、彼には何か秘密がある事に気付いたの。

家に泊まりに来たこともあるのだけど、それは一度だけ。



でもその時にお父さんやお兄ちゃんとか何かあったらしくて、それからしきりなのはに「優君は来ないのかい？」とお父さんが聞いてくるようになったの。

それからもずっと彼を見ていたの。友達と楽しそうに遊んでいるけど時折見せるあの寂しそうな顔。

そこで気づいたの。彼も夢を見たのではないのか？ って

実際に私が見ているから他に見た人がいてもおかしくはない。

あの寂しい顔は、少し大人になってしまった事に悲しんでいるのでないのか？ ノートに書いてた内容から将来的には魔法関係者になるんだと思うの。

この時、私は運命だと感じたの。

だって、夢を見て大人になった二人。更に一般人から魔法の世界に関わるっていう共通点。 なにもしなければ独身の私。

きつと神様が私に結婚する相手を教えてくれたのだと思うの。

だけど、そう思ったのもつかの間に彼と私は離れ離れになっちゃったの。

私は私立聖祥大附属小学校に、彼は市立海鳴小学校に。もう遅すぎたのかなってこの

時は思ったの

だけど、神様は私を見放さなかったの。なんと、2年生になった時に彼が転校してきたの。

やっぱり運命つてあるんだって感じたの。転校してきてから彼は凄かったの。

授業中であてられた内容は全部正解。小テストも満点。体力測定もクラスで1位の成績だったの。

夢ではそんな男の子はいなかったし、彼が夢を見たのは間違いないの。

私は、あまり成績は夢と変わってない。仕方ないよね、魔法の勉強してたから疎かになっちやってるのは

勉強の方はアリサちゃんに教えてもらえればちゃんとわかる。でも運動はダメなの。

魔力を使えば凄い結果は出せそうだけど、そういうのは違うと思うの。優君も魔力を使っていなかったから一緒に事を考えたのだと思う。

必要なかっただけなのかもしれないけど

まあ、こういった感じに私は彼と結婚するためにアプローチをかけたのだ。

だけどここで一つ問題が発生。すずかちゃんやアリサちゃんも彼を気にするようになったの。

2人とは親友だから仲良くしたい、かといつても彼とは結婚したい。

いつそのこと一夫多妻制がある次元世界で結婚しようかな？

お父さんが泣いちやうかもしれないや。まあ、みんなで結婚するにしても第1婦人の座は渡さないの。

オマケ

◇

【すずか side】

クラスに居るある男の子、藤崎優

彼がおかしいと感じたのは体力測定の時だった。

私よりもすごい記録を出す男の子。どう考えても普通じゃない。

お姉ちゃんにも言っておいた。お姉ちゃんは調べておくから警戒するように言っていた。

クラスで見る彼は至って普通の男の子。授業ではアリサちゃんと張る成績。体育では不自然な動きをしているところを見て手加減していると思う。

おかしい。

ある日、なのはちやん達とクラスのみんなについて話をした時に無意識に彼を見ていた。ずっと警戒してたせいだろう。

そのことをなのはちやんに指摘された時は驚いた。なのはちやんって結構人を見ているんだな。

私は正直に彼には何かを感じると言っておいた。警戒してるなんて言えないしね。

それを聞いた時のなのはちゃんの顔はどうしてか寒気を感じたけど

まあ、怪しいって点を抜けば普通にいい人だと思う。普通の男の子よりも大人というか成長しているっていうか

かと思えば子供っぽいことをしたりとか。後、色んな事を知っているのも気付いた。彼は雑学王なのかもしれない

◇

【アリス side】

ああ、悔しいわね。どうしてもアイツに勝つ事が出来ない。

2年生の時に転校してきた男子。授業や小テストも完璧なアイツに私は勝負を挑ん

だ

内容はクイズ

結果は引き分け。どちらも全問正解で終わった。

体力測定の結果から多分運動では勝てない。だけど知識面は互角。

だから、それからクイズとかIQテストで挑んだ。

一度も勝てなかった。

アイツは反則でもしてるのかってくらいに満点を叩き出す。私は何かをミスすれば負け、ミスしなければ引き分けという結果になってしまう。

心底苛ついた。アイツにじゃない。私にだ

勝てない理由を相手のせいにするほど愚かではない。それでも悔しい物は悔しいのだ。

ある日、なのはとすずかと一緒に弁当を食べていた時にクラスの皆についての話になった。真っ先に思い浮かんだのはアイツ、藤崎優だ。

一方的な感情だったのは理解している。アイツに相手にされていないってことだけは本当に腹立たしい

だけど、それでも。アイツがライバルであることには変わりなく、いつか見返すと2人に宣言した。

その時のなのはの顔は忘れないだろう。あの子、あんな怖かったっけ？

## 現れたのは白黒

それは夏休みの事だった。宿題を滞り無く終わらせた僕は、友人と遊んだり山の中で特訓をするという日々を送っていた。

特訓に関しては魔法のことは取り敢えず置いておくことにした。何と言っても情報が少なすぎるのだ。まあ、剣に絞ったお陰でそちらの方は随分と強くなったと思う。

その日も手に持った木刀で技の反復、動きの調整などを行っていた僕は、山の中腹にある廃墟に人がやってきたことに気付いた。

珍しいこともあるもんだと考えた僕は気になって廃墟に入ろうとしている人達に気付かれないように近付いた。

まあなんとというか、あれだった。クラスメイトのアリサちゃんとすずかちゃんが抱えられて中に入るのが見えた。

誘拐なのかな？でも決めつけるのって良くないし…

「離しなさいよー！あんた達!!」



…誘拐かあ

随分と古典的なような展開だと思いつつ、2人を助けるべく、思考を巡らす。

まず最初に、2人に姿は見られたくない。すずかちゃんやなのはちゃんは未だに変にこちらを見てくるし恐らくは僕になにかしらの不信感を抱いてるのだと思う。

だとしたら顔を隠すのが一番なんだけど、生憎と今ここに顔を隠すためのものがあるわけでもない。かといって取りに行っている時間もないわけだ。助けないという選択肢は無いし。

ここは心を決めて顔を見られる覚悟で行くべきなのかな？

どう思う？みんな

『助けに行くべきじゃないのかな？』

まあ、そうだよ。僕もそう思うよルカさん

『でも、ばれない方がいいんだよね？』

うん

『よし、助けに行こう』

ちよつと待っててくれるかな？スタンさん

『でも結局は行くんだろ？ならとつとと行こうや』

まあ、ユーリさんの言うとおりで何だけどき

『わかった。見えない速さで助ければいいんだ!』

そこまで人間やめてないよ、シングさん

『……ちよつと待つててくれ。聞いてくる』

どうしたの? ルドガーさん

『ああ、あいつならどうにでも出来そうだとは思うけど』

ルークさんを筆頭にみんながうんうん頷く。

え? みんな何を知ってるの?

『ああ、貸してくれるだつてさ』

『そうか。良かったな。これではれないぞ』

いまいち状況を飲み込めない僕は、どういふことか聞こうとした時だった。  
突然目の前に何かが現れた

これは…!!



「嘘よ！すずかが吸血鬼だなんて！」

金髪の少女は叫ぶ。誘拐犯が告げた事を否定するために。  
対する誘拐犯は愉快そうに笑い、紫髪の少女へと視線を向ける。

「嘘じゃないさ。現に否定しないだろ？」

「すずか、嘘だつて言つてよ！」

紫髪の少女はその言葉に肩を震わせて小さな声を零した

「……ごめん……アリサちゃん……」

少女の嗚咽する声が響く。そのことに金髪の少女は理解する。

この男が言っていることは真実なのだ。同時に考える。何故隣の少女は泣いているのか

男の高笑いが聞こえるがそんな事には気を向けない。

どうして自分にそんな重大なことを隠していた？

どうして自分に嘘をついていた？

わかってる。この少女はバレるのを恐れたのだ。自分が化け物であると罵られることを

そして、理解する。何故化け物であるといけないのか

「…っさいわね…」

男の高笑いに気付き、鬱陶しそうに金髪の少女は言葉を零した。

男は怪訝そうな顔をし、金髪の少女へ視線を向ける

「よくよく考えればそうだわ。すずかが吸血鬼だなんて関係ない。すずかが私の親友

だつてことには変わりないのだから!!」

少女は断言し気付く。

そうなのだ、そうなのだ。たとえ紫髪の少女が化け物であるとしても関係はない。寧ろこれまで一人で抱え込ませてしまった自分へ怒りを覚えるくらいに。

その言葉に紫髪の少女は腫らした目を金髪の少女へ向けて涙を零す。

「アリサちゃん…!!」

「私とすずかは何があつても親友でしょ？なのはもだけど」

笑顔で告げる金髪の少女に男は機嫌を損ねる。目の前の少女は一体何なのだ？

自分は今まで騙されていたという絶望に落ちる少女の顔を期待したのだ。

人間と馴れ合う同族へそんなことは無駄なのだと教えてやろうとしたのだ

なのに、今の状況は何だ？絶望に落ちるところか希望に溢れた紫髪の少女がいるだけではないか

こうなつてしまったのは何故だ？どうして自分の考えは外れたのだ？

全てこの金髪の少女のせいか

男はそう結論に至ると、不思議と何も思わずに、拳銃を金髪の少女へ向ける。

「っ!!!」

少女たちの顔がこわばる。その表情に男はやっと望んだ顔を見ることが出来たと感じた。

そして、その引き金に指をかけた…

「ガッ!!」

突然ガン!という鈍い音を立てて男は倒れた。

それに少女たちは困惑し、その音を立てた存在へと視線を向けた

丸々と太った身体。ふさふさとした毛並みにどこに目があるかわからない模様

「パン…:ダ?」

そう、偉く小奇麗なジャイアントパンダがその手に看板を持って”足で”立っていたのだ。

看板に少し血が付いてる所を見ると、看板で男の頭を強打したのだろう。

パンダは男が気絶したのを見ると少女たちに近づく。

困惑した少女たちはどうすればいいのかわからずに喋るといふ事すら忘れてパンダを見る

パンダは少女たちの前まで近づくと看板に何かを書き込みだす

【わたしは山やまの神かみ、パンダししやう師匠ししやう。山やまを荒あらす男おとこたちを懲こらしめにきた】

ご丁寧にルビまでふっている看板に少女たちは更に困惑する。一体目の前の存在は何なのだろうか。自称神であり師匠であるパンダ

謎の存在は正直いって怪しい。だけど一つ言えることはこのパンダは自分たちを助けてくれたのだと。

そのことに少女たちがありがとうと告げようとしたが、突如けたたましい足音が聞こえて口を閉ざしてしまう。

パンダ師匠も無言で部屋の入口へと視線を向けて看板を持つ手に力を入れる

「今の音は何だ!! いったい何が」

入ってきたのは男。恐らくは今倒れている男の仲間であろう存在を見たパンダ師匠はその手に持つ看板をぶん投げた。

男は一瞬のうちに視界全てが看板に遮られ、ワンテンポ遅れて頭部に凄まじい衝撃を受けてふっとばされる。

およそ人間の力では考えられない威力の投擲に少女たちは、目の前の存在は本当にパンダなのではないのか? と考えだす。

それもつかの間、また足音が響きだす。先程よりも大人数が来る音だ。

少女たちは、慌てた様子で身体を動かし、自身を拘束する縄を解こうとする。

しかし、固く結ばれた縄は容易に外れることはなく、足音はどんどんと近づいてくる。焦り、少女たちはパンダ師匠を見た。そこにはどこから取り出したのかはわからないが、片手には看板。片手には木刀を持ったパンダ師匠が立っていた

七ツ夜という文字が書かれた背中では先程よりも大きく見え、不思議と安心できてしまった。



少女たちはそれから見た光景を忘れないだろう。

パンダ師匠は魔神劍ましんけんと書かれた看板を投げ、木刀から何か衝撃波を飛ばす。

そして、またどこからか看板を取り出し、投げては衝撃波を飛ばす。

意味がわからなかった。漫画のように飛び交う人間たちを見た少女たちは先程までの緊張感はどこへ行ったのやらポカーンと口を開けて荒ぶる。パンダを見ることしか出来なかったのだ。

気がつけば男たちは全て倒れ伏せて気絶していた。そこにパンダ師匠の姿は無く、全ては夢だったのでは？と少女たちは感じたが、部屋の隅に転がる多数の看板にその考えは捨てた。

その数分後、現れた月村忍と高町恭也により少女たちは助けだされ、男たちは捕まった。

月村忍と高町恭也は少女たちがいうパンダが神だったという言葉に頭をかしげるのはまた別の話である

## 夏、海、ピクニック

ある晴れた日、夏休みを満喫している小学生にとってはもう少しで学校が始まってしまふという憂鬱に襲われる8月の半ば、高町家は海が見える公園にピクニックに来ていた。

他にもアリサ・バニングス、月村すずか、月村忍もそれに同伴しシートの上で弁当を広げてピクニックを満喫していた。

誘拐事件からはや半月。月村忍は謎のパンダ、パンダ師匠を捜索したのだが見つかることは無かった。アリサ・バニングスは月村と盟約を交わし夜の一族のことを秘密にする約束した。

2人が誘拐されたことは高町なのはも知っており、その時にパンダ師匠に助けられたとも教えられていた。

高町なのは不思議な神様もいるんだねといって全員を呆れさせていたが、そういうのもしかたのないことだろう。

看板を投げては木刀から衝撃波を打ち出す存在など、普通に考えればありえないのだから。

「そう言えばなのは。あんた優とは遊んでるの？」

「うーん。遊んでないよ。優君いつも忙しそうだから」

ウインナーを口に運びアリサ・バニングスは高町なのはへ聞いた。

アリサ・バニングスは高町なのはが藤崎優という少年に特別な感情を持っていることを知っている。というよりもクラスの殆どの女子生徒は知っているのだ。

当人には気付かれていないが、それは傍から見たらとてもわかりやすく。また、高町なのはもそれを否定することはなかったのだ。

「ほほう？それは興味深い話だね」

だが、そのことを知っているのはあくまで学校内の生徒たちなのだ。高町なのはの父親である高町士郎が知っているはずもなく、自分の娘に近づく不逞な輩の話を聞こうと少女たちの会話に入ってきた。

兄である高町恭也もまた近付いてきて会話に耳を傾けていた。

「お父さんも知ってるよね？藤崎優君。将来、なのはは優君のお嫁さんになりたいの」  
とんでもない発言が自分の娘から飛び出し、思考がフリーズする高町士郎と高町恭也。

アリサ・バニングスの隣に座っている月村すずかは高町なのはの大胆な発言に顔を真っ赤にさせて俯いている。

「アンタって、大物っていうかなんというか……」

アリサ・バニングスの呆れたような声に高町士郎は思考が再起動し、自分の娘へ詰め寄る

「まだ早すぎるよなのは。もう少し良く考えて」  
「考えたの。出会ってからずっと優君のこと。小学校離れ離れになって悲しかったの。でも彼が転校してきた時に気づいたの。運命って本当にあるんだって」

その眼は無駄に燃えており、士郎は自分の娘はいつの間にもここまで成長したのかわか

らず、戸惑っていた。

そして思考する。藤崎優という少年について

会ったのは3年前のことだが、彼には何かを感じたのは確かだった。だけどそれは不明瞭なもので自分の娘がそんな相手と付き合うことになれば厄介事に巻き込まれてしまうのではないか？

そして更に思考は加速し、ある結論に至る。

なのはと結婚するならば、相応の実力をつけてもらわねば

「恭也、優君に稽古を付けるぞ」

「…必要あるのか？」

士郎の言葉に思考を起動させていた高町恭也は父親の言葉に反論する

「なんだって？」

「あいつの剣術に手を出してはいけないと思うんだ。あいつ自身、自分で高めるために父さんの誘いを断ったのだろうし」

その言葉に高町士郎は唸り、月村忍は疑問の声をあげた

「その、藤崎優君って、何か剣術を習ってるの？」

「ああ。3年前に一度手合わせして引き分けたが、殆ど俺の負けみたいなものだった。」  
「うそー！」

月村忍は自嘲気味に告げる自分の彼氏に信じられないと声をあげる

高町恭也は夜の一族である自身から見てもその実力はとても同年代のレベルではなく、ましてや自身の妹と同年代。3年前といえば幼稚園児に引けを取ることなど考えられないのだ。

だが、高町恭也が嘘を付いている様子もなく、月村忍は妹に言われた相手、藤崎優への警戒レベルを引き上げた。

「まあ、優くんはいつも家にいないから稽古も出来ないと思うよ」

何やら混沌と化してきた場に高町なのはが一声をあげる。

それに全員が視線を向け、高町なのは話の続きに耳を傾ける。

「家に行ってみても、いつも友達の家に行っているか山に行っているらしくて会えないの。時々お義母さんがいるから教えて貰ったの」

この際はこの少女が言うお義母さんという発言をスルーして彼らは話しだす

「山に行ってるって、一体何やってんのよアイツ」

「えーつと修行？」

「そんな漫画みたいな事するわけ無いでしょ」

「いや、わからないぞ。もしかしたらあいつの剣術は山で鍛えられたものなのかもしれない」

「山にいるっていうけど、パンダ師匠を捜索する時にあらかた探したけどそんな男の子見なかったんだけど」

「まあ、違う山にいるのかもしれないからな」

ますます謎が深まる少年。藤崎優について話している家族や親友たちを見て、何故か誇らしげにしている高町なのは急に立ち上がると海の方を見つめ始めた

「どうしたんだ？なのは。一体何があつたんだ？」

「……」

高町なのはは兄の言葉を無視し、ただ海を見つめる。

無視された兄、高町恭也はそれにショックを覚え、うなだれる。月村忍に慰められているところを見る限り大丈夫そうなので一同は放置し、高町なのはが見つめる方向に視線を向ける。

ベンチなどが置かれているレンガの道に転落防止用の柵。その向こうには綺麗な海が広がっているほか何も無い。

「いったい何が……」

高町美由希が呟いた時だった。

突然、視界の柵に手が現れた。海から伸びてきたように出てきた手は柵を掴むと、その身体を引き上げる

小学生くらいの身長。



濡れた黒い髪にゴーグル。

無駄のない筋肉がついた身体。

片手に持つ1mほどの魚。

水が滴る海水パンツ。

小学生の少年。藤崎優が海から現れたのだ。

「…大物get」

そうつぶやきが聞こえ、少年は公園の外へ歩き出した

「……アイツ、何やってんのよ」

「さ、さあ?」

「…今のいいスズキだったわね」

「いや桃子、少し観点がずれてるよ」

「……」

更なる混沌に包まれる公園はなんとも言えない空気になっていた

## 閑話：夢の世界の話

I <sup>体</sup>am <sup>は</sup>the <sup>劍</sup>bone <sup>で</sup>of <sup>出</sup>my <sup>来</sup>sword <sup>て</sup>.

Steel <sup>血</sup>is <sup>潮</sup>my <sup>は</sup>body, <sup>鉄</sup>and <sup>で</sup>fire <sup>心</sup>is <sup>は</sup>my <sup>硝</sup>blood.

I <sup>幾</sup>have <sup>た</sup>created <sup>び</sup>the <sup>の</sup>thousand <sup>戦</sup>blades <sup>場</sup>.

Un <sup>た</sup>known <sup>だ</sup>to <sup>の</sup>Death <sup>度</sup>and <sup>も</sup>Life <sup>も</sup>.

Have <sup>彼</sup>with <sup>の</sup>stood <sup>者</sup>to <sup>は</sup>create <sup>常</sup>many <sup>に</sup>weapons <sup>独</sup>.

Yet, <sup>故</sup>those <sup>に</sup>hands <sup>そ</sup>will <sup>生</sup>never <sup>涯</sup>hold <sup>に</sup>any <sup>意</sup>thing <sup>味</sup>.

So <sup>そ</sup>as <sup>の</sup>I <sup>体</sup>pray, <sup>は</sup>UNLIT <sup>と</sup>ED <sup>劍</sup>BLADE <sup>で</sup>WORKS <sup>出</sup>.

そこは戦場。幾つもの劍が突き刺さる荒野

ではなく、青く澄み渡る空に広大な野原。  
そこではある戦いが繰り広げられていた。

「ふつ、君も中々やるようだな。ルドガー！」

一人は赤い外套の上からエプロンを纏い、左手にはフライパン、右手にはフライ返し  
を持った青年

「ああ、エミヤも中々だ！」

もう一人は青いワイシャツと黄色のネクタイに黒いズボンの上からエプロンを着た  
青年。その手にはお玉が握られ、目の前の鍋に入ったスープが煮立つタイミングを測っ  
ている

「二人共、まだですか。お腹が空きました」

その戦場から少し離れた机の前に座る金髪碧眼の女性は、目の前で熾烈な戦いを繰り広げる青年たちを急かすようにその腹からぐうというお腹を鳴らす。

それを見かねたのか騎士の甲冑を着た金髪の青年が女性に近付き、その隣で跪いた。

「王よ、もう暫らくお待ちを。それまで私の作った食事でも」

「ガウエイン卿。貴方の作る物は料理などと呼んでは2人の料理に失礼であろう！」  
「なんと!？」

騎士の甲冑を着た青年は未だに腹から空腹を訴える音を奏でる女性の言葉に両手を地面につけて項垂れる。

その姿を黒い甲冑で全身を覆った男が肩に手を置いて慰めていた

「ふははははは、中々な道化ぶりだぞ。円卓の騎士達よ。もつと我を愉しませろ」

無駄に豪華に彩られた椅子に座る黄金の鎧に身を包んだ男は片手に持つワイングラスを揺らしながら愉快そうに笑う。

その様子を見て少し離れた場所にいる腹を鳴らしている女性によく似た格好をし、黄金の鎧の男に似た男性が両手に地面をつけて項垂れていた

「あれが、別世界の僕」

「ま、何があるのかはわからねえが元気だせや」

男性は自身の肩に置かれた手を見た後、その手を置いた人物に視線を向けた。

「君は？」

「俺はユーリってんだ。あんたらと同じでアイツの中に住んでる一員だってことさ」

地面に付けた両手を上げ、自身の肩に手を乗せる青年に並び立ち上がった男性は笑みを浮かべて口を開いた。

「そうか。僕はアーサー。君たちは僕達とは何か違う感じがするんだけど」

「ああ、俺達もそれは感じたよ。だけどそれでも根底は一緒だ。」

「確かにそうだね」

男性と青年は自分たちが置かれている状況に少しおかしく感じたのか口元を緩ませ  
て、今なお激しく戦い合っている2人の青年へ視線を向けていた

それは会合。ある破壊者が境界を壊してしまった故に置きてしまった出来事  
それは布石。これにより未来で彼らを宿す少年はある選択を得る

まだ、少年は気付かない

## 魔法少女リリカルなのは

### 第1話 「それは必然な出会いだった」

「将来の夢かあ」

前の席でおにぎりを片手に食べる浜田君がそうつぶやく。

内容はさっきの授業で先生に言われた将来の夢について、それについてはクラスの子も何か思うことがあるらしく、いつもより上の空の子が多い気がする

「優は何かやりたいこととかあるのか?」

「うーん、なんだろ」

ウインナーを口に運び考える。僕の将来の夢か…考えたこともなかったな。

どれをとつても普通の人よりも出来てしまう僕は何かをしていいのかわらない。

例えばサツカー。ボールコントロールは抜きにしても、それ以外のフィジカル、パワー、スピード、跳躍力。それら全てがありえないほど揃っている。

例えば学者。僕は会ったこと無いけど、ユーリさん達が言う英雄王達の影響で既に知らないことは殆ど無い状況にいる。

うん、なんかもうやりたいことも見つからないな

「まあ、まだ俺らも小学生だしなあ」

「そうだね。今のうちに決めておくのもいいかもしれないけど、まだ決めきれないや」

こう話してると思う。本当にこの学校の生徒は小学生なのか。

海鳴小の友達とはこんな会話にはならないよ。これも進学校の影響なのかな

「だけど優なら何にでもなれそうだな」

「どうだろう。わかんないや」

「否定しない所が憎らしいが、事実だからなあ」

「あはは」

苦笑いを零す。今年の体力測定も相変わらずの成績。転校してきてからのテストも全て満点。



少しやり過ぎな感じはあるけど仕方ないよね。体力測定にしても、今更みんなに合わせるのも逆に不自然だし。

まあ、1年前よりは身体能力の制御もうまくなったおかげで出来ないわけでは無いんだけどね。

「話は変わるけどよ。新しいポケモンが出るらしいけど、お前は買ってもらうのか？」

「うちはお金無いからねえ。発売してから少しして買うんじゃない？」

「そうか。それまで待つてやるよ」

「ありがとね」

バケットモンスター。略してポケモン

バケットに入るくらいのボールでモンスターを捕まえるというコンセプトのゲームだ。子供に人気のゲームで、意外に奥も深く。戦略性や育成要素に溢れた名作ゲームだ。

去年もよく遊んだなあ

「そーいやあ昼の体育はドッジボールだったな。今日こそお前をアウトにしてやるから

な

「お手柔らかに頼むよ」

さて、そろそろ休みも終わりに近付いてきたのか、いち早くご飯を食べ終え、外に遊びに行っていた子達が帰ってきた。

僕は家から持ってきた体操服を持って体育館へ向かう。3年生になってからは男女に別れて着替えをしている。少し大人になって早ければ思春期に入る少年少女もいるからだろう。

なら最初から別れさせておいた方がいいと思うのは僕だけだろうか。



学校が終わり、バスで帰る子や歩いて帰る子。塾に行く子や山に行く子に別れる。

ごめんなさい。少し嘘つきました。

山に行くのは僕だけです。

今も絶賛修行中の身で、何かあった時用に身体を慣らしている。

今日はパンダ師匠なりきりセットを着ての特訓だ。

すずかちゃん、アリサちゃん誘拐事件以来、これは僕が念じれば出てくるようになった。

話によると英雄王が許可しているかららしい。

つまりは、英雄王が許可してくれたら他の色んな物も出せるようになるみたいだ。

まあ、ルークさん達にはそれは難しいだろうけどとは言われたけど、いつかはちゃんと話したいな。

山へ向かう道を歩く子は他にはおらず、暫く寂しい思いをしながら歩く事になる。

いつもこの時には色んな事を考えてしまう。

例えば、僕は本当に藤崎優なのだろうかとか。

転生者を拒否したことで影響したのは知識や身体能力だけでなく、心にまで影響したのではないのか。だとしたら今の僕は何なのだろうか。

そう考えた時はみんなに怒られたけど。特にルークさんにはお前はお前以外の何者でも無いって言われちゃった。

いつも、落ち込んだ時に励ましてくれる皆がいる僕は恵まれているのだろう。いつか恩返ししたいな。

『助けて』

ん？誰か何か言った？

『いや、誰も話してねえぞ』

おかしいなあ。皆が話すような声が聞こえたんだけど…

『助けて！』

また。確かに助けてって…

一体誰が

『…お前が言うんだから本当なんだろうな。だけど俺達には聞こえない。声の方向はわ

かるか?』

ちよつと遠すぎな気もするよユーリさん。

後、少し魔力の感覚もする気が…

『……なんかきな臭いな。様子見だ。今日のところは修行は無しで家に帰っておけ』

う、うん

◇

『聞こえますか、僕の声が聞こえますか』

また声が聞こえた。

どうしようかユーリさん

『ああ、そうだな。十中八九この世界での魔法の力だとは思うが…』  
『なあなあ、一個いいか?』

どうしたの? カイウスさん

『お前はどうしたいんだよ。優』

僕がどうしたいって?

どうしてそんなことを…

『だってさ。お前っていつも俺らの言うとおりに何かしてるだろ? それって違うんじゃないか?』

…

『確かにそうだな。悪い優、俺達は余計な口挟むべきじゃなかったぜ』

：ユーリさん。わかったよ、僕は僕がしたいようにする  
だから、行くよ。この声の元へ

『聞いて下さい。僕の声が聞こえる貴方、お願いです、僕に少しだけ力を貸してください。お願い、僕のところへ！時間が、危険がもう！』

随分と切羽づまっている状況みたいだ。

急がないと。結構遠い気がするけど、問題ないね。

僕は窓を開けて、飛び出す。

手に持つ物は木刀。今の僕の唯一の武器だ。

戦わなくてもいいのかもしれない。でも、どうしてか戦わなくちゃならない気がした  
んだ



「お礼はします。必ずします！僕の持っている力を貴方に使つて欲しいんです。僕の力を、魔法の力を」

少女を見つめる小動物は懇願する。目の前にいる魔法の資質を持つ少女へ。すぐそこまで迫る異形の存在が追いつく前に少女に魔法の力を託さねばならないと

「魔法……」

少女はつぶやく。既に知っている力。この日から自分は戦いに巻き込まれていく。

それは大変なことだとはわかっている。

だけど、それ以上に出会いや大切なモノを教えられる。

だからこそ、少女は小動物の手を取った

「危ない!!」



背後から怪物が襲いかかる。妙なことを考えていた少女は一瞬避けることに遅れてしまった。流石に魔法の力を開放していない今の自分がこの怪物の攻撃を受けてしまえばただでは済まない

少女は恐怖に身体が支配される。

少女は知っているのだ。ただ、知っているだけで少女は体験したわけではない。故に初めての戦い。初めての魔法の力に怯んでしまった。

その怯みが命取り。怪物は無情にも硬直した少女に突っ込み

フルスイングの看板に吹き飛ばされた

「え？！え？！」

小動物は突然現れた存在に驚く。今現在この場所は結界によって一般人？が干渉する事は出来ないはず。故にその存在は魔法関係者に絞られるのだが

その者はパンダだった

「どうして？何この動物!？」

小動物は困惑する。自身が知っている動物ではないのはわかるが、ここまで気配を消した2足歩行の野生動物など存在するのか？

だとしたらとても危険ではないのか？

「…パンダ?」

少女も硬直が解け、目の前の存在に目を向ける。

看板を肩にトントンと当てて立っている存在はまごうことなきパンダ。その背中にある七ツ夜という文字が無くて、そこらへんで寝そべっていたらまず間違いなくパンダと間違ってしまうであろう存在。

この存在には心当たりがある。自分の親友たちを助けた山の神、パンダ師匠。それが目の前に立っていたのだ

「な、なんだかよくわからないけど今のうちに！」

小動物は少女にそう促す。既に少女が小動物の手を取ろうとしていたことには気付いていた。後は宝石を渡して呪文を詠唱するだけ。

幸いにも怪物はパンダ師匠が看板と木刀で応戦しており呪文を詠唱する時間は十二分にある

「これを持って！」

「う、うん！」

少女は小動物から宝石を受け取り、それを両手に持ち目の前に掲げる

「目を閉じて心を済ませて」

言われた通りに眼を閉じた少女を見た小動物は怪物の方をちらりと見て、まだ大丈夫であるのを確認して少女に視線を戻す。

瞬間移動してるかのような速さで怪物を斬り付けるパンダの姿は見間違いだと心のなかでこぼして

「僕の言う通りに繰り返して」

「うん」

小動物は眼を閉じ集中する。そして発動のキーワードを紡ぎだした

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

少女はたどたどしく小動物の言葉を繰り返して述べる。

言葉を紡ぐ度に手に持つ宝石が光りだすのが少女にもわかった。

「契約の元、その力を解き放て」

「えと…契約の元、その力を解き放て」

宝石が脈動し、起動準備に入る。今自身に触れている者をマスターと認識して

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の心は」

「そして不屈の心は」

「この胸に」

「この手に魔法を！」

少女は無意識に手を上に掲げる。

そして最後の起動のためのキーワードを叫んだ

「レイジングハート、セットアップ！」

「Stand by ready. Set up」

機械音の英語が聞こえ、少女の持つ宝石からまばゆい光が漏れ出す。

それは光の柱となり、少女を包みこんだ。

(え？何あの光、すごい眩しいんだけど)

パンダ師匠は項垂れた怪物を片手に持ち、少し啞然として少女を見守る。

自分の天敵の少女だが助けられないわけにもいかず、怪物を撃退していたのだが、少女から感じる魔力に自分は不要だったのでは？と感じはじめた。

そして、少女はその光を力に、姿を変える。

白い服に青いラインなどが入ったもの。私立聖祥大学付属小学校の制服に似たその服は少女も夢で見た少女のバリアジャケットであった

## 第2話「彼女の呪文はリリカルだった」

エマーゼンシーエマーゼンシー  
緊急事態緊急事態

目の前で強力な魔力反応、これって逃げたほうがいいんじゃないかな？

『どうだろう。今の優じゃあバレる心配はないと思うけれど』

そうは言ってもサルカさん。僕はあの声の持ち主を助けに来たのであつてなのはちやんを助けに来たわけではなかったんだよ？

まあ、襲われてたから助けたんだけど、それでも彼女なら自分でどうにかできそうなんだよね。

『じゃあ、君はどうするつもりなんだい？見捨てるかい？』

…それはないかな。

まあ、ばれないんだしこのままで大丈夫か。あの声の主はどうやらあそこにいる動物

みたいだし恐らくはなのはちやんがああ姿になったのもあの動物のせいなのだろう。

そう考えれば来て損した気分にもなるけれど、過ぎたことをグチグチ言っても仕方ないよね。

右手で掴んでいる怪物が蠢くのが伝わる。動かれるのも厄介なので、左手の木刀を振り下ろしてダメージを与えて動きを止めておく。

なのはちやんの様子から見てこの怪物の対処方法はわかっているようだ。こちらへ手に持っている棒状の物を向けている。

「リリカル、マジカル」

なのはちやんが杖を振る度に、更に魔力の反応が上がるのがわかる。

何をするのだろうか。とてつもない攻撃で怪物を消滅させるのだろうか。それだったらなのはちやんの危険度ランクが跳ね上がるんだけど

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

動物が叫ぶ。



今思えば動物が話すのっておかしいんだよね。今の僕も喋らずに看板で意思を伝えるのに

それよりも、あの動物の言うとおりならなのはちゃんがしようとしているのは封印なのかな？

「ジュエルシード、封印！」

なのはちゃんの声で確信する。更にあの怪物がジュエルシードという名称なのだとも理解した。

宝石の種、恐らくはその訳でいいんだと思うんだけど、どういった意味を持ってそう名付けられたのだろうか。少なくともあの怪物に宝石のような要素は無いと思うんだけど。

そうこう考えているとなのはちゃんの杖から翼が生えてこちらに带状の何かが向かってきた。

すぐさま右手を振り、手に持った怪物を带状のものへ投げつける。

帯は怪物を絡めとるように縛り付いた。

そして、怪物の額が光、アルファベットが浮かび上がった。X, X, Iの3文字

恐らくは数字の21を示すもの。

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル21、封印！」

最後になのはちゃんがそう告げると帯状の光が怪物に向かい、その身体を貫いていく。

え？封印じゃないの？普通にダメージ食らってるみたいだけど。

そして、その後怪物は光を放って消滅し、その後には宝石が転がっていた

これがジュエルシードの由来といったわけかな。

目の前に転がる宝石を前に無言で佇んでいると、なのはちゃんと動物がこちらへ歩いてきた。

回収するつもりなんだろう。どういったわけがあるかはわからないけど特に邪魔する理由もないため大人しくしておく。

「これが、ジュエルシードです」

動物が告げる。良かった、僕の仮定論はあっていたんだ。

僕が、両手を組んでうんうんと頷いているとなのはちやんが手に持った杖、レイジングハートというらしいが、それで宝石に触れ、杖の中に宝石をしまい込んだ。

僕はそれを見届けると、そのまま去ろうとしたのだが、動物が倒れ、なのはちやんの変身も解け、更に遠くからサイレンの音が聞こえてきたためなのはちやんを連れてその場を離れることにした。



「すみません」

【起おこしてしまつたようだな、すまない。出来できるだけ早はやく離はなれるべきだったのでな】

安心のルビ付き看板。これなら小学生でも問題なく読めるでしょ。

まあ、なにはともあれ。動物となのはちやんを連れ僕は近くの公園に2人？を座らせた。

そのタイミングで気絶していた動物が起きてしまい、なのはちゃんも心配そうにその頭を撫でていた。

お腹に包帯を巻いてる所を見ると怪我でもしているのだろうか？

「怪我は痛くない？」

なのはちゃんも同じことを思っていたみたいでそう尋ねた。

動物は少し身体を起き上げてなのはちゃんの顔を見てから少し笑いつつ言った

「怪我は平気です。もう殆ど治っているから」

そして身体を震わせてその身体に巻かれた包帯を解いていく。

随分器用なんだね。今度猫さんにそんなこと出来るか聞いてみようかな

「本当だ、怪我の跡が殆ど消えてる。すごい」

「助けてくれたお陰で残りの魔力を治療に回せました」

「魔力ってそんなふうに使えるんだ。みんなの術だと基本的には魔力は攻撃、回復は気って感じだったからなあ」

「貴方にも感謝しています。ありがとうございます」

動物はくるりとこちらへ身体を向けて頭を下げる。

僕はせっせと看板に文章を書いて、言葉を彼らに伝えた

「<sup>き</sup>気にするな。<sup>とお</sup>通りすぎりみたいなものだと<sup>かんが</sup>考えてくれ」

「そうですか。」

それに納得したのか、改めてこちらを向いてきた。

綺麗に整った毛並みに緑色の瞳。どう見てもフェレットのような動物に見える彼が話しているのには少し違和感を感じてしまうね。今僕パンダだけど

「ねえ、自己紹介していい？」

そう話すのはなのはちゃん。その瞳が映すのはなにか。

動物はそれを了承し、僕もそれを領く事で了承の意思を示した。

「私、高町なのは。小学校3年生。家族とか仲良しの友達なのはって呼ぶよ。」

最初に咳払いをしてから告げた自己紹介文。そうか、僕は仲の良い友達だったのか。

あまり遊んだ事も無いから仲が良いとは思ってはいなかったんだけど…なのはちゃんにとってはそうなんだね

まあ、嫌じゃないし、寧ろ仲がいい友達が出来るのは嬉しい事なんだけど。なのはちゃんの正体が掴めないんだよね

「僕は、ユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です。」

海外の動物だったのかユーノ君は。

ああ、でもユーノちゃんの可能性もあるのか

【私は山の神。パンダ師匠だ。好きに呼んでもらって構わない。後ユーノとやらは雄か？】

雌か？ 因みに私は男だ」

僕の紹介文を呼んだユーノ君（仮）は少し怒った感じで、「僕は男です！あと雄雌じゃなくて男女！これでも人間なんですから！」と言われた。今は魔力が少ないためこの姿で回復するのを待っているとも言っていた。

けど  
そうなのか。魔力って本当に便利なんだね。出来れば色々教わりたいものなんだ

と、ここでののはちゃんが思い出した、というよりも何かに気付いたかの様子で口を開いた

「貴方、優君じゃない？臭いも似てるし」

臭いって何？

って、何でわかったの!?

【違うな。少なくとも私は優という名ではない。パンダ師匠だ。】

その言葉になのはちゃんはおかしいなあ、と首を傾げながら納得した。

なんとかごまかせたようだけど、尖すぎる気がする。やっぱりなのはちゃんは警戒しないと…

それから、ユーノ君はなのはの家で預かることになり2人と別れた。

それにしてもジュエルシード、人の願いを間違った方法で叶える物かあ。

しかも危険物。そんなものがこの町に降ってくるなんて。もしかしたら転生者はこれを解決するために憑依するつもりだったのかな？

まあ、憑依はされなくなかったけれど、それくらいの目的なら僕が代わりにしてあげようかな。

そう考えつつ帰宅し、パンダ師匠なりきりセットを脱いでからお風呂で汗を流す。

今日会ったことを皆と話しながら眠りについた



次の日、学校で相も変わらずの日常を過ごした僕は、放課後に友達と過ごして楽しい



時間を過ごした。

### 第3話 「街は危険じゃなかった」

「優、少し買い物行ってきてくれない？」

既に日も落ち、近所の家からは夕飯の香りが漂う時間、突然母に告げられた。

頼まれたものは塩、みりん、米なんだけど、普通こんな時間に小学生をおつかいに行かせるかな…

まあ、特に用事があるわけでもなく快く引き受けた。にしても、米10kgって…

そんなこんなで近くのスーパーにて買い物を買った僕は右手にスーパーの袋を引つ掛け、両手に米を抱えて道を歩く。

重さは問題ないのだけど、如何せん大ききのせいで持ちにくい。

ずり落ちそうになる米袋を抱え直して歩く。そう言えば、ここ最近街の至る所で魔力の気配を感じるね。

大体はなのはちやんが封印した時と同じ魔力を感じる。多分ジュエルシードを封印しているんだろう。まだ小さいのによく働いてるのはいい子だと思う。

若干僕を見る目が怖い気がしなくともないけど…

まあ、比較的順調そうに封印は出来ているみたいだけど、なんだか最近のなのはちゃん疲れてるっぽいんだよね。無理はよくないと思うけど…

「なのは！、起きてなのは！」

……何故だろうか、事象って何かを考えたら訪れるものだけ？

近くの曲がり角からユーノ君の声が聞こえる。言葉から察するになのはちゃんもいるっぽいんだけど…

取り敢えず行ってみようかな

再度降り落ちてきていた米袋を抱え直し声のする方へ歩いて行く。

そこには、倒れているなのはちゃんとその周りを忙しなく動いている小動物ユーノ君の姿が…見た感じなのはちゃん寝てるっぽいね…さつきも魔力を感じたから封印した帰りつて所かな。それで家に辿り着く前に力尽きたと…

通りがかった身としてはこのまま放っておくわけにも行かずに2人に近付く。ユーノ君は僕の姿に気付いたのかさつきまでなのはに呼びかけていた声を潜め、こちらを怪訝そうに見ていた。

少しユーノ君は不用心だなと感じつつ、米袋を地面に置いた後にユーノ君の首の後を

掴み頭に乗せる。困惑した様子がわかるけどまあ、放っておいても問題無いと思う。

次に倒れているなのはちゃんだけど、寝息が聞こえているし、疲れて寝ちやつたつていうのは当たつてたみたいだね。

なのはちゃんを背負つて道に置いた米袋を脇に抱えて立ち上がる。案の定バランスが取りづらく、少しふらついてしまったけどなんとか踏み直す。

背中に背負いながら左手で女の子を支え、右手で米袋とスーパ一の袋を持ち、頭に小動物を乗せて歩く小学生つて傍から見たら珍しいと思う。まあ、今はそうするしかないから我慢するけどね。



幸運にも誰にも見られることなく自宅に帰つてくることが出来た。米袋を置いてドアを開ける。

その音が聞こえたのか、母が台所からやつてきて出迎えてくれた。

そして、僕の背中で眠っているなのはちゃんを見て驚いた様子で「いつの間にそんな関係に!」つて言つた。

そんな関係って：

取り敢えず、スーパ―の袋と米袋を母に渡した後にリビングにあるソファになのはちやんをおろし、その横にユーノ君を座らせる。

しかし、ここで問題が発生、なのはちやんが僕の服を掴んで離してくれなかったのだ。まあ、普通に服を脱いで大人しく寝かせただけだね。なのはちやんは僕の服を抱えて丸まってしまった。心なしか寝顔が幸せそうになったのは気のせいだと思う。

未だに混乱している母に「道端で寝てたから連れてきたよ。家に電話してあげないと」と告げてから自分の部屋に服を取りに行った。

服を来てからリビングに戻ると、ユーノ君が母に愛でられていた。そういえばネコアレルギーの父はユーノ君は大丈夫なのだろうか。

ここで、僕が戻ってきた事に気づいた母が視線をユーノ君から僕に向けた。横にいるユーノ君は心なしか疲れているみたいだ。なんかごめんね

「さつき高町さんの家に電話したんだけど、もう遅いしなのはちやん泊まる事になったからね。後、明日は朝から用事があるらしいから迎えも朝に来るらしいよ」

ユーノ君の頭をわしわししながらそう告げる母に呆れたような視線を送る。話が早すぎるよ母さん。

◇

それから1時間くらいが経つてなのはちゃんが起きた。寝ぼけた様子で晩御飯を食べ、母さんに風呂はどうする?と聞かれて「優君と入る」とこれまた寝ぼけた様子でつぶやくのはちゃん。

これに母が少し興奮気味になっていたので、僕は無視してユーノ君共々なのはちゃんをお風呂に連れて行く。因みに父はアレルギーはあくまで猫だけらしいのでユーノ君は大丈夫みたい。

下手したら外で寝なければいけなかった状況にユーノ君が安堵の息を吐いていたのがはつきりとわかった。

お風呂場に付いた。だけどなのはちゃんは寝ぼけた様子で立っているだけ。

取り敢えず顔の前で手を振ってみただけ、少し嬉しそうに笑うだけで何もしない。放っておこうとしたんだけど、何故か手を掴まれる始末。いったいどうすれば

「優君、脱がして」

後ろでユーノ君が吹き出す音が聞こえる。流石にそれははずかしいんだけど：

何度その旨を伝えても「脱がして」の一点張りのなのはちゃんにこちらが折れて脱がす。ユーノ君はこちらから視線を外すように後ろを向いていた所を見るに、ユーノ君も恥ずかしいのだろう。

なんとという人物なんだ高町なのは。僕は改めて実感した。

お風呂の中に入り、なのはちゃんが椅子に座らせる。僕はなのはちゃんの前に置かれた風呂桶とは別の風呂桶を取り出し、湯船のお湯を掬ってその中にユーノ君を入れてあげる、流石に浴槽にそのまま入れてあげれないからね。

そうしていたら、なのはちゃんから頭と身体を洗ってほしいとのご要望が。もう本当に勘弁して下さい。

まあ、なのはちゃんが折れないのはさっきのでわかったので大人しく従う。何時の世

も女の人のほうが強いんだね、カイウスさん、ルカさん

『いや、何で俺達に振るんだよ。』

取り敢えず、お湯をなのはちゃんにかけながら、温度に慣れさせる。それから髪の毛もお湯で濡らしてからシャンプーで髪の毛をわしゃわしゃと泡立てて洗う。

洗い終えたら目をつむってと言ってからお湯で流してあげる。その後はボディソープを母さんが使っているボディタオル（柔らかい）で泡立ててなのはちゃんの身体を洗っていく。

最初は僕が使っているボディタオルを使おうとしたんだけどジュードさんに止められた。

背中、腕、首、胸、お腹、足と擦ってからお湯で流す。もう既に考えることを放棄し始めてた僕なのはちゃんに湯船に入るように言ってから椅子に座る。

なのはちゃんはまだ寝ぼけているようだったので、ユーノ君に「なのはちゃんが溺れそうになったら鳴いて教えてね」と伝えて頭を洗い始める。ユーノ君はそれに「キュー！」と返事をしたのだけど、人に返事しちゃうあ人の言葉がわかってるってばれちゃうよ。

ユーノ君



本格的にユーノ君の危機感が薄いのでは？と感じつつ身体を洗い終えて湯船に浸かる。疲れがとれる事がわかるなあって思いつつ、目の前にいる幸せそうに笑っているのはちやんにため息を吐く。この疲れって大半がなのはちやんのせいなんだろうなあ。100秒きっちり数えてから湯船から上がる。なのはちやんも満足したらしく湯船から出た。

少し赤くなつて項垂れているユーノ君を回収し風呂を出た。

それからは、風呂場での事もあり、すぐに布団に入り夢の世界に旅だった。あとなのはちやん、君の布団あっちだつて言ったよね？

夢の世界でカイウスさんに追いかけてまわされました。



朝、清々しいくらいに感じる空の元、藤崎家にある声が響いた

「大人の階段登ったの!!でも記憶が無い!!」

目を覚ますと、頭を抱えて悶えているのはちゃんの姿がありました。

朝食を食べ終えた辺りで土郎さんがなのはちゃんを迎えに来た。何でも今日は翠屋 JFC というサッカークラブ（土郎さんがコーチ）の試合があるそうだ。

そう言えば以前になのはちゃんにそんなことを言われたなあ。となのはちゃんに視線を移すとなにやらユーノ君に詰め寄っているのはちゃんの姿があった。放っておく。

「優君も見に来るかい？もしサッカーがしたいなら大歓迎だよ」

「すみません。今日は用事があるので」

無駄に歯を光らせて笑う土郎さんに頭を下げ断る。

今日は修行の日だから仕方ないね。

「鍛錬でもするのかい？」

「はい」

何でわかったのだろうか。ああ、土郎さんも休みの人は修行してるのかな。家にあんな道場あるし

「それなら仕方ないね。まあ、無理はしないように」  
「わかりました」

土郎さんとなのはちゃんを見送った後、深い溜息をこぼして家に入る。  
やっぱり少し苦手かなあ…



時間は過ぎて昼過ぎ。昼食を食べに一度家に帰ってきてから再度山に向かおうとしている時だった。

突然嫌な気配を感じた。

一体何が起きるんだろう?、と警戒していると地面を照らしていた太陽が雲に隠れた。何だろうと空を見上げると、それは間違いだったのがわかった。巨大な影が出現していた。

「え?・怪獣?」

思わずそう呟いてしまったけど、よくよくみたら巨大な植物だった。一体全体どうやって大きくなったのかは…心当たりが無いってわけでもないけど

いや、十中八九ジュエルシードのせいだろうね。こんな大きな怪物にもなるなんて

つと、そんな事言ってる場合じゃなかったね。とつとときぐるみに着替えないと。こんな街中で暴れたら一般人にも被害が及ぶかもしれない

『上だ!・優!』

「っ!!!」

とつきにその場を飛び退く。次いで聞こえる地面に何か突き刺さる音。

視線を向けてわかる。植物の蔓がさつきまで僕の立っていた場所に突き刺さっていたのだ。鋭いというよりはその重量で押しつぶした形に近いけど

つと、もう一度飛び退く。

また地面に突き刺さる蔓。そこまで速くはないね

『奴さんはお前が狙いみたいだな。変装する時間がねえぞ』

「どうして僕を狙うのかな？」

『魔力のせいじゃねえか？』

結構隠蔽には自信あったから、もし魔力のせいじゃ狙われてるんだったら少しショックかも

「でも、どうしよ。」

変装できずにあんな植物と戦うところを見られるのは良くないと思う。

だいが目立ってるし

「でもまあ」

それで助けないってのは無いけどね。

逃げ出すなんてもつての外だよ。要は見られずに助けたらいいんだから

『来るぞー!』

「うん!獅子戦吼!!」

闘気を飛ばして蔓を蹴散らす。今回は木刀は無い。

山で調達するつもりだったから仕方ないけど、少し不安が残るかも…まだ素手での戦闘、木刀でのに比べて慣れてないし

「次!叛陽陣!」

光弾で迫る蔓を吹き飛ばす。

あとひとつの懸念はこんな大きな敵を相手にしたことが無いってところかな。術で燃やしたら街に被害が出そうだし

「でも、やるしかないよね！」

臥竜碑で迫る蔓の下に潜り込み打ち上げることでも迎撃した。



『大丈夫か!?』

「うん。まだいけるよ」

あれから、数十分が経過した。その間、瓦礫を打ち落としたりして一般人への被害を出来るだけ抑えることに専念していた。僕にジュエルシードの封印は出来なくて、精々出来るのが時間稼ぎくらいしかない。

それでも、出来る事は全力でやる。迫る蔓を躲して植物の巨体に近付く。激化する攻

撃を躲しては殴りを繰り返す。少しでもダメメージが入れば鈍くなるはずだと、根拠はないが確信を得たように拳を打ち込んでいた。

「優君！大丈夫?!」

すると、空から魔法少女姿のなのはちゃんが降りてきた。流星に上空は意識してなかったよ…

というか普通にやってくるの? こういうのってバレたらまずいんじゃないや

取り敢えず、僕は蔓を殴り飛ばしてなのはちゃんに驚いたような顔をしてから聞く

「なのはちゃん…その格好は?」

「私、魔法少女になったの。それであんな怪物を封印してるんだよ」

ノータイムで暴露したなのはちゃんに内心驚きつつ、視線を植物へと向ける。

未だに少しずつ広がっている植物をなんとか止めないといけないのは変わりなく。実はなのはちゃんにはここでもたもたしているよりもとつと封印してほしいというのが心境なんだけど…



「ちよつとなのは！簡単にバラしちゃったらダメだよ！」

「えへへ。ごめんねユーノ君。って、優君その怪我どうしたの!？」

そう言われ、頬を触る。そこにはいつの間に来たのかが分からないが、何かで切つたらしく血が出ていた。

「多分瓦礫か何かで少し切っただけだよ、気にしないで」

「……………」

なのはちゃんが見ている前では使える技は限られる。闘気を飛ばすのはやめておいたほうがいいね。

「……………」

それにしても、キリがないな。結構蔓は消し飛ばした筈なんだけど

「…せないの」

「…なののは？」

なにやら後ろでとてつもない気配を感じて振り向く。気配を発しているのはなのちゃん。何故かそこだけが歪むようにみえると錯覚してしまう。疲れてるのかな後、ユーノ君も何故かすごく焦ってる。

「レイジング・ハート」

なのはちゃんがつぶやく。それに機械音で Yes Mom と聞こえた。いや、何かがおかしい気がするんだけど

不穏な空気の中、植物の方への警戒をしつつもなのはちゃんの動向を見る。とんでもないことをしでかしそうで怖いよ。

なのはちゃんの手に持つ杖が変形する。先が伸びて、翼のようなものも生える。機械音でキャノンモードって聞こえたのは空耳だと思いたい。

キャノンって…

「私の優君に傷を付けるなんて絶対に許せないの!!!」

「え?なののは?」

なののはちゃんからとてつもない魔力が溢れる。いや、無駄に放出しすぎなんじゃ…  
ユーノ君も困惑しちやつてるよ

「見せてあげる!デイベインバスターのバリエーション!!」

「え?なのは砲撃魔法使ったことないよね?…つて周囲の魔力を取り込んでる!」

懸念っていうのはいつも当たるんだね。嫌な予感がするよ。

周囲の魔力を収束して杖の先に集めている。さつき無駄に放出していた魔力つてこのため?

「これが私の全力全開!スターライト…ブレイカー!!!」

視界が桃色に包まれた

## 第4話 「2人目の魔法少女と遭遇してしまった」

大型植物の事件から一週間が経った。

はい。結果から言うのであれば。植物は消え去りました。

なのはちゃんの特大な砲撃魔法は上に向かって放った為に街へと直接当たることはなく空の彼方へ。

その時に少しビルに掠ってしまったようで少しだけビルの上の部分が削れているように消えていた。魔法ってこんな破壊力を持っているのか：と内心戦慄していたんだけど、ユーノ君の話ではなのはちゃんがおかしいとのこと。

因みになのはちゃんはその後ユーノ君に説教されていました。下手したら海鳴市が吹き飛ぶところだったとの言葉なのはちゃんは素直に謝っていた。もし先程の魔法、スターライトブレイカーを放つならそれ相応の結界を張らなければいけないのと。あんな魔法に耐えられる結界ってあるのかな？

後、長年警戒していたなのはちゃんが秘密結社の手先であるとの考えは間違いだったみたいで、ユーノ君がなのはちゃんにジュエルシードの封印を手伝って貰うために魔法

の力を渡したらしい。

それに少しばかり拍子抜けし、警戒していた自分が恥ずかしくなった。でも、なのはちやんからは随分前から魔力を感じれたんだけどね…

それから僕の話になった。なのはちやんが危険ではないことがわかった？ので、ある程度の事を話した。勿論嘘も交えてだけどね。

例えば、ユーノ君が話してるのに驚かないのは既に話せる動物を知っているからと昨晚に声を聞いたからだと言った。

この話せる動物とはパンダ師匠の事だ。彼とは時々一緒に修行していると伝えておいた。何かの本で真つ向から嘘をつくのではなくて、少しばかりの真実を交えた嘘を情報として教えたほうが真意には気付かれにくいと書いてあったためそんな事を言ったんだ。

2人はパンダ師匠が喋れるって事に驚いていたけど…

その日の晩にすずかちやんのお姉さんが来た時は驚いたし、同時に嘘をついていて助かったと感じたよ。

次に魔法に関してだけど、僕の中にも魔力があるとの事をユーノ君にわかるように調整。デバイスと言う魔法を使う際のサポートする道具は無いらしく素人の僕には難しいかもしれないと言われたけど、少しだけユーノ君が魔法を教えてくださいる事になった。

これでこの世界の魔法の習得は問題無さそうだね。これまでは身体の慣らしと調整ばつかの修行がやつと魔法という本格的な修行に出来ることとなったため、内心喜んでいた。

まあ、それからなのはちやんがデバイスレイジングハートにジユエルシードを確保して、その場を離れた。お巡りさんに見つかつたら大変だしね。

それから、なのはちやんは家に帰つて休むみたいで別れた。まあ、その際にユーノ君を借りて魔法の練習をしたんだけどね。場所は山の中で人目につかないように。

その時にユーノ君にパンダ師匠はいないのか？と聞かれたけど、毎回一緒に修行するわけではないのとあまり人に見られるのが嫌つて言つていたと教えておく。まあ、山の神様だしね。

そんなこんなで魔法は1日目でラウンドシールドという障壁を展開する魔法ができるようになった僕（ユーノ君から魔法の才能があると太鼓判を貰つた）は普通に学校で勉強し、放課後はユーノ君から教えてもらった魔法の反復をするか、友達と遊ぶかのどちらかをして過ごしていた。

そして今日はユーノ君がすずかちゃんの家に遊びに行くのはちやんに付いていくため魔法を教えてもらうことは出来ない。

だけど、昨日は結界を張る魔法、封時結界を教えてもらったのでそれを練習するつもりだよ。

障壁の方の練習はユーノ君に止められた。密度の強化は難しかったので量を増やすのに視点をおいて100枚張るのを目指していたけど、60枚の状態で結構前方まで展開されて長いなあと感じていた所でユーノ君から障壁は十分とのお達しが。

仕方ないのでこれからは密度強化を目指すよって言ったらユーノ君頭抱えちゃったね。

まあ、そんなこんなで結界の練習。範囲は抑えて山を覆う程度。持続時間と魔力効率の上昇を目指しています。

因みにすずかちゃんの家遊びに行くのは誘われたけど断った。折角の休日に魔法の練習をいっぱいやりたいからね。ユーノ君には無理しないようにいわれたけど特に疲れていることはないの、どれ位で無理なことになるのかな？



結界を維持すること3時間。そろそろ飽きてきてついでにラウンドシールドの強度の引き上げを試している所でユーノ君から念話が入った。

『優こころが遠いつてのはわかってはいるけれど出来たら来てくれる？ ジュエルシードを発売したんだけど、少し問題が起こって』

特に断る理由もないので承諾。結界を解いてなのはちゃんのを補足する。ユーノ君の結界内にいるためようで、少し感じにくいけど、方角とおおまかな距離はわかる。大体35〜40kmくらいか。結構遠いな。

高速移動は人目につくと危険…なんだけど、もうそれについては問題ない。

再度結界を展開する。範囲は限界まで。途中で貼り直さないといけないだろうし、魔力の消費も馬鹿にできない。だけど見つかる危険性は無くなるのは大きい。

足にグツと力をためて地面をける。

次の地点で再度の加速。それからは地面に足が出来るだけつかないように速度を維持。

この時に気をつけるのは摩擦。あまり加速し過ぎると靴がすり減ってしまふ。下方への力を後ろに流すように力を伝達させる。



景色が後ろに流れていく。全てを置いていってしまうかと思われるほどの速度に驚いた。

まだこれで限界ではない。更に加速してしまったら一体どうなってしまうのだろうか。人気がない空間を疾走し結界の限界範囲に到達した。

一度結界を解除。もう一度限界までの範囲で張り直す。残り距離は20kmほど。靴は特に大きなダメージがあつた様子はないのでこの方法で問題ないようだね。

もう一度足にグツと力を入れて加速した。



「到着つと」

どれくらい走つたのかはわからないけれど、あれから一度も結界を張り替えることなく月村邸に到着した僕は、既に展開されている結界に突入する。ユーノ君が僕が入れるようにしておいてくれたようですんなり入る事ができた。

結界内に入ってしまったえばなのはちゃん魔法の場所は大分正確に特定できる。まあ、何か戦闘しているのが見えるから場所の特定は必要無さそうだけどね。

取り敢えず、戦闘をしている場所へ向かう。

そこには、超巨大な猫の姿と空をみあげているユーノ君の後ろ姿があった。

猫の方はジュエルシードの影響であると推測しつつユーノ君へと声をかける。

「来たよ、ユーノ君」

「え？ 優!？」

くるっと振り返り驚いた顔でこちらを見るユーノ君。どうして驚いているのかな？

「まだ12分しか経ってないんだけど、結構近くにいたの？」

「うーん、普通にいつもの山にいたよ」

未だに驚いている理由がわからない……って時間の問題か。確かに普通なら無理だろうけど、魔法とか使えば出来るんじゃないの？

そう尋ねるとユーノ君は以前見たように頭を抑えてため息を吐いていた。風邪でも

引いているのかな？

「まあ、それは置いておくとして。今はあれが問題だよ」

ユーノ君は上空へと手を向ける。いや、それより横の猫は放置していいのかな？  
まあ、いいのだろうと思ひ込み向けられた方を見る。そこには桃色の射撃魔法を放つ  
なのはちゃんと黄色の射撃魔法を放つ金髪の女の子が見えた。

ユーノ君の話によると、ジユエルシードを狙って来たみたいでそれになのはちゃんが  
嬉しそうに応戦しているようだ。嬉しそうに…なのはちゃんって好戦的なんだね。

更に聞くと、見たところ2人の実力は拮抗している状態らしい。もしかしたらあの少  
女もなのはちゃんのスターライトブレイカー並の攻撃魔法を持っているのかも…地球  
が危ない。

と、少女と言いついていたなのはちゃんが周りを見渡しだした。一体どうしたんだろ  
うか…

「優君の匂いがする!!!」

僕はカレーか何かなのかな？

そんな事を感じているとこちらと視線が合う。そして嬉しそうに笑ってこちらへと手を振って来た。

「あ……」

そしてなのはちゃんに飛来する金髪の女の子の射撃魔法。

全てがなのはちゃんに直撃。なのはちゃんはあえなく追撃されてしまったのだった。

これって僕が来たの良くなかったんじや……

相手の少女も呆気にとられたような顔をしている。

今まで射ち合っていた相手を些細な事で倒せてしまつて拍子抜けしているんだろう。

落ちてくるなのはちゃんが地面にぶつかる前に抱きとめる。見たところ大きな怪我は無いみたいだね。良かったよ

なのはちゃんを地面に寝かせて空に浮かぶ女の子を見る。

僕を警戒しているようで、魔法の杖をこちらへと向けて臨戦態勢をとっているんだけ

ど、僕としてはここで戦う意味がない。

なのはちやんが気絶した時点でこちらは引き下がらないといけないんだよね。

だって、僕ジュエルシードの封印も回収も出来ないし。

だからもし僕が女の子と戦って倒してしまうとジュエルシードが封印できなくて大変なことになってしまう。

負けたとしたら普通に怪我しそうだし。

未だにこちらを警戒している女の子を見ながら巨大な猫を指差す。

「すみません。あのジュエルシード封印して下さい。ジュエルシードは持つて行っていいから」

そう丁寧に頭を下げた。それにまたもや唾然とした表情を浮かべる女の子。

そんな顔されてもこちらに封印が出来ない以上、女の子にやってもらうしかない。ジュエルシードを狙っているって言うんだから少なくとも封印する事は出来るはず。

「優!?!」

「仕方ないよユーノ君。僕達はジュエルシードを封印する手段が無いんだからあの女の子に封印してもらわないと。その後に奪うのは良くないだろうしね。まあ、くれるっていうのなら貰うけど、そうはならないだろうし」

僕の言葉に唸りだすユーノ君。理解は出来るけど納得はできていないようだね。

でもまあ、ここはこれ以外に出来る事はないよ。

「あ、あの」

「ん?どうしたの?」

「いや、本当に持って行っていいんですか?」

「うん。いいよ」

だって、流石に封印してくれた子に戦いを挑むのは嫌だからね。僕としては封印できれば大丈夫なんだし。

「じゃ、じゃあ封印しますね」

「出来るだけ痛みはないようにしてあげてね。可愛そうだし」

僕の言葉に頷いて杖を猫へと向ける女の子。

そして、猫の手足を魔法で固定した。あれは確かバインドって魔法だっけ？今度ユーノ君に教えてもらおう。

「ロストロギア、ジュエルシードシリアル14。封印」

動けない猫は少し不快そうな顔を浮かべていたけど、特に痛みとかは無いみたい。

猫の体が輝き、青い宝石と分離して小さくなっていくのがわかった。って、子猫だったんだね、あの猫。

それにしてもちゃんと僕のお願ひ聞いてくれてたんだ、いい子だね。

女の子は封印する前に少し魔力を溜めていた。魔力を溜める時間があればダメーじを与えなくても封印できるんだ。

初めて知ったよ。これからは僕が時間を稼いでなのはちゃんが封印するって感じで対処したら効率が良いかなかも…

女の子は落ちた宝石へとこちらの様子を伺いながら近付いていく。だから、取らない

よ。

そして、宝石に杖の先端を付けて回収した。因みにまだユーノ君は納得できていないみたい。

「じゃ、じゃあ私はこれで」

「ちよつと待って。君の名前教えてよ」

「……フェイト」

そうか、フェイトって言うんだ。あの子も魔法少女なのかな？

もしかして地球って案外魔法少女がいっぱいいるんじゃないや…って、教えてもらったんだしこつちも教えないとね。

「ありがとうね、ジュエルシードを封印してくれて。僕は優、藤崎優だよ。こつちのフェレットはユーノ君であつちの女の子はなのはちやんだよ」

「う、うん。ど、どういたしまして？」

未だに混乱しているようで女の子は頭を傾げながら飛んでいってしまった。



出来たら友達になれないかな…

「そういえば、なのはちゃんは大丈夫かな」

さつき怪我はないのを確認はしたけど、目を覚まさないのは心配だな…：…って何かいつも通り幸せそうな顔で眠っているよ。放っておいても大丈夫そうだね。

これ以上ここにいるのは良くないだろうし、ユーノ君に帰るよって言って月村邸から離れた。

僕って来た意味あったのかな？

帰りも結界を張りながらダツシユで家に向かった。

## 第5話「ゼロ」

|||||

――全ての始まりはある人物の願いだった

――其の者の願いは救い、救われない者達の救済だった

――いつしか思想は歪み、願いが果たされる事は無かった

――其の者は資格を失い世界から追い出された

――ただ、一つの願いを残して

|||||

意識が沈んでいくのがわかる。

夢の世界へと至る感覚とは少し違うような。まるで、更に奥底に沈んでいくような…

そう、どちらかと言えば、あの甲冑の男性がいた場所へ至った時に似た感覚…

身体は動かない。呼吸をしているのかもわからない。ただ、意識だけはハッキリとしている。

みんなを感じることが出来ない為、ここが夢の世界だとは実感できる。

ここは一体……

◇

それからどれだけ沈んでいたのだろうか。

1秒かもしれない。10分かもしれない。2時間なのかもしれない。あるいは、それよりもずっと長い：

意識だけが加速していく中、気がつけば僕は立っていた。

地面に走る光のサークル。上に浮かんでいるのは輝く星。いや、よく見れば地面が透けてその向こうにも星が見える。

そこはまるで、宇宙に浮かぶ切り取られた空間のようだった。

光るサークルからは白い粒子が立ち上っている。

見たことのない幻想的な空間。この世の光景とは到底思えない領域。

僕は、そこに立っていたんだ：

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

――それは試練

――ある出来事に対処するために其の者が設けた

――それは其の者が消えた世界においても訪れる

――試練を受けるのは器

――試練の相手は神

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

世界の脈動が聞こえる。少しずつ大きくなっていく音は確かに存在している。

その音とともに自分の身体の感覚が現実味を帯びていく。

視界はハッキリとし、やがてこの空間を把握できるようになった。

光るサークルの中心…恐らくはこの空間の核となっている場所にそれは存在していた。

黒い人型の輪郭。その顔らしき場所には黄色く光った目。胸には薄く光る青い円状の何か。

手足にかけて胸の物と同じ色になっているその存在。

「……あなたは」

「……………」

返答はない。僕の言葉に何のリアクションも取らない人型の影。だけど、何となくではあるけど僕は理解した。

この影が僕をここに連れてきたのだ。

「……………」

影が身構える。それと同時に影の横に現れる円盤状の何か。

僕はこの影と戦わなければならぬらしい。

普段なら戦わないことも考えたのかもしれない。だけど、この時は戦わなければならぬと感じたんだ。

身構える。相手の一挙一動を注視していつでも対処できるように……

今の僕の手には何もない。木刀でもあれば問題は無かったんだけど……

とかんがえると手に木刀が現れた。そう言えばここつて夢の世界だったね。

まあ今は置いておこう。夢の世界と言っても影はみんなと同じようにここにいるだけの存在だろう。

故に夢の影響は受けない。ただ、僕が打ち倒すしかないというわけだ。

「行くよ!!」

「……………」

木刀を手に駆け出す。それに呼応するように影は円盤を前に突きだしてきた。

盾か何かなのだろう。浮遊しているため、不用意に攻撃してしまえばどんな力で弾かれるかわかったものじゃない。

だからこそ、思いっきり叩く。

生憎とこの木刀は本物ではない。現実ならばへし折れてしまうほどの力で叩いても、夢の世界では壊れない。

だから思いっきり叩ける。相手のガードの上から叩いてしまえばガードもへつたくれもないのだ。

木刀は円盤に当たる。反発する力を感じるが気にせずには押し込む。円盤はそのまま弾かれ、木刀は影を叩く。

近くに来て影の輪郭がはっきりとする。しっぽのようなものが生えた女性のような影。頭には耳のような物も見える。

身体を回転させて二撃目を放つ。

影はくるりと一回転し、木刀を躲した。それと同時にこちらに迫る円盤。木刀のフルスイングで再度弾き飛ばした所で、影がこちらへと接近してきた。

木刀は間に合いそうもない。なら

「ファイアーウォール!!」

炎の壁を自分を囲むように出現させる。影は後ろに跳ぶことで炎を躲した。

僕は影の方向に走る。炎の壁の向こうにいるであろう影への追撃。炎の壁を突き破って跳ぶ。

「紅蓮襲撃!!」



炎の纏った蹴りおろし。足は影の腹部に当たりその身体を吹き飛ばす。  
まだ、これでは終わらない。更なる追撃のため疾走する。地面を這うように接近し木  
刀を振るう。

「虎牙破斬!!」

切り上げからの斬り下ろし。相手の体勢を崩して次に移る。  
円盤はまだ戻ってくることはない。相手は完全に無防備である。  
ここで決めてみせる!!

「閃け、鮮烈なる刃!」

言霊を乗せて発動させる。

敵を移動しつつ叩き、すぐ切り替えして叩く。

「無辺の闇を鋭く切り裂き、仇為すモノを微塵に砕く!」

みんなから教えて貰ったとっておき。これの発動には言霊を乗せる必要がある。

本来なら言霊が決まっているわけでも無いらしいのだけど、僕にはみんなから教えて貰った言霊でしか発動できなかった。

だけど、それはみんながとっておきと言うだけあってとてもない威力を持った攻撃となる！

「決まった！ 漸毅狼影陣！」

接近し、刹那の内に数度木刀で殴りつけた。

ここまでの動きをなぞるように行える技。

それらを纏めて秘奥義と言うらしい。

秘奥義をくらった影はその場に崩れ落ちた。



目を覚ます。どうやら夢から覚めたみたいだ。

右手を見る。さつき、確かに僕はこの手で影を倒した。あれは一体何だったのだろうか。

『何かあったのか？』

リッドさん達は夢であつたことを知らないみたいだ。ますます謎は深まるばかりだね。

まあ、それはさておき。なのはちやん達は温泉から帰ってくる日だ。お土産買ってくれるって言ってたから楽しみだな。

## 第6話 「それは二度目の対峙だった」

なのはちちゃん達のお土産は温泉饅頭だった。渡してきたはずかちちゃんの後ろでアリサちゃんに抑えられているなのはちちゃんの姿には既視感があった。

ありがたく温泉饅頭を受け取った僕はしっかりと堪能させて貰った。

それとユーノ君との修行の時に旅行先でジュエルシードが見つかったと聞いた。それはフェイトちゃんに持って行かれたらしいんだけど、問題はその後。なのはちちゃんとフェイトちゃんはお互いの持つジュエルシードを賭けて決闘したらしい。

1対1ではなくて2対2だったらしいんだけど、結果的にはフェイトちゃんの使い魔をユーノ君が魔法で転移させたお陰で2対1になったらしいのだけど結局なのはちちゃんとフェイトちゃんの一騎打ちの形になったようだ。

2人の実力は殆ど同じだったようで、勝負は結局つかなくったんだとか。

その際に少しフェイトちゃんと話せたらしく、なのはちちゃんはいつともよりも上機嫌だった。

学校ではアリサちゃん達に呆れられた様子で見られているらしいけど。

まあ、そこらへんは置いておいて。ユーノ君との修行なんだけど、理由はわからないけれど僕の障壁の強度が数倍になっていているらしい。

夢の中で影を倒した影響なのかもしれない。まあ、別に困ることもないので構わないんだけどね。

そんなこんなで現在いるのは自宅。時間は午後の6時半。

今日の放課後は海鳴小の友達と公園でちゃんばらごっこして遊んだよ。

最終的には僕VS全員って感じになっちゃったけどね。

勿論勝ったよ。怪我させないように持つている棒の弾き飛ばしだけしてたけど。



ユーノ君が封時結界を張る魔力を感じた。恐らくはジュエルシードを発見したんだろう。僕もお手伝いに行つたほうがいいだろうね。

またフェイトちゃん来るかもしれないし。

幸いにも封時結界が張られた場所はそこまで離れていない。これならすぐにもか

けつけられそうだ。

母に少し声をかけてから外に出る。手に持つのはいつもの木刀。辺りは暗いと言っても人がいないわけでもないので封時結界を張りつつ走る。

少し走った場所、ビルに囲まれた所にユーノ君の封時結界が張られている。結界内に入りなのはちゃん達の元へ向かう。

到着すると、既にジュエルシードは本来の姿に戻っているようで、青い宝石にXIVという文字が浮かび上がっている。あれはシリアルNo. 14のジュエルシードだね。

で、なのはちゃん達はというとジュエルシードをほっぽり出して一騎打ちしているようだ。ユーノ君もオレンジ色の獣と戦っている。

ジュエルシードなんて危ないもの放置していてもいいのかな。まあ、流石に危ないのならユーノ君がなにか言うだろう。取り敢えずはユーノ君を助けるとしようか。

「裂空斬!!」

「がっ!？」

「優!?!」

縦に回転しながら後ろから獣を叩く。突然の奇襲に獣は驚きその体勢を崩した。ビ  
ルを蹴り方向転換。魔力を燃やし炎を纏い接近する。

「鳳凰天駆!!」

「ぐっ!!!」

渾身の体当たりで獣を吹き飛ばした。

僕は先程まで障壁で獣の攻撃を防いでいたユーノ君の横に着地する。

「優、来てくれてありがとう。正直僕だけじゃあ、あの使い魔に勝てなかったよ。」

「まだ勝ったわけじゃないよ。まあ、それでも時間は少しは稼げるだろうけど」

獣が突っ込んだ場所を一瞥してから空中で射撃魔法で牽制しあっている二人を見る。

本当に互角なんだね。

スピードと立ち回りはフェイトちゃん。パワーと防御力はなのはちゃんに分があるってところかな。

まあ、時間さえあれば決着は付くんだろうけどさ…

「ねえねえユーノ君。一ついいかな？」

「ん？どうしたんだい？優」

「あのジュエルシード、なのはちゃん達の魔力吸収してない？」

少しづつジュエルシードの胎動が聞こえるんだよね。一応封印してるんだらうけど、それが解けるんじゃないかな？

ユーノ君は僕の言葉にはっとしたように空中に浮かぶジュエルシードに視線を移す。

「まずい!!なのは！今すぐジュエルシードを確保して!!このままじゃ封印が解ける!!」

僕の予想は当たっていたようだね。言っておいてよかったよ。

でもさ急いでたのはわかるんだけど声で言わなかったほうが良かったと思う。なのはちゃんがユーノ君の声に慌ててジュエルシードに近付いてるのはいいんだけどさ、フエイトちゃんも慌てて近付いてるよ。

そして2人同時にジュエルシードへと杖を当てた。



## 外伝：理由

しとしとと雨が降り注ぐ。4月の半ば、春に降る雨は冷たく。公園の茂みの中で虚空を見上げる少年に容赦なく降り注いでいた。

既に少年の目には涙はなく、ただどこを見ているのかわからない目で木々の隙間から見える空を見上げるだけ。

顔に雨があたろうとも少年は反応する事もなく、ただじつとしていた。

少年がこの公園の茂みで倒れこんで既に3日が経過していた。

その間少年は全くと言っていいほど微動だにせず、その身を弱らせていた。

無論少年は何かを食べなくては生きてはいけない。その危険信号は身体が少年へと訴えることなのだが、2日目を超えた辺りで腹は少年へ空腹を訴える事を諦め、腹いせと言わんばかりに痛みを少年へ与えていた。

そして、動くことを止めてしまった少年は雨に打たれて冷たくなっていく身体に自分の死を感じていた。

少年は、自分はここで死んで消えるのかと考えた。

皮肉なものだった。少年はあの場所に戻るために生きることが望み、それを叶えることが出来た。

しかし、蓋を開ければ叶ったのは孤独であり、少年が望んだ結末とは大きくかけ離れた物だった。

僕は、どうして生きたいと願ったのだろうか。

少年はそう自問自答を繰り返す。

自分の身体を操られることが許せなかったから？

違う

自分の居場所を奪った者が憎かったから？

違う

叶えたい夢があったから？

違う

ただ、少年は、家族に会いたかったのだ。

しかし、それはもう叶うこともなくなつた。  
それを少年は理解し、生きる意味を見失つた。

◇

少年は目を覚ます。

いつの間にか自分は意識を失つていたので少年は理解した。

最後の記憶にある雨の感覚は無く、心なしか地面も柔らかい。

さらに、自分が見上げる景色は白一色に変化していた。

そこはあるマンションの一室であり、少年には見覚えのない内装の部屋であり、そこで少年はベッドに寝かせられていた。

少年は考える。どうやら自分は誰かに助けられて”しまった”ようであり、死から一歩遠ざかつてしまったようであると。

誰がこのような物好きな事をしたのかはわからないが、あのまま消えてしまうことを良しとまで考えた少年は、自身を助けた者に余計なお世話だと内心呟いた。

少年は相も変わらず虚空を見上げる。

自分が生きていても意味は無い。家族や友人、全ての者から忘れられ、残ったのはこの身一つだけ。

何かを成すという志も無い。

何かを守るといふ対象もない。

何かを得るといふ欲も無い。

何かに復讐するといふ目的も無い。

少年はただ、表情を変えずに虚空を見つめていた。

それから数時間が経過した。その間、少年は微動だにせず、ベッドに横たわっていた。

ガチャリと扉を開く音が聞こえる。

この部屋の住人であり、少年を助けた人物が部屋に入ってきたのだろう。

入ってきた人物はオレンジ色の髪を背中まで腰まで伸ばし、額には何かの宝石。そして、頭部には獣のような耳が付いていた。

明らかに普通の人ではないその人物（女性）に少年は興味を持つこともなく、視線を動かすことはなかった。

女性は少年を一瞥した後、部屋の隅にあるダンスへと近付く。

そして、ダンスから幾つかの衣類を取り出すと、くるりと反転し、扉に向かって歩いて行く。そして、再度視線を少年に向けて気がついた。

少年の目が開いていることに。

「なんだ、起きてたのかい。それなら声をかけてくれればいいものを」

「……」

女性は頭を掻きながら少年へと近付く。

反応しない少年に何を思うのかは定かではないが、彼女は少年の顔を覗きこんだ。

少年の視線は変化せずに彼女など眼中に無いとでも言いたいのか、ただ彼女の向こう側を見つめていた。

「全く、反応くらいしたらどうだい？折角人が助けてやったのに」

不服そうにそう呟く彼女に少年の口は言葉を紡いだ。

” どうして助けた”

喉は枯れ、声にもなっていないような言葉。しかし、それはしっかりと彼女へと届いた。

「どうしたって、私が助けたわけじゃないから知らないよ。」

では、一体誰が…と少年が言葉を紡ごうとした時、部屋にある少女が入ってきた。

金色の髪を黒いリボンで括っている。服は黒を基調とした物で、少し心配しているような表情を浮かべていた。

少年は少女へと視線を移す。

この少女を少年は知っていた。フェイト・テストアロッサ、転生者藤崎優者の記憶の中でこの少女を見たのだ。

母に虐待されながらもその身を削りジュエルシードという物を集める少女。転生者藤崎優者はこの少女に取り入ろうとしていたが、拒絶されていたと言う事も思い出した。

少年は少女の身の上を理解している。故に枯れた声で部屋に入ってきた少女に問うた。

”君は、どうしてそこまで頑張るの?”

突然の言葉に少女と女性は驚き少年と距離を置き警戒する。

この少年は一体自分たちの何を知っているのだろうか。気まぐれに助けたのは間違っていたと少女が心の中で呟くが、少年はただ問いの返答を待ち、少女たちを見ていた。何を見ているのかがわからない目。焦点は定まっておらず、傍から見れば心ここにあらずと言った少年は酷く不気味に見えた。

沈黙が場を支配する。

コチコチと時計が動く音だけが響く。何分その状態が続いているのかわからない。

少年は唯、少女を見つめるだけだった。

「……母さんのため」

「フエイト!!」

少女は答えた。何故答えたのかは自分にもわからない。だが、ここで少年にこの言葉

を言っても特に問題もないため良しとしたのかもしれない。

少年は、「そう」と呟くと視点を天井に戻し、暫くしてからその目を閉じ、眠りに落ちた。

「どういうつもりだい？こんなガキに」

「わからない。まあ、知っていても問題ないから。私がやることは変わらないよ、アルフ。もしこの子が邪魔をするのなら、排除するだけだから」

少女は寝息を立てて眠る少年を見る。酷く衰弱している少年に一体何が出来るのかはわからないが、障害になることも無いだろうと考え、部屋の外へ歩いて行った。



## 第7話「現れたのは執務官」

2人のもつ杖にヒビが入る。よほどの衝撃でぶつけたのか、それとも魔力の放出量に耐え切れなくなったのかはわからないけれど、間違いなく2人のデバイスは破損した。

「くっ！」

「んっ！」

ジュエルシードから真つ白な光が放出されて2人は堪らず飛び退いた。あれは2人の魔力に当てられて暴走しだしたのか？

だとすればまずいかもしれない。なのはちゃんの魔力は尋常じゃない、それを吸収して暴走したとすれば危険極まりないよ。

だから

「止める!!」

一息で空中に静止するジュエルシードへ近付く。脈動音と周囲の空間が若干歪んで見えるそれは、間違いなく暴走してると言える。

フェイトちゃんやんがデバイスを待機モードにしたのが見えた。恐らくはこれ以上破損しないようにだろう。なのはちゃんのレイジングハートも使えない状況。

なら力づくで抑えるしか無い。

以前ユーノ君に教えてもらった封印方法。失敗すれば大怪我間違いなし、成功しても怪我しちゃうような荒業だけど、今はそれに頼るしか無い。

ジュエルシードを右手で掴む。

「うお…おおおお!!」

右手に魔力を集中!ジュエルシードを包み込むように魔力を凝結!

「優!!」

後ろからユーノ君の声が聞こえる、無茶をしている僕を止めようとしているんだろ。う。だけど、誰かがやらなきゃいけないんだよ?ユーノ君

右手に痛みが走る。蚊に刺された程度の痛みが…

ん？

全然痛くないや。とつとと封印しよう。

◇

2人の戦闘狂の決闘から一夜明けて既に放課後。少し夕焼けに染まる道を家に向かつて歩いて行く。

ジュエルシードの封印は問題なく完了した。僕が元気にジュエルシードを掲げているとユーノ君は安心したのかふう、と息を零していた。取り敢えずジュエルシードはユーノ君に渡しておいた。

なのはちゃんは少し落ち込んだ表情をしていたけど、どうしてか僕を抱きしめると「既成事実を作ったの!」と言って走り去ってしまった。

フェイトちゃん達は悔しそうな顔をしながら撤退していった。その際に獣が女の人になったのには驚いた。カイウスさんみたいな物だと納得は出来たけどね。

まあ、これからは僕もジュエルシードの封印も出来るようになったというのは嬉しい情報だ。

これで本格的にユーノ君の手伝いが出来るよ。まあ、まだ覚えた魔法は少ないから僕自身力になれるかわからないんだけどね。

取り敢えずは特訓あるのみかな…っと、なのはちゃんの魔力を捕捉。レイジングハート治ったんだ。早いね…

さて、向かうかな。2人共昨日みたいな展開はやめてよ？

封時結界を張って駆ける。今回は範囲内になのはちゃん達もいるっばいね。これなら、一足でいける!

足に力を入れて跳躍する。

方向はあっているね。前方に巨大な木が見える。すごい顔が怖いやつだけど。

背中に背負うランドセルに魔力を纏わせる。これで多少の衝撃が来てもランドセルが壊れる心配は無いだろう。

そのまま、まっすぐ木に向かって落下を始める身体を抗わせる事無く全身に魔力を巡らせていく。

魔力は発火し、この身を火の鳥と変貌させる。

昨日も使った技だけど、落下時にはこれほど有用な技は少ないだろうね。

既になのはちゃんたちも戦っていたようで、2人共砲撃魔法を木にぶつけていた。

バリアのような物が見えるけど、それももう壊れそうだし。これで決めれそうだね。

「鳳凰天駆!!」

巨木に直撃し、その身体を霧散させる。相当なのはちゃん達の攻撃が効いていたようだね。

巨木がいた場所に小さな宝石、ジュエルシードが現れる。

それを封印する2人。フェイトちゃんとのデバイスも治ってたんだ。デバイスって凄いい治りやすいんだね、初めて知ったよ。

ってあれ？2人共ジュエルシード回収しないの？  
え？僕が持つておけばいいの？…わかったよ

2人はどうやらジュエルシードを回収するのは戦って決めるようだ。それに伴って、また暴走しないように僕に預けておくって事になったらしい。

僕は回収出来ないんだけど、ユーノ君に視線を向けても困ったように顔をかいてるだけだし…

まあいいか。2人の戦いの行方でも見守ろうかな。

2人は浮きながらお互いを見つめる。

僕も次はユーノ君に浮遊魔法教わろうかな。あつたら便利そうだし…

「ジュエルシードは譲れない」

フエイトちゃんのデバイスが変形する。

ああいう変形ってかっこいいよね。そろそろ僕もデバイスが欲しいけど、何処かで手に入らないのかな。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなの」

そう言ってデバイスを変形させるのはちゃん。

なんでだろう。話だつて言ってるのに会話ではない気がするの。なのはちゃんの思考はいまいちわからないんだよね。

「私が勝つたら、ただの甘ったれた子じゃないってわかったなら、友達になって一緒に優くと結婚してくれる?」

「え?・え?・ええええええ!!?」

…僕っていつなのはちゃんと結婚する事になったのかな…初耳なんだけど…いや、多分聞き間違いだね。

フェイトちゃんも驚いてるし多分凄いな変なことを言ったのには変わりないんだろうけど。

「行くよ!・フェイトちゃん!」

「え？ちよ…え？」

フェイトちゃんに突っ込むのはちゃん。

困惑しながらなのはちゃんを迎撃しようとするフェイトちゃん。

なるほど、動揺させる作戦だったのか。なのはちゃんって凄い策士だったんだ。学校では頭良くなかったから気付かなかったよ。

また今度アリサちゃんの相手してもらおうかな。

と、なんだろう？あの魔力。いきなり2人の間に現れた魔力は…

2人の衝突とともに発生した光のせいでちゃんと見えないな、一体どうなってるの？

「ストップだ!!」

光が晴れて見えるようになったら、2人のデバイスを止めている黒い魔法使いがいた。

一体誰なんだろう？あの小さな子。



『小さいってお前さんが言えたことじゃないだろ』

その言葉は無視します。

今はあの少年が誰なのかが問題なんだよ！

『へいへい』

「ここでの戦闘行動は危険すぎる」

そうなの？ 街中じゃないし大丈夫そうんだけど……すぐそこ海だし移動しろって事かな。

僕は空に向かって大声で言う。

「2人共！海に行けって事じゃない？」

「あ、なるほど」

「違う!!」

違ったみたいだ。じゃあ、一体どうしてなんだろう。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」  
いや、だからどうして危険なの？

## 第8話 「それは、まずいことになりそうで」

「ユーノ君、管理局って何？」

先程あの黒色の少年が自分のことを管理局の執務官と名乗っていた。

その時にユーノ君が知っているふうに管理局って呟いていたので、問う。

何かの管理でもしている集団なのかな。管理って聞くと中間管理職って単語を思い浮かべちゃうね。

「時空管理局と呼ばれる集団で、異なる次元に存在している世界が互いに干渉してしまう出来事を管理しているね。」

「みんな魔法使いなのかな？」

「全員ってわけじゃあないけど、僕の魔法も彼らが使う魔法と同じ物を使ってるね。」

つまり、魔法使いの集団ってことなのか…これってまずいんじゃないの？

『ああ、まずいぞ優。このままじゃあお前はモルモットだ!』  
『ちよつと、ルーク!』

じゃあ、逃げないといけないよね。

「ユ一ノ君」

「どうしたの?」

「結界任せたよ。」

「え? 優!」

地面を思い切り蹴り、空中へ逃げる。

モルモット  
実験動物なんてゴメンだよ。絶対に捕まりたくないね。

「逃すか!!」

少年が射撃魔法を放ってくる。やっぱり僕を捕まえるつもりなのか!  
ラウンドシールドを30枚張る。これで、防ぎきれるのかな?

って、一枚のところで跳ね返っちゃった。何だ、大したことのない威力でよかった。無傷で確保すべきだと手加減したのだろう。

まあ、今はその手加減に助かったかな。このまま逃げさせてもらおう。

ラウンドシールドを足場に空中で再度加速して離脱する。

その際にシールドが割れちゃったから、僕の脚力はあの攻撃以上はあるのだというのは判明した。

取り敢えず、暫くは裏山に潜伏しようかな。

あそこなら姿も隠せそうだし。



「優、ジュエルシード持って行っちゃった」

跳び去る少年を見て悔しがるのは黒衣の執務官。

呆れるのは小動物の姿をした少年。

目を輝かせるのは白い魔法少女。

それに乗じて離脱したのは黒の魔法少女とその使い魔だった。

その様子を見ていた女性、リンデイ・ハラオウンは溜息を吐きつつ黒衣の執務官に通信を送る。

『クロノ、お疲れ様』

「すみません、逃してしまいました」

及第点とは言えぬ結果だが、最悪ではないため取り敢えず女性は大丈夫だと黒衣の執務官に告げる。

そして、少し横に視線を移して、小柄な少年が跳び去った方向を見ている少女を見た。

『クロノ、そちらの方々にはちょっと話を聞きたいからアースラに連れてきてくれる?』

「了解です。すぐに戻ります」

通信を切り息を吐く女性は、今もモニターの前で作業をしている船員に指示を送る。

「追跡はどう?」

「少女と使い魔の方は多重転移で逃走したため、追跡は無理ですね。少年の方は山に入り、穴を掘って隠れたため、見失いました。」

逃走方法に随分と差があるものだと感じつつ女性は山の監視を続けるように告げて自室に向かった。

取り敢えずは現状の確認と、逃走者の情報を聞き出さなければいけないと頭に入れたつ、その歩を速めるのだった。



「さて、何から話してもらいましょうか。」

お茶に砂糖を入れつつ女性は2人の少年少女に視線を向ける。

先程帰還してきた執務官が連れてきた2人の内少女の方には緊張は見られず、少年の方には若干の緊張が見て取れた女性は内心、女の子のほうが肝っ玉があるのね。と感じつつ聞くべき情報を頭のなかで纏める。

「では、まずはロストロギアを集めている理由から教えてくれる?」

「はい。あのロストロギアを発掘したのですが、それを輸送中に事故であの街に散らばったんです。それを回収するために横のなのはと逃げた優に協力してもらったのですが」

「それは立派だわ。」

「でも、同時に無謀でもある。」



少し身を小さくさせる少年に女性は少し微笑み、優という協力者についての情報を得るのは問題ないことに内心で安堵する。

恐らくは何か理由があつて逃走したのだろうが、あの障壁から見て相当な実力の持ち主である事は間違いないのだ。それが障害として存在していたのならばジュエルシードの搜索に多大な時間がかかつてしまう危険があつたのだ。

「では、あの逃亡した少年について教えてくれるかな?」

「はいはい」

女性の質問に反応したのは少女だった。

正座したまま片手を上げて器用にぴよんぴよん跳ねている。その全身から説明したという意思を見せる少女に横にいる少年は苦笑いを浮かべていた。

「あのね、優くんは凄いんだよ。頭は良くって運動もすごい。明るくて優しくてかつこよくていい匂いがして、とっても強い。後ね、すごい努力家だし魔法もすごい上手い!山の神様ともお友達だし、前はおつきな魚を一人で捕まえる所を見たことあるの!あとね、すごいこつこつよくて、太陽みたいな匂いがして」

「なのはストップ、ストップ！それ2回目だから」

「え？そうだった？もつともつと優くんは凄いんだけど…」

「優の凄さは僕もわかってるから、落ち着いてね」

未だに少し不満気な少女に少年は肩を落としつつ、少し驚いている女性に藤崎優という人物について説明しだす。

「彼、藤崎優の魔力量は僕は底を見たことがありません。僕が魔法を教えているのですが、異常なほどの吸収量と上達への意欲の高さから教える魔法の規模が僕と桁違いになっちゃいます。」

魔法以外に魔力を炎に変えたりと自分で編み出したりもしている程の才能に彼自身の武術を組み合わせる応用力。戦闘能力は一般人とは思えないほどですね。

ですが、彼自身の思考は子供に近いため、今回逃げたのも変な理由でした」

「凄まじいな」

「あら、逃げた理由知っているの？」

「はい。先程念話で聞いてみたところ。モルモットにされるのは嫌だと言っていますんでした。」

「モルモット…」

一体逃亡した少年は何を勘違いしたのか、女性の組織、時空管理局にモルモットとやらにされてしまうと考え逃亡したのだと理解した女性は、念話で山の監視をしている船員にもう必要はないとだけ指示をし、少年と少女に向き合った。

「ではこれより、ロストロギアジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。藤崎優が持ち去ったジュエルシードについては少し協力してもらおうが」

「そうは問屋がおろさないの！」

「なのは!?!」

少女が突然立ち上がり、胸を張って宣言する。

まだ、フェイトちゃんと友達になれてないの!と

それに執務官は頭を抑えて告げた。

「次元干渉に係る事件だ。民間人に介入してもらうレベルじゃない」

「そんなの知ったことじゃないの。人手不足の時空管理局が手に負えるとは到底思えないのー!」

「どうして時空管理局が人手不足だと?」

「それは秘密なの!」

一体何の根拠があつてかわからないが少女は胸を張って自信満々に協力するという意見が通ると思っている。

時空管理局が人手不足であるのは事実である事から女性としても強くは言えずに、溜息を吐きつつ少女へと妥協案を告げた。

「では、民間協力者として、貴方達の身柄を時空管理局の預かりという事でいいかしら?」

「艦長!?!」

「勿論なの!あ、でも一度帰して欲しいの。両親に説明するから」

「それは構わないんだけど、いいのかしら?貴方達の協力はこちらとしても願ってもないんだけど!」

「あ、後は基本的にはいうことは聞くけど、どうしても聞けない命令は聞かないの!」  
「な!」

執務官は目まぐるしく変化する状況に着いて行けずに混乱する。

この少女は一体何をしたいのかが理解できないと頭を抱える。そして、視線をずらすと同じように頭を抱える少年の姿が。

それに少し親近感を覚えつつ艦長の様子を見る。

「それは許可できないわ」

「それなら勝手に集めるだけだからいいの!」

そう言われてしまうとどうしようもなくなるといふ状況に見た目よりも中々に自分たちの状況を理解しているのだと女性は感じる。

ただ、はっちゃけているだけかもしれないが。

ただ勝手に行動されると困ってしまうのはまぎれもなく時空管理局なので…それならば制限はあるがこちらにも制御出来る状況にするという少女の案を飲むほうが懸命だと判断し女性は渋々その案件を了承したのだ。

## 第9話 「決戦場は上」

「あれから藤崎優君の動向はどんな感じかしら？」

「はい、艦長。一度封時結界を張ったものの、それ以降は特に目立った魔法の使用は無し。連日のように一人で海で遊んでいるようです。あと、ジュエルシードは肌身離さず持つてるみたいですわね」

「そう。他のジュエルシードを集めているわけでも無さそうだし…本当に子供みたいね。だけど一人で遊んでるなんて、友達いないのかしら」



管理局から逃げてから早5日目。今日も僕は海中のジュエルシードを回収していた。あの日、山の土の中で息を潜めていた僕になのはちゃんが念話で話しかけてきた。

その時になのはちゃんは海中に6つのジュエルシードが沈んでいると教えてくれた。管理局と行動を共にしてるから自分達は目立った行動は出来ないと言ってたので、變わりに僕が回収することになった。

そして、管理局からの監視もあるからあまり派手に動かないで欲しいとも頼まれた。何かなのはちゃんの言い方、何処かのスパイみたいでカッコ良かったな。

少しワクワクしてきたよ。

まあ、どうしてなのはちゃんがジュエルシードの場所を知っているのかは教えてくれなかったけど、回収しておかないと大変な事になるらしい。

既に海の中で3個見つけ出す事は出来た。魔法を使う訳にも行かずに虱潰しに探してるけど、これが中々厳しい。

息は持つし水圧も平気なんだけど、海の底つて暗いんだよね。懐中電灯使ってるけど見える範囲が狭くなっちゃう。ジュエルシードは少し光ってるから近くにあったらすぐわかるんだよね。

昼間は学校に行かなきゃならないし夜には家に帰らないと怪しまれちゃう。その時に魚を捕まえておくのも忘れない。僕は夕飯をとってるのだと思わせるように。

まあ、もう日も傾いてきたし帰るとしよう。今日の収穫は蛸2匹にカンパチ1匹。結

構活きが良いし、母も喜ぶだろう。

こら、君のじゃないよ。また今度お菓子持ってきてあげるから我慢してね。

◇

布石は整ってきたの。プレシアさんを止めるには時の庭園に行かなきゃだけど、その方法を知らないから、夢のとおりにはやるしか無いの。

だけど、そのせいでフェイトちゃんが傷付くのは正直嫌だ。だから優君に頼んでジュエルシードを既に回収してもらうの。優君は優しいから快く返事してくれたの。すつごく嬉しかった。

地上にあるのは管理局の指示通りに回収してるの。これなら夢のとおりに進むから問題ない。もし万が一優君が回収しきれなくても、少なくなつた分フェイトちゃんの負担は減ると思うの。後フェイトちゃんの危機にすぐ駆けつけられるように命令の拒否権も手に入れておいたの。これで何もかもが完璧なの！



出来ればプレシアさんも助けたいけど、それに関してはどうすればいいのかわからな  
い。

私はやっぱり考えるのは苦手だから。でも、どうしてだろうか。優君ならなんとかし  
てくれると思えるよ。暫くしたらフェイトちゃんの話も話しておかないといけないね。



そして、決戦の日。

黒の魔法少女は既に残りのジュエルシードは海の中にあると目星をつけていた。

あれだけ管理局や自分達が探しているのを見つからない”6個”のジュエルシード。

それと、その両陣営以外の少年が持っているジュエルシード、合わせて7個。それを  
何としても確保しなければならなかった。

しかし、少女は少年の持つジュエルシードを後回しにした。何故かはわからないけど、彼を襲うのは気が引けたのだ。だから、最後の最後に頼もうと少女は考えていた。

「本当にやる気かい？フエイト」

「うん。管理局が来る前に回収しないと」

魔力を集中させる。少女がしようとしているのは、海に向かって魔力を帯びた電撃を打ち込み、海中内にあるであろうジュエルシードを発動させて封印するという荒業だった。

ただ、それに誤算があるとすれば、海中内のジュエルシードを少年が回収してしまっている事だろう。

今も海中内にあつたジュエルシードは少年の海水パンツのポケットの中に収められている。

「絶対に私が邪魔させないからね。だからフエイト、無理だけはしないで」

「わかったよ、アルフ。」

少女は今、雷撃を打ち込んだ。



「なんてことしてるの、あの子達はー」

時空管理局の巡航艦アースラ通信主任、エイミー・リミエツタは画面に映るCAUT IONという文字を見つつ叫ぶ。

魔力メーターは振り切り、今にも焼ききれそうな状況。その目的を理解したため、更にそれがどれだけ無謀なのだとわかる彼女は更に焦る。

いくら、敵対しているとはいえ、あの年の少女には荷が重すぎる状況。なんとかしてあげたいと感じるが、局員として助けるわけにも行かない。

それに内心歯痒い思いをしつつ、少女を見守った。

雷撃を打ち終えた少女は肩を揺らしながら息を吐き、疲労を隠せていない状況。そこから更に6つのジュエルシードを封印しなければならぬとは…

「あれ？」

しかし、ここで気づいた。アースラが捉えた反応は1つしか無いことに。

画面に映る少女もそれに気づき、困惑した表情を浮かべていた。

そして、彼女は思い出す。連日、海で遊んでいた少年の存在を。

今思えばおかしかったのだ。春先に一人で海で遊ぶ少年がいるはずがない。確かに魚介類をとっていたが、それもカモフラージュのためだったのかもしれない。

「リンディ艦長！大変です！」

「わかってるわ。彼女が複数のジュエルシードを発動させたのでしょうか？」

「違います！発動はしましたが、複数ではなく1つです！」

「……どういふことかしら？」

「藤崎優君が既に回収していたのだと思われまます！」

「まさか……いや、ありえるわね。彼は今どこに？」

「今日も海に来ています！」

何故少年がああ階段で海中に沈んでいるのかを知ることの出来ない艦長は頭を抑える。子供だと甘く見ていたら既にそこまで手の負えないことをしでかしている少年だとは思ってもよらなかったと。

そして、更に追い打ちを駆けるかのごとく、司令室に入ってきたクロノ執務官が口を開いた。

「…報告します。高町なのは、ユーン・スクライア兩名が海上へ出撃しました。」

「……はあ、彼女たちを止める命令を言っても拒否するでしょうね。仕方ないわ、クロノ貴方も出撃してジュエルシードを回収してきてくれない？」

「了解しました。」



「ん？なのはちゃんの魔力？少し距離あるね。見当違いのところ探してたのか」

トビウオと並泳していた少年は街の方向を見て眩く。大きな魔力の変動と知り合いの魔力を感じ、すぐさまその方向へ向かう。

少年は最期のジュエルシードを探しきれなかったのだ。

風潰しといえど粗はあり、少年が探しきったと思つた場所に一つだけ見落としていた箇所があり、そこにたまたまジュエルシードがあつたのだ。

少年は限界まで身体を動かし泳ぐ。

特に疲労しているわけでもなく、おおよそ人間では考えられない速度で泳ぐ少年は、すぐさま荒れた海に辿り着いたのだ。

そこには、立ち上る水流が一本あり、そこにジュエルシードがあるのがとひと目でわかった。

少年は更に加速して水流を目指す。

上空では少女達が水流をバインドなどで固定しようとしているのが見える。取り敢えず先に封印してしまおうという魂胆のようで、今は白の魔法少女も黒の魔法少女も協力していた。

少年は水流に突っ込む。

白の少女に頼まれたのは海中に沈むジュエルシードの回収。ならば、ここにあるものも回収したほうがいいのだと判断し、立ち上る水流の中にあるジュエルシードを無理矢理掴み、魔力で抑えつけた。

少し右手に痛みが走ったが気にする程度ではなく、少年はすぐさまジュエルシードを海水パンツのポケットに突っ込む。

ただ、問題があるとすれば、少年は立ち上る水流に突っ込み、その元凶を消してしまつたために水流は消えて落下していつてるのだと。

いきなり現れていきなりジュエルシードを回収していった少年に白の魔法少女以外の人達が唖然と落ちていく少年を見つめる。

そして、そんな少年と、それを見ていた次元巡艦に雷が落ちた。

「……なの」



## 第10話「それぞれの決意」

次元巡艦アースラ内にて、一人の少女が女性に正座させられていた。

「全く、いきなり次元の壁に穴を空けるとはね」

「なの……」

その言葉に身体を小さくさせて項垂れる少女。

この少女、実は先程砲撃魔法で次元を超える攻撃を行ったのだ。

本人曰く、「優君が攻撃されてカツとなってやった。後悔はしていないの」とのこと。

説教している女性にとっては、雷を落としてきた相手を察知したことに内心驚いているのだが、いきなり砲撃で次元に穴を開けられては溜まったものではない。

既に穴は管理局員のお陰で塞がっているのだが、それに人員を割いたため、再度藤崎優を確保する事が出来なかつたと内心残念がっていた。

アースラ本艦にも雷撃は直撃し、その機能を著しく下げてしまっていた。しかし、もう一つ女性にとって不可解なのが、同じ雷撃を食らったはずの少年がピンピンしている

ということ。

彼はそのまま、海に潜り逃走していったのだ。

アースラのモニターも動かないため、暫くの確保は出来ずじまい。出来る事といえば雷撃を放ったであろう人物、プレシア・テスタロッサについて調べることにくらいである。

つまり、目の前の少女にやってもらおうことは唯一つ。

「今回の件については不問とさせていただきます。そして、貴方には暫く休みもあげましょう。」

「?：わかりました」

「アースラの機能が回復するまで特にすることもないしね。フェイト・テスタロッサ、プレシア・テスタロッサ両名ともあれほどの魔法を使用したのだから暫くの間行動は出来ないだろうし。なのはちゃんには一度帰宅して身体を休めてもらいます。その際に出来れば藤崎優君からジュエルシードを貰っておいてくれるかしら?」

「…わかりました。」



「そろそろいいかな。」

日も落ちてきて、もう辺りも暗くなってきた。流石に追手の目も撒けたと思うしそろそろ帰ろうかな。

いい加減お風呂入ってゆっくりしたいんだよね。海から出てから焚き火で身体を乾かしたくらいだからベトベトしてるし。

それにしてもさっきはびっくりしたなあ。ジュエルシードを取ったと思ったら雷が降ってくるんだもん。少しビリツとして火傷もしちゃったけど、集気法で回復したらすぐ火傷も無くなったし問題は無かったんだけど。

でも、その後のなのはちゃんのスターライトブレイカーは怖かったな。空に大穴開けちゃったんだもの。あの時は目を疑ったよ。

土中から這い出て身体に付いた土を払う。

海水。パンツとタオルが入った袋を手に持ちつつ山を降りていく。

多分僕がジュエルシードを回収していたのは管理局の人にバレたと思う。だから、見つかっちゃったら多分僕を捕まえに来るだろうなあ。

ついでに僕を実験動物みたいにするに違いない。

なんて恐ろしい組織なんだ。管理局は。

「つて？ 魔力反応？」

すぐ近くで弱々しい魔力の反応を感じた。

何だろうか、罨だろうか、それともおかしなものだろうか。

少し警戒しつつ魔力の反応へ近付く。

もし罨ならば逃げよう。

敵ならば倒そう。

おかしなものならば捕まえよう。

そう考えつつ、魔力の反応のばしよに辿り着いた。

そこには、フエイトちゃんの使い魔の獣が横たわり、今にも息絶えそうな程に弱っていた。

僕は駆け寄りその容態をよく見る。

どうですか？ジュードさん。ルカさん。

『僕は獣医じゃないからちゃんとは見れないけれど、口から血も流しているし恐らくは内臓へ何かしらのダメージを受けたのだと思うよ』

『それに呼吸も不規則だね。早く治療しないと命の危険があるよ』

それは大変だ。

僕は急いで治療功を発動し獣を癒していく。

つて、え？傷塞がったよ？

『全快したみたいだね。優の治療功の性能がおかしいのかな』

ま、まあ結果オーライだね。嬉しい誤算つてやつだよ。だけど、取り敢えずいつ管理局に見つかるとかはわからないし、山に引き返すとしよう。

先程の不規則で苦しそうな呼吸ではなく、安定した寝息を立てている獣を担いで山に入る。

入った所で車の音がしたし、もう少しで普通の人に見つかるころだったようだね。危ない危ない。

◇

あれから夜が明けて現在は学校。

なのはちゃんも久しぶりに登校してきてアリサちゃんやすずかちゃんが目に見えて

喜んでるのがわかる。良かったね。

あの獣、アルフさんはあれからすぐに目を覚ました。

僕がどうしてあそこで倒れていたのか聞いたら、特別に教えてくれた。

フェイトちゃんの母親に挑んで返り討ちにあつたらしい。理由はフェイトちゃんへの虐待を止めるためらしいのだ。

フェイトちゃん、虐待受けていたのか。なのにあんな気丈に振る舞っているなんて、物凄い子なんだ。

そうアルフさんに言う自信和満々に当たり前さと言っていた。それからフェイトちゃんのいい所や可愛い所をアルフさんから散々聞かされた。

女の子のスリーサイズって勝手に教えてもいいものなのかな。まあ、小学生はそんな気にしないかな。

まあ、暫くアルフさんには山に潜んでもらう事になった。春の山なら食料に困ることも無いし、下手に外に出て管理局に見つかる可能性を低くしたいと意見を言っておいた。

そして昼休み現在、僕はなのはちゃんに屋上に呼び出されています。

取り敢えず、つい tara ベンチに座るように言われて従う。下手に逆らったりしたらス  
ターライトブレイカーがとんでくるかもしれない。

するとなのはちゃんは嬉しそうに笑い手に持った弁当を僕に差し出してきた。これ  
を食べればいいのかな？

受け取ってみると正解だったようでも更に嬉しそうに見えた。

『優君、普通にご飯を食べながら聞いて欲しいの』

いきなりなのはちゃんが念話で話してくる。一瞬反応しそうになったけどグツと堪  
えて弁当を開く。

中には少し形の崩れた玉子焼きに唐揚げ。レタスなども入っており。バランスは考  
えられてるみたいだね。だけど、ご飯にハートマークってどういう事？これって女の子  
の弁当では普通なのかな。

『まず最初に、優君アルフっていうフェイトちゃんの使い魔が今どこにいるのかわかる  
かな？ Yesなら唐揚げをNoなら卵焼きを食べて』



特に嘘をつく必要もないため唐揚げを食べる。ここまで徹底してやっているんだ。多分なのはちやんは管理局とは別の目的で動いてるに違いない。

「なのはちやんは管理局に潜入した凄腕スパイなのだろう。今も日夜行われる非人道的な実験を止めるために夜な夜な戦いにあけくれているのかもしれない。」

「どう？美味しい？」

念話でなく口頭。これは念話のカモフラージュかな。

なら話を合わせたほうが良さそうだね。

「うん。とつても美味しいよ」

「そう。嬉しいの！」

『わかったよ。一度フェイトちゃんへの伝言を伝えておいてくれるかな？後で紙に書いて渡すから。』

「ねえ優君。なのはの頭を撫でてくれない？」

多分、この口頭での質問は念話での頼みを断るか否かを判断するためのものだろう。

「うん。いいよ」

「えへへ」

僕が頭を撫でるとなのはちゃんの顔が綻ぶ。

ここまでの演技、なのはちゃんつてすつごく器用なんだね。もう少し不器用だと思っていたよ。

『じゃあ、後は聞いておいて欲しい事なの。フェイトちゃんについて、少し長くなるから、肩に頭乗つけさせてもらっていいかな』

僕は少しだけ頷いて返事した。そして、僕の手を掴みつつなのはちゃんは僕に寄り添ってきた。

『じゃあ、話すね』

◇  
な、なんて健気でいい子なんだろうか。フェイトちゃん。  
そして報われなさすぎるよ。フェイトちゃんについての事を全て聞き終えた僕はそ  
う思った。

フェイトちゃん自身は作られたクローン。オリジナルは母親のプレシア・テストロッ  
サの实の娘であるアリシア・テストロッサ。

既にアリシアちゃんは亡くなっていてプレシアさんは彼女を生き返らせようとして  
いるのだと。そしてプレシアさん自身も病に冒されていると。

これで昨夜のアルフさんの話と繋がる。勘でしか無いけど、プレシアさんは自分が長  
くないことがわかつているから冷たくしているのだろう。

別れの時の悲しみが少ないように。

フエイトちゃんは事情を何も知らされる事はなく、母親のためにジュエルシードを集めていたんだ。

ただ、プレシアさんに褒めてもらいたくて。

本当に悲劇の家族だね。なんとか助けてあげたいけど…一体どうすれば…

『私も手伝うから一緒にがんばるの』  
『う、うん』

なのはちゃんってこんな情報どこで知ったのかな…

後ルークさんも随分とご立腹みたいだ。恐らくはクローンとオリジナルって単語に反応したらしい。

そうか、確かルークさんも……

◇

アルフさんへの伝言は間違いなくフェイトちゃんに届いていた。

内容は簡単、ジュエルシードをすべてかけて勝負すること。

勝てればもれなく僕の持つてるジュエルシードも渡すという太っ腹な気持ちで参戦した。

僕は戦うのではなく傍観。

今回は、なのはちゃんとフェイトちゃんの戦いを見守るだけだ。2人共怪我はしない

で  
よ  
ね  
？

## 第11話「偽物と本物」

「ユーノ君。一つ教えてほしいことがあるんだけど、いいかな？」

「どうしたの？ 優」

空中で射撃魔法を打ち合っている2人を横目にユーノ君に話しかける。

今のうちに覚えておかないといけない魔法があるんだよね。

「転移魔法を教えてください？」

「いいけど、このタイミングで？」

「今じゃないといけないんだ。」

僕の言葉に渋々といった具合に転移魔法の発動を見せてくれるユーノ君。本当に助かるよ。

それを真似して僕も発動させる。

座標さえわかればある程度どこにでも転移できるって話はなのはちやんが言ったた

とおりだったんだね。

まあ、その座標の指定が次元空間でさえも指定できる分範囲は広いんだけど。

「ありがとうユーノ君。これでどうにか出来そうだよ」

ここで、視線をなのはちちゃん達に戻す。実は内心冷や汗を掻いているんだけど、ユーノ君は気づいていないのかな？

今なのはちちゃんがバインドで捕まってユーノ君焦ってるけどさ。なのはちちゃん、魔力を無駄に放出させながら戦ってるんだよ？

今にも飛び出しそうなユーノ君の首根っこを掴んで引き止める。

ずっと準備してるよ。近づかない方がいいからね？

「優！離して！」

「来ちゃダメだよ！ユーノ君！これは、私とフェイトちゃんの戦いなんだから！」

「でも」

隣のアルフさんも危険だって言ってるけどさ、今危ないのフェイトちゃんの方なん



だつてば。

「優は心配じゃないの!？」

「確かに心配だね（街が）」

「生返事!？」

◇

そして、僕の予想通りにフェイトちゃんの射撃魔法の嵐をかすり傷程度で済ましたのはちゃんは、一度デイベインバスターを放った後、それを防ぎきってボロボロな状態のフェイトちゃんをバインドで拘束。そして超特大のスターライトブレイカーを放った。

フェイトちゃんがバインドで縛られたあたりでアルフさんが焦り、ユーノ君が遠い目をしていた。

だから言ったでしょ？近付いたら危ないって。

直撃したフェイトちゃんが生きてるのか不安になるね。一応デバイスは非殺傷設定らしいんだけど、流石にあの砲撃は…

意識も失つてるみたいで、そのまま海に…落ちる前になのはちゃんが助けたね。

なのはちゃんはそのままフェイトちゃんを連れてこつちに戻ってきた。

見たところシヨックで気絶してるだけみたい。少し安心したよ。

と、目を覚ましたみたいだね。なのはちゃんがトラウマになって無ければいいけど…

「私の勝ちだね。フェイトちゃん」

「そう…みたいだね」

フェイトちゃんがそう言うのとデバイスから4つのジュエルシードが放出される。

じゃあ、僕も渡そうかな。

「おめでとう、なのはちゃん」

「うん！ありがとう、優君！」

僕もポケットから7つのジュエルシードを取り出し、なのはちゃんに渡す。  
と、来たか！

「優君！上！」

「了解！ラウンドシールド！」

障壁を上方方向に展開。枚数は50枚。

その直後に鳴り響く雷鳴。以前と同じ攻撃を僕の障壁は防いだ。

壊れた枚数は2枚。これならもつと少なくともいいのかな。

と、僕が障壁に集中している間になのはちゃんに渡したジュエルシードが転移した。

予定通りだ。

今の強制転移の魔力経路で大まかな座標は特定できた。

僕は、この戦いが始まる前になのはちゃんに一つ頼んだんだ。

敵陣に乗り込ませてくれて。

その際に提案されたのがこの方法。転移魔法を戦いの間に習得。そして、来るであろう攻撃を防いで強制転移からプレシア・テストアロッサのいる時の庭園の座標を割り出す。

管理局も転移し始めてる頃だし、鉢合わせになるだろうけど、ジュエルシードを持っていない僕は捕まる心配はないそうだし、

なのはちゃんが嘘をつくことも無いだろうし、今の間は管理局を気にせずに行動しよう。

障壁を解いてなのはちゃんと目を合わす。

「気をつけてね。私もすぐ向かうから」

「わかったよ。じゃあ、行ってくるね」

転移魔法を発動させる。管理局みたいに正確な位置まではわかっていないけど、概ね合ってるだろう位置は割り出せた。

失敗したら失敗した時だ。

風景が変わり転移が始まったのがわかった。

今の夫婦みたい！というなのはちゃんらしき声は空耳だろう。

◇

時の庭園に着いたようだ。

暗くてじめじめしてる場所。心なしか空気が淀んでいる気がする。

周囲に管理局の人がいないところを見て、少し違う座標に転移したのだろう。

それがどういった影響を出すのかはわからないけど、今は僕に出来る事をしよう。

僕が、プレシア・テストアロッサを止める。

そう、考えた時だった。

いつも、パンダ師匠なりきりセットが出てくるように見たことのある円盤が現れたのは。

「鏡？」

ある時に夢で戦った時に影が使っていた物。

あの時は気づかなかったけど、よくよく見たら装飾が施された鏡だった。

どうして今現れたのかはわからないけど、鏡はあの時の影のように僕の周囲をふわふわと浮いている。

まあ、いざとなれば盾にでもなるだろうし、ラッキーだと考えておこうか。

取り敢えず、僕は少し騒々しい方向へと歩き出した。

◇

それから少しして、開けた場所に出た。何人かの人が倒れているところから察するにプレシアさんに返り討ちにあった管理局の人なのだろう。

あ、消えた。強制転移されたみたいだ。でも、一気に全員出来るってわけじゃあないみたいだね。

まあ、今はそのことは別にいいか。

ここに管理局の人達が倒れていたってことは、この近くにプレシアさんがいるってこ

とだよね。

奥に見える通路に入る。

そこには、カプセルに入ったフェイトちゃんそっくりな子とプレシアさんがいた。

あれが、アリシア・テスタロッサ。本当のプレシアさんの子供か。

「作り物の命は所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ。」

プレシアさんはカプセルをなぞりそう呟く。恐らくは管理局の人と通信しているの  
だろう。

僕の存在に気付かずに話を続ける。

「アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我儘を言ったけど私の言う  
ことをとても良く聞いてくれた。アリシアはいつでも私に優しくかった」

……なんて言い草だよ。まったく

なのはちゃんに話を聞いた時は同情したけど、今はただただ、腹立たしい。

いや、あれは演技なんだ。フェイトちゃんが悲しまないようにするための。そうに違いない。

じゃないと、フェイトちゃんが可哀想だよ…

「フェイト、やつぱり貴方はアリシアの偽物よ。折角上げたアリシアの記憶も貴方じゃダメだった。アリシアを蘇らせる間に慰みに使うだけの人形。だからもういらないういどこへなりと消えなさい！」

疾走する。多分、これまでで一番早く走ってる。

鏡は僕の後ろを追尾するように飛行している。

もう我慢出来ないよ。さつきから聞いてれば偽物とか本物と違うとか…

演技にしたって限度があるよ……

思いつきり拳を握り、プレシアさんの振り向きざまに叩きこむ。

障壁のようなものが現れたけど、それすら壊してプレシアさんの頬を打ち抜いた。



『優君!?!』

なのはちゃんの声が聞こえた。やっぱり通信してたんだね。

でも、今は返事してられないよ。この人に言つてやらないといけない。

「偽物だとか、本物だとか。もう聞き飽きたよ。偽物も本物、どっちもそこに存在してるだろうが!!アンタが娘を否定してどうするんだよ!!」

「くっ! デバイスも持たない餓鬼が!!」

プレシアさんが雷撃を放ってくる。

それを集気法を発動させながら手で打ち払う。

雷は横にそれで壁に穴を開けるだけに留まった。

「どんな事情があるにしても、家族を裏切る事は許さない。だからさプレシア・テストアロツサ。僕はアンタを今から10発殴る」

少し、お灸を据えさせてもらおうか。

## 第12話前編 「宿命を閉ざす時」

「何も知らないくせに知ったような口を聞くな！」

魔女、プレシア・テスタロツサは怒号の声を上げて前方に佇む少年へと雷撃を放つ。

先程は牽制的な意味合いで手加減をしていた。故に素手の少年にも大したダメージを与えることは出来なかったのだろう。そう考えつつ、威力を上げた雷撃を次々と放った。

しかし、少年はその雷撃を尽く捌き、その歩を魔女に近づけていた。

「ああ、何も知らないよ。でもさ、偽物と呼ばれることがどれだけ辛いかは知っているよ。」

少年の脳裏に浮かぶのは赤髪の青年の物語。

記憶として自身が体験したその物語で、青年は本物になるのではなく、また新たな存在として自身を認識することが出来た。

しかし、そこまでの過程は楽といえるものではなく、苦悩に満ち溢れ、一度仲間にも見捨てられ、更には自身の死とも直面することとなった。

それを青年は乗り越えたのだ。

そのことを少年は知っている。偉大な英雄譚の一つとして語られたそれを侮辱する行為を少年は決して許すことなどは出来なかった。

「クソガキがあ!!」

魔女は更に雷撃の密度を増やし、少年へと憎しみを込めた攻撃を放つ。

それでも少年は止まることは無く、一步、また一步と確実に魔女へと進む。

そんな少年の姿に魔女は恐怖した。

一体この子供は何者なのだろうか。バリアジャケットも纏っていない。それでも自身の放つ魔法を物ともせずに進んでくるその姿、とてもじゃないが”人間”には見えなかった。

「2 発め!!」

少年は魔女の懐に踏み込み拳を打ち込む。

障壁が発動し少年の拳を止めようとするが、少年は腕の力で障壁を打ち破り魔女へとその拳を叩き込む。

「がつ?!」

腹部を殴られた魔女は吹き飛ばされ、その身体を壁にたたきつけられる。

元来が研究者基質の身体。更に病に犯されている事も災いし魔女の身体は少年の拳に耐えられるはずもなかった。

口から血を吐き地面に赤い染みを作る。そして、少年を睨みつけて荒く息を吸う。

魔女にとっては予定外であった。

管理局とは無関係の少年が自身の障害となっているのだ。

どれだけ取り繕っても動揺を隠すことの出来ない自身の心に魔女は鞭を打つ。

自分は娘を生き返らせなければならぬのだ。その為にもう一人の娘ですら傷付けた。

他人にどう思われようが関係のない。ただ、自身の目的は娘の蘇生なのだと内心で反

響かせていた。

対する少年は自身の変化に少し驚いていた。

いつもよりもスムーズに行える気の循環。魔力による強化。

少年はこの現象に一つ心当たりがあった。今も少年の周囲をふよふよと浮いている鏡。

これが現れてから少年は酷く調子が良いのだ。まるで、その鏡が少年を助長させているかのよう。

少年はこれを特に深く考えずにいた。

損をしているわけではないのだ。ただ調子が良いだけ。ラッキーだと考えておけばいいと自身に言い聞かせて3度めの拳を魔女に叩きこむ。

魔女は再度血を吐く。血は少年の身体にかかったが、少年は気にすることもなく4度目の拳を振り上げる。

しかし、魔女が雷撃を放ったことにより少年はその場を飛び退いた。

魔女は口内に溜まった血反吐を吐き出し少年を睨みつけて立ち上がる。

少年は無傷であった。少し自身を殴ったためか拳を赤くしているが、雷撃によるダメージは皆無だったのだ。

「仕方ない……わね」

魔女は懐からジュエルシードを一つ取り出し、その手に魔力を集める。

雷が迸り地面を抉りだす。

「あまり刺激するのは良くないけどそうも言ってもらえないわ。」

そして、少年に向けてジュエルシードを介した雷撃を放った。

先程の倍以上の太さの雷撃を少年は気を纏わした拳で殴り、その軌道を無理矢理に変える。

雷撃は再度少年からそれて横にある壁に穴を開けた。

先程と違うのは少年の拳を火傷にした程度。それもすぐに治ってしまい魔女は舌打ちをする。

「ほんと化け物みたいなガキだこと」

「……」

少年はただ、腰を低くし、その拳を構える。

息を吐きだし脱力する。

自身を襲った雷は脅威と呼べる程でなかったとしてもその威力を上げたのだ。

もしジュエルシードが増えればどうなるのか？

防げずにやられるかもしれない。

どう足掻いても自身が人間であることには変わりない。ただ、頑丈ではあるがそれでも許容範囲を超えれば待つているのは死なのだ。

少年は疾走する。

これ以上時間をかけていられない。早いうちに何とかしなければならぬと自分に言い聞かせてその拳を振りかぶった。

そして気づいた。違和感に。

だが、それに気づいた時にはもう既に遅く、違和感を載せた拳は障壁へと阻まれた。そして感じる雷撃の魔力。

魔女はジュエルシードを使い、障壁へと魔力を回し、反撃するようにしていたのだ。少年の全身に襲う雷。

とつさに気を全身に回した少年は瞬間的に回復していく。

しかし、障壁を打ち破るのは少しばかり困難だと判断し、その場を飛び退いた。

その間に魔女はジュエルシードをもう一つ取り出した。

これで少年の攻撃は更に通らなくなり、尚且つ魔女の攻撃は強化されていく。

このままではジリ貧だと感じた少年は考える。

あの雷撃を防ぎつつ、魔女へと拳を叩き込むためにはどうすればいいのか……

数個の考えを思い浮かべるがそれでは意味が無いと切り捨てる。

少年の今の目的は魔女を10発殴ること。倒すことではないのだ。

故に単純な方法でなければいけない。

障壁を張つての突貫などを考えたが、少年は自身を中心に展開する障壁魔法を覚えていない。故にそれは使えない。

そして、少年が考えついた方法は酷く原始的な考えだった。

リソースを増やすのだ。



体を巡る魔力を倍加させる。

身体能力を飛躍させ、魔女が反撃する前に拳を叩き込めばいいと考えたのだ。

しかし、それに悲鳴を上げたものがいた。

少年の周りにふよふよと漂う鏡だったのだ。

鏡は少年の纏う気と魔力を活性化させていたのだが、少年自身が纏う魔力を増やしてしまつたせいで活性化の限界に近づき、鏡本体へ負荷がかつたのだ。

ミシミシと装飾を傷つける音が響く中、少年はその音を気にもとめずに纏う魔力を増やしていく。

それに鏡の持ち主は壊されるのは溜まつたもんじゃないと少年へと話しかけた。

『なんてことしてやがるんですか！』

その女性は少年の頭に怒号を浴びせて少年の魔力の高まりを抑える。

このままでは自分の持つ鏡が壊れてしまうと言う女性に少年は申し訳無さそうに内心で謝った。

恐らくは初対面なのだと思われる女性はぶんすかと腹を立てつつ少年に口を開く。

『真名を開放せずに力を引き出すから限界が来るのです！壊されては困りますから今回だけは手助けさせて貰いますけど、後でたつぷりと文句聞いて貰いますからね！』

初対面の少年にこうまで言つてのける女性に少年に宿るもの達は呆れて物も言えずに少年と少女のやりとりを見守つた。

女性は告げる。

鏡を使うには言霊を載せる必要があると。

女性は告げる。

言霊には意味が必要なのだと。

故に続けた。

自身の言う言霊を反響させて、口に出すようにと

少年は告げる。

頭の中で告げられる言霊を鏡に送るように

「軒轅陵墓、冥府より尽きることもなく……」

魔女は少年の雰囲気が変わったことに気付いた。

それに警戒し、さらにジュエルシードを取り出す。

そして自身が纏う障壁を更に強固なものとし、少年の動きを注視した。

「出雲に神在り。」

少年は目を瞑り拳を自身の顔の前で握って言霊を謳う。

その言葉が紡がれる度に少年の近くにある鏡が輝きを強めて少年を強く照らす。

「審美確かに、魂たまに息吹を、山河水天さんがすいてんに天照あまてらす。」

やがて少年の身体は光りだし、その光は周囲を照らすものとなった。

「是自在にして禊ぎの証、名を玉藻鎮石、たまものしずいし神宝宇迦之鏡也。しんぼうのかがみなり」

そして、最後の言霊を謳った少年はその身体から強い光を放った。

少年の近くに浮かぶ鏡は言霊を教えた女性の持つ道具。

それは魂と生命力を活性化させる鏡。

黄泉の世界の伝説の神宝。

そして、少年の言霊は第2章へと進む

「ここは我が国、神の国、水は潤い、実り豊かな中津国。」  
なかつくに

『なっ!?! 一体どうして続きを!?!』

女性の驚いた声が少年の頭に響く中少年は至る。

根源となった物に。

少年は理解した。

あの日に見た英雄譚とは別の記憶。

数多に混じりあつてしまい、何が何やらがわからなくなった記憶の奥にあるその宝具の真意を。

少年は自分に出来る事はプレシア・テスタロッサを止めることだけだと考えていた。しかし、それは全くの間違いだったことに言霊をのせていく中で気付いたのだ。

「国がうつほに水注ぎ、高天巡り、黄泉巡り、巡り巡りて水天日光。」  
たかま  
よみ

鏡に写すは少年の後方にあるカプセルの中に眠る少女。

活性化させるのは彼女の魂と生命力

次に映すは少年の目の前にいる女性。

光は周囲を照らし、鏡は力を高めていく。

「我が照らす。豊葦原瑞穂国、八尋の輪に輪をかけて、これぞ九重天照……！」

今、言霊は最後まで紡がれた。後は、引き金となる名前を紡ぐだけ……

「水天日光天照八野鎮石」

少女と魔女の身体は光りだし、効果を發揮させる。

それは神の眼前では禁忌とされる行為。

しかし、それは人間が渴望した行為<sup>もの</sup>だった。

◇

少年は今、少女を”黄泉還らせた”

それに女性は憤慨する。神への冒瀆であると言う女性に少年はしれつと言いつつ放った。

——僕、神様嫌いだから

その言葉に少年に宿る者達は一瞬唾然とし、その後すぐに笑い声を上げた。

確かに少年の境遇にあれば神を好きになる筈もないという事を知っている女性は何も言えずにグヌヌと唸っているだけだった。

そして、少年に、「もう手を貸しませんからね！」と告げると少年の奥底に沈んでいっ

た。

少年は少し苦笑いを浮かべて周囲の様子を見る。

照らされていた光は収まり、そこには倒れている魔女と、カプセルの中に浮かぶ少女。そのどちらも先程とは変わり、顔には生気が溢れていることに気付いた少年は、いつの間にか消えていた鏡に感謝の言葉を告げてその場に座り込んだ。



## 第12話中編「襲撃は突然に」

気絶した魔女が目を覚ましたのは執務官、白の魔法少女、小動物、黒の魔法少女とその使い魔が到着してすぐの事だった。

黒の魔法少女は戸惑いつつも魔女が起きるのをただ待っていた。

執務官は魔女を捕縛する準備をしつつも黒の魔法少女と魔女を見守っていた。

小動物と使い魔はカプセルに入った少女をカプセルから出し、平らな地面に寝かせつけている。

白の魔法少女は疲労した少年に肩を貸して黒の魔法少女を見守っている。

少年はただ、その場は他の人に任せていた。

自分が介入すべき場合ではないと考えての事だった。

その間、少年に宿る者達は慌ただしく動いていた。

少年がしたこと、他者の死者蘇生をよりにもよって魔法関係の組織、管理局に知られてしまったのだ。このままでは何かしらの接触と最悪の場合少年の懸念である実験動物モルモットにされてしまうかもしれない。

少年自身の力は絶大だが、数で攻められるといくら少年であっても捕まらないというのは不可能である。

故にある青年は一人の王の元へ赴いた。

騎士を統べる円卓の騎士の長。その王へと青年は懇願する。

「夕飯、一品多く作るから力を貸してくれ」

それに王は、椅子に腰掛けたまま青年を見据え五品だと言いつち青年の反応を待つ。

青年はすぐに頷く。それに王は満足気に微笑み、立ち上がる。

「モードレッド、こちらに来るのです」

「な、何でしょう。父上」

王によく似た風貌の騎士が一人現れる。

その顔は戸惑いか困惑かはわからないが、王が何を言い出すのかを全くと言っていいほど理解できていなかった。

「その兜の加護をあの少年に」

「な、何でそんなことを…」

騎士がそう零すと王はその眼光を鋭くさせて騎士を睨む。

まるで、言わなくともわかっているだろう？と言っているようだ。

騎士は戸惑う。自身の父親はこんな人物であつたのだろうか。と

「いいから言うことを聞いて下さい。でなければ…」

王は椅子に立てかけてあつた鞆から聖剣を引き抜く。そして上に掲げると聖剣は光を放ち始めた。

王はにこりと微笑み騎士に告げる。

「わかっていますよね？」

「は、はい!!だから聖剣を閉まって！」

その答えに満足したのか王は聖剣を鞆に戻して椅子に腰掛ける。

「安心してください。お礼に好きな時に手合わせしますから」

それに顔を明るくさせたのは騎士だった。今度こそ倒してみせると王に言い放つと騎士は興奮気味に青年へと告げる。

「後で被せておくから安心しな。なに、私生活に影響しないのが俺の兜のうりだ」

その答えに青年は満足し、ありがとうと騎士に伝える。

騎士は照れくさそうに頭をかくとそのまま青年から離れていった。

騎士が少年へと被せたのは兜

シークレット・オブ・ペディグリー  
不貞隠しの兜

それは被っているものの正体への想起を阻害させる物。既に手遅れに近いかもしれ  
ないが何もしないよりはマシであると結論づけた青年は一息を吐く。

◇

自身の中で大変な事になっているとは考えも付いていない少年は身体を起き上がらせた魔女を見つめる。

魔女は視線を自身の両手に向けて身体を確認する。

病に犯されていない健康な身体。先程までの苛つきもどこに言ったのかはわからないほど清々しく感じれていた。

「……母さん。身体は大丈夫？」

黒の魔法少女はただ心配気に魔女へと問う。その姿に魔女は自身がしたことを後悔し、更に何故そこまで自分を慕ってくれるのかわからずに困惑する。

「母さんの娘。アリシアも生き返ったよ」

少し悲しそうな目でそう告げる少女を見て更に胸を締め付けられる痛みに襲われた。

そして思い出す少年の言葉。

”偽物も本物もどちらもそこに存在している”

確かにそうだ。フェイトはフェイトとして存在している

アリシアもアリシアとして存在している。フェイトをアリシアとして認識する事事態が間違いであつたとようやく魔女は気づいた。

魔女は涙を浮かべて少女を抱きしめる。

それに少女は少し驚き、そしてすぐに彼女を抱きしめ返した。

初めて自分を抱きしめてくれた母に感謝をしつつ少女も涙を浮かべた。

「ごめんなさい。ごめんなさいフェイト。」

「うん。いいんだよ母さん」

その光景に少女の使い魔は涙を流しつつ笑っていた。やっと少女の願いが叶ったと。

白の魔法少女も微笑む。自分ではこの光景は生み出すことは出来なかつたと思いつつ、隣にいる少年へと視線を向ける。

この少年は一体何者だろうか。ふと脳裏をそんな疑問がよぎつたが、それは不思議とすぐに霧散する。そんなことよりも良かったと思えたのだ。

少年も満足気に笑い、その光景を眺めていた。

「死ね、イレギュラー」

少年の胸を光の槍が貫いた。

◇

それは唐突な襲撃であった。

槍で貫かれた少年は地面へと倒れこむ。

それに白の魔法少女は絶句し、すぐに槍を刺した犯人へと視線を向けた。

金色の髪に白いローブを着た男。

その手には眩しい光を放つ何かを持っている。そして、特筆すべきはその背に羽根が生えていたことだった。

「よくも、優君を!!」

少女は憤慨し変身する。

ここで、他の者達も異変に気付き、男と対峙する。

「……」

突如、上からとんでもないほどの圧力を感じ、少女たちは地面にひれ伏した。それに男はつまらなそうに一瞥すると、その歩を魔女へと向けた。

「一体…何を…」

白の魔法少女は動かない身体に力を入れつつ男を睨みつける。

男は視線を少女へと向けるとその口を開いた。



「神に作られた器が勝手をしだしたのでな。そのの肅清と神の定めた歴史の修正だ」

それを理解したのは白の魔法少女だけだった。

いや、実際は前半部分は理解できていないが、後半部分をはつきりと理解したのだ。

歴史の修正、即ち夢での結末。プレシア・テストアロッサとアリシア・テストアロッサの死。

ふざけるなど少女は激昂する。そんなよくわからない理由で人を殺す事など許してはならないと、少女は重い身体にムチを打ちデバイスを男へと向ける。

「お願い！レイジングハート!!」

デバイスは瞬間的に主人の考えを読み取り周囲に散らばる魔力を収束させる。

先程の戦闘で少年が使用していた魔力が十二分に周囲に散らばっていたため、魔力の収束はすぐに完了した。

「スターライト…ブレイカアアアアアアアアアア!!!」

少女の必殺の一撃。収束された魔力は少女が放つ魔力と共に砲撃を強化され、男へと迫る。

「…無駄だ」

しかし、砲撃は男の前で霧散した。

「そ…んな」

全身にかかる圧力を振りきった一撃はいともたやすく男に防がれ、少女の腕は地に伏せる。

少女の様子を見ていた男は、少女が動かなくなるのを確認し、再度歩を魔女へと進めた。

男は魔女の目の前に辿り着くと手に持つ光を輝かせる。  
それは槍の形となり、魔女の命を刈り取るため男は槍を持つ手を振り上げた。

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

——誰もが目を背けた。男が光り輝く槍をプレシア・テストアロッサに突き立てる光景から。

——本人さえも自身はここで死ぬのだと悟っていた。せめて生き返った娘ともう一人の娘が生きて幸せになる事を願いつつ、死を受け入れた。

——否

——ただ一人はそれを良としなかった。

——少年はただ手を伸ばす。それは神への冒涇だろう。ただの自己満足で終わってしまうのかもしれない。



## 第12話後編「神に抗う愚か者」

少年の手に持つ物からは途轍もないほどの力を感じる。それは少年の身体を巡り少年を変貌させる。

少年は敵を認識し切り離す。自分と敵とそれ以外の者を。

少年は景色を変え、陰湿な城から異空間へと敵を引きずり込んだ。

天使の一刺しは空をきる。目の前にいた人物は消え、一瞬困惑した表情を浮かべた。そして立ち上がっている少年を見てさらに困惑する。

少年自身に変化はない。ただ、少年の腕には黒い籠手のようなものが付き、その手に黒い槍を持っていたのだ。

自身が持つ槍と正反対のように感じるそれに天使は身震いする。

「貴様がここに私を連れてきたのか」

少年はただ、自身が開放した力を確かめるように手のひらを見つめている。

心なしか少年の肌はグレーに近づき、頬には黄色のラインが走っている。天使は自身の言葉に耳を傾けない少年に激昂する。

「神から与えられた力に酔いしれる異端者と」

少年は天使を一瞥すると槍を強く握りしめ、天使へと向けた。

「確かに僕は神様に作られた器なのかもしれない。だけどね、神様は一つ失敗したんだよ。人形遊びをするのだったら僕に感情を持たせてしまったのは間違いだった。ただ、意思のない人形で面白おかしく遊んでいれば良かったんだ。けどもう僕は人間として生まれたんだ。自分たちがしたいと感じる事を全力です。それが僕達人間なんだ。どれだけの力を持っていてもそれだけは変わらない。神に決められたルールに従う理由なんて無いのだから」

これまで少年は自身を人外と称していた。

人並み外れた身体能力に、膨大な知識。非常識な宝具を見に宿した自分は人間であると言えないと、少年は思っていた。

それを一人の王が否定した。

どれだけの力を持ち、どれだけ人間から離れようとも、神に抗い己の信念を貫く貴様はまさしく人間であると。

更に王は告げる。自身の役割は神などという重荷を取り除き、人間の欲望を開放するのが仕事だと。

そして王は少年に渡した。自身の宝物庫に勝手に入れられた一つの金色に輝く時計を。

少年は更に時計の力を引き出す。

籠手が徐々に大きくなり少年の腕を全て覆う。

それではまだ足りない。目の前の天使を倒すためにはもっと引き出さなければいけない。少年は表情を変えて、時計を握る手を強めた。

この力、骸殻は精霊の力を宿した力だ。時計と契約し、自身がタイムファクターと呼ばれる危険因子へと徐々に変貌していく代わりに強大な力を入れる。

少年は既に知っていた。この力の到達点を。故にその危険性を理解していた。

だが少年は開放する。王はこの力にリスクは無いと告げる。少年はそれを鵜呑みにはしなかったが開放を進める。しかしもし仮にその言葉が無くとも少年は開放していたのだろう。

籠手は更に大きくなり少年の身体を包み込む。到達点に至る為には更に開放しなければいけないが、少年はそこで開放を止めた。

ただ、なんとなくだが思ったのだ。今の自分ではこの先へはいけないと。

天使は手に持つ光を弓と矢の形に変化させて少年へと放つ。

少年は手に持った槍で光の矢を払いのけ前に進む。

この力の使い方は身体が知っている。全てが自身の力となったわけではないが、それでも骸殻という強大な力が敵を倒すには申し分ないと感じる。

天使が更に光の矢を放とうとするのを見計らい、天使の頭上へと跳ぶ。

「絶影！」

槍を構えて急降下し敵の翼を貫く。

天使の呻き声が聞こえたが、少年は着地と同時に距離を詰めて痛みに顔を歪める天使



と肉薄し、槍を振るう。

「舞斑雪」

すれ違いざまに槍で天使の腹部を切り裂く。天使は、少年の動きに合わせて、自身の持つ光を槍へと変え少年の腹部へと突き立てる。

天使の腹部からは血が吹き出し、少年の身体には光の槍が貫いている。

少年は自身の損傷を気にもとめずに槍を天使へと投げ放った。

天使は翼と腹部への損傷にその場を動けない。投擲された槍を避ける事が出来ずに貫かれた。

少年は骸殻の力を槍という形で具現化させ、更に槍を投げ続ける。光の槍に貫かれた腹部からは血が吹き出す。それでも少年は投げることをやめない。

天使に次々と襲い掛かる槍はその一発一発を確実に天使の命を削りつつ、動きを制限していく。

そして少年は、最期の仕上げと言わんばかりに槍を具現化させて疾走した。

天使は近づいてくる少年を見て、自身の存在が終わることが近いことを悟った。

だが、天使はただ少年に殺されることを良とせず、最後の力を振り絞り光の槍をその手に持つ。そして、少年の槍に貫かれながら胸部へと光の槍を突き立てた。

少年は一瞬怯みそうになったが、それでも攻撃をやめることもなく、力を開放し叫んだ。

「マターデストラクト!!」

言霊を載せずに発動させた秘奥義。

それは、即ちその技が少年自身の力で発動された事を物語っていた。

天使は少年の一撃でその命の炎が掻き消えた事を悟る。

一体どうしてこうなってしまったのだろうか。自分はただ神が定めた運命を正すためにやってきただけなのに、今自身の存在は消えようとしている。何がいけなかったのだろうか。何を怨めばいいのだろうか。

天使は薄まる意識の中自問を繰り返し、そしてある答えに至った。

(人間を…甘く見てしまっていたのか)

天使はこの事を神に告げられ無い事を神に謝罪する。

人間とは危険なものであり、油断して行動すれば思わぬ反撃を食らってしまうと

「…神…よ…人間に…力を与えた…のは…間違い…で…」

◇

プレシア・テストアロツサは困惑した。自身の目の前にいた天使が音もなく消え、天使により押さえつけられていた身体も問題なく動けるようになったのだ。

「いつたい…何が」

その場にいる者達で事態を把握できている者は居ない。高町なのはやフェイト・テスタロッサも同様に、天使の力が消えた状況に困惑するだけであった。

そして気付く。高町なのはの隣に倒れていた少年の姿が無いことに。

それと同時に少し離れた場所で何かが倒れる音が響いた。その先は先程までアリシア・テスタロッサの入ったカプセルが置かれていた通路の方向。

一同は疲労した身体に鞭を打ち、音のした場に向かう。

「優……くん?」

その場に辿り着いた高町なのはの声が震える。プレシア・テスタロッサもその光景に絶句し立ち尽くす。

そこには、腹部を抉られ、胸からも夥しい量の血を流し、血の海に伏している藤崎優の姿があった。

「つ!!母さん!今すぐ医療班を!!」

クロノ・ハラオウンが次元艦アースラへ叫び声で通信し、それにはっとしたプレシア・テスタロツサが近づき治療する。

残された少女たちはただ、その現実離れた光景に立ち尽くすだけだった。

|||||

『神に抗う愚か者……か。それ故に現れたのだろうか。だが、まだ私の宝物を使わせるわけにもいかない。しかしまあ、あの神に押し付けられた物品だけならば貸してやらんこともない。』

最後に一つだけ言っておこう。此度の蛮勇、見事であった』



## 第13話「随分と都合のいい事」

ここは次元航空艦アースラ内にある病室。僕が天使との戦いで倒れた後に運び込まれた部屋。

僕が倒れてから半日が経過したらしい。管理局の人に治療してもらったと聞いた時は何か改造でもされたかと不安に思ったが、みんながそんなことは無かったと教えてくれて安心した。

どうやらルドガーさんがある人に頼んだらしくて、僕自身が変なことをしたり特殊なことをしても不思議に思わないようになったらしい。これで普段からパンダの格好をしていても怪しまれなくなるね。

僕の傷はジュードさんが治癒功で治してくれたらしく、もう既に全快に近い状態だった。それでも失った分の血は戻っていないので、それを補充するためにご飯を食べているんだけど…

「優君が無事で良かったよおおお」

僕が起きてからずっとなのはちゃんがかこんな調子で抱きついてきて離れてくれない。正直食べにくいね。

いや、確かに大怪我しちゃったけどさ。もう治ったことだし大袈裟じゃないかな？

ユーノ君も苦笑いしてるだけだし。

管理局の人も呆れてるよ。

プレシアさんとかは特に目立った怪我もなく、今はこの艦の護送室にいるらしい。未遂で終わったけど次元震とやらを発生させかけたとかで捕まったんだって。

よくわからなかったけど、管理局の人を倒してしまったのもあって捕まったと聞いて納得した。

アリシア・テストアロツサはもう既に目を覚ましているらしくプレシアさん達と同じ部屋にいるらしい。

家族水入らずで積もる話もあるんだろうなあ。

ユーノ君曰く中から女の子の説教する声と落ち込む女の人の声が聞こえているらしいけど…

パンを口の中に放り込みながら考える。



あの戦いの中であったことは大まかに分けて3つ。一つは水天日光天照八野鎮石を使ったこと

もう一つは天使が現れたこと。最後は金色の王様と話せたこと。

あの金色の王様と話してから僕には変化が起こった。

パンダ師匠のコスチューム以外も出せるようになったのだ。具体的には紫色の剣だとかルドガーさんの時計だとか。後斧とかもかな。

なのはちゃんたちが見てるからまだ確認できてないけれど、王様の話では神様が勝手に王様の宝物庫に入れたものらしくて、それだけなら全部貸してくれるらしい。

その道具は簡単に言えばルドガーさん達が持つてるものと同じ物らしくて、これからは骸殻の力なども使えるのだとか。

新しく修行が出来るな。とスタンさんに言われた時は少し肩を落とした。

どんどん人間離れた力を身に付けていってるね。

まあ、王様に僕は人間だって断言してもらったから平気なんだけど…

王様は話を終えるとまた奥底に消えていった。

今度は僕が来るのを待ってるのだとか…早くそっち側にも行きたいなあ。あの騎士の格好をした男の人は怖そうだけど。

◇  
目覚めてから1日が経った。流血によって失った血液も戻り、今では暇を持て余して  
います。

はやく帰りたいんだけど、この艦は現在次元震が起こりかけたせいで安定していない  
次元が正常になるまで動かせないらしいのだ。

数日で収まるだろうとは言われたけど、両親になんて説明しようかな。

勝手に何日か家にいなくなるのは前にもしたけど、その時はすごく怒られたなあ。  
最終的にはバケモンのデータ消されちゃったけど。

さらば、僕のデンチュウ。お前のことは忘れないよ。

そしてこんには新たなデンチュウ。これからよろしくね。

布団に潜り込んでいるのはちゃんを押しつけつつそんなことを考えている僕。

まあ、あの時は正直に山ごもりをしていたと言ったので今回もそんな事を言つて誤魔化そう。魔法なんて信じないと思うだろうし。

ベッドから降りてからぐつつすと眠っているのはちゃんに布団をかけて部屋の外へ向かう。

その際になのはちゃんに服を掴まれたから、服を脱いでそのまま外へ歩いて行く。なのはちゃんはそのまま服を抱え込んで丸くなった。

何か掴まないと眠れないのかな？

部屋の外へ出るとクロノ君と鉢会う。なんだかお疲れの様子。管理局は秘密結社ではなくブラック企業なのかな。

事情を聞くと時の庭園内で過去にあったプレシアさんの事故の証拠を見つけたらしく、その裏付けをするために情報を集めているらしい。

そんな事を僕に言ってもいいのかな？と聞いてみたところ。これでお前も当事者だな。と肩を掴まれて連れてかれる。

ええい、罨だったか!?

◇

なんだか大きな画面やキーボードがある部屋に連れて行かれた。そこで死屍累々な光景が目飛び込む。何でも証拠集めを艦長が命令したらしく、殆ど休憩も無しに調べていたらしい。

皆さんお疲れ様です。ブラック企業に就職したのが運の尽きだったんだね。そう人事のように思っている僕をクロノ君がある機械の前に座らせる。

何でも、情報はパスワードが無ければ一般公開レベルのものしか見れないらしく、僕が弄っても問題無いとのこと。そのレベルの情報から怪しい物を拾っておいてくれと言われた。

普通小学生に機械触らせるかな…まあ、キーボードならわかるけどいいんだけどさ…って、日本語じゃないじゃん。

クロノ君にそう言うところからか分厚い本が…それって翻訳書ですか？

クロノ君はニッコリと微笑み事故があった日にちを僕に言っただけ少し離れた所で機械をいじっている女の方へ行ってしまった。

仕方ない。まあ、やってみますか。

クロノ君から受け取った翻訳書に目を通す。

見た感じドイツ語と英語に文章の構成は似ているようだ。

取り敢えず10分程度で本の内容と言葉を覚えた僕はキーボードを触って事故の日にちと事故と入力する。

出てくるのは大魔導師プレシア・テスタロッサが追放された事などだった。

なるほどね、何かしらの実験中の不祥事で事故を起こし追放されたと。

今思ったけど、一般公開レベルで得られる情報ってあるのかな…

取り敢えず、その実験について調べるために近くで倒れている管理局の人に実験の概要について聞く。

一瞬言うのを躊躇ったみたいだけど、クロノ君に調べておけと言われたと告げると普通に教えてくれた。

何でもフェイトちゃんを作った際の実験だったらしい。

なるほど、クローン実験か。

取り敢えずその方面から調べていこうかな。

ええっと、実験の参加者は…プレシアさん以外に数人の局員か…名前閲覧つと。え？  
パスワードを入力する？

…：わかんないし、ロックを解除しようか。

幸いにもコードを作るソフトらしいものはあるみたいだ。  
ここをこうして、こうやって。この場合はこう動いてね。

数分かけて作ったコードを作動させる。

よし、ロック解除。ええっと、取り敢えず一番の責任者から調べようかな。

J・トレジャー…これって偽名？

まあいいや。取り敢えずこの人の現在は…

ふんふん。何か実験してるみたいだね。何々？新たな医療機械の作成？

概要はつと…：上級IDの提示？ええいロック解除だ!!

ふむふむ。カプセル型の生体調整機械。

内容は…へえ、魔力つてこんな風に変換出来るんだ。つてちよつと待てよ…これじゃあ魔力波数の影響で上手く作用しないんじゃないや。

波数のコピーを入力してそれにあわした魔力培養水槽を作るのか…えらく非効率なものだね。変なものの開発してるんだ。

報告書はつと。え？専門ID？

解除解除。

あれ？この変換式、全然変換してないじゃん。少し怪しいな。順を追って確認しようかな。

最初に魔力体の参照

次に魔力体のコピー

次に魔力要素の抽出

何か意味のないコード書いてる…

次に器の作成と

再度意味のないコード

最後に器への魔力体の貼付け。

これ医療じゃなくて普通にクロン作ってるなあ…何かコードを長くすることで隠してるっばいけどさ。

報告書の提出先は…ほうほう。管理局のユーラン少将ね。

取り敢えずこの情報を印刷してつと。倒れてる局員さんの手に持たせて…

プログラム作成。閲覧履歴の書き換えと出力履歴の書き換え後に自動消去。

ついでに解除コードも削除するようにしてつと。これで後はクロノ君に報告して…

「全然いいのよ！クロノ君！」

「そうか、まあ仕方ないか。すまなかつたな、部屋に帰つてもいいぞ」

よし、任務完了。これってスパイっぽくてかつこいいね。またしようかな…

後日、この報告書と実験内容への指摘を持たされた局員は研究者への道へと引きずり込まれるのはまた別の話。



◇

それから2日が経過して僕となのはちちゃんは家に帰してもらった。

案の定母にデータを消されて暫くゲーム機は没収された。解せない。

まあ、その日はゆっくりと身体を休むために早めに寝たんだけど、夢の中でクレスさんによる時空剣技の修行が：

少し疲れた状態で起きた僕をなのはちちゃんが襲撃。

その時にフェイトちゃん達が裁判を受けるって事とその前に一度会えると聞いた。取り敢えずお腹の上から降りて下さい。

母さんに妙な視線を送られつつ学校へ登校。何でわざわざ僕の家に来たのかな？学校への通り道じゃないだろうし：

それから色々教えてもらう。子供は5人欲しいこと。料理をいっぱい練習していること。家事も出来るようになったと言っていた。あとついでにユーノ君はこちらに

残ること。

なんか大半のことが関係ない事だったような気もするけど、気にしなくていいかな。寧ろ最後のほうが重要だと思っうけど……

まあ、これでユーノ君から継続して魔法を教えてもらうことが出来るとわかってホッとしたよ。また何時あんな天使が来るかわかんないからね。

あとなのはちゃん。腕掴まないで。歩きにくいから。

◇

それから数日後。海辺の公園にてクロノ君達と別れる前の挨拶をした。

今はアルフさんの膝に乗ってなのはちゃんとフェイトちゃんの別れを見守る。

何故か僕の膝にはアリシアちゃんが乗ってきたけどアルフさん重くない？

アルフさんにはかっつと笑って全然さ！と言っていた。なんかかっつこいい人だね。

僕達の隣にはハンカチで涙を拭いているプレシアさんの姿が。何でもアリシアちゃんに相当怒られたらしく、またフェイトちゃんの素晴らしさにやつと気づいたとプレシ

アさん本人が熱弁していた。

元氣そうでなによりです。

視線をなのはちゃん達に戻すとなにやらお互いのリボンを交換している様子。少しアリシアちゃんが羨ましそうに見ていたから、僕の持っているカードをあげた。

ごめんね、さっき買ったカードで。なんかやる気もないのに衝動買いしちゃって。キラ光ってるし喜んでくれるかな。

アリシアちゃんは物凄く喜んでくれた。なんかそこまで喜ばれると逆に心が痛むというかなんというか。

もし今度会えたらもつといいものをあげよう。そう僕が心に決めていると、なのはちゃんたちがこちらに近付いてきた。

さて、もうお別れの挨拶は終わりかな。と思っていると最後にフェイトちゃんが僕に話があるとのこと。

「あ、あの…」

「どうしたの?」

しかし、いつまでたつてもフェイトちゃんは話し出さない。

何故かそんなフェイトちゃんを微笑まし気に見てくるなのはちゃんとアルフさん。プレシアさんは僕を睨んだり、頭を抱えたりしていた。

「そ、その。絶対に戻ってくるから、その時は貴方の隣にいてもいいですか!!」

隣にいる？ええつと、どういう意味だろ…

皆さんヘルプ

僕の内心の声と共に始まる脳内会議。結論は…なるほどフェイトちゃんは僕と一緒に戦いたいんだね。

「勿論！一緒に頑張ろうね！」

次の瞬間、なのはも！との声が背後から聞こえた。なのはちゃんはもう一緒に戦ったのに、変な事言うね。

ってあれ？フェイトちゃんが顔真っ赤にさせて倒れちゃった。大丈夫？

あとプレシアさん。何で雷バチバチさせているんですか…

## 外伝：願い

少年は目を覚ます。少女と出会ってからどれ位の時間が経ったのかは少年にはわからない。だが、少年は自分がすべきことを見つけ、それを成す為はその身体を起こす。

既に少女の姿は無く、近くのテーブルには食べておくようにと書かれたメモとサンドイッチが置かれていた。

少年は衰弱している身体に鞭を打ちサンドイッチを持って外へ出る。

その際に何か透明な壁に阻まれたが、少年はそれを手で押すことで破壊した。

既に身体はボロボロである少年にはたして何が出来るのだろうか。

少年はただ、自分の想いを叶えるために歩いた。

少女の住居を出てから数分。弱り切った身体ではサンドイッチを満足に食べる事もできずに3口ほど食べて吐き出してしまった。

しかし少年はそれでもサンドイッチを食べた。少女に感謝しつつもその身体を少しでも治すために。

そして、少年は少年が生まれた場所に辿り着いた。

何故ここに来たのかは少年にもわからない。ただ少年は人目のない場所を目指して歩いていたのだ。

少年は地面に座り込む。体の節々が悲鳴を上げて頭は割れそうなほどに痛む。

その中で少年は願った。ある少女の幸せを。

自分でないものが残していった記憶。悲惨な運命に愛された少女を助けたいと感じたのだ。

少年は頼った。彼の中に住む黄金の王に。

一度助けてくれた王。非力な自分に生きる可能性をくれた人物へ懇願した。少女を助けたいと…

少年は誓った。自分と同じ思いを少女にはさせないと。

全てを壊された自身だからこそわかる絶望。神様が目の前の少女の思いが壊される事を望んだのならば、少年はそれに抗うと王に向かつて叫んだ。

少年が王から渡されたのは金色こんじきの杯。

人類が生み出した願望機であるそれは、まさに少年が望んだものであった。

しかし、そう簡単に願いが叶うという事はなく。その金色の杯の中身を満たすためには代償が必要だった。

少年には乗り越えることが出来ないかもしれないもの。失敗すれば死を持って願いが成就されるもの。

それを説明した上で王は少年に問う。

———そこまでして貴様は神へとその刃を向けて抗うというのか？



少年は答えた。

——神様だとかは関係ない。私は、私がしたいようにするだけだ。その結果神様に抗うことになっても俺は止まらない。

混ざり合い。自我すらもあるかはわからない少年の唯一つの意思。

何を思つてそれに至つたのかは王ですら理解の出来ないことではあつた。

だがひとつ言えることは、王の責務として、神に縛られている少年に手を貸してやるということ。

王は嗤う。どこまでも自身のことを考えるからこそ他人を助ける愚か者。

それを自覚し、否定せずにあるのまま受け止める少年はまさしく人間であつた。

王はやつてみると言わんばかりに少年の持つ杯を起動させた。

◇

杯から光が溢れ、少年は目を思わず目を瞑ってしまふ。

太陽のような光を放つ杯。それだけの光量を放ちながらもそれを持つ手は何も感じない。

少年はやがて、杯を持っていた手が空を切っていることに気づいた、それと同時に光がふつと消え、少年はその目を開けた。

周囲の景色は先程までいた場所とは打って変わっており、一面白色の空間であつた。地面があるのかもわからない空間。立っていることも覚束無いであろうその空間で少年は一人で佇んでいた。

ふと、少年は気配を感じる。周りから感じる圧倒的な圧力。

それを知覚した直後、少年は戦慄する。

少年を黒い影が囲む。その数は実に21体。

全てがおぞましい身体を持ち、その目を爛々と光らせて少年を狙う。

願望機が提示した試練。それは即ち、21匹の怪物の討伐に他ならなかった。

額に英数字を鈍く光らせた怪物達は今にも少年へと殺到しようとしているようにもとれる。

しかし、ここで少年の目の前で波紋が拡がる。

そこから出てくるのは王の宝物内にある無銘の剣。特別な力が付与されているわけでもなくすぐく切れ味の良いというわけでもない。

ただの剣が少年の目の前に現れたのだ。

『餞別だ。貴様の力、存分に振るうがいい』

その声と共に少年は剣をその手に持つ。

そして、声高々に宣言した。

「俺……いや、僕は絶対に生き延びる!!」

初めて握った武器をその手に少年は駆け出した。  
願いを叶え、自分が生き抜くために。

## 外伝：同族

少年は我武者羅に剣を振るう。どう振るえばいいのかわからない少年は力任せに敵を斬るしか出来ない。

3体はそれで倒すことは出来たのだが、影は少年の単調な動きを学習したのかそれ以降は少年の剣に斬られることはなかった。

影の鋭く尖った爪が少年に襲いかかる。何度目かの分からない攻撃に少年の身体は次第に傷ついていく。重傷ではないものの、衰弱しきった身体には軽傷でも危険であり、少年の動きは鈍る一方であった。

それでも少年は剣を振るうことを辞めなかった。

誰かに教わっていればまともに戦えたのかもしれない。鍛錬する時間があれば圧勝出来たかもしれない。

しかし、それらは所詮I Fの話。少年が振るう剣はどう足掻いても素人が振り回している棒きれなのだ。

少年は戦い続ける。戦いが長引けば長引くほど少年の精神力は尋常でないものであると物語っている。

だが、流石に少年の身体が特別製だといえどもこれほどまで攻撃を浴びながらも戦い続けられるのはありえないことだった。

その理由をこの場で気づいたのは王だけだった。

そして、その事に微笑を浮かべて今なお足掻く少年を見守る。

恐らくは少年にこの試練を突破するのは不可能だ。あるいは全快の状態だったならば突破は可能だったのかもしれない。

しかし、この試練を受けると決めたのは衰弱していた少年なのだ。故にその参加権は現在の少年にしか無いものなのだ。

王は見定める。この人間は何処までやってみせるのかを…

◇

少年が戦い始めてから暫くが経った。既に少年の身体には血が流れていない所を見つけるのが困難なほどに傷ついていた。

しかし少年も負けてはおらず、その影の数を10匹と半分以上減らしていたのだ。

少年はもう既に限界を超えている身体を気力で動かす。

指一本動かすだけで身体中に激痛が走り少年へと警告する。しかし、少年はその警告すら無視して剣を持つ腕をあげる。

影はゆらゆらと揺れ、少年を取り囲んでいた。

少年は剣を掲げつつ気づいた。

身体が動かないと…

少年の身体は長い間痛みによって少年へと警告をしていた。しかし、それが無駄だと悟ったのかその身体を停止させる事にしたのだ。

いや、既に動けなくなるほどのダメージでもあったのも理由の一つなのだ。

それでも、少年は身体を動かすために指示を送る。

動け、動けと自身の手足に呼びかける。

それでも手足は少年に応えてくれるはずもなく。少年は影に為す術もなく吹き飛ばされた。

その様子を見ていた王は少年の限界を悟った。そして、少しつまらなそうに少年の失敗<sup>死</sup>という結果をありのままに受け止めたのだ。

しかし、それを良としない者が現れた。王と同じく少年を見守っていた人物。

その者は少年に問いかける。

” 何故、お前はそこまで戦える？ 一体何のために…”

その様子に王は嘲笑う。そんな事すら分らないのかと目の前の人物を蔑む。

その者は王の言葉に耳を傾けず、少年を黙って見つめていた。

「……………だよ」

既に動かなくなったはずの少年はその口を重々しく開いた。

瞳は既に見えないのか、虚空を見つめている。しかし、意識はあるようで、身体をなんと動かさそうと震えていた。

” …… ”

その者は少年の一挙一動を見守る。

このままでは少年は死んでしまうだろう。しかし、自身が表に出た所で何かが出来る



わけではない。身体が動くのならばどうにでもなるのだが、もうそれは過ぎた話。少年が死ぬのをただ見守るだけ。

「…僕…：…シたい…：…つて…：…思…：…た…：…カラ」

少年の喉は既に言葉を発するのを拒否している。それでも少年は述べた。自身が生きているという証を告げるため。それを見届けた者は自身の中で問答する。

――今、何が起きているのだ？

目を閉じて思い浮かべる。

――今、俺は何をしたかと考えているのだ？

これから襲うであろう苦痛に備えて。

――今、目の前で何が消えようとしているのだ。

息を吸い、意識を集中させる。

――そう、この少年はあの時の自分なのだ。

思いうかべるのは意識を浮上させる感覚。

ーなら：助けられない理由はないな  
少年の意識を引きずり込んで自身が表に出る。

”引っ込んでな。ここは俺が：ルーク・フォン・ファブレが請け負った”

少年の身体を動かす者が変わった。

その者は自身を襲う痛みで舌打ちする。

限界を超えた肉体で何が出来るというわけでもない。ただ、黙って少年が死ぬのを見ているのは我慢ならなかっただけなのだ。

しかし、それにしてもこの痛みは異常だ。俺が死んだ時よりも痛みを感じるじゃないか！と内心で思うその者は傍観しているものへと叫んだ。

何か方法を教えやがれ！それか手を貸しやがれ！と

『不敬。今の言葉で貴様は己の首がはねられると理解すら出来ないのだろうか。しかし、今日の我は気分がいい、特に許そう。しかし、我が手を貸すことなどはありえない

ことだ。ただ、一つだけ助言でもしてやろう』

その声に早くいいやがれ！と激怒しつつ激痛に耐える。

今の間にも影は自身との距離を詰めているのだ。あと一撃を喰らえばこの身体は無残にも動かなくなり、為す術もなくなるだろう。

『魔力を身に纏ってみろ。私の予想が正しければそれで済む筈だ』

その声を聞くと同時に体内に感じる膨大な魔力を身体に纏わせる。一体これで何になるのかは理解できないが、その者にとってはこの状況を打開できるのなら何でも構わなかった。

纏った魔力が急激に失われたことがわかった。

影の仕業ではない。まだ影は到達していないのだ。ならば一体何故魔力が消えたのか、その者は思考する。

そして気づいた。身体の傷がなくなり動けるようになってると。

『やはりな。恐らくはこの童子が助けを乞うた時にでも着せたのだろう』

王の言葉はその者に理解は出来ない。しかし、身体は動くようになった。これならばどうにかなると内心で呟くとその者は少年の身体を操り影へと接近する。

少年が影に吹き飛ばされながらも手放さなかつた剣を握り締めて加速する。

本来の身体よりもよく動くその身体に少しばかり困惑しながらもその者は剣を振るう。

「双牙斬!!」

上からの切下ろしからの切り上げ。

先程まで少年が振るっていた素人の剣ではなく、洗練されたその剣は容赦なく影を切り裂く。

影が消え去ったのを確認し、次の影へと接近する。

怪我が無くなったのは確かだが、身体には疲労が残っているのだ。故に長期戦はほとんど不利になるため短期決戦で挑むしかその者がこの場を切り抜ける方法は無かつた。

疾走しながら周囲を確認する。残りの影は9体、そのうち3体が少し離れた場所で固

まっているのを横目に見つつ加速する。

「全てを灰燼と化せ」

魔力を集中させる。走りながらも呪文を詠唱できるのは少年の身体の恩恵であると理解し、今ばかりはそれに感謝をするその者は呪文を発動させる。

「エクスポード!!」

3体が固まっている場所、その上空に巨大な火球が出現する。影はそれに気付き、その場を離れようとするが火球は急速で落下し、3体を業火で焼き上げた。

それを見届け、既に目の前にまで迫った影へと掌底を当てる。

「凍り付く一撃、絶破烈氷撃!!」

魔力を巡らせることで発動した技。本来ならば水の譜術を発動させた空間でしか出来ないその技を何もない場所で使えるのも偏に少年の身体が特別であると物語ってい

た。

凍りついた影を砕くと、その背後から別の影が襲いかかる。それにその者は内心で舌打ちし、瞬速の剣を振るう。

「瞬速の剣閃、翔破裂光閃!!」

跳びかかってきた影を閃光が貫き、その存在をかき消す。

これで残りの影は4体となった所で影達はやつと少年の動きが見違えている事に気付いた。ただ単純に避けられる剣ではないと。このままでは負けてしまうと悟った影達はその者に一斉に襲いかかった。

4方向からの攻撃、剣一本では通常ならば迎撃は困難な状況。

それを待つてました、と言わんばかりにその者は魔力を開放した。

「雑魚が近寄んじゃねえ!!」

魔力の伴流は影の動きを阻害し、その肉体を傷付ける。

それで攻撃は終わらない。その者は手に持った剣を地面に突き刺し、剣を通して地面

へと魔力を送り込んだ。

「絞牙鳴衝斬!!!」

魔力の伴流が激増し影を滅した。

今試練はクリアされ、少年の身体の目の前に金色に輝く杯が現れる。

しかし、その場に少年の意思はなく。その願いを叶える権利を手にしたのは少年の身体を操る者だった。

その者は杯に願いを託す。

杯はその者の願いを了承し、その輝きを増して世界を照らした。

そして、その者は自分の役目は終わったとばかりに少年の奥底へと意識を沈ませた。

## 外伝：捕縛

とある公園にて、4人の魔導師と1匹の使い魔は結界を張り、バリアジャケットを着て臨戦態勢をとっていた。

それもその筈。彼らが収集していたジュエルシードと呼ばれるロストロギアが突然消えてしまい、まだ見つからないものを含めて全てがこの公園に集まっていたからなのだ。

彼らの前には今にも爆発してしまいそうに膨らんでいる黒色の塊がある。もし21個全てのジュエルシードが同時に起動してしまえば強大な次元震が発生してしまう。

この街に住む少女には溜まったものではなく、また、2人の魔導師にとっても次元震による事故は到底見逃す事などは出来ないものだった。

「どう見る？フエイト」

「正直怖い危険な状態だと思う。暴走しているわけではないけど、いつ暴走するかわからない状態。今の間にもっと強力な結界を張って力づくで抑えないといけないと思う」



2人の魔導師は冷静に現在の状況を確認し自分たちの上司のいる艦、アースラへと通信する。

「ユーノ君、どうすべきなのかな」

「下手に刺激しちやったら暴走しちゃうかもしれない。でも、様子見しようにもこの塊、どンドン大きくなっちゃってるし、早い内にどうにかしないとイケないとは思うけど……」

「まどろっこしいね！取り敢えず安全な場所に動かして無理矢理封印しちゃえばいいじゃないか！」

今だに膨らみ続ける塊を牽制しつつ対策を考えるのは2人の魔導師と1匹の使い魔。

最もな事を言っている使い魔だが、下手に手を出すわけにも行かずに結局は後手に回ってしまう状況を理解していた。

彼らには手段がない。

どうすればこの状況を打破出来るのかを理解できない。

ジュエルシードの危険性を理解しているからこそ続いてしまう膠着状態。

それに終止符を打ったのはジュエルシードの方だった。

黒の塊は3mくらいの大きさにになると膨張を止め、その外郭にヒビを生じさせた。

これには魔導師たちもギョツとする。時間をかけすぎたせいで爆発でもしてしまうのではないのかと頭を過るが、既に手遅れ。

ヒビはどんどん拡がり、やがて全体に拡がると黒の塊は光を放ちながら崩れ去った。

そう、爆発などではなく崩れ去ったのだ。

崩れた塊は地面に着くと同時に霧散していき消えていく。

爆発の心配は無かったのを悟った魔導師達は早速ジュエルシードを回収するため崩れた黒い塊に近付いた。

そこには一人の少年が倒れていた。

小学生低学年程の体躯。着ているものはボロボロ、髪もボサボサ。その手には剣を握っており、よくよく見れば服に血が染み付いている。

特に怪我をしている様子もなく、異常なほどに痩せこけていた。

魔導師達は疑問に思いつつも意識のない少年を捕縛する。

恐らくはジュエルシードをこの場に集めたのはこの少年なのだと考え、話を聞くために少年を自分たちの本拠へ連れ帰った。

その様子を見ていたのは王だけだった。

王は改変された世界を確認すると意識を少年の奥底へと沈ませた。

【少年はまだ目覚めない】

## 空白期第1期

## 公認試練

息を吐いて肩の力を抜いて集中する。眼前に佇むのは2本の木刀を持った土郎さん。対する僕は1本の木刀を片手に持つて対峙している。

事の発端はなのはちやんだ。突然僕の家に戻ってきたなのはちやんは付いてきてほしいと言うと、ウキウキした状態で僕を翠屋まで連れて行った。

そして店に入って一言。

「私達、結婚します」

うん。何言ってるのかさっぱりだ。

店の中にいるお客さんや土郎さん達固まっちゃってるよ。

それにしてもなのはちやんと結婚かあ。どうなるんだろ…

庭で遊んでる茶髪、金髪、紫髪の子供達。金髪の子供は3人もいる。

大きな家の縁側でその様子を見ている僕。そんな僕によりかかるとは大人になったのはちやん。腕を掴んで幸せそうに笑っている。

反対の手をギュツと握られる。そつちを見ると顔を赤くして俯いているフェイトちやんがいた。

ん？

子供に混じって遊んでいるのはアリシアちゃん。

僕達の近くで白いテーブルと椅子に座って本を読みつつこちらをちらちらと見るのはすずかちゃん。

すずかちゃんの正面で子供にほっこりしつつ紅茶を飲んでるのはアリサちゃん。

おかしいな、僕なのはちやんと結婚生活を考えたはずなんだけど…

うーん。やっぱりダメだね。僕自身が経験したわけじゃないからいまいち想像付かないや。

だからなのはちゃん？もう少し考えてみようよ。勢いでそういうことを決めると後々後悔するよ？

「ずっと隣にいたらダメなの？」

いや、何でそこで一緒に戦うかどうかを聞くの？  
別にずっと一緒に戦うくらい僕は構わないけど…

「……翠屋、臨時休業だ」

え？！どういうことですか？士郎さん。

とまあ、こんな感じで士郎さんは翠屋を休みにして僕を道場に連れてきました。

高町家の皆様とすずかちゃんのお姉さんの忍さんがその様子を見学しています。あと、ユーノ君もなのはちゃんの足元に座って見てた。

敢えて言うけどさ、どうしてこうなったの……

士郎さんはすつごく真剣にこつちを見ている。

まあ、やるからには僕も真剣に応えないといけないよね。

木刀を持つ手に力を入れて士郎さんを見る。

そんな僕達の間立って試合の合図を出したのは恭也さんだった。

恭也さんが腕をおろすと同時に士郎さんは急速で距離を詰めてきた。人間の動き超越しちゃうてるんじゃないの？つてくらいの速さで僕に接近してきて木刀を振り下ろしてくる士郎さん。

まあ、特に問題もなく士郎さんの木刀を紙一重でかわす。そして反対の手の木刀がこちらに迫ってきた。それを無手の方で捌いて木刀の柄の部分で士郎さんの胸を突く。

流星に近すぎるとこちらの技も効果ないからね。

つて、士郎さん凄いな…さっきの捌いた方の手、少しじんじんしてるや。

それに柄での攻撃も後ろに跳ぶことでダメージ減らしてるし…

「やっぱり見えるんだね。」



どういうこと？確かに速いとは思うけど、普通に対処できる程度だよ？  
そうだよね？なのはちゃん

「かつこいいの優君!!あとなのはには全然見えてないよ!!」

なるほど。士郎さんあなた化け物ですか。普通人が見えない速度で木刀振れませんかよ。

って、何でそんな殺気を籠った目でこちらを見てくるのですか？いや、何か怖い雰囲気出さないで下さい。

「君には奥義を受けてもらおうとしよう」

「なっ!!?父さん正気か!」

何？何が始まるっていうの？

なんだかすっごい不安なんだけど…大丈夫かな。

「行かせて貰うよ!!」

速っ!?

目で追い切れない!?

「御神流正統奥義・鳴神!!」

「す、粹護陣!!」

あ、そんなに痛くないや。速さには驚いたし粹護陣のお陰なんだろうけど、全然平気だ。

よし、今度はこっちの番

「よく耐えたね…合かk」

「虎牙破斬!!」

何か言ってた気がしたけど気にしなくていいよね。

って、普通に防がれると思っただけどモロに入った。チャンス!!

「飛燕連脚!!」

2発の蹴り、最後に突き。面白いように命中する。流石にまだいけるよね？

「猛虎連撃破!!」

虎牙破斬を4回打ち込む。

よし、トドメだ！

「負ける、ものかああああ!!」

2発の踏み込み切りに闘気を纏った切り上げ。

アルベイン流最終奥義、冥空斬翔剣。やっぱり奥義には奥義で応えないといけないよね。

って、少しやり過ぎちゃったかな…

「いたたた、僕も年か…引退するべきなのだろうか」

◇

手当された土郎さんは少し遠い目をしてそう呟く。一体何を引退するのだろうか、いまいちわかないや。

「凄いな優。あの父さんの鳴神を耐えるなんてさ。」

「本当にびつくりしたわよ。」

いや、それほどでもないよ恭也さん忍さん。多分粹護陣無かったら痛かっただろうし。

って美由希さん？どうして僕を抱き上げるの？なのはちゃんすつごい睨んでるけど。

「まあ、何にしろ合格だ。なのはとの結婚を認めるよ」

え？ どういうこと？ 結婚を認めるって…

なのはちゃん嬉しそうにしてるんじゃないかと説明して欲しいんだけど。

「あ、あの…僕なのはちゃんと結婚するんですか？」

って、今度はすっごいショック受けた顔してる。

なんだか反応が大袈裟で面白いかも…

あ、ユーノ君が握りつぶされてる…

ごめんユーノ君。後でお菓子あげるから今はなのはちゃんの相手をしていて。

「うちのなのはじゃあ不服なのかい？」

士郎さん睨まないで下さい。すごく怖いです。

あと桃子さんが凄く怖い顔であなたを睨んでいますよ…

ま、まあ答えておこうか。

「いや、不服と言うよりも普通にまだ早急すぎると思うんです。なのはちやんだって成長していく過程で他の人を好きになるかもしれないし、今の一時の感情で結婚を決めるのは良くないと思いますし。」

「絶対ないの。優君以外になのはが結婚したいとおもう人なんていないの!!」

「ふむ、そういうことか。だけど、それは当人同士の問題だね。ならじつくり話し合うことにするといい。僕は優君なら安心してなのはを預けられるよ」

「きよ、恐縮です」

何故か親公認になってしまった。あとなのはちやん、嬉しいのはわかったけど離れたほうがいいよ。ちよつと汗かいちやつたし汚いよ？

「ねえ恭也、私達はいつ結婚しようか」

「取り敢えずなのはが社会人になるまではダメだな」

そこのお二人もどうかしてください。どんどん収集がつかなくなってるから…

◇ 「優君は私の事好き？」

「う、うん。そりゃあ好きだけど…」

少し苦手かな…主にいつ砲撃がとんでくるのかわからないのが…

まあ、なのはちちゃんが嬉しそうだしいいか。

「じゃあじゃあ、アリサちゃんやすずかちゃん。フェイトちゃんはやてちゃんも好き？」

「ま、まあ。みんないい子だし、きらいじゃないよ…つてはやてつて誰？」

「気にしなくていいの！じゃあ最初はフェイトちゃん。と行きたいところだけど、帰ってくるのは12月だから今の間にアリサちゃんを落とすの!!」

落とすつて、何処から？アリサちゃん普通の子だから死んじやうよ？

流石にそんな事はさせれないからね？なのはちちゃん。

「目指せ！大家族!!」

もう着いてけないです。はい。



## 猫屋敷

現在僕は月村邸にやってきています。

今回で月村邸に来たのは2回目。前に来た時もあったけどすごく広いなあ。

なのはちゃんに誘われて来たのはいいんだけど肝心のなのはちゃんが用事ができて来ないという。

今日は他の子と遊ぶ予定もなかったし来たけど、やっぱり来ないほうが良かったかもしれない。

なのはちゃんがいつも向こうから来るから忘れてたけどやっぱり女の子グループに男の僕が入るのっておかしい気がする。

今日はお休みのなのはちゃんには絶対に行くように言われたけど、正直あまり乗り気じゃない。

よし、帰ろう。

「折角ここまで来てるのに何帰ろうとしてるのよ。アンタは」

しかし、それは出来ませんでした。金髪の女の子アリサちゃんによつて退路を塞がれていたのだ。

少し遠いところにリムジンが見えるところからアリサちゃんは今来たらしい。

見つかつちやつたか。ここで帰ると2人に氣を使わせちゃうかもしれないね。仕方ない。

「そんな事無いよ。少し早く着きすぎちやつたから何処かで時間を潰そうかと思つただけだよ」

我ながら絶妙な言い訳だつたね。

これならアリサちゃんも騙されてくれるでしょ。

『うん。いい言い訳だつたね』

『何ドヤ顔で言つてんだよ、クレス』

うん。正直無いと思うよクレスさん。

まあ、アリサちゃんも渋々だけど納得してくれたみたい。

そんなこんなで僕達は門の前にまで来たんだけど、ここで問題が発生した。

インターホンに手がとどかないのだ。アリサちゃんは普段は執事の鮫島って人に押して貰っているらしいのだけど、今日はインターホンのことを忘れて先に返してしまつたみたい。

アリサちゃんは困つたように腕を組んでるけど、まあ背伸びしてもギリギリ届かないついでにジャンプしたら普通に届くよね？

スカートだからジャンプしたくないのかな。じゃあ、僕がしてあげよつと。

ジャンプして押す。特に問題もなくインターホンを押した僕は着地してからアリサちゃんへと視線を向ける。

いや、悔しそうにしなくていいでしょ、大したこと無いんだから。

「スカートで来たのは間違いだったようね。」

「いや、普通に似合ってるから僕はいいと思うんだけど。」

「私は良くないの！あとそんな言葉はなのはに言つてやりなさい。」

前に言った時大変な事になったからあまり言いたくないです。でも言わなかったら言わなかったで元氣なくすから言わなきゃいけないんだけどね。取り敢えずそっぽを向いてしまったアリサちゃんを宥めつつお迎えを待つ。これから遊ぶのに機嫌悪いのは良くないからね。

2分ほどでメイドさんがやってきました。名前はノエルって言うらしい。初めましてって言うところからこそって帰してくれた。うん、いい人そうだ。

まあ、髪の色が薄紫っていう変わった色だけどね。まあ、リンディさんよりは変わってないか。

ノエルさんの後ろについて歩いて行く。前来た時はジュエルシードのせいであまり見てなかったけど綺麗な庭だなあ。

あ、猫もいる。そう言えばここのジュエルシードは猫が発動させちゃったんだっけ。それで初めてフェイトちゃんとも会ったんだよね。

まだ1ヶ月くらいしか経ってないのに懐かしい気分だなあ。

感慨深く頷いてる僕に何を思ったのかアリサちゃんは少し誇らしげに言ってきた。

「ここの庭って凄いわよね。綺麗だし広いし。」

「うん、僕もそう思うよ。」

「私の家も結構いい線行ってるのよ？今度なのはと一緒に来なさい。」

「わかったよ。その時はよろしくね。」

予期せぬ事で約束をした僕達は足並みを揃えて舗装された道を歩く。ここだったら伸び伸び修行できそうだなあ。

まあ、あまり大きな技とかは出来ないけどね。だって綺麗な庭壊しちゃうかもしれないし。

って、何か足元にフワフワした感触が…

視線を向けるとそこには一匹の猫が。随分と人懐っこいね、足に頭を擦り付けてるや。

僕は気をつけながら歩く。まあ、流石にここで猫に構ってすずかちゃんを待たせる訳にはいかないしね。

そんなこんなで、庭に置かれた白い椅子に腰掛けて猫を膝に乗つけて撫でているすずかちゃんの姿があつた。

すずかちゃんの目の前には既にお茶とお菓子が置かれたテーブルがある。用意がい

いね。

でも、お茶会つて初めてだから何したらいいかわからないんだけど：

取り敢えず用意された椅子に座る。そしてすぐさま膝に猫が乗ってきた。本当に人懐っこいなあ、可愛いし。

集気法を発動させながら猫を撫でる。前にもやったけどこれすると猫気持ちよさそうにするんだよね：：つて囲まれてる!?

◇

【アリス side】

猫に殺到されて地面に転がってる男の子藤崎優を横目に紅茶を飲む。

全く、お茶を飲む時くらい静かに出来ないのかしらね。

それにしてもいきなり来れなくなるなんてなのはも災難ね。折角勇氣を出してコイツを誘ったのに：まあ、私達がいる時点で少しヘタれてるけどね。

まあ、なのはが来れなくなるからつてコイツが来るのを拒んだら流石に可哀想だからそのまま遊ぶ事になったけど、あろうことかすずかの家の前に来てから帰ろうとする始

末。

なんだかムカついたから声をかけてやった。その時に言い訳されたけど、コイツ嘘だけは下手なようね。

別にコイツが嫌いってわけじゃあない。ただコイツを見ていると自分の弱さが見えてきて悔しいだけだ。

どうしてコイツはそこまで楽しそうに出来るのだろうか。それだけの能力を持っていたら周りからの期待という名の重荷がのしかかって来てるだろうに：コイツは微塵にもそんな事を感じさせない。

だからコイツは強いんだろうな。

私には到底出来ないこと。いつも何かに急かされてるかのようになっているのを隠しきれていない私と隠しきっているコイツ。

対等とは言えないかもしれない。だけど、それでも私はコイツのライバルでいたい。初めて出来たライバルなんだから。

いつかコイツとも会わなくなるだろう。その前に一度でもいいから、コイツに納得の行く勝利をして見返してやるんだから。

まあ、最近なのはがコイツ絡みで何かを企んでいる気がするのは何故かしら。すごく

嫌な予感もしてゐるし……  
気にするほどでもないかな。

◇

【すずか side】

あんなに猫に好かれてる人見たこと無いな。しかも初めて来た人なのに……隣にいるアリサちゃんも少し呆れている様子。

かと思えば何か真剣な顔で見始めた、一体何を考えているのかな？

あ、今度は少し微笑んでる？ どうしたのかな。

猫に好かれてる藤崎君を見て和んだのかな？

あ、いい笑顔……え？ 何で今度は思案顔？

何か今日のアリサちゃん百面相みたいで面白いな。

なのはちゃんも来たらよかったのに……用事って一体何だろうか。



そう言えば昨日お姉ちゃんから聞いたけど、藤崎君がとうとう士郎さんに認められたらしい。何でも試合で勝つたんだとか。

凄いな藤崎君。それにいいな、なのはちゃん。そんなに思ってくれる人がいて。

最近は特に幸せそうだしこのまま二人は結婚するのだろうか。きつとその時のなのはちゃんは綺麗なんだろうな。

私もそんな人出来るかな。今は想像も出来ないけどいつか素敵な人が出来たらいいな。

でも、私引つ込み思案だから難しいかも。今一番話す男の子といえば藤崎君くらいだし、彼はなのはちゃんのだしね。

以前は警戒してたけど、数日前くらいから警戒の必要性を感じなくなってきた。だって、悪い人には見えないし優しいってのは知ってるから。

彼なら私の秘密を教えても気にせず接してくれそう……ダメダメ彼にはなのはちゃんがいるんだから。

それに、なのはちゃんにも言えてないのに彼に言えるわけがない。アリサちゃんは知っても以前と変わりなく接してくれてるけど、もしなのはちゃんに拒絶されたら凄く悲しいし……

まだ言う勇気がない。

いつの日か、私の秘密を知っても平気な男の人に会えるかな。

◇

お茶会も無事？ 終わり今はリムジンの中。普通に走って帰ろうとしたところアリサちゃんにアホか！ って言われて半強制的に乗せられた。

来る時も走ってきたと言ったら呆れたように見られた。何処かおかしかったかな…

それに高級車に乗ったこと無いから何だか落ち着かないよ。走ったほうが速いのに乗る意味もないし…

まあ、折角アリサちゃんが提案してくれたんだし断るのも悪いから大人しく乗ってるんだけどね。

隣に乗るアリサちゃんも何か落ち着いてない様子。どうしたのかな。トイレに行きたいとか？

『絶対に口に出しちゃダメだよ』

わかってるよ。流石にそこまでデリカシーが無いわけじゃないからね？

そんなやりとりをしている僕をアリサちゃんが見てくる。そしてその口を開いた。

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

「どうしたの？」

珍しいな、アリサちゃんが質問するなんて。いつもは僕に何か質問させようとするのに。

アリサちゃんは言い辛い事なのか口籠ってる。一体何を聞かれるのかな。若干怖くなってきた。

「アンタはどうしてそこまで強いのか？」

どうしてって、あの日に転生者を拒否したからじゃないかな。でもそれを言うわけに

もいかないし…

言い訳も思い浮かばないや。

「わからないよ。」

「……………はあ」

ため息吐かれた!?

うーん、どうしてだろ。嘘付いたのバレたのかな。

仕方ない。少しだけ教えてあげようかな。

「まあ、強いていうなら。すごい人たちが僕を助けてくれたからかな」

これなら問題ないでしょ。

実際いつも皆には助けられてるしね。修行は大変だったりするけど。

アリサちゃんは少し納得できてなかったようだけどそれ以降は質問してこなかった。

## 山の中の決戦

「てめえ、待て!!」

迫り来るハンマーを寸での所で避ける。自分が先程まで立っていた場所が陥没するのを見て計り知れない威力に身震いする。

一体どうして僕は攻撃されているんだろうか。取り敢えず【話をしよう】を書かれた看板（ルビ入り）を投げつけながら距離を取る。

僕はただ、パンダ師匠の格好で修行してただけなのに…

動きと魔法の練習。それを山の中で行っていたんだけど少し疲れて休憩している所で、赤髪の女の子が突然襲いかかってきたのだ。

意味もわからずに攻撃を受けるつもりはない。取り敢えずは全て避けてはいるんだけどしつこすぎないかな？もう2時間位たつよ。

ほら、肩で息をしているし。一体何を思って攻撃してるんだろうか。

看板に【どうして私を襲う?】と書いてそれを見せる。女の子は怪訝そうに看板を見

るとその口を開いた。

「お前をペットにするためだ！」

夏の太陽が照らす中。蟬の鳴き声が妙に大きく聞こえてくる気がする。

一体この子は何て言ったんだろうか？もう一度聞いてみようか。

看板に「もう一度頼む」と書いて見せる。多分さつきのは聞き間違いなんだろう。

「お前をペットにすんだよ。」

聞き間違いじゃ無かった。

どうして、僕なんかをペットに……まさか、パンダ師匠の格好しているからなのか！？

取り敢えず理由を聞いてみよう。【どうしてそんなことを？】と書かれた看板を見せる。

女の子はその看板を読み終わると手に持ったハンマーをこちらに向けて告げた。

「お前が普通の動物じゃねえからだ！」

だって、人間だもの。

流石に勘違いでペットにされるのは御免被りたい。かと言って、パンダ師匠の正体を明かすのは嫌だ。秘密の方がカッコいいし。

まあ、人間と思われてないんだったらこうしよう。

【私は普通のパンダだ。笹も食べる】と看板に書き込んで女の子に見せる。

こちらに向けたままのハンマーを振り、嘘だ！と断言する女の子。いや、確かに嘘だけれど少しも信じて貰えないのはショックだよ。

「こんな場所でアホみたいな結界展開してる野生動物が何処にいるんだよ。はやての為に目の届く所に置いておくほうが安全だ！後、お前凄く柔らかそう！」

ああ、確かに結界張るパンダなんているわけないよね。それとこの着ぐるみが柔らかいのは事実だけどペットはちよつと…

「とにかくくだ。私はお前を連れて帰る。いいな？」

【所で一つ聞くがいいかな？】

「……なんだ」

まあ、特に悪気はないようなのでここは穏便に解決したい。

そこで子供がペットを飼えない理由ランキング1位で攻めていこうと思う。

【わたし飼うと言っていたが、それを家の人達は了承しているのか？】

僕の言葉に衝撃を受けたような顔をして「ちよつと待つてろ！」と言って何やら話しだす女の子。

誰かに念話しているのかな？まだあまり魔法の使い方知らないから念話の盗み聞きは出来ない。出来れば何を話しているのかを知りたかったけど、仕方ないか。

と、女の子が舌打ちをしてこちらへと視線を向けてきた。さあ、君の両親はなんと言ったのかな？答えによっては全力で逃げさせてもらうけど。

「はやてにつながらねえから、ちよつと待つてくる。いいか？ここで待つていろよ？絶対だぞ？」



そう言つて女の子は跳び去つていった。よし、帰ろう。

◇

それにしても、いきなり魔法使いに襲われるなんて驚いたなあ。やっぱり気付かないだけでそこら中に魔法少女とかいるのかな？それはそれで怖いから勘違いであつてほしいけど。

所構わず砲撃魔法で暴れられたら溜まつたもんじゃないからね。

後、暫くはパンダ師匠の格好はしない方が良さそうだなあ。次見つかったら何をされるかわかんないし。

取り敢えずはあの山にもあまり近付かないようにして、周りに気をつけながら魔法の練習かな。

それにユーノ君にも魔法教えてもらわなきゃいけないし、夢の中では皆の修行が待つてる。

まだまだやることは沢山あるなあ。取り敢えずは次元斬で時間止められるようになるのを目的にがんばろー。

そう言えばあの子の名前聞いてなかったなあ。はやてって人と知り合いらしいけど。何処かで聞いた事があるような名前、というか前になのはちやんが言っていた名前だね。

もしかしたらなのはちやんなら何か知っているかも知れない。今度会ったら聞いてみようかな。

いや、パンダ師匠の正体に気付かれるかもしれないし黙っていよう。

放置しておいても問題ないでしょ。

今は今日の夕飯の献立にわくわくするのに忙しいからね。詳しいことは後で考えよう。

# 魔法少女リリカルなのはA's

## 序章

少女は疲弊した顔で授業を受ける。その様子には彼女の親友たちは心配そうに彼女を見つめる。

少女が時折視線を向けるのは一つの席。その席の主の身を案じている少女は、今も少年の帰りを待っていた。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り少女は教科書を鞆に仕舞う。それから少年の席を見つめてため息をこぼしていた。

「なのは、しっかりしなさいよ。」

「そうだよ、確かに藤崎君の事は心配だけど、なのはちゃんが元気ないと藤崎君も悲しむと思うよ」

「アリサちゃん…すずかちゃん…」

そう、学校を休んでいるのは藤崎優という少年。彼が学校に来なくなつたのは丁度一週間前。担任の教師に急遽入院したとクラスメイトたちに伝えられたのだ。

勿論少女たちや少年の親友達は彼の見舞いに行った。しかし、そこに居たのは眠っている少年だつた。

クラスメイト達は少年を起こそうとするが、少年は起きない。それを不思議に思い少女が看護婦に少年はどうして目を覚まさないのかを問うた。

看護婦は答えた。「わからない」と。

ある朝少年の母は何時になつても起きない少年が気になり少年の部屋へと足を踏み入れた。

そしてベッドで眠る少年を揺さぶつたり大声で呼んでみたのだが目を覚まさなかつたという。流石にこれは異常だと感じた母親は自身が勤める病院に少年を連れて行った。

医者は少年に気付け薬を嗅がしたりしたが少年の目は一向に覚めることは無かつた。

原因不明の昏睡。脈拍や健康状態に異常はなく、ただ眠り続ける少年。

ただ、母親に出来る事は少年の身の回りを世話し目を覚ますのを待つだけ……

少女はこれを聞かされた時酷く困惑した。何故彼がこうなってしまったのか。どうして彼なのか。幸せを感じていた生活がいきなり灰色に包まれた。

少女の家族や親友たちはそんな少女を気遣い慰めていたのだがその耳に届くことはなかった。少女はただ、毎日のように少年の病室に足を運んで少年が目覚ますのを待つ。

一体どうしてこうなってしまったのだろうかと少女は神に問うたが答えるはずもなく、ただ無情にも時間が過ぎるだけであった。

既に11月も終わりに近づき少女は考える。

このまま少年が眼を覚まさなかったらどうしよう。

すぐさまそんな考えを払うかのように頭を振る。少女は少年を信じているのだ。直ぐにでも自分の元へ帰ってきてくれると。ただ、今は休んでいるだけなのだ。

そして更に考える。もう少しである事件が起きてしまう。だが、前回のように少年に頼ることは出来ない。だからこそ、少年のためにも少女はその事件を自分の手で解決することを決意した。

少年はまだ眼を覚まさない。

## 夢想編第1話「投影」

意識が沈む。この感覚はあの影と戦った時と同じ感覚。ならば、この先に待っているのは…

どうやら到着したようだ。前回のような宇宙みたいな空間ではない場所。黄昏時の丘に無数の剣が刺さっている光景。風が冷たく感じるのは何故だろうか。

僕は歩く。そこかしこにはボロボロになった剣が転がっている。その中で異彩を放っているのは一人の男性の姿だった。

赤い服に白い髪、褐色の肌をした男性は静かにこちらを見つめていた。

「……どうやら来てしまったようだな」

男性は少し重々しげに口を開く。その口調から察する事が出来るのは諦めのような感情。一体この人は誰なんだろう。

「ようこそ、というべきかな。もてなしはしないが歓迎はするよ。藤崎優」

この人は恐らくみんなが言っていたまだ会っていない人達の一人なのだろう。だから僕のことを既に知っているのだ。

僕は男性に近付く。敵意を見せない男性はそんな僕をただ見ていた。

「貴方は、一体？」

「名乗るほどの者でもないが、まあなんだ。呼び名が無いのは少しばかり不便だな。私のことはエミヤと呼ぶがいい」

「エミヤ……さん。わかったよ。始めましてエミヤさん。知っているみたいだけど僕は藤崎優だよ。」

エミヤさんは少し驚いたような顔でこちらを見ると、顔に少し笑みを浮かべて口を開いた。

「さて、本題に入るとするか。もう薄々と感じているとは思いますが、ここは私の心象世界だ。そして君へ試練を与える場所でもある。」

「試練……」



あの影のようにエミヤさんと戦うのかな。だとすればこの人強そうだから最初から全開でいいかないと。

「まあ、戦う事には変わりないが少しばかり話を聞き給え。せつかちなのは損をするぞで」  
少し呆れたように言うエミヤさんに恥ずかしく感じる。まあ何にせよ戦うのなら本気で行くよ。

「では話すぞ。私はある友人に頼まれてな。君が私の元に至った場合は力を貸すに値するかテストをしてやってくれと。」

「友人？」

「それは気にしなくていい。まあ、本来ならば断っているのだがな。私も君には少しばかり興味を持っている。だからこそ私の力を使うに値するかを試させてもらう」

エミヤさんはそう言うのと僕からすこし離れた場所に立って双剣を両手に持って構えた。

僕もそれに習って王様の蔵からエターナルソードを取り出そうとするが、でない。

「残念ながらここにはある方法でしか武器を扱えないようにしている。素手で掛かって来るのもいいが私相手にそれは些か愚かというものだ。故に考えろ。君の目の前にいる男をよく観察し見極めろ。君なら出来るはずだ」

エミヤさんはそう言って剣をこちらへ向けてくる。

「いいか、イメージするのは常に最強の自分だ」

最強の自分？

一体どういう意味が…

「行くぞ。君がこれから目撃するのは無限の剣。剣戟の極地。恐れずしてかかってこい！」

その言葉とともにエミヤさんが疾走してくる。ありし日の土郎さん並の速度。だけど、捉えきれないわけではない。

「はっ!!」

エミヤさんが振るってくる白い剣の横つ腹を思いつきり殴る。エミヤさんは言っていた。よく観察しろと、だからエミヤさんの剣撃を捌きながら動きを見極める。土郎さんと比べて筋力はエミヤさんが上、速度は最高速度の土郎さんのほうが若干速い。多分動体視力はエミヤさんが上。判断力も上だろう。

これまで戦った相手で一番強い相手だと思う。だからこそ集中しなければならない。エミヤさんは言っていた。ここではある方法でしか武器が使えないと。多分その答えがエミヤさんの武器なのだろう。

双剣の切り下ろしを思いつきり横から蹴って逸らす。

エミヤさんの体勢が崩れた。好機!

「掌底」

「甘い!」

エミヤさんが武器を捨てた。そして再度同じ双剣を手に持って斬りつけてくる。取り敢えず掌底破をそのまま放って距離を取る。

「がっ!!」

距離を取るためにだいぶ威力を削がれてしまった掌底破。恐らくは無傷だろう。だけど、少しは考える余裕が出来るはず。エミヤさんは今瞬間的に武器を取り出した…いや、手放した武器が消えていない。もしかして武器を作っているのかな？

流星にあんな剣で似せた剣が存在するとは思えない。なら、エミヤさんが何かをして作ったと考えるのが正しいだろう。だからこそ思い出す。エミヤさんは僕にも出来ると言っていた。だけど、どうやって？

まだ糸口はわからないけど、それでもやるべきことはわかった。エミヤさんのように剣を生み出さなければ勝てない。

まずはイメージ。多分使うのは魔力。エミヤさんの剣を躲し頭のなかで思い浮かべる。手に馴染んだ木刀。だけどここからがわからない。

「思考が散漫になっただけ」

「っ!!」

エミヤさんに蹴り飛ばされる。なんて脚力!

軽く人間やめてるんじゃないの?

まあいいや。言うほどダメージはない。これなら集気法で回復できる。

それよりも作り出さなければならぬ。それにはもつとエミヤさんが剣を作るのを見なければならぬ。

着地と同時に距離を詰めて気を集めた拳でエミヤさんが持った剣を思いっきり叩く。

そこまで強度があつたわけではなかつたようで、黒い剣を折ることが出来た。エミヤさんの手から飛ばせれば良かったんだけど、思わぬ収穫だね。あの剣は折れる。

「中々やるな」

エミヤさんの手元に集中する。魔力で剣の骨組みを作ったのがわかった。なるほど、それから剣の本体で覆うのか。

後は実戦するだけだ。イメージしろ。その手に持つのは木刀。まずは骨組みを敷く。

魔力で骨格を作るように：

幸いにも何故かエミヤさんはこちらを攻撃してこない。今のうちに完成させる。

材質は木。思いつくのは影との戦い。あの時の木刀は絶対に折れることのない物。僕が夢で生み出した物。

それが手に握られていた。

「……驚いた。よもやこの短時間でここまでの投影をしてみせるとはな。やはり天才」

エミヤさんが驚いている声が聴こえる。これは投影という技術なのか。基本は理解した。これで戦える。

僕は木刀を片手に持つて構える。

「ふむ、見たところ6つの工程の内4つまでしか行えていないようだ。だが、何も教わる事無くそこまで再現してのけたのだ。及第点は優に超えているな。ならば、後は君の実力を確かめさせてもらおう」

エミヤさんが双剣を消す。

それと同時に纏う空気が変わった。さっきまでの比じゃない圧力。さっきまでは手加減していたのだろう。そんな空気に警戒し、木刀を握る手に力が入る。

エミヤさんが双剣を投影する。多分さっきみたいに簡単に折れるものじゃない。あれがエミヤさんの本当の投影。

だけど、僕は全力でぶつかるだけだ。

「はい！」

「はい！」

思いつきり地面を蹴って接近する。エミヤさんがそれに合わせて白い剣を振り下ろしてくる。それを木刀で撃ち上げるように防ぐ。すぐさま黒い剣が迫ってきた。地面を蹴って上に逃げる。そしてそのまま体重を載せた一撃をエミヤさんに振り下ろす。

「はあああああ!!!」

「うおおおおお!!!」

エミヤさんの交差させた双剣と僕の木刀がぶつかる。僕の上からの振り下ろしを真つ向から止めるなんて人間業じゃない。だけど、負けられない!!

木刀に魔力を込める。骨組みはできているんだ。どちらも同じ剣。元々の形は同じ。後は剣の本体を投影するだけ!

「なっ!?!」

木刀が変化する。その刀身を大きくし色を紫色に染める。これがクレスさんから教わった時空剣技だ!

「次元斬!!」

次元を切り裂くその剣技。それは時をも止める事が出来る。

一体どういった原理で時間を止めているのかはわからないけど、この剣エターナルソードのお陰だとクレスさんは言っていた。

時間が止まった空間で着地し、魔力を身体に集中させてエミヤさんへと迫る。

魔力は炎に変換されて僕を包む。



ここで時間は動き出し、エミヤさんが驚いた顔でこちらへと視線を向けた。  
もう遅いよ

「燃え上がれ紅蓮の刃！緋凰絶炎衝！！」

鳳凰天駆で突進、それから反対方向へ再度の突進。それにより地面から炎が吹き出し敵を燃やす。

「*I am the born or my sword*  
身体は剣で出来ている」

え？今何かが聞こえたような。

つていきなりエミヤさんの前に白い盾が!?

「くっ!!」

突破、出来ない!!

僕は盾を打ち破れない事を悟ると盾を蹴り距離を取った。

そうか。投影は盾も作れるのか。

「全く、いきなり姿を消したかと思えば炎を纏つての特攻とは。しかも熾<sup>ロ</sup>天<sup>イ</sup>覆<sup>ア</sup>う七つの円環<sup>ス</sup>、の花卉を2枚破るとは思いもしなかったぞ。少しばかり肝を冷やした。」

エミヤさんはそう言つて盾を消す。今度はどう攻めるべきだろう？次元斬連発して時間を止め続けたいけるかも…

「投影にしてもそうだ。私に及ばないものといえどその根底を同じにしておきながら私に出来ないこと…投影の重ねがけをやつてのけるとはな。これは認めざるを得ない」

エミヤさんが近づいてくる。よし、今度は時空剣技の組み合わせで…

「合格だ。君に私の力を貸そう。」

「え？」

まだ僕勝ってないんだけど…

「どうやら一つ勘違いしていたようだな。何も私は最初から勝てとは言っていないだろう？君の力を見せてみると言ったはずだ。それを君は存分に見せてくれた。故に合格だと言ったんだ。」

「は、はあ」

「それに、今の君ならば使えるだろうさ。固有結界 Unlimited Blade Works 無限の剣製を」  
「無限の剣製…」

一体何だろうか。それがエミヤさんの切り札なのかな？

僕の切り札はエターナルソードでの時空剣技と極光術。ローレライの鍵での超振動。時計での骸殻くらいしかない。どれも同程度の力しか使えてないから、多分エミヤさんにその切り札を出されていたのなら負けていたと思う。

と、あれ？僕の身体が光り出した…

「どうやら時間のようだな。詳しいやり方などは後日教える。今は投影の技術を磨いておくことだ。」

「は、はい」

「ではな。これからよろしく頼むよ」

視界が光りに包まれた。

## 現実編第1話「はじまりは突然になの」

紫髪の少女月村すずかは悩んでいた。彼女の親友である高町なのはがずっと落ち込んでいるからだ。

親友として力になりたいとは思ってはいるが、彼女に出来る事は無い。一度件の少年、藤崎優を月村家のお抱えの医者に見てもらったが診断結果が変わることは無く、事実上のお手上げ状態であった。

それでも自分出来る事を考え、彼女は海鳴市の図書館へと足を運んだのだ。

自分が読書を趣味としているのも理由だがここなら何かしらの情報が得られるかもしれないと淡い期待を抱いてやってきた。

その道の専門職の人達ですらわからなかった事が簡単に判明するとは思っておらず自分がやっていることは無駄なのかもしれないと自覚しているが、それでも彼女は本を探すことをやめなかった。

多くの人が利用する図書館。そこで彼女は車いすに座った少女が棚の高いところにある本に手を伸ばしているのを見た。

流石に放っておくわけには行かずに彼女は車いすの少女へと近づき、その手の先にある本を手取る。

「これ、ですか？」

車いすの少女は少し驚いた顔をした後、彼女が手に持つ本を見て笑みを浮かべた。

「はい。ありがとうございます。」

少し関西の訛りが入った口調。明るい性格の車いすの少女と月村すずかはそれをキツカケにお互いの事を話し合った。

「そっか、同い年なんだ」

「うん、時々ここで見かけてたんよ。あ、同い年くらいの子やって」

「実は私も」

お互いにここで見たことのあると知ると、少しおかしく感じたのか二人は笑みを零

す。

「すずかは思う。そう言えばこうして笑って話をするのは久しぶりだと。少し顔色を暗くしたすずかに車いすの少女は首を傾げた後口を開いた。

「私、八神はやて言います。ひらがなではやて、変な名前やろ。」

「そんなこと無いよ。綺麗な名前だと思うな。」

「ありがとう。」

車いすの少女、八神はやては少し照れくさくなったのか顔を赤らめて頬を掻いた。

それにすずかは微笑み、自分の名前を言う。

「私、月村すずかかって言うの」

「すずかちゃん…一つ聞いてもええ？」

「どうしたの？」

はやてが気になるのは先程のすずかの顔。初対面といえど親切にしてくれた人が暗い顔をしているのは、はやて自身良くないことだと思つてのことだ。

「なんかあつたん？初対面の私が言うのも何やけど、話ぐらい聞くよ？」

「はやてちゃん…」

すずかは少し反省する。他人に気付かれるくらいに表情を暗くしてしまっていたのかと。

自分がこんなのでは親友を元気づけるなんでもつてのほかであるとも思った。

「私のクラスの男の子が入院しててね。その子の事を好きな私の友達が凄く落ち込んでるの」

「そうなんや。その男の子は大丈夫なん？」

「わからないの。お医者さんも目を覚まさない原因がわからないって」

「…そつか。それですすかちゃんも落ち込んでるんやね」

はやては少しその少年を羨ましく思う。誰かにそこまで思ってもらえるのはとても幸せな子だと。

同時にその男の子の身も心配する。原因不明の病気。その子の両親も気がでない



のだろう。家族を失った経験がある自分だからわかる恐怖。だからこそ、その男の子には元氣になってほしいと切に願うのだった。

◇

夜、高町なのはは自宅で気持ちを落ち着かせていた。

夢の記憶によればそろそろとある少女による襲撃がある筈だ。そこで自分は負ける。だけど、今回は負けるわけにはいかない。今も眠り続けている少年、藤崎優に顔向け出来るように、隣に並び立つために自分は勝たなければならないと感じていたのだ。

結界が展開される。それを察知した少女は自身のデバイスを手を外へと飛び出す。

【緊急事態ですマスター】

「わかっているよ。魔力反応がこっちに来ているんでしょう？」

首から下げたデバイスの警告を知っているのは、それを聞くまでもなく行動する。

ここで戦闘するのは危険だとわかっているため、移動する。なるべく広い場所へ：

【違います。魔力反応が海鳴大学病院、藤崎優の元へ向かっています】

「……レイジングハートセットアップ」

少女はその報告を聞き、変身する。

夢とは違う展開。そう言えば彼女たちの目的は魔力であったとわかっていた。

故に急ぐ。今の少年は動けないのだ。そんな状況で襲われでもしたら大変なことになつてしまう…

いくら、夢では仲が良かったとしても少年を傷つける者を許すことは少女には到底できなかつた。

「全力で飛ぶよ、レイジングハート」

【了解】

◇  
そして少女は出会う。未来では仲間として戦うであろう現在の敵と。

「ねえ、待ってくれるかな？」

「……てめえは？何者だ」

赤髪の少女、ヴィータは異様な空気を纏った少女、高町なのはと対峙する。とてつもない威圧感ととんでもない魔力を感じる。

自分の目的は魔力の蒐集、故に大きい魔力の元へと動いたのだが、目の前の少女も多くの魔力量の持ち主だった。

「流石にね、私でも我慢できない事ってあるの。」

「……グラーフアイゼン」

冷や汗を流す。目の前の少女が纏う空気は危険だと自分の頭へと警告している。だからこそ、相棒を握りしめて魔力を込めた。

「頭、冷やそうか」

今ここに、未来でエースオブエースと英雄視され管理局の白い悪魔として恐れられる少女、高町なのはがその力を開放した。

## 夢想編第2話「作家」

目を覚ましたら本の山の中だった。視界をうめつくすほどの山、タイトルに目を向けるとみにくいアヒルの子などの童話や辞典などが並べられていることがわかった。

多分、ここはまだ夢の中なのだろう。こんなことは初めての事だから確信はできないけど現実の僕は今も自分の部屋で眠っているのだと思うから。

視線を横にずらす。本の山にすこしだけ通路のような隙間ができている。取り敢えず進もう。

それにしてもここには色んな本があるなあ。これとかこの前僕が読んだ本だし…

あれ？あそこに誰がいるな。椅子に座って何かを飲んでる。見たところ背丈は僕より少し上くらいの青い髪の男の子。

あれがこの世界の人のかな。

「すみません」

「うおう!?何だ貴様、もう来たというのか」

ず、随分と低い声だね。でも驚かせちゃったみたいだ、謝らないと。

「ごめんね。貴方がこの世界の人？」

「言われるまでもなく理解しろ。ま、オマエのような無知の子供には無理な話かもしれないが……そんなものは知らん。」

凄いい口悪い子だなあ。でも凄く頭が良さそう。

初めて無知って言われたよ。なんだか少し感動した。

「だがしかしまあ、言うに事欠いて俺の所に来るとはな。オマエも幸薄そうだな。それで、オマエは何を知りたい？俺の知ることなら答えてやる」

え？いきなりそんなこと言われても。

質問する気なかつたし……どうすれば……

「早くしろ。俺もそう暇ではないのだ。」

「じゃ、じゃあ。貴方の名前は？」

「聞くことが俺の事とはよくわからん子供だ。まあいい、聞かれたからには答えよう。俺はアンデルセン。ハンス・クリスチャン・アンデルセンだ。」

アンデルセン？ってあの童話の？

同姓同名っているんだ。外国じゃあわりとありふれた名前なのかな？

「……オマエが何を考えているのかは知らんがそれは恐らく間違いだ。俺は正真正銘童話の作者であるアンデルセンだ」

「あ、アンデルセンって子供だったの!?!」

「子供に言われたくないわ!あとこの姿は少々特殊だな。俺の幼少期の姿をしているにすぎん」

「そ、そうなんだ。でも驚いたなあそんな有名な人が僕の中にいるなんて」

でも、どうしてそんな人が僕の中にいるんだろ。

「まさか知らないと言うのか?どういった人物がお前に宿っているのか」

僕は頭を縦に振り肯定する。

あれなのかな？ 異世界とかの英雄とかなのかな。スタンさん達だってそうだし。そんな僕の様子を見て頭を押さえるアンデルセンさん。一体どうしたんだろう。

「一から説明してやる。まず最初にお前が出会った16人は地球とは違う世界を救った英雄という凡夫だ。そして、それ以外は英霊と呼ばれる存在、地球で何かを成し遂げた偉人等と呼ばれた者達だ。」

「え？ じゃあ、エミヤさんとかも偉人だったんだ」

「奴は違う。いや、他にも何人かはいるが英霊となるには偉人と言うものが条件ではない。全員が宿っている訳ではないがお前には数多くの英霊が宿っている。」

そうだったのか。そんなすごい人たちが僕の中にいるんだ。知らなかったよ。

「折角だ、これまでお前が会った英霊たちについて教えてやろう。特徴を挙げていけ」

「じゃ、じゃあ。金色の鎧を纏った金髪の王様」

「いきなりとんでも無い奴について聞くのだな。まあ聞かれたからには答えてやろう。奴の名はギルガメッシュ。この世全てを統治した古代ウルクの王であり通称は英雄王。」



自称人類の裁定者。とまあ、奴についてはそこまで語らぬ方がいいだろう。奴自身からどんな仕打ちをうけるかわからんぞ」

ギルガメツシユか。それも聞いたことがある。帰ったら詳しく調べてみよう。

「じゃあ、金髪で緑色の目をしてて騎士の格好で思い込みが激しい男の人」

「ふむ…：そのような男は知らんな、いや待てよ。女ならばあるいは、普段顔を隠している騎士を該当から外せば…：まさかお前、女版騎士王を男と間違えたか！傑作だ」

え？男じゃないの？だって胸無かったよ？

「何処を見て判断したのかが容易に想像できるな。子供の思考とは残酷なものだ。で、騎士王についてだな。騎士王、名をアーサー・ペンドラゴン。ブリタニアの王であり配下に円卓の騎士を従わせている人物だ。円卓の騎士も何人かはいるが全員がいるわけではない。」

「アーサーってアーサー王？…：アーサー王って女だったんだ」

「そこら辺が少しややこしくてな。男版騎士王も貴様の中には存在している」

「…ええ？どういうことなの？」

顎に手をおいて答えるアンデルセンさんは難しい顔をしている。  
何か複雑な事がありそうだ。実はアーサー王は双子だったとか

「いや、結論から言ってしまうえば平行世界の騎士王というわけだが…流石にあの性格の  
違いは…」

「ええ？」

「気にするな。まあアーサー王の事くらい少し調べればわかること。特筆して言えばど  
ちらも食いしん坊なだけだ」

食いしん坊…なんか何処かで聞いたような気がしなくもないけど…

「他には会ったか？」

「ええつと、鏡の持ち主の女の人」

「鏡か、これは簡単だな。狐耳が至高だと宣う間抜けな女だ。まあ、その生涯を通して人  
間に仕えようとする姿は少しだけ同情はするがな。名前は玉藻の前、言わば狐だ」

そうか、ここの人達ってみんな過去に死んだ人達なんだ……  
それを聞くと何か変な感じがするな……

「次だ次」

「エミヤさんは」

「ふむ。実のところ奴の事はあまり知らん。まあ一言で言えば自分の幸福と他人の幸福を秤にかけられる物好きと言った所か」

これだけかな。それ以外はスタンさん達だけだし……

「ふむ、もう居ないようだな。では他に質問はあるか？」

質問か……

そう言えば一つ聞きたいことがあった。

「どうして今になって僕はここに来たの？ エミヤさんの後は目覚めるかと思っただけ

ど」

「そんな事もわからんのか。簡単にいえばだ、お前はここに来るための力を習得したため今現在俺達の世界を巡っているのだろう。故にまだ目を覚ます事は出来ん。しかしまあ、全ての世界を巡るわけではない。案外早い間に目を覚ますだろうさ。」

成る程、じゃ、じゃあ現実世界の僕ってずっと眠った状態なんじゃ…

「では最後に、お前についての俺の評価を教えてやろう」

な、なんか凄い怖いけど大人しく聞こう。

「いつも周囲に流されながらも周囲を巻き込んだトラブルを起こす厄介者。神を嫌い人を好むその様はある意味で英雄王に似ているとも言える。強大な力を持ちそれに飲まれないのもそれ故にだろう。神に作られた自己を持たない器でありながらどうなるうとも神に抗おうとする人間らしさを持った意味不明な存在。それがお前だ」

なんか凄い酷評だった気がする…

「さて、俺から言いたいことはそれだけだ。また何か聞きたいことがあれば聞いてこい。ここは執筆しなくてすむが娯楽が少ないのでな。俺に出来る範囲でなら協力してやろう。」

そうアンデルセンさんが背を向けた瞬間意識が沈んだ。

## 現実編第2話 「戦いの嵐、ふたたびなの」

バインドで縛ったヴィータちゃんの腹部を殴る。

確かヴィータちゃんは帽子を壊されて怒っていた。あまり怒らせるのは良くないから砲撃は使えない。だから魔力を載せた拳を打ち込む。

バインドが外された：足に魔力を纏って接近する。

優君が教えてくれた戦い方。接近戦は少し苦手だけど、多くの魔力を纏えばそれなりの闘いが出来るってことも教えてくれた。

ヴィータちゃんのグラーフアイゼンを躲して掌底をお腹に打ち込む。

「ぐっ!!」この馬鹿力がああ!!」

砲撃よりはダメージを与えられない。だけどこれでも十分に戦える。

振り下ろしてくるグラーフアイゼンをレイジングハートで逸らす。正面から受けるのではなく受け流すように。

「くそっ!! グラーフアイゼン!! カートリッジロード!!」

中々攻撃が当たらなくて苛ついているのか、単純な攻撃が増えてきた。そろそろ決める。レイジングハートお願い。

【了解しました。】

周囲の魔力を拳に集める。収束できる量はスターライトブレイカーに比べると少ない。

けれど、これが今の私の接近戦での必殺技だよ。

「ラケーテンハンマー!!!」

「当たらなければ意味ないの!!」

自分の魔力の7割を足に集中。ヴィータちゃんがグラーフアイゼンを振り切る前に接近する。

あの技は遠心力とアイゼンのブースターで加速して凄い威力を発揮する技。だから

こそ、加速する前に潰すのが正解なの!!

「スターライトオオ!!」

「しまっ」

「インパクトオオオオ!!」

収束した魔力を載せた拳を打ち込む。威力にするとスターライトブレイカーの三分の一、射程は腕が届く範囲。だけど発動の溜めが短いのが利点なの。

魔力を打ち出すのではなくて魔力による加速だから腕にダメージを負うのが難点だけど…それでもその衝撃は身体の中に伝わる。

「ガッ!!」

ヴィータちゃんがふつとばされる。少しは反省したのかな？

全く、動けない優君を狙うからこうなるんだよ。

「なのは!!」



「あ、フェイトちゃん。久しぶり、元気にしてた？」

「あ、うん。ってそうじゃなくて！無事!？」

ああ、この結界と魔力反応の衝突で戦闘してたってわかったんだね。だけど平気だよ。優君のためなら私は何だって倒してみせるから。

「で、相手はどうしたんだい？」

「スターライトインパクトでふっ飛ばしたの」

「あれ、完成させてたんだ…」

ユーノ君とアルフさんもフェイトちゃんの後ろから出てくる。って、そうして苦笑いしてるの？ユーノ君。

まあいいや。確か夢だったらこの後シグナムさんや…名前忘れたけど狼さんが出てくるはず。

レイジングハート、周囲の警戒よろしくね。

【了解。後、先程の相手は飛ばされた場所から移動していません】

うん。なら安心なの。

「それより優はどうしたの？彼なら出てきてもおかしくないのに」

そう言えばフェイトちゃんに言っただけじゃなかったね…

優君は…

【マスター!!】

「っ!!シユート!!」

レイジングハートに言われ、とつさにデイバインシユーターで攻撃する。危ない危ない、もう少しでフェイトちゃんがやられるところだったの。

避けられてしまったけど、攻撃は防ぐことは出来た。

全く、シグナムさんに狼さん。騎士だったら不意打ちはいけないんじゃないの？

「あ、ありがとうなのは。」

「助かったよ」

「うん。優君の事は後で教えてあげるから今は目の前の相手に集中しよ」

ヴィータちゃんと違って他の人達は砲撃で攻撃しても問題ない。

レイジングハート、分割いける？

【頑張ります】

オツケーじゃあ、頑張ろうか。

「フェイトちゃん。援護するからあのピンク髪の人相手よろしく。アルフさんはあの男の人を」

「う、うん。わかったよ」

「任せときな！」

「ユーノ君、アルフさんの援護をお願いね」

「わかったよなのは。なんだか今日のなのは頼もしいね」

優君の隣に並び立たないといけないしね。だけど私一人だったら厳しい物がある。  
だけどもんなでなら：

屋上に降りて集中する。

まあ、これで準備は整った。今こそ修業の成果を見せるとき。

フェイトちゃんとアルフさんが突っ込むのに合わせてデイバインシューターを打ち出す。その間の片手間に周囲の魔力を収束する。

これが私とレイジングハートで考えた戦い方。デイバインシューターで牽制しつつ魔力を収束させてスターライトブレイカーを撃つという方法。凄く大変だったけどなんとか形にはなったもの。

牽制が長引けば長引くほど威力を増やされるし、放つときの溜めも少なくて済む。

シグナムさん達の攻撃で一番厄介なのはカートリッジを使ったもの。だから使わせる暇を与えないの！

「シュート!!!」

フェイトちゃんの攻撃に合わせてデイバインシューターで攻撃する。

絶え間ない波状攻撃、流石のシグナムさんでもこれならカートリッジロードが出来な

いはず。

【マスター、撃つための最低魔力の収束は完了です】

目の前にピンク色の塊が出現する。まだ小さいの。もう少しの間頑張つてくれる？  
レイジングハート

【了解です】

フェイトちゃんさんの背後から現れるようにデイバインシュートを動かす。フェイトちゃんは気兼ね無くバルディッシュで攻撃してて。

私は今の間に結界を壊すから。

結界を壊せば管理局への通信遮断が解かれる筈…だからシグナムさん達も撤退する。これが終わったら優君をどうするか考えないと…よし、毎日私が傍で守っていよう。

【マスター、これなら結界の破壊は問題無いです。】

「オーケー、じゃあ行くよ、レイジングハート」

レイジングハートを構えて魔力を送る。少しの間援護できないけど頑張つてね、フェイトちゃん。

「スターライト…」

突然、激しい痛みが襲う。自分の胸に視線を向けるとそこには胸から出た腕が…忘れてたの…シヤマルさんのこと…

「なのは!!」

だい、じょうぶだから、フェイトちゃんも気をつけて…私は…私で何とかする!! シヤマルさんの腕を掴む。少し魔力を込めた手。絶対に離さないの。レイジングハート、方向を教えて!!

【3時の方向。14度下方向】

了解なの。だけど、それじゃあ結界を破れない…だったら

「なののは?!?!」

シヤマルさんの腕を離す。一瞬消えたのを見計らって屋上から飛び降りる。

もう一度走る激痛。だけど、問題ない!!

もう一度腕を掴む。もう離さないの!!

レイジングハートが言った方角を見る。そこには腕をなんとか抜こうとしているシヤマルさんの姿が。

「みーつけたっ」

レイジングハート、行くよ。全力全開

「スターライトオオオブレイカアアア!!!」

シヤマルさんを飲み込んで発射される。スターライトブレイカーはそのまま結界を

打ち破つて空へと消えていった。

えへへ、少し無理しちやったかな。

【マスター、しつかり!!】

ごめんね。少し、休むね…



## 夢想編第3話「盟友」

「これで僕の勝ちだ」

これで0勝3敗かあ、この人本当に戦略ゲーム上手いなあ。現実だったら常人ではない僕は負けなしだけどそこは英霊。この人達も尋常ではない。

それにしてもこれは悔しいよ。一応は食らいについているけどあと一步の所で勝てない。

「にしても、中々見事な采配だったぞ、坊主。どうだ？余の家臣となり共に世界を征服せぬか？」

「何度目の台詞？言ってるでしょ。僕は世界なんて興味ないって」  
「ふぬう、今ならば特に待遇を良くするが…」

僕は世界征服なんてしたくも無いのに…

特に夢とかも無いけれど、取り敢えず真っ当に生きたいから。

「しかし、貴様が我が軍に入ってくれると大幅に戦力を上げれそうなのだ。」

「ふーん。」

僕ってそこまで強くないよ？だって普通に英霊の人のほうが強い人いると思うし。

エミルさん達の方が強いよ。

「ならば、余と盟友とならぬか？」

「盟友？」

確か友達とかって意味だっけ？それなら別にいいかな。

友達が増えるのは嬉しいしね。

「わかったよ。これからよろしくね？イスカンドルさん」

「そうかそうか。盟友となってくれるのだな。よく返事してくれた。感謝するぞ」

王宮の中のような空間。それが今回の場所だった。世界の主はイスカンドルさん。

多分アレクサンドロス大王って言ったほうがわかりやすいかな。

大きな身体に立派な顎鬚に鬣のような髪の毛。

最初に見た時は身体の大きさにびっくりしたけど話してみるといい人だったのはすぐにわかった。

それに、多分あれじゃないのかな。家臣とか盟友とかって言うのは友達が欲しいだけじゃないかな。

そう思うとあれだね、少し親近感が湧くというか何と言うか。偉人も僕達と同じなんだなって思えるよ。

「なにやら、少しばかり誤解された気がしたが気のせいであろう。今宵は気分が良いな。これでまた一步世界の征服に近付くわ」

まあ、手伝うとしても程々だよ？僕が間違ったことだと思ったら全力で止めるからね。だって、友達だし。

「さて、ではここに貴様。藤崎優と余は盟友となった。まあ、配下となった訳ではないがお主には少しばかり褒美を取らせようと思う。」

褒美？何だろ。玉座の横に置かれてるゲームとかかな？

ゲームなら嬉しいな。寧ろゲームがいい。

「構えろ。」

突然威圧感を感じる。そうか、そうだったね。この人は僕に試練を与えてくれる人なんだ。アンデルセンさんのように情報をくれるわけではないんだ。

この人は、僕に何かを託そうとしている。

「いいか坊主。我が宝具は種を明かせば簡単な物だ。英霊の座に儂が号令を掛けてかつての配下や盟友達を呼び出す。」

イスカンドルさんを中心に風景が変わっていく。まるで侵食するように王宮の絨毯が砂地になっていくのには少し違和感を感じる。

これが、イスカンドルさんの力なのか…。って、宝具ってなんだろう？

「しかしまあ、お主は英霊という訳ではない。故に英霊の座に号令を掛けることなどは不可能。それ以前にお主と繋がりを持った者は座にはおらん」

侵食は更に広がり、とうとう壁をもその色を変える。朱い装飾された壁から真つ青な空へ：

室内からいきなり室外に放り出されたような感覚。地面の砂地は確かに本物だ。

「取り敢えずは教えてやろう。これが余の宝具、アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢だ！」

完全に空間が侵食されてすぐ、目の前に軍勢が現れた。

え？

「皆の者！今宵は新たな盟友が現れた！！名は藤崎優！！まだ童子ではあるが、必ずや我が軍の力となる者だ！！」

「「うおおおおおおお！！」」

まるで地響きがなるような怒号。全員が武器を掲げて雄叫びをあげている。  
すごい…

流石は征服王と呼ばれた人。こんな光景見たら改めて思うよ。とんでもない人なんだって。

「では坊主、貴様に試練を与えよう。これから余の軍と戦うのだ。貴様の力を皆に見せつけるが良い」

「軍って…この人数？」

「なに、心配するな。この者達は全員が本来の力を有しているわけではない。誰も彼もが生前よりも力を発揮出来る。故に貴様ならある程度は戦えるだろう。」

僕、1体多つてやったこと無いんだけど…

どうしよう。

「もしだ、もし勝つことが出来たならば…」

「ん？どうしたの？」

聞き逃しちゃった。もう一度聞いてみるけどイスカンドルさんは気にするなと言って軍の方へ歩いて行った。

もしかして、これって拒否権無い？

イスカンドルさん達は離れていく。恐らくは距離を取ってくれるのだろう。ここから全員で突進されたら怖いけどね。

「では、行くぞ!!我が盟友よ!!」

「仕方ないね。僕も出来る限りやるよ!」

王様の蔵からエターナルソードとローレライの鍵を取り出す。

更に時計を首に掛けておいた。さあ、これが僕の完全武装だよ。

「AAAAaLalaLalaLalaLalaie!!」

「「AAAAaLalaLalaLalaLalaie!!」」

イスカンドルさんの雄叫びとともに迫ってくる。イスカンドルさんはいつの間にか

馬に跨っている。他の人達は武器を構えて走っている分イスカandalさんの方が速い。少しだけ危惧してたことが起こったか。僕の勝ち筋としては普通ならこんな人数で一人の人間を相手にしないからこんな場合の戦いは不慣れなのだろうってことくらい。全身に気を巡らせてダメージに備える。

手足に魔力を集中させて身体能力の向上。

イスカandalさんとの距離は目測70m

もうすぐそこまで迫ってきている軍。僕は右手に持ったエターナルソードと左手に持ったローレライの鍵の切っ先を地面に着けて息を吐く。

さあ、始めよう。

◇

眼前に佇む少年へ迫るのは征服王。

方に届く軍を引き連れての進軍は正しく圧巻そのものである。故に本来ならば少年



は為す術もなくこの人数の津波に飲み込まれてしまう状況だ。

征服王は確かに少年に「貴様ならば大丈夫」だと告げたが実のところ内心では自分自身半信半疑だったのだ。

だが、それでも征服王は見極める必要があった。目の前の少年の実力を。

自身の軍勢には絶対に殺すことはしないように告げている。自分たちは既に死んでしまっている身であり、実は死んでも蘇る事が出来るのだ。しかし、少年は生身の人間。以下に強大な力を有しようとも死ぬ時は死んでしまうのだ。

故に軍勢は殺さずというハンデを背負っていた。しかし、その程度で結果が覆る事などがあらずもなく。

もし、少年が勝つとすれば…少年自身がその軍と対等に渡り合える力を持つてるに他ならない。

「なに?！」

征服王は驚愕する。目の前の少年が消えたのだ…否、一瞬で接近してきたのだ。

とつさに手に持った剣を振るう。しかし少年はそれを軽々と避けて征服王の乗る馬に一太刀当てるとその速度のまま後方の軍へと突っ込んでいった。

征服王を乗せた馬は倒れる。足を切り飛ばされた訳ではないが、少年の持つ剣の腹で足を叩かれ、衝撃に足の神経を麻痺させられていたのだ。

地面を転がりすぐに顔をあげる。そこには驚くべき光景が広がっていた。少年を取り囲む軍勢が一人、また一人と吹き飛ばされていたのだ。

「ハイ」まで、とは」

征服王は思わず言葉を漏らしてしまう。もしかしたら自分ほとんど無い者と盟友になったのではないかと。

一方で少年はただ考えていた。

敵がどの方向から攻撃してくるのかを。常に死角である背後に気を配りつつその眼に入れた情報に従いほぼ反射的に身体を動かす。

少年は今、並列思考に酷似した事を行っていた。

ただ考える。どこへ避ければいいのか…どこに攻撃すればいいのか…

少年は実のところ一つ失敗していたのだ。

このような大衆の中央付近で戦えば少なくとも軍としては自分が振った剣が仲間に

あたつてしまふと躊躇すると踏んでいたのだ。

しかし、それは間違ひ。少年がどう避けようがお互いの隙を埋めるように攻撃の波状を受ける。そこに味方への躊躇は無いどころか、それぞれの武器をぶつけることもなかつた。

相手の連携の隙を突いて崩すことは既に少年の頭の中には存在しておらず。ただ、目の前の一つ一つの場面においての少年が出来うる最良の選択肢を紡いでいく。

近くの敵に剣を振るいながら術で遠くの敵への攻撃及び牽制を行う。

相手を殺すわけにはいかない。だけど負ける事も考えていない。

下段の切り払いと上段への横薙ぎを身体を倒しながら跳び、剣と剣の間に身体を入れ込む。当然敵はそこへ剣を振り下ろしてくるが両手に持った剣で多方向からの攻撃を受け流す。

その人間離れた動きに周囲は動揺する。まるで空気を斬っているような感覚に囚われるほど少年へ攻撃を与えることは出来ない。

ただ闇雲に斬り付けても隙を見つけて反撃されてしまふ。

軍が勝つ糸口は唯一つ。少年が疲労して動きが鈍る事だつた…

それから2時間が経過した。軍勢は少年に吹き飛ばされては再度戦いを繰り返していたが、もう既に3000人ほどを残して全員が地に伏せるか膝を付いていた。

一方で少年もまた肩で息を吐きその疲労を隠せずにいる。

肉体的と言うよりも集中力が持たなくなつたと言う方が正しい。

少年はその場に座り込む。それを好機と見て軍勢はここぞと少年へ迫つた。

しかし、少年に近付けなかつた。それは軍勢にとつては敗北宣告と同義の状態である。

少年はただ、自身の周りに障壁を展開させたのだ。

生前の力ならば何人かならば壊せたであろうその障壁をスケールダウンしてしまつてゐる軍勢に敗れることはなく、ただ少年が疲労を癒やすのを眺めるしか出来なかつた。

「そこまでやるとは思わなんだ。この勝負、余の負けだ」

故に王は宣言する。自身の軍の敗北を。勝機が無くなつた状況を見極められない王ではない。少年に安全に休まれるならばどうしようも無いのだ。

少年は息を大きく吐き障壁を解除する。

「貴様の實力、しかと見せてもらった。その武勇は近い未来大義を起こすであろう。」

王は馬を降り、座り込んでいる少年へと手を差し伸べる。

少年は少し笑うとその手を取って立ち上がった。

「皆、この者の實力を味わったな!!この者が我が盟友となる事に不満を持つものは名乗りをあげろ!!」

その声に名乗りを上げたものは…

誰一人としていなかった。

## 現実編第3話 「再会、そして大騒動なの」

目を覚ます……夢で全く同じ光景を見た……そっか、私はやられちゃったのか。

優君のために頑張って修行して、ヴィーたちやんも倒せたのに肝心のシヤマルさんのことを忘れていたの……一体私は何をやっているのだろうか……

「ほんと、弱いな。私」

【マスター……】

枕元に置かれていたレイジングハートが話しかけてくる。そっか、レイジングハートの破損はしなかったんだ。それは良かったの……

でも、それでもまだ足りない。私はもつと強くないと。優君に置いて行かれないから……

それから、お医者さんに診察してもらった。やっぱりリンカーコアは蒐集されてし

まったようで、小さくなってしまっているようだ。まあ、それでも既に魔法を使える程度には回復しているらしい。

もしかして、シヤマルさんを攻撃したから中断できたのかな。真実はわからないけれど運が良かったと思えばいいの。

「まあ、魔法を使えると言つても万全つてわけじゃないからね。暫くは気をつけるんだよ」

「はい、ありがとうございます。」

頭を下げてお礼を言う。そう言えばヴィータちゃん達は優君を狙ってたんだよね？それじゃあ今の優君は格好の獲物なんじゃ…こうしちやいられないの。早く戻らないと…!!

「あ、ハラオウン執務官。」

部屋の扉が開く音がする。そちらに目を向けるとフェイトちゃんとクロノ君が立っていた。

クロノくんはこちらを一度見るとそのままお医者さんと一緒に出て行ってしまった。部屋に残ったのは私とフェイトちゃん。

フェイトちゃんは顔を伏せて少し悲しそうな表情をしている。

「もう、そんな顔してたらダメだよ？ フェイトちゃん。そんなんじやあ優君に笑われるよ？！」

途端に顔を赤く染める。まだ少し恥ずかしいのかな。でも、優君って鈍感さんだから恥ずかしがってたらダメだよ？

まあ、その分優しいから気付かなくても気にはかけてくれるとは思うけどね。

「なのは…ごめん。私の力不足で…」

「違うよフェイトちゃん。これは私が弱かっただけ。」

だからフェイトちゃん、悲しそうな顔しないで。私はフェイトちゃん的笑顔が見たいの。

って、そうじゃなかった!! ベッドから立ち上がる。まだ少しフラつくけどこうしちゃ



いられない！

「なの「フェイトちゃん!!」」

フェイトちゃんが止めようとするのを遮って言う。早く優君の所に行かないと!!

「一体どうしたの？なの。落ち着いて。」

「早くしないと優君が危ないの！」

「……詳しく教えて、なのは。」

あれ？フェイトちゃんの雰囲気が変わった。少し冷たいような、そうでないような……  
まあ気のせいかな。

そのまま部屋を出ようとしてもフェイトちゃんにがっしり手を握られて動けない。  
急がなきゃいけないのに……仕方ないか。

フェイトちゃんに事情を話す。優君がずっと眼を覚ましていないこと。相手は優君  
を狙っていたこと。

それを話した直後、フェイトちゃんは私をベッドに放り込み念話をしだした。フェイ

トちゃんってこんな力あったっけ？

『母さん、リンディ提督。今よろしいですか？』

『どうしたの？フェイト。今日の晩飯はハンバーグがいいの？任せなさい！』

『巫山戯ないで下さいプレシアさん。で、どうしましたか？フェイトさん。』

『ちよつとした冗談なのに…』

あ、一応念話は聞けるんだ。でも話せないって事はそこまで魔力が回復してないってことか…

魔法が使えるって言っても使えないのも多そうだなあ。

『最重要案件です。今なのはからあの敵の情報を得られました。』

『本当に？教えて頂戴。』

『流石フェイトだわ！』

プレシアさんって親馬鹿だったんだ。しかも重度な…

それにしても、他人の念話を聞くって変な感じ。

『敵の狙いは優です。正確には優の魔力です。』

『成る程、あのロストログアならば辻褄が合うわね。でも、もしあの子に仕掛けても返り討ちに合うんじゃない？』

『それが現在優は原因不明の昏睡状態らしく、無防備な状態らしいのです。そこで私を優の護衛に海鳴市へ向かわせて欲しいのですが。』

成る程、確かにリンデイさん達には許可を取らないといけないよね。そこまで頭回ってなかったの…

『それはいけません。フェイトさん。貴方のバルディツシユは現在軽度と言えど破損している状態でしょう？』

『それは…』

バルディツシユ、壊されちゃったんだ。でも軽度で良かった…シグナムさんの不意打ちを何とか出来たからなのかな。

そう言えばさつきからプレシアさんが話してないけど…

『わかったわ、フェイト。お母さんに任せなさい！行くわよ！アリシア！』

『あいあいさー』

『ちよー！』

…アリシアちゃん、いつから念話出来るようになったんだろ。確か魔法が苦手で上手くないかといって言ってたような…

それよりもプレシアさん。行くってまさか…

『もう転移してる…仕方ないわね。フェイトさん、貴方の母親であるプレシアさんが傍にいるならば優君の安全は保証されますね？』

『は、はい。』

まあ、確かプレシアさんって大魔導師って言われるほどの人だし安全って言えば安全だよな。でもフェイトちゃんもそうだけど、優君は…好きな人は自分で守りたいんだよね。

だけど、今は我慢しなくちゃ。早く万全になるのが最適なの。

【マスター、少しお話が】

どうしたの？レイジングハート。



《海鳴大学病院にて》

「お母さん、優起きないね。」

「そうね。だけどきつとすぐに眼を覚ますわ。強い子だから…」

「早く元気になって貰う為に身体を暖めないと…」

「アリシア、どうして上着を脱いでるの？」

「え？だって身体を暖めるのって裸で抱き合ったらいいんでしょ？」

「やめておきなさい。それとそんな考えは捨てなさい。」

「仕方ない。じゃあ普通に暖めてあげよ。」

「ベッドに潜り込まないの。」

「ええー」



アースラが整備中で使えないこともあり、作戦本部を海鳴市に置くことになったの。まあ、簡単にいえばお引越。フエイトちゃん一家とリンデイさん、クロノくん、エイミイさんがそこに引越すらしい。

大まかには夢のどおりに進んでいく。けれど細かいところは違ったりするの。

レイジングハートはメンテナンスの為に管理局本部に置いてきた。レイジングハート本人からそんな希望を言われたの。

恐らくはヴィータちゃんやシグナムさんのデバイスを見て、ベルカ式のシステムを組み込む為に言い出したのだろう。

私自身、カートリッジシステムに興味があったり特別必要だと思ったりもしていないの。だけど、相棒であるレイジングハートが言い出したのだから私はそれを全力で支援するの。

だから、一緒に強くなろう。レイジングハート。

管理局から海鳴市に戻る前にフェイトちゃんから頼まれたの。強くしてくれって。

フェイトちゃんも優君に置いて行かれたくないらしく、頑張って修行していたそうなの。だけど、それでも足りないと思っただけ。

私がヴィータちゃんを倒したのを知ったからそう言ってきたのだと思う。

それに私は快く引き受けた。今現在は私もフェイトちゃんも万全ではない。だからこそ出来る修行もある。

取り敢えずは周囲の魔力を身に纏えるようにならないとね。私もスターライトインパクトの溜めれる容量をもっと増やすように頑張るから。

## 夢想編第4話 「終焉」

意識が沈む。もう何度も経験したためか随分と考えることに余裕が出来てきた。この先は一体どんな世界なのだろうか。一体どんな人が待っているのだろうか。

何も知らないけれど不安ではない。だって、彼らは僕に力をくれるから。彼らは僕に教えてくれる。力がなければ奪われるだけの存在に成り下がると。だから、僕は……

目を開く。既に着いていたようで足はしっかりと地面にたっていた。だけど、視界に映るのは黒。何かを全て黒で塗りつぶしたような世界。認識できるのは僕の身体だけ……

言い知れぬ恐怖があった。

冷や汗が止まらない。この黒を見ているだけで何かに蝕まれるような感覚に襲われる。

怖い怖い怖い怖い怖い

身体を抱えて座り込む。一体コレは何なの？どれもこれも黒。右を見ても左を見ても、下を見ても上を見ても前も見ても、黒色しか見えない。まるで生気を感じさせな



い世界。そんな世界に僕は来てしまったのだ。

脳裏にイメージが浮かぶ。

これは一体：

——何もない部屋。窓も塞がれ、光も入らない部屋で自分が■に向かつていくのを感じる。目の前に映るのは用意された食事。酷く質素な物：一体私が何をしたのだろうか

——目の前には見たことのある者達。どれも私が過去に助けた者。ふっ、どうやら正義の味方になりそこねた私には相応の罰らしい。全てを助けることなどは出来ずに最低限を犠牲にした私の最後がこうなるとはな

——皇帝の座を追われ、幾度も首元に刺そうとした刃を引き止める。ああ、なんとかわしいことか。この世から素晴らしい芸術家が一人消えることの悔しさよ。願わくば余の理解者が現れんことを

——自分の頬を何かが濡らす。それは暖かく、止まること無く自分の頬に流れてい

た。目を開く。そこには生涯で唯一の親友の顔があった。全く、なんて顔をしてるんだい。君は王で僕は道具だろう？道具が■れて涙を浮かべるのは頂けないよ。だから、君が泣く事なんてないんだよ

——かつかつか、儂の最後がこうも呆気なく終わるとは考えもしなかった。そうか、やはりどれだけ肉体を鍛えあげようとも、精神を強固にしようとも、毒を口にすれば■するのは道理か。まあ仕方あるまい。儂を■そうとする輩など数えきれぬほどにいる。なればこそ恨む道理などはない。真、愉快な人生であった

——身体を何かが蝕むのがわかる。これが■か。まあ、色んな世界を壊してきた俺が受けるにしては随分と幸運な罰だ。それに、これは俺が選択したことだから…後悔はない。だからこそ、お前は生きてくれ。俺は一足先に兄さんの所へ…

——胸に刺さる矢が自分の■を奪っていくのがわかる。私はただ、人間に憧れただけなの…

——意識が加速していく。誰も俺に追いつけるやつなんか居やしない。まるで景色

を後ろに置き去りにしていくような感覚……これが、これこそが俺の相棒。ゲイボルカーだ!! よし、あのカーブで更に差を着けてやるぜ!!

——幾多も敵をなぎ倒した。幾多も剣を折った。しかし、王を守ることは出来なかった。何故だ? 何故私はこうして王を守れずに地に伏せている。旧友に受けた傷に刺さった刃。どうしてこうなってしまったのだ。私のせいではないか。私怨を持ってしまった私の責任。そのせいで王は■に私も■に向かっている。すみませんでした王よ

——血が流れていく。等々やられちまったか。撃たれた場所がズキズキと痛む。どうやら俺の役目はここまでみたいだ。最後の頼みを聞いちゃくれなにかい? 俺が■んだ後、俺の身体をこの矢が落ちた場所に埋めてくれ。今射つからよ……

いくつもの■のイメージが流れこんでくる。頭が割れそうになるほどに痛む。そうか、そうだったのか。全てはいつか■ぬ。それはどんな存在でも変わらない事実。だからこそ……この世界の全てのはs——

「目を閉じなさい。」

声が聞こえた。凜とした声だ。ハツとしたように意識を浮上させ、声の方向を見る。そこには2人の女の人が立っていた。白い和服の女性と青い和服と赤いジャケットを着た女性。

「貴方…：たちは…」

「いいから目を閉じな。」

青い和服の人に言われる。慌てて僕は目を閉じる。すると、先程まで流れていたイメージが突然に止まった。同時に頭の痛みも引いていくのがわかった。

「全く、魔眼ももっていないのにここまで理解して廃人になっていないとか。本当に人間かよ、こいつ。」

「数多の記憶を埋め込まれて尚自我を持っている時点で人間離れをしているのは明白でしょう？ 多分、最後まで見ていたなら目覚めてしまっていたわよ。」

一体この2人は何を話しているのだろうか。だけどこれだけはわかる。この人達が

この世界の主なのだろう。

「目覚めてもこの子ならば間違つた使い方はしないでしょう。だからこそ目覚めさしてはいけない。貴方の力をこの子に渡してはいけないわよ。」

「わかつてるよ。お前こそ間違つてもこいつと接触するんじゃないぞ。じゃねえと意味がないからな。」

「わかつてるわ。」

頭の痛みも完全に収まる。それと同時に急激に眠気に襲われる。このままじゃ意識が沈む。だからこそ、聞かなければ…

「貴方達の、名前は…」

「なんだ、随分と酔狂な奴だな。言うに事欠いて聞くのが名前とはな」

「いいじゃない。こんな子が何かを成しとげたりするものよ？」

「違う。で、名前だったな。俺は—」

「私は—」

「「両儀式」」

その声と共に意識が闇に沈んだ。

## 現実編第4話 「それぞれの思惑なの」

「なのは！ここで踏み込んで！」

「うん!!」

白い魔法少女は変身すること無く、友人の使い魔と近接戦での修行を

「フェイト、その魔力制御が若干不安定だよ」

「う、うん」

黒い魔法少女は変身すること無く、友人のペットと魔力制御の修行を

「クロノくん、どう？そっちの調子は」

「武装局員の中隊を借りられた。操作を手伝ってもらおうよ。」

管理局員たちは事件の沈静化に向けての行動を

「主はやて、本日は私が病院に付き添います」

「ありがとうございます。シグナム」

闇の書の主とその騎士は変わらぬ日常を

「とつとと完成させないといけないな。行くぞザフィーラ」

「ああ、しかし無茶はするなよヴィータ」

自らの意志で動く騎士たちは主を助けるために戦いを

そして

「……………」



まだ少年は目を覚まさない。

◇

海鳴大学病院のある診療室。そこに少女、八神はやてはいた。

本日は定期健診のために病院に訪れ、自身の身体の状態を確認してもらっていた。

闇の書の騎士、ヴォルケンリッターの将、シグナムが同行しており、主である八神はやてを守っていた。

「うーん、やっぱりあんまり成果は出ていないかな。」

診察のカルテを眺めて身体を揺らしながら医者と言う。それを2人は少し不安気に

見つめていた。

「でも、今のところ副作用も出てないし、もう少しこの治療を続けましょうか」

「はい。えーと、お任せします」

「おまかせつて。自分のことなんだからもうちよつと真面目に取り組もうよ。」

苦笑いを浮かべる医者には少女は少し罰が悪そうに笑い、視線を医者から外す。

そして、一息置いた後医者には視線を向けて笑みを浮かべて言う。

「私、先生を信じてますから」

医者はそれに少し困ったような顔をした。現状この少女の症状が良くなっていない理由がわからない。それでも尚自身を信じると言ってくれた少女に申し訳なく思ったのだ。

「そうだ先生。この病院に原因不明で寝とるつていう男の子がおるつて聞いたんやけど」

それを察してかどうかは定かではないが少女は話を変えるためにその話題を切り出す。

少女の友人である月村すずかから聞いたこと。彼女の親友の想い人だと聞かされたはやてはその男の子に興味を持っていた。

「ああ、藤崎君のことね。あの子がどうかしたの？」

「いやあ、ちよつと気になったので」

医者は顎に手をおいて考える。少年もまた原因不明の症状、目の前の少女と共通点があった。それに仲間意識を持った為に聞いたのかもしれないと考える。

良くも悪くも身体というものは精神と繋がっている。プラシーボ効果と呼ばれる特効薬でもない薬を飲ませてそれによる思い込みで症状が治ったりすることもある。精神的に良い刺激を与えるというのはこの少女のためにもなるかもしれない。

「じゃあ、会ってみる？」

「ホントですか？」

「ええ。あの子は眠っているけど健康状態は良好なのよ。だから面会は問題ないわ。寧ろあそこの病室は賑やかなくらい」

またもや苦笑いを浮かべる医者には少女は不思議そうに頭を傾げていた。

それから医者は少女の付き添いであるシグナムと話をすることによって少女は廊下で看護婦と一緒にシグナムを待つことになった。

「そういえばはやてちゃん。うちの子に興味があるんだってね」

少女の隣に立つ看護婦はそう少女に話しかける。それに頭を傾げて少女は考える。一体誰のことだろうか、興味をもったと言ったのは藤崎という少年だったはず。

と、そこで看護婦の胸元に目が行く。そこには藤崎と書かれたプレートがあった。

「もしかして」

「そつ。私は貴方が会いたって言った男の子の親なのよ」

少女はそれを聞いて彼女の顔を見る。悲しそうではない、寧ろ少し喜んでいるような顔で少年のことを話している。

一体どうしてそこまで元気なのが少女にはわからない。家族が目覚めないのは不安ではないのだろうか？と少女は思った。

それを察し女性は優しくそうに笑い少女の頭を撫でる。

「最初は不安だったんだけどね。自分の息子がどうしてって事も思ったりもして碌に仕事なんて出来なかった。」

始まるのは独白。一人の女性が一人の親として語る言葉。

それに少女は黙って耳を傾ける。

「でもね、あの子が目を覚まさなくなってから何があったと思う？」

「……わかりません」

「毎日女の子が会いに来るようになったのよ」

少女には一瞬意味がわからなかった。この女性は一体何を言っているのだろうかと思うが、女性はそれに構うこともなく続けた。

「本当は他の子と遊んでたい年頃なのに、毎日息子の病室に来てるのよ。で、その子最初は沈んだ顔で息子の顔を見ていたのだけどある日を境に急に元気になったのよね」

「……」

「私は気になってその子に聞いたのよ。どうして貴方は笑顔なのってね。そしたらその子なんて言ったと思う？家族が帰ってくるのを笑顔で迎えるのは家族の役目なんだって。」

少女は女性の顔をみる。凄く綺麗な笑顔を浮かべている顔。思わず見惚れるほどの顔。

それに少女は気付く。少年は自分とは違うのだと。周囲の人に愛され、想われ、そして。それに応えているのだと。

「私もその言葉には衝撃だったわ。そして安心した。息子にはこんなに想ってくれてい

る子がいるんだって。もしその子を泣かすような事があれば私が眠らせてやるわよ」  
「…………ふふ」

少女は安心する。自分の出る幕では無かったと。この人達は信じてやめるの  
だとわかった。

女性は膝を曲げて少女と視線を合わせる。そしてニカツと笑った。

「ごめんね。はやてちゃん、つまらない話だったでしょ」

「ううん。ホントにいい話でした。全米が泣く位には感動しました。」

「ははは。じゃあはやてちゃん。もし良かったら息子に言っついてくれない？お誕生日  
おめでとうってね」

「…………ええ!？」



それから八神はやてとシグナムは件の少年の病室にやってきていた。

ノックしてから入ると病室特有の匂いがした後、綺麗に片付けられている部屋が視界に飛び込んでくる。

そのままシグナムに車椅子を押されてはやてはベッドに近付く。

ベッドにいるのは寝息を立てて眠っている少年。ただ眠っているようにしか見えな  
い寝顔の少年に少し安心する。その少年の横で幸せそうに眠っている幼稚園児くらい  
の女の子がいなければだが。

「…むう…優…わたしも…」

「なあ、シグナム…」

「……はっ！、ど、どうしましたか？」

「何か知らんけど無性に腹が立つのは何でやろ。今にもリア充爆発しろって叫んで壁を  
殴りたいこの衝動は何やろ」

「…私にはわかりかねます」

グヌヌと唸っているはやてを他所にシグナムは思案する。

目の前の少年は何なのかと。ここまで近付いてやっと気づいた魔力。だがそれは途



轍もない程の大きさ。闇の書のページの残りを埋めても余るほどの魔力に身震いする。右手が少年の方へ伸びていく。

この少年の魔力を蒐集すれば……

「あら、見ない顔ね。」

しかし、部屋の入口から声が聞こえ反射的に手を引つ込めた。

そして視線を声の方向に向けるそこにいたのは一人の女性。  
長い灰色がかった髪。少し疲れ気味の眼。そして…魔力

「あ、お邪魔してます。私八神はやて言います。」

「これはご丁寧に。私はプレシア。そこで眠っている女の子の母親よ」

「……シグナムだ」

警戒する。これほどの魔力を持った少年を野放しにしてるわけが無かったと今更に  
気付く。

自身の落ち度、それに主である八神はやてを巻き込んでしまったことを恥じる。

「……はあ、ちよつとその貴方。ついてきなさい」

そんなシグナムを見てプレシアはそう告げて部屋を出て行った。

「……どうしたんやろ。シグナム」

「……取り敢えず行つてきます」

バレてしまったと。主であるはやての顔が相手にバレてしまったと内心で思う。故に行動する。全ては主のために…

◇

「それで、どういった要件だ？」

シグナムは直ぐにでもデバイスを取り出せるように構える。それに対しプレシアは頭を抑えてため息をはいている。まるでシグナムの様子に呆れているように…

「貴方さつきあの男の子に手を出そうとしたでしょ」

「……」

沈黙する。それは答えを言っているのにも等しく。更にプレシアはため息を吐いた。

「全く、自分たちが主を苦しめているのは理解しているだろうけど、あの子に手を出すのは一番やってはいけない事よ」

まるで全てを知っているかのような口ぶり。だからこそ困惑する。そこまで知っておいて何故管理局からのアクションが無かったのだと…

「闇の書の騎士…いえ夜天の書の騎士達がそこまで短慮だとは思わなかったわよ。」

「……夜天……」

「自分たちの本来の役職さえ忘れ、過去にどうなったのかすら覚えていないでしょ。貴方」

「そんなことは……」

シグナムは自身の記憶を探る。そう言えば以前の主のことを思い出すことが出来ない。まるで霧がかかっているように認識することが出来ない。

「このままじゃあ闇の書が暴走してあの子の命は無くなる。」

「嘘をつくな!!もし本当だとしても何故貴様が知っている!!」

「調べたからよ。私の娘を生き返らせる為にね。まあ、ベルカの方はそれらしいものになかったからあまり詳しくは調べてないけれど。貴方達は有名だから真っ先に調べたのよ」

「娘を生き返らせるだど?ではあそこの少女は」

「正真正銘私の娘。生き返った娘よ。」

その言葉をありえないと吐き捨てつつシグナムは期待する。生き返る程の事が出来るのならばはやてを助ける事が出来るのではないかと…

「…どうやって…」

「私もわからないわ。だけどこれだけは言える。あの男の子がアリシアを生き返らせた

のだった。ここまで言えばわかるでしょ？さっきの言葉の意味が」  
「……」

案にプレシアはこう言っているのだ。あの少年に頼めど。あの少年にはそれをするだけの力があると。だが、当の本人は昏睡状態にあるとシグナムは内心でつぶやく・

「まあ、貴方達は納得出来ないでしょうから蒐集を続けるといいわ。もし蒐集仕切る前にあの子が目を覚ませばどうにか出来るだろうし。目覚めなければ貴方達が出来ることが出来て貴方達の中では万全な事になるでしょうね。」

「……何故そこまで我らに告げる。貴様は管理局の人間ではないのか？」

「私はあんな連中は嫌いよ。まあ、多少は協力してやってるけど貴方達と戦うことになるよりはこうやって話すほうが面倒がなくていいわ」

シグナムは安堵する。プレシアが主はやてのことを管理局に告げることは無いと。

「まあ、あの子に手を出すとこののなら全力で相手をするけれど」

プレシアは手のひらをシグナムに向ける。  
それにシグナムは一瞬呆気にとられてしまった。

「答えて頂戴。約束して頂戴。あの子に手を出さないと。もし断るならばバリアジャケツトを展開する前に雷を打ち込むわ」

完全に油断していた。警戒を解いてしまった。

既にシグナムは後手に回ってしまっていたのだ。

ここで自分が倒れれば主がどうなってしまうのかは容易に想像できる彼女には既に選択肢などはあつて無いようなものだった。

「何故…そこまでして」

「あの子は私達家族にとつての恩人。未来では私の息子になるかもしれない子。それを守れなかったら娘に嫌われちゃうわ」

シグナムは少年を傷つけないと言うしか無かった…

## 夢想編第5話「蒼光」

意識が浮上する。もう何度も経験したお陰か感覚的にわかる。まだ夢の世界だと。僕はどうやら地面に横になっていたようで頭に固い感覚がしている。取り敢えず眼を開いてみた。視界に入るのは満天の夜空、端に映る赤く照らされた木の葉。横に視線を移すと焚き火がパチパチといいながら燃えているのが見えた。

「ん？目を覚ましたのか、坊主」

火の向こう側。倒れた木に腰掛けている人がいた。アロハシャツに黒色のズボン。青色の髪の毛に赤色の目と槍。何処かで聞いたことのある声。

そんな特徴を持った男の人が僕を見て笑っていた。

「ゲイ、ボル、カー」

そうだ、あのイメージが流れた時に聞こえた声の人だ。確かカーブで差を付けるとか

言つてたような…

「何だそれ。この槍はゲイ・ボルクだぞ」

違つたようだ。少し恥ずかしく感じながら身体を起こして頭についた土を払う。

目の前の焚き火の近くには棒に刺さつた魚が並べられているのがわかつた。

「食えよ。腹減つてるだろ」

そう言つて男の人は魚にかぶり付く。見た感じ川魚みたいだね。僕も結構山に籠つたりするからわかるんだよね。

と少し得意気に魚を手持って頬張る。

美味しい。夢の中のはずなのに感じられる味。今思えばおかしな話だよね。夢の中で痛みなんかも感じるのは。

「まったく、お前には驚かされたぜ。いきなりやつてきたかと思えば気絶してるんだからな。」



僕は気絶していたみたいだ。多分前の世界のせいなのだろう。イマイチわからないかったけど、あの世界はあまり居たいとは思えなかったな。

魚を食べる。よく噛めば魚は骨まで食べれるんだよね。前に鯛を食べてた時はびつくりされたけど…

「いい食べっぷりだな。じゃあそのまま聞きな」

僕はその言葉に頷いて2匹目に手を出す。塩振っていないのに美味しいなあ。

「俺の名前はクーフリーン。お前に貸せる力って言ったらこの槍かルーンの魔術くらいしか思い浮かんでねえ。それに無料で貸すつもりはねえしな。」

### 3 匹目

「だがまあ、まだ子供のお前にそこまで酷い事を言うつもりはねえ。なに、簡単だ。俺と戦え」

## 5 匹目

「だけどお前と俺じゃあ力の差があるのは否めない。だけど俺は全力で戦いたい。そこで俺は考えた。お前は俺に片膝をつかせたら勝ち。俺はお前を気絶させたら勝ちって事だ。って話を聞け！」

「ひいふえはす!!!」

「……まあいいか。じゃあ、準備が出来たら言いな。」

「りよーかいです」

取り敢えず目の前の魚を全て口に放り込む。そして、立ち上がって土を払ってから屈伸する。

身体感覚に問題はないみたい。今度は王様の蔵を開いて時計を取り出す。うん、ここなら使えるみたいだ。

「問題無いです」

「わかった。じゃあ、始めるか」

少し場所を移動する。あたりは月明かりが少しだけ差し込んで森のなか。

そこで槍を構えてこちらを見てくるクーフリーンさん。その構えにとんでも無い人だというのがわかった。

やっぱり英雄と呼ばれた人達は一味ちがうみたいだ。気を引き締めて右手にエターナルソードを取り出し、左手にエターナルソードを投影させて逆手に持つ。

「行くぞ!!」

クーフリーンさんが突っ込んできた。そして槍を突き刺してくる。速度も土郎さん以上。目で見るのがやつとと言った所。

「甘っ!!」

集中回避してクーフリーンさんの後ろに回り込む。槍っていうのは懐に入り込まれないかぎり接近戦では無類の力を持つって言われてるけど、逆を言えば懐にさえ入れ

「あめえよー！」

僕の集中回避に反応してかクローリーリンさんの槍の柄の部分が進んでくる。それに反射的に集中回避を発動させる。今度は横に回り込む。

この人、とんでもなく速い。エミヤさん以上の判断速度だ。

接近戦を挑むのがそもそも間違いかもしれない。でも、ここは引かない！

「そっ！！！」

槍を横薙ぎに振るってくる。地面にへばりつくように伏せて回避する。頭の上を槍が通過したのがわかった。

「次元斬！！！」

クローリーリンさんの足元を崩すように次元を斬る。その瞬間に停止する空間。

いや、もう動いてしまう！！

次元斬を物ともせずそのまま回転して2度目の横薙ぎをしてくる。

恐ろしく速い。僕は地面にエターナルソードを刺して柄を持ったまま跳ぶ。

槍の横薙ぎを受けてエターナルソードは地面から抜ける。その力は手で持っていた僕にも伝わり、回転する力になる。

クーフリーンさんの顔に回転した力を乗せた蹴りを放つ。丁度上から叩き込むように。

それにクーフリーンさんは槍を左手に持ち右手で防いでくる。なんて反応速度なんだ。

「はっーいいねえ。思ったよりやるじゃねえか！坊主!!」

僕は飛びのき距離を取る。本当にとんでも無い人だ。

蹴りの影響が少し地面が陥没しているのがわかった。あれだけの威力を乗せたのに手を振るうだけで済んでるところを見ても異常だっつのはわかる。

「おらあ!!行くぜ!!」

肩の力を抜く。そうだ、僕の腕は剣。力は振る力だけでいい。

見るのは迫ってくる敵。槍をしならせて振り下ろしてくるのをしっかりと見る。

右手の剣で受ける。この剣が壊れる事は心配しなくていい。投影で作ったものならまだしもこの剣は間違いなく本物の聖剣だ。

後は、僕がこの力に打ち勝たないといけない。

衝撃が全身を襲う。腕を通して肩、腹、足に槍の力が伝わってくる。

なんて重い一撃なんだろうか：だけど、打ち勝つ！

思いつきり、力任せに槍を弾く。僕の間離れした筋力でも押し返すのがやっと。それに右手が痺れてエターナルソードを落としてしまう。

「まだまだあ!!」

僕に弾かれた力を利用して遠心力を掛けた一撃。今度は左手に持つ剣で受ける。さつきよりも重い一撃。なんとか耐える。

くっ、ヒビが入ってきた。魔力で投影を重ねがけしつつ左腕に力を乗せる。

「ぐ、あああああ!!!」

弾いた。同時に剣は壊れてしまったけど問題はない。今度は予想外だったのかクーフリーンさんの体勢が崩れている。叩き込む!!  
右手に気をためて一步踏み込んで放つ。

「幻竜拳!!」

丁度腹部に叩きこむ。撃ち上げるように放った攻撃。地面に衝撃を逃すことなんて出来ない一撃をぶつけた。

衝撃でクーフリーンさんがわずかに空中に浮く。

でも、あまり浮いてないところを見て衝撃の殆どが伝わったようだ。

「がっ!!」

少し血を吐いたのがわかった。流石にダメージはあるみたいだ。これで片膝が着け

ば…

「まだ、だあ!!」

体勢を立てなおして槍を振るってくる。防ぐものがない!  
がむしやらにクーフリーンさんの足を掴む。

突然身体が勝手に動き出した。逆の手もクーフリーンさんの足を掴む。

「えっ? ちよ、おまー!」

足を思いつきり踏ん張ってクーフリーンさんをぶん投げた。

「あはあああああああ!!」

蒼い光を放ち回転しながら木々をなぎ倒してクーフリーンさんは吹っ飛んでいった。



## 現実編第5話 「格闘戦は苦手なの」

守護騎士の2人ヴィータとザファイラを管理局員達は結界内に閉じ込めた。

複数の局員たちによる結果はちよつとやそつとでは壊れることもない。しかし、守護騎士達が本気で壊しにかかれれば壊れないとはいえない。

そのため、管理局員たちは直接守護騎士を捕まえなくてはならなかった。

「お前らが相手か」

守護騎士の前に立ちふさがるのは4人。金髪に黒い服、黒いマントをつけ、デバイスを持った少女フェイトとその使い魔のアルフ、黒い服に紺色の髪の少年クロノにその後ろで何かを思案しているユーノ、だった。

「ロストログア不正使用及び局員への攻撃行為で逮捕する。武器を下げたて投降するならば君たちには弁護の機会がある。」

「はっ、そんなのに従うわけねえだろ」

「私達は戦いに来たわけではない。どうしてこんな事をしているのか教えて欲しいだけ」

「……あのさ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ。和平の使者なら槍を持たないってな。」

フェイトはその言葉が理解できずに頭を傾げる。

それに少し苛ついたのかヴィータはデバイスを不思議そうな顔をしているフェイトに向けた。

「話し合いをしようってのに武器を持ってくる馬鹿がいるかって意味だよ。ばーか」

「……」

フェイトは苦虫を噛み潰したような顔をして自身のデバイスへと視線を向けた。

確かにヴィータの言うとおりなのだ。だからここは変身を解いた方がいいのでは？と考えクロノへと視線を向ける。

それにクロノは首を横に降って否定した。守護騎士達はこれまで無抵抗では無かったといえど局員たちの魔力を蒐集してきたのだ。そんな相手に無防備になるのは危険

すぎるとクロノは念話で伝えた。

「ヴィータ：それは諺ではなく、小話のオチだ。」

「うっせえ！いいんだよ、細かいことは」

ザファイラの訂正に少し顔を赤くして反論するヴィータ。

腕を組んで視線をずらした。視線を向けた先に一つの光が見えた。光は結界の一部を破るとそのまま近くのビルの上に落ちた。

少し立ち上った煙が晴れ一人の女性が現れる。

「シグナム」

フェイトの視線の先にいる人物シグナムが剣を構えていた。

その眼は敵を認識し睨みつけている。それに応えるようにフェイトもまた視線をシグナムから離すことはなかった。

『アルフ、私は…彼女と』

念話でアルフへと伝える。それにアルフはわかっているとばかりに笑みを浮かべてザフィーラへと視線をむけた。

『ああ、私も野郎にちよいと話がある』

クロノはそんな2人の様子に頭を抑えてヴィータへとデバイスを向ける。

ユーノは一人、まだ何かを考えていた。

「必然的に僕が君の相手というわけだか」

「前の奴はいねえのか？」

「なのはのことか？彼女は別行動中だ」

「チツ！折角この前の借りを返せると思ったのによ。仕方ねえお前で我慢してやるか」

6人は一斉に飛び出す。

アルフとザフィーラは共に拳をぶつけ

クロノとヴィータはお互いに魔力弾をぶつけ

フエイトとシグナムはデバイスをぶつけた。

「拳が以前よりも重くなっているな」

「いい練習相手がいたからねえ!!」

「厄介な奴だな」

「これでも執務官なんでね」

「そのデバイス…強化したのか」

「それだけじゃない!」

◇

ユーノは考える。彼の友人高町なのについて

何故彼女がこの作戦に参加しなかったのかが気になる。彼女は時折何かとんでもないことをしでかす人物なのだ。今回も何かをしそうで不安になる。

視線を3つの戦いへ向ける。

ここまで衝撃が伝わってきたきそうなほど拳と拳で殴りあうアルフ、彼女はなのはと模擬戦ばかりしていたと脳裏に思い浮かべる。

その横で戦うクロノは以前よりも多くの魔力弾を操っている。彼もまたなのはの戦い方から修行したと言っていた。

そしてフェイト、彼女はここ数日でもんでもなく成長した。自分が修行相手になったからわかる。彼女もまた魔力弾を操る事を覚えた。更には並列思考マルチタスクを取得し近接戦を行いながら高い精度の魔力コントロールを覚えた。

彼女たちはみんな高町なのはどういう人物に影響を受けた者達。彼女が関わると何かしらの変化を起こしている気がしてならない。

もしかして自分もそうなのかもしれないと頭によぎるがそれを振り払った。

違う。変わったのは何も目の前の3人だけじゃないのだ。高町なのは本人も変わった1人であり、変えた人物ではない。

彼女は一人の少年、藤崎優によつて変わった。一体あの少年は何者だろうか。幾度も思案したがその度に頭に霧がかかるといふ意欲が失せてしまう。

異常なのかもしれない。だけど自分にはどうすることも出来ない結論づけてユーノは動き出す。

彼の仕事は結界内での闇の書の主の探索。

そして、高町なのはの仕事は結界外の探索なのだ。

◇

高町なのはは結界の頂点にたち探索魔法の範囲を広げる。

先程シグナムを補足したが彼女は特にアクションを起こさずに放置した。彼女の相手はフェイトであるとの考えだからだ。

ならば自分の相手はヴィータが正しいのではないのか？そういう考えも彼女の中に

はあった。しかし、それを彼女自身が否定した。

もつと戦うべき相手はいるのだ、夢では手も足も出なかつた相手。闇の書の完成を目的としている人物。

リーゼ姉妹  
仮面の男が

夢ではリーゼロットが現れていた筈。彼女とは直接戦つた訳ではないが夢の自分が戦つていたならば間違いなく負けている相手。

だからこそ負けられない。恐らく少年、藤崎優ならば彼女たちを倒せるだろう。だから高町なのも勝たなければならぬのだ。

彼の隣に立つたためにはそれくらいの事をしなければいけないと彼女は心に決めたのだ

「……見つけた」

魔力探知に一人引つかかる。闇の書を持ち結界を心配そうに見ている人物。シャマルを

足へと魔力を集中させて飛行魔法を強化する。



左手には新しい力を手に入れたレイジングハート。  
右手にはアルフから貰ったグローブ。

魔力量に物を言わせた移動方法。1km程の距離を数十秒で移動する。

移動しつつ彼女は魔力弾を展開する。

彼女もまたフェイトと同じく並列思考<sup>マルチタスク</sup>を取得していた。いや、フェイトが取得するよりも前に、一人で身につけたのだ。

距離を近づけながらも展開されていく魔力弾。その数は本来の発射最大可能数である12発を超え、数を36発まで増やしていた。

それには彼女のデバイスは驚いていた。彼女がやっていることは端的に言えば魔法の同時展開。飛行魔法に加えてアクセルシューターを3回分展開し、さらにそれら全てを制御していたのだ。

「見えた」

高速で近づき彼女はシャマルを魔力弾で取り囲んだ。

そしてデバイスを向けて笑顔を向けた。

「大人しく投降してくれるかな？」

「ぴ、ピンク……」

シヤマルは彼女の展開する魔力弾に冷や汗を流す。脳裏に映るのはピンクの魔力の奔流。

そんな様子のシヤマルに少し頭を傾げた後彼女は一斉に横方向に魔力弾を発射させた。

「くっ！」

「……さて、先制攻撃はこっちが貰ったけど、貴方に反撃の機会を与える気はないよ」

魔力弾が向かった先へと視線を向ける。数発かすったようで腕を抑えている仮面を着けた男が姿を見せていた。

さらに彼女は魔力弾を展開する。先ほどまで展開していた魔力弾と合わせて48発。それを巧みに操り仮面の男へと集中砲火を掛ける。

魔力弾を動かすには魔力が必要。だが、彼女の場合は魔力を使えば使うほど彼女が有

利となる。

「レイジングハート、カートリッジロード」

【了解。バスターモード】

彼女のデバイスにある弾から魔力が供給される。その間も魔力弾の操作を止めることはない。絶え間なく敵へと襲いかかり動きを抑制する。数発はシヤマルへの牽制に使用しつつ周囲の魔力を収束させる。

ここまで大盤振る舞いで魔法を使ってきたのだ。もう既に少女の中にある魔力の量は少なくなっており、残りの魔力もこの砲撃を放てば尽きると少女は悟っていた。

だけど少女は戸惑わずに更にカートリッジを開けて集中する。

「これが、これが今の私の全力全開。スターライト…ブレイカアアアアア!!!」

## 夢想編第6話 「狐耳」

目を覚ましたら神社にいました。

確か僕は涙目になったクーフリーンさんから槍を受け取ったはずんだけど……いつの間にか景色が変わっていた。

槍も消えてるし一体なんだろう。もう次の世界に来ちゃったのかな……だとしたら一体誰の……

「やっぱり来ちゃいましたか」

「ん？」

声が聞こえた。呆れたような声、境内の方から聞こえた。

人がいる。獣の耳と尻尾を生やした和服を着た女性。前に見た影に似たシルエツト。プレシアさんとの戦いの時に聞こえた声。

そうか、この人があの鏡の持ち主……確かアンデルセンから聞いた話では、名前を玉藻の前って言ってた。

「全く、いつかは来ると思っていましたけどこんな早いだなんて思ってもなかったですよ。玉藻。ぶん。ぶんです」

「……貴方はあの鏡、水天日光天照八野鎮石の持ち主の玉藻の前さんですか？」  
「ええそうですよ。誰から聞いたかは知りませんが私は玉藻で間違いないです」

それを聞いて僕は頭を下げる。あの時アリシアちゃんとプレシアさんを救えたのは間違いないこの人のお陰なのだ。

感謝してもしきれないよ。僕自身には蘇生の手段が無かったんだから……

「頭を上げて下さい。私は貴方に水天日光を蘇生のために貸したわけではありません。しかし、貴方はあろうことか自分だけの力で水天日光の力を引き出しました。可能性を考えなかった私の落ち度です。」

「……」

「別に水天日光を使うのは問題ないのです。貴方は既に私の根源の影を倒す事により実力を示していますから。ですが、これからは水天日光を蘇生に使うのはしないように。本来は死者を生き返らせるなどはあつてはならないのですよ」

「それは…保証できません」

玉藻さんの言い分を断る。確かに人を生き返らせるのはよくないとは思う。だけどいざ誰かが死んで友達が悲しんでいたなら迷いなく僕は蘇生を行うと思う。

自分でも勝手なのはわかっているけど、力があるのに見てみぬふりなんて出来ないよ。

「……」

「僕は、多分使ってしまうと思います。今約束してもそれを守る事は出来ません。」

「…嘘でも使わないと言えたと思いますが」

嘘は付きたくない。僕が勝手に決めた宿ってくれた人達に対する礼儀だ。この人達がいなければ多分僕は転生者に身体を乗っ取られていたと思う。

そんな人達に嘘を付くくらいならば最初から僕には水天日光を使えない方がいいんだ。

玉藻さんの目を見る。僕は絶対に嘘はつかない。

それだけは信じてもらうために…

「……貴方が正直者だということはいくわかりました。しかし、それでも蘇生の技法を使用されるのは困るのです。」

「……」

「だから、力を示して下さい。そして見せてください。貴方が水天日光の間違った使い方をしていないかを」

…ありがとう。僕にチャンスをくれて…

目の前の玉藻さんに内心でそうお礼を言いつつエターナルソードを取り出す。

玉藻さんもそんな僕を見て一息を吐いてから目を細めた。すると彼女の一本だった尻尾が2本になった。

どんどんと横にずれるように増えていく尻尾。それと同時に感じる威圧感。

そうか、そうかそうか。玉藻の前、いや玉藻御前は九尾の狐が化けたとされる女性だったわけ。この力の跳ね上がり方から察するに彼女は尻尾が多ければ多いほどその力を増す…

影を打ち倒せたから安堵していた。根源というばかりのその存在を制する事が出来たのだから…

だけどそんな事は無かった。いままで感じたこともないほどの圧倒的な力。彼女の前では僕なんかは塵にも等しいのかもしれない。いや、それ以下なのかもしれない。

エターナルソードを握る手に力が入る。わかってしまった、この人に勝つことは出来ない。

他の人と対峙した時は感じなかった感情。どんな人でも心の何処かでは勝てるかもしれないと感じていたことが今になってわかった。

これが恐怖。これが絶対的な存在…

「……何故笑っているのですか？」

今僕は笑っているのか。そんなつもりは無かったんだけどな。

でも、確かに笑ってしまふのは仕方ないと思う。初めて会った強大な相手。自分はまだまだということを嫌というほどに思い知らされる力の差。

そう、まだ先はあるんだ。僕よりも遙か先、その到達点が…

この人が僕の中に居てくれて良かった。僕はまだまだ強くなれる。だから…



「今の僕の全力受け止めて下さい！玉藻さん！」  
「わかりました。貴方の力拝見させて貰います。」

骸殻を纏う。それと同時に左手に槍が出現する。エターナルソードで次元を切り裂いて時間を止め、絶影で接近。更に蒼破刃で牽制しつつエターナルソードを持ち替え右手にゲイ・ボルクを持つ。

2本の槍での双針乱舞。更に力と魔力を込めてゲイ・ボルクを投げる。突き穿つ死翔の槍、大軍をも吹き飛ばす威力の投擲。

まだ終われない。すぐさまローレライの鍵を持ち超振動を起こして撃ち放つ。ルクさんが言っていた。超振動は簡単に言ったら凄まじいビームが撃てるって。他にもいろんな物を無効化出来る第2超振動もあるけど使えない…

煙が立ち込める所へもう一度超振動を撃ち込む。まだ倒れていないのがひしひしと伝わってくる。多分攻撃を止めたらすぐにやられる。

かと言って今僕は全力で攻撃しているんだ。手加減なんか一切していない。ただ僕が持ちうる攻撃の最上の物で攻撃している。

それでも一向に収まらない威圧感…

——一陣の風が吹いた

一瞬何が起こったのかがわからなかった。僕は地面に倒れていた。目の前に立っているのは無傷の玉藻さん。冷ややかな目でこちらを見下ろしている。

僕はどうなっているの？

痛い、痛い、痛い。

骸殻も解け、目の前にはローレイの鍵を握った手が転がっている…

そうか、これ、僕の右手か…

痛い、痛い、痛い。

幸いにも左手は無傷だ。両足も無傷…

治癒功を使用して出血を抑えながら左手にエターナルソードを持つ。

敵わないことはわかっていた。勝てないことはわかっていた。ここまでの実力差が

あることはわかっていた。

なら、どうするべきかはきまっている。

何処までも足掻いてやる。

## 現実編第6話 「反省会なの」

ここはフェイトちゃん達が住んでいるマンション。その中のリンデイさん達の部屋にて昨日の戦いの反省会を行っています。

そんな私は反省中と書かれたプラカードをかけて正座している。最後にロツテさんに放ったスターライトブレイカーが捕縛結界を物の見事に粉碎してしまつてシグナムさん達は逃亡しちやつたのこと。

ロツテさんも直撃したのはわかつたけどどうなつたかまでは確認出来なかつたの。散々な結果にクロノ君から叱られちゃいました。何故かクロノ君は冷や汗を流していたけど。

そうそう、フェイトちゃんはシグナムさんをもう少しのところまで追い詰めたらしい。魔力弾で牽制とバルディッシュでの接近戦を同時に行えたのが大きいって胸を張つて言つてた。可愛かつたな…

クロノ君はヴィータちゃんと戦つたけど決定打をいれれなかつたって悔しがつていた。修行あるのみだよ。

アルフさんは狼さんを一度は捕まえたらしいけど結界が壊れた衝撃で逃げられてし

まったくらしい。申し訳ないです。

仮面の男、リーゼ姉妹に関してはクロノ君達は見当も付いていないとのこと。私が問答無用で攻撃しちやつて会話してないからなんだよね、あはは。

でも、もう一人の仮面の男、リーゼアリアさんが優君の病院を襲撃したらしい。まあ、プレシアさんが撃退したらしいのだけど、やっぱりフェイトちゃんのお母さんって凄いなんだな。

これで仮面の男が2人いるって事と目的がおそらくは魔力蒐集であるって事がわかり、それを元に搜索するらしい。あの2人が実質的に一番の強敵だからね。

それにしても優君を狙うとは、あの二人には今度あつたらしつかりと頭を冷やして貰わないと…

「なのは、笑みが黒くなってるよ」

「……気のせいだよ、それよりもフェイトちゃん」

まったく、人の顔を見て黒くなってるってユーノ君は失礼なの。確かにどうやってお仕置きしようかは考えてたけど変なことじゃないよ。

ただ、スターライトブレイカー何発撃ちこめばいいのか考えてただけだよ？

まあ、これは置いておいて今は仮面の男の事を考えないと。何処に居るのかって聞かれたら管理局にいると思うけど今言うべきではないと思う。どう頑張っても闇の書を完成させないとハヤテちゃんは助からない。けどただ完成させるのはダメだ。何としても闇の書のバグとリインフォースさんを切り離す方法を考えないと……

あれかな？ フェイトちゃんのザンバーでどうにか出来ないかな…無理か。

優君ならどうするだろ、闇の書自体を消しちゃうのかな。それともバグを無くすとか…流石にそれは出来ないか。

何にしても闇の書覚醒までに優君が起きるのは期待しない方がいい。自分たちの力でどうにかしないといけないよね。

私はあれこれ考えるのは苦手だからここはユーノ君に考えてもらおう。寧ろバグをどうにかしてもらおう。そのために必要なことなら惜しまずに助力はする。主に戦闘方面で…

『緊急事態よ』

「どうしました？ プレシアさん」

突然プレシアさんが念話をしてきた。リンデイさんが答えたところを見るにこの場

にいる全員へ念話をしたんだろう。

『優君の容態が急変したわ』

「なんですつて!?!」

嘘…なんで今になって…

こーうしちやいられない!!

「フェイトちゃん!!」

「なのは!!」

プラカードをへし折り放り捨ててて出口に向かう。一刻も早く優君の所へ!!

ユーノ君とクロノ君の制止の声が聞こえたけど聞こえないの!

説教なら後でいくらでも聞くから今は早く行かせて貰うの!

『多分フェイトとなのはちゃんは一目散に向かつてるでしょうからこのまま念話を聞きながら来なさい』

流石プレシアさん！気が利くの！！

足に魔力を溜めて跳ぶ。隣を並走するフェイトちゃんも同様に跳び上がった。

「レイジングハート！！」

「バルディッシュ！！」

「セットアップ！！！！」

ありったけの魔力を飛行魔法につき込んで飛ぶ。多分これまでで一番早く飛んでいく。

『優君は先程突然魔力を放出しだして苦しみだしたわ。それに痛いと言っているわ』

『外傷などは？』

『それが全く無いのよ。内面も魔力で検査しても異常はなし。ただ魔力を放出しているのよ。でも、これほどの魔力を放出していればいずれ枯渇してしまうわ』

『……それはまずいわね。何か手立てはありますか？』



『一応私が魔力供給を行っているのだけど、それもいつまで持つのかわからないわ』

早く早く

『医療班に連絡します。似たような症状を過去にあるか確認してその対処を貴方に行つて貰うかもしれません』

『わかったわ……っ!?!』

突然プレシアさんが声を上げた。

一体なにがあるのだろうか。もっと早く!

もう少しで病院なのに!

『プレシアさん!どうしましたか!?!』

『これは、あの時の……』

早く病院へ!

## 夢想編第7話 「選定」

倒れこむように迫る札を躲す。片手を失いバランス感覚が狂ってしまった身体で玉藻さんの攻撃を避けるのは大変だ。

すぐに左手で地面をついて起き上がる。目の前には再度放たれた札が迫っている。

防御は無意味だ。さっきまで何度か試したが障壁を破られるだけで意味が無い。

その場にしゃがんで札を躲す。

息もつけない波状攻撃に接近する事が出来ない。それでは僕の力を最大限に生かせないよ。

僕は遠距離攻撃で強力なものを身につけていない。術は使えるけど近接戦闘のほうが強力なのは明白だ。

転がり、直ぐに反転し札を躲す。

ジリ貧なのはわかってる。寧ろ玉藻さんが全然本気を出していない事がわかった。

いや、本気なのは本気だろうけど全力ではないといった所。

次元斬で時を止めて札を躲す。

もう既に魔力は尽きかけている。どれだけ多く魔力を保有しようといつかは無く

なってしまうのが当たり前。

だけどその当たり前が今はとてつもなく重く感じる。時間が動き出す前に出来るだけ距離を詰める。

大体止まっている時間は1秒と少し。札を避けてから少しだけしか進めない。

治癒功で止血は続けなければならぬ。集気法で体力を回復しなければならぬ。

全てを集中して行ってやつと戦える状態。

近付けば近付くほど攻撃の間隔は短くなっていく。

躲す、躲す、躲す。

次元斬を使う。ここで一気に距離を詰めて……止まらない!?

次元斬による時間停止の魔力が尽きた。その一瞬の判断ミスが一気に僕を劣勢にする。

目の前には札、一発一発がとんでも無い威力を秘めた一撃。

躲す。

左足に被弾した、すぐさま治癒功の範囲を広げる。痛みは緩和されたが集気法が切れ  
た。

気も尽きかけということか。

無理矢理身体を回して第2波を躲す。

躲しきれないと判断。エターナルソードで札を斬る。

目の前で爆発。それと同時にエターナルソードが吹き飛ばされてしまった。

爆風のせいで次の札が見えない。

しゃがむ。頭の上を何かが通過したのがわかった。

すぐに横へ移動。札の攻撃範囲から外れないといけない。

右足に被弾。少し遅れたせいかな。治癒功を発動、発動しない。

尋常じゃない痛みの信号が足から発せられる。

我慢して地面を転がり、すぐに立ち上がり視線を玉藻さんへ向ける。

周囲360°を札が囲んでいた。

「はあ…はあ…」

囲まれた。武器も持っていない。魔力もほぼ皆無、気も同様。

どこまでか。

いや、諦めない。

残った気と魔力で身体を強化。躲すことは出来ない。だけど出来るだけダメージを減らすことなら…

「密天・集」

札が殺到する。

身体に当たる度に衝撃が襲う。

出来るだけ姿勢を低くし被弾数を減らす。

耐えろ、耐えろ、耐えろ。

これを使い切っても意味がないかもしれない。だけど、乗り切らなければ何も無いんだ。

耐えろ!!



「……」

女性は目の前の地面に伏せる少年を見る。

神に弄ばれる哀れな存在。神に逆らう愚かな存在。

神とは人が作った想像上の物であるがゆえにそれは絶対的な存在なのだ。

現に神である女性を前に少年は何も出来ずに地面に倒れ伏すのみ。

少しは期待した。自身の宝物、水天日光を使いこなしたのは紛れも無くこの少年の力。故に何かをやつてのけるのかとも思えた。

しかし、結果は期待を裏切るものとなった。

何が神様が嫌いか、何が嘘は付きたくないか。

言葉では正しいことを言えようが力が無ければいつも排他され消される運命にある。

そう、生前の自分のように…

振り返り社へと歩を進める。

ここは精神世界、暫く時間が経てば少年も目を覚ましてここからいなくなるだろう。手加減はした、されど容赦はしなかった。

この少年は敗れたのだ。水天日光という冥界の宝物を手に持つ資格を得る戦いに。敗者に情けは無用、ただ勝者となった女性の心も曇ったままであった。

「……………」

ふと、声が聞こえた。掠れた声、空耳かと思うくらいに小さな声。

女性は立ち止まり少年へと視線を向ける。

少年は立ち上がるうとしていた。右腕がないせいか上手く力を入れられずに立ててはいないが、それでも必死に左腕で立とうとしていたのだ。

あれだけの攻撃、いかに神に作られた器といえど気絶は免れないはずの攻撃を少年は耐えたのだ。

しかし、満身創痍の身体で一体何が出来るというのか…  
女性は札を一枚取り出し少年へと放る。

札は少年の胸に当たると爆発し少年を吹き飛ばした。

少年は地面をゴロゴロと転がり倒れこんだ。

これで終わっただろうと内心で呟き女性は社へと歩を進める。

やはり、人間は人間か。と感じるもその歩を緩めることはなかった。

「…まっ…て…」

女性はゆっくりと振り返る。そんな馬鹿な、と感じつつ視線を少年へと向けた。

左腕で地面を押し立ち上がろうとしている。

一体何が少年をそこまで動かすのだろうか。一体少年は何がしたいのだろうか…

見ている限り少年の身近な存在が死んだ事もない。ただ少年は水天日光の蘇生という物を求めるだけ…

はたしてそうなのだろうか。それだけの理由で少年がここまでする事になるのか…

わからない



「何故。そうまでして…」

女性はたまらずに問うた。わからない、理解できないと内心で叫び少年の返答を待つ。

少年はその言葉にぴくりと反応し、なんとか身体を起こして座り込んだ。

「…あなた…ち…と…きあう…ため…」

息も絶え絶えと言った様子で呟く。

貴方達と向き合うため…

この少年はただそれだけを考えていたのか…と女性は納得する。

少し考えは外れていたが概ね綺麗事を言う人間の言葉だ。

しかし、綺麗事も最後まで突き通せば偉業となり得るものだ。

女性は札を取り出す。

少年は自分たちと向き合いたいと言った。だからこそ女性も真摯に向き合うべきだと自身に言い聞かせた。

札をとばす。これまでの手加減などとは比較にならないほどの威力を秘めた札。魔力量も倍以上のもの。これを受ければ少年もただでは済まないとわかっている。女性も放った。

防いだ…

誰がではない。何が…だ。

放った札は防がれた。少年の目の前に漂う鏡に…

「水天日光…」

自身の宝具、いつの間にそこに居たのかがわからないが、少年を庇うように鏡は宙を浮いていた。

その装飾はヒビが入り、辛うじて鏡部分が残っている程度…

「そう…貴方の答えはそうなんですネ」

女性は札を取り出す。既に少年は資格を得た。後は答えを得るだけ…

少年にとっての答えが真摯に向き合うことなのかがわからない。だけど少年の行動への答えとして自分が用意できるものはこれだけなのだと言き、女性は札を放った。

防いだ…

今度は鏡ではない。少年の障壁だ。

水天日光の恩恵を受け、魔力を回復したのだろう。先ほどまでの魔力とは比べ物にならない密度の障壁を展開している。

これを砕くのは骨が折れそうだと感じつつ女性は次々と札を放った。



少年の目の前、丁度障壁と少年の間にそれは現れていた…

青と金色で装飾された剣…

地面に突き刺さったそれは突然現れていたのだ…

「……………」

少年は立ち上がり、その剣を見る。

少年はその剣を知っている。埋め込まれた記憶の一つにある剣。丁度少年の周りを壊れかけの姿で漂う水天日光の時と同じように思い出したその剣。

名を勝利<sup>カ</sup>すべき黄金<sup>バ</sup>の剣<sup>ン</sup>

アーサー王伝説で記された選定の剣。それが少年の目の前に現れた。これが意味することを少年は本能的に理解する。

今、少年は試されているのだと：王たる資格なのかは不明だが、この剣の持ち主としての資格を…

少年は柄を持ち引き抜く。

剣はあっさりと地面から抜けた。

内包された力を感じる。エターナルソードよりはランクが下なのかもしれない。

だけど、ただこの時だけはどの剣よりも強い、最強の剣だと少年には感じられた。

使い方はわかっている。自分の魔力を剣へと浸透させる。

減った分だけ補充されていく魔力。何故か誇らしげに見える鏡に少年は内心で感謝しつつ前を見た。

障壁へと絶え間なく攻撃を繰り返している女性。

既に壊れかけの障壁でここまで持ったのは奇跡と言うべきかもしれない……少年は剣を持った左手を後ろに引く。

魔力をどんと貯めこむ剣はその輝きを増していく……

恐らくはこれが最期。魔力が回復したが怪我を治ったわけではない。

時間があれば治せるが、目の前の女性がそれを許してくれるはずもない。

故に最期……この一撃を放つには少年の身体は持たない……

これを放ったが最期、最悪は命を落とすかもしれない……

この世界で命を落とすことは現実世界における精神的な死だと少年は感じていた。

それでも少年は止まらない。これが自分を守ってくれる者たちへの最大の賛美であると信じているから……

「これが……僕の全力……」

剣を握り締めて横薙ぎに振るった。

「カリ、バーン!!!」



「……」

女性は目の前で伏せる少年を見ていた。

先程と違うのは少年の周りを心配そうにふよふよと漂う鏡。

そして……

「……あなたの一撃は、間違いなく私に届きましたよ」

腕から血を流した女性だった。

少年の決死の攻撃は女性へと確かに至り、本来少年な力ならばありえない威力で女性へと傷を付けることが出来た。

結果、少年はその命を削り死にかけ、女性は手傷を負った程度、と考えればどちらの勝利であるかは明白だったが、女性は少なからず少年を認めていた。

女性は少年へと近づく。

自分が認めた相手、少年をここで死なせるのは女性は良としない。すぐさま水天日光を呼び、少年の傷を治療しようと腰を降ろした。

少年が消えた：

女性は目の前で起こった事に一瞬思考が止まったが直ぐに慌てて魔力を開放した。

少年が向かった先を探る：あの傷では少年が死んでしまうのは時間の問題なのだ。

女性は数秒で少年の居場所、違う者の世界を見つける。



そして、自身の世界の境界のかべを蹴破り、その世界へと向かった。

『…君は生きたいか？』

「…うん。僕は生きたい。生きてやらなきゃいけないことがある。

『その結果、人間から更に離れても構わないのか？』

「…僕は、僕であるかぎり人間であるから、大丈夫だよ

『……そうか、ならばこの呪いを認めよう。これにより君は異端の目で見られるかもしれない』

「…それで、大事な人達を救えるなら

|||||

「とう!!」



「む、次元を蹴破って入ってくるとは、とんでもない客が来たものだ」

「うるさいです。そんなことより、あの子は？」

「ああ、治したよ。なんせ死にかけていたしな」

「…一体どうやって…」

「神の加護…いや、呪いかな。彼が受け入れたから認めたよ」

「…余計なことを…」

「そう言わないでくれ。いつかはこうなる運命だったと僕は感じているよ」

「それでもです。でもまあ、手遅れになる前に助けられて良かった…」

「ああ、確かあまり死に近づくと、直死の魔眼に目覚めてしまうんだったか。それではあ

「まりに酷だからね」

「ええ、私が言うのも何ですがそれだけは避けたかったので」

「次からは手加減してあげなよ？玉藻の前」

「そういう貴方も手合わせするならば手加減してあげてくださいよ？英雄ヘラクレス」

「ははは、違うない」

## 現実編第7話 「私も：そこへ」

優の呼吸音だけが響く病室。彼が生きている証拠となつてゐるそれを私は黙つて聞く。

優が魔力を大量に発してから1日が経つた。今は魔力を放出してゐないけれど、一時は本当に危険な状態だつたらしい。母さんが言うにはいきなり現れた鏡が優の魔力を補充し続けていたらしく、もしそれがなければ間違いなく母さんが枯渇するくらいに補充しても足りなかつたそうだ。

彼は今現在戦つてゐるのだとも母さんは言つてゐた。魔力の補充時に気付いたらしい。そして、昏睡してゐる間戦い続けていたかもしれないと聞いた。

優の手を握る。母さんより小さい手。でも不思議と心地よく安心感がある。

私を守つてくれた彼、姉さんを生き返らせてくれた彼、母さんを直してくれた彼。

そして、私達家族を救つてくれた彼。証拠はない、けれどなんとなく彼が母さんの裁判での情報を見つけてくれたのだと思えた。

そんな彼に私は何をしてあげたのか：

何もしていない。ただ彼に救われたただけだ。

それは嫌だ。彼に何も出来ない自分は嫌だ。

だから修行した。彼を守るようになるために。

だから勉強した。彼と沢山話せるように。

手をぎゅつと握る。彼の体温が伝わってきて少し身体が高揚する。

私の親友、なのは一緒だ。彼と肩を並べるために修行している。驚くほどの速度で強くなっていくのはに危機感を覚えなかつたわけではない。

どうして私はここまで弱いのだろうか。以前よりは強くなっているけれど、優やなのはには遠く及ばない。

だからこそ、私は強くなりたい。そしていつの日か彼と家族になれたら…

顔が熱い。どうしてそうなってるのかは自覚している。傍から見たら赤くなっているだろう。

私は彼が好きなのだ。どうしようもなく彼を好いている。

初めて会った男の子。私を助けてくれた男の子。私を認めてくれた男の子…

いつも太陽のように笑う彼は凄く眩しい。

だけど、今はその笑顔が見られない。彼はこんなに近くにいるのにここにはいない。

少し身体を寄せて密着する。彼の匂いがする布団。嫌悪感はなく、むしろいい匂いと

でも言えるほど…

いつも姉さんが潜り込む理由がわかる気がする。ここだと本当にぐっすり眠れちゃう。

隣にいる男の子。私の親友が好いている男の子。私の好きな男の子。

複雑な関係かもしれない。でも、なのはは言ってくれた…一夫多妻でいいじゃないって。

正直盲点だった…

「あ、フェイト布団に潜り込んでる!!」

「アリシアに続いてフェイトまで…：母さん育て方間違えたのかしら」

「??あまりお母さんってフェイトに構って無かったんじゃないか?」

「…：少し海に飛び込んでくるわ」

「冬の海は寒いよ? 母さん」

病室に入ってきたのは母さんと姉さん。いつか、優も一緒の家族になるから楽しみにしててよ? 母さん。



緊急指令が発せられ、シグナムの姿が確認された。場所は文化レベル0の次元世界、目的は魔獣からの魔力の蒐集だろう。

結界を張れる局員の到着は時間がかかるため、私が出ることになった。行く際になのはから背後を気をつけておくように言われた。

到着すると魔獣に捕まっているシグナムがいた。私はサンダーレイジで魔獣ごとシグナムの拘束部分を破壊する。

『フェイトちゃん、助けてどうするの！捕まえるのよ！』

「あ、ごめんなさい、つい」

エイミイさんからの通話に申し訳なく思う。あの状態から捕まえるなんてこれっ

ぼっちも考えていなかった。

「礼はいわんぞ、テスタロッサ」

レヴァンティンにカートリッジを込めつつシグナムは言う。お礼を言われるとは思っていない。寧ろこちらは魔獣の蒐集を邪魔したのだ。恨まれはしても感謝はされないだろう。

「邪魔をしただけですから」

「そうだな。蒐集対象を潰されてしまった」

「悪い人の邪魔をするのは私の仕事ですし」

「ああ、悪人だったな。私は」

シグナムはカートリッジを入れ終わりこちらを睨んでくる。

怖いとは感じない。勝てないとも思えない。彼女はまだ彼らの域には達していないから…

カートリッジをロードしハーケンフォームになったバルディッシュを構えて魔力弾ハーケンセイバー



を射出、更に射出をする。

計4個。私の周りをヒュンヒュンと音を立てて飛び回る魔力弾を制御しつつ視線をシグナムへ向けた。

「リベンジは出来れば今しばらく先にしたいが、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら戦うしか無いな」

「はい。私も戦うつもりで来ました」

魔力弾を1発シグナムへ放ち、それと同時に接近してバルディッシュを振り下ろす。

魔力弾は躲されてバルディッシュはレヴァンティンで防がれる。更に魔力弾で攻撃しつつ、バルディッシュを持つ手に力を入れる。

弾き返された。魔力を手に込めるのが一瞬遅れた…要練習

「お前のその魔力弾による牽制は厄介だな。時間を掛けられればやられそうだ…だからこれで決める」

シグナムがカートリッジをロードし魔力を高める。あの技は前にバルディッシュを

破壊された技…

でも、今の私はあの時の私じゃない！

カートリッジロード…

さらに飛ばしていたハーケンセイバーをバルディッシュに戻す。

強化、強化。

私はなのはみたいに収束魔法が得意ではない。だから攻撃は自分の力で行わなければいけないんだ。

だから、魔力制御を修行した。自分の全力を出せるように…

「行くぞ、テストロツサ！」

「うん！来て！シグナム！」

「紫電一閃!!」

「f i f t h ハーケンスラッシュ!!」

シグナムの炎の纏った攻撃を電気を纏ったバルディッシュで迎撃する。

この技は単純にバルディッシュの魔力容量を5倍にしてそこへ5倍の魔力を注ぎ込

むという荒業。

だけど、威力はその分跳ね上がりとんでもない一撃となる!!

「はあああああ!!!」

「なに!!!」

レヴァンティンを弾き飛ばす。そのまま、一回転してもう一度シグナムへ一撃を入れれば…

そう思つて一度振り向いた瞬間に何かが現れた…

ええっと、確かなのはが言つていた後ろに気をつけるつてのはこのことかな。取り敢えずその何かにバルディッシュで攻撃しつつそのままシグナムを攻撃した。

「がは!!!」

「ぐっ!!!」

現れた何かとシグナムは攻撃を受けて吹き飛ばされる。あれは確か、なのはや母さんが戦つた仮面の男…間違えてなくてよかつた。

## 夢想編第8話 「騎士」

鏢迫り合い。力で押しきったらかウンターが来ると予測し力を緩める。その瞬間に横薙ぎでの攻撃がとんできたので、くるりと宙返りをして距離を取る。

「……今ので十四合か。流石というべきだな」

「スペック的に同格なんだからある程度は抵抗できるよ。まあ、剣技ではまだまだ及ばないけれど」

「それでもだ。その年でそこまでの立ち回りが出来るならばいずれはこの境地をも超えるだろう」

勝利すべき黄金の剣を構えて接近する。対する相手、黒い鎧で身を包んだ騎士、ランスロットさんもアロンダイトを持って迎撃してくる。

これで十五合目、腕が痺れるくらいの衝撃に身をすり減らすような緊張感。これが、円卓の騎士の実力…

素直に凄いと思う。

これで三人目だけど全員が鍛えぬかれた剣技を披露してくれている…

ちらりと僕達を見る人へ視線を向ける。聖剣を地面に刺し柄に両手を乗せて椅子に座っている男性：いや、女性は見定めるように僕を見ている。

玉藻さんとの死闘は途中で気絶してしまったため結末は覚えていない。勝利すべき黄金の剣で攻撃したところまでは覚えている。後は優しそうな男の人の声が聞こえたくらいだ。

僕は気がつけば見覚えのある草原に寝そべっていた。この世界は騎士の世界。円卓の騎士とその主君、アーサー王の世界。

そこで僕は力量を見極められている。なんでも勝利すべき黄金の剣に選ばれたお陰で第一段階は終わり、後は僕に宝具を授けるに相応しい実力があるのかを確認しているのだ。

試練内容は剣の三十合の打ち合い。その間に相手を倒しても構わないとの事…

既にガウエインさんとモードレッドさんとは打ち合いが終わっている。二人共倒すとは行かなかったものの、なんとか三十合を捌くことが出来た。

まあ、最期はそれぞれの剣の真名開放が飛んできたので、心してかからなければなら

なかつただけだね。

今打ち合っているランスロットさんもとんでもない。隙を見て打ち込んでも、力尽くで打ち込んでも捌かれる。

彼は手に持っている無毀なる湖光の恩恵だと言っていたけど、僕はそうは思わない。円卓の騎士最強を謳うだけあって、その胆力は相当なものだ。

振り下ろしを横に打つことで捌く。これで十六合目、勝利すべき黄金の剣は折れるよ  
うな気配もなく騎士たちの攻撃を耐えてくれる。これが聖剣たる物なのだとは思  
うけど、それでもこの強度は素直に嬉しい。

剣を水平に構え、刺突を放つ。下からすくい上げられるように打たれた。これで十七合目。

そのまま、横薙ぎでの斬撃を無理矢理勝利すべき黄金の剣との位置を入れ替えること  
で防ぐ。

衝撃で回転しつつ頭部へと一閃。

しかし、正面から剣で止められてしまった。

「……これで十九合目」

「見事な腕前だ。既に結果は出ているようなものだが……三十合、最期まで耐えてみよ！」  
剣気と共にランスロットさんが突っ込んでくる刺突を柄で躲し、自分を軸に回転して突く。

ランスロットさんは跳び上がりこれを回避。そのまま体重を乗せた一撃を振り下ろしてくる。

これを守っていた。思いつき切り上げて剣を弾く。吹きとばせはしなかったものの、空中で完全に無防備な状態に出来た。

今、修業の成果を見せる時！

人体には様々な急所が存在する。どれもが致命傷、もしくは戦闘不能に陥るほどの物で、多くのものが人体の中心に沿って点在する。

この技は危険だからと皆に言われた技、下手をしたら相手を殺してしまう技。だけど、ランスロットさんに挑むならばこれくらいいしなないといけない。

「心沙雨」  
こころさわめ

散沙雨と秋沙雨を昇華させた技。心臓部などの急所への連続刺突。回数は10。一息の間に打ち込むそれを防ぐのは体勢が崩れていなくても困難で、空中で崩されたランスロットさんならば不可能に近い。

しかし、防がれた。

はは、本当に人間か疑いたくなるよ。あれだけの剣速についてきただけでなく、あの体勢から剣で防いだなんて。

本気の斬り合いならいずれ負けてたかもしれないや。

「…一つばかり多く打ち合ってしまったな。」

「うん。やつぱりすごいや。」

「私自身防げたのは奇跡に近かった。あの技、使い所を誤るなよ?」

「わかってるよ。ランスロットさんにはあれくらいじゃないと敵わないと感じたから使ったけど、普段ならまず使わないよ」

「それならばいい」

ランスロットさんはくるりと反転して騎士たちの方へ歩いて行った。後残っている



のはアーサー王唯一人。この人達の期待を裏切らないために全力で相手しないと

「…ランスロット卿ですら三十合で勝負がつかないとはな…貴殿の実力は十分に達していると言っても過言ではない。だからこそ、最期にこれを防いでみせよ」

アーサー王さんは立ち上がり聖剣を引き抜いた。あれがアーサー王伝説でも有名な剣、エクスカリバー…いや、約束された勝利の剣か。

僕の持つてる勝利すべき黄金の剣と同じ力を感じる。

どうやら、最期は三十合の打ち合いじゃなく、約束された勝利の剣の一撃を耐えればいいみたいだ。

僕は魔力をありつたけ勝利すべき黄金の剣に込める。アーサー王さんも同様に力を集中させているようで、僕の剣と同じように光を放っている。

「行くぞ。エクスー」

「行くよ。カリー」

全力の一撃を解き放った。



## 現実編第8話「暗躍するプレシアさんのの」

海鳴大学病院の廊下をプレシア・テスタロッサは歩いていった。彼女はここ最近の日課として、藤崎優と彼の病室に入り浸る娘のアリシア・テスタロッサの護衛を行っていた。と言つても、これまで彼女が動いたのは2回。1度目は闇の書の騎士、シグナムへの忠告。2度目は仮面の男の襲撃を撃退。

いずれも彼女は詳しいことは管理局へは報告せず、またその心情を管理局側の人間、リンデイ・ハラオウンは理解していた。

彼女は過去に管理局によって娘を失っている。その娘は護衛対象の少年により生き返つたのだが、それでも管理局との溝は未だ深いままだ。

管理局に手を貸しているという形になってはいるが、彼女にとって手を貸しているのはもう一人の娘、フェイト・テスタロッサに対してだった。

彼女にとって今行っている日課は管理局とはまた別件と捉えており、未来の息子になるかもしれない少年を守るのは仕方のない事だと考えて文句も言わずに護衛を行っていた。

ふと、廊下の先にいる一行に目を向ける。何やら深刻な顔で医師と会話している女性

2人に少女1人。そのうちの1人の女性には見覚えがある。女性、シグナムを見て彼女はその3人を闇の書の騎士であると断定した。

医師が部屋に戻ったのを見計らいプレシアは彼女たちに近寄る。

「ちよつと、その騎士さん達」

「……貴様は」

「なんだ、お前」

シグナムは鋭い目で睨み、少女ヴィータともう一人の女性シャマルは怪訝そうにプレシアを見た。

プレシアは彼女たちを見て内心で随分と不用心だと感じつつ言葉を続ける。

「少し話を聞きたくてね。誰か一人でも二人でもいいから来てくれない?」

「いきなりなんだよ。誰がそんな怪しい誘いに乗るかっての」

「まあ待てヴィータ。こいつは前に話したおかしな魔導師だ」

「…知らねえ」

「あの時ヴィータは寝むそうにしてたから聞いてなかったのかも…でもいきなり話して

くるなんて随分と不用心なのね」

そちらには言われたくないとプレシアは言葉に出そうになるがなんとか飲み込む。今現在会話できると思われるのはシグナムかシャマルのどちらかである。ヴィータは腕を組んで必死に何かを思い出そうとしているようで話を聞けるような状況ではないだろう。

「まあ、どうでもいいでしょ。で、来てくれる？ここじゃあ話せない内容だし屋上にでも行きましょう」

「…罨ではないのだろうか？」

「普通それを本人に聞くかしら…まあ、警戒するのは仕方ないわね。デバイスでも握りしめていつでもバリアジャケット着れるようにしといたらいいじゃない」

「…わかった。ヴィータ、主のことを頼む」

「お、おう」

その返答にプレシアは満足したように頷きキビを返して廊下を進んでいく。

あまりにも無防備に背中を晒すプレシアにシグナムは若干拍子抜けしつつ彼女に付

いていく。シヤマルもまた少し困惑しながらも二人に付いていった。



「で、聞きたいこととは何だ」

屋上に立ち、誰も居ないことを確認したシグナムはそう切り出す。その手にはいつでも起動できるように待機状態のデバイス、レヴァンティンを握りしめていた。

前回彼女はプレシアに出し抜かれてしまい、話し合いを有意に進めることは出来なかった。同じ轍は2度は踏まないと内心で言い聞かせつつプレシアの返答を待つ。

「そうね。大まかに2つあるわ。まず一つ目、貴方達の主の容態はどう？」

「……」

プレシアは途端に暗い顔になった彼女たちを見てある程度の状態を理解した。彼女

の予想通り闇の書の主の容態は良くはなく、騎士たちにも余裕がないのが一目でわかった。

「まあそれはいいわ。じゃあ少し良い事を教えてあげる」

「……なんだ」

「こちらの病人。あの子の容態が変化したわ」

「……」

「いきなり魔力を放出しだしてね。もう少しで枯渇する所だったけど今は落ち着いているわ」

「その何処が良い事なんですか？」

「もしかしたら、あの子が近い内に目を覚ますかもしれないってことよ」

既に少年、藤崎優が昏睡状態になってから一ヶ月程度が経過していた。その間は全くの変化も見られなかった少年に変化が出たのだ。

悪化したのかもしれないが、プレシアは何故か少年の魔力放出は少年の目覚めが近いのだと感じ取っていた。

しかし、それは確証はないことだ。もし目を覚ましても少年は闇の書の主を助けられ

ないかもしれない。全てが憶測であり根拠の無い事だった。

だが、プレシアは少年ならば何かをすると感じている。あの時、少年が自分の病を治したように…

「…それでは何か？我らに蒐集を辞めろと言うのか？」

「はあ、前も言ったでしょ。別に好きにすればいいって。だけどこれだけは覚えておきなさい。貴方達の家よりも良い案はあるってことを」

「何の確証もないのか!!」

シグナムは思わず叫んでしまった。主が助かるかの不安。目の前の女性が告げる言葉。全てが重くのしかかりシグナムを潰そうとするのを振り払うかのように…

そんなシグナムを見てシヤマルは胸に手を当てる。彼女もまた不安に感じていたのだ。シグナムから聞いたプレシアの告げる可能性。闇の書に触れる機会が一番多いシヤマルにだからこそ感じる悪寒。

シヤマルも薄々気付いているのだ。闇の書が主の命を奪うと。だが、今更蒐集を止められることも無かった。



「ま、そう言うのも仕方ないわね。さっきのは言っておきたかっただけよ。で、今からが本題」

「…なんだ」

「貴方達、仮面の男と何か関係はあるのかしら？」

重圧を感じた。発生源はプレシア。思考を始めてしまった騎士たちは不意をつかれ、プレシアに先手を許してしまった。

騎士たちは動けない。既に主導権はプレシアにある。シグナムは内心で自身の失態へ悪態を付き、プレシアの質問へ応える。

「知らぬ。我らも面識がない。ただいつも我らの前に現れるだけ…」

「…嘘はついてないようね。まあいいわ、もし面識があると言っていたなら管理局へ報告していたけど、無いのなら構わないわ」

「…一体、どうしてそんなことを？」

「…仮面の男がここを襲撃したのよ。私が撃退したけど。もし貴方達と繋がりがあ  
るのなら、先日約束して貰った事を破られたって事だったし」

「…そうだったのか。もう一度言う。我らのはあの者とは繋がりは無い」

「それならいいのよ。」

プレシアはそれだけ言うとう屋上の入り口へと歩いて行った。

彼女の行ったことは簡単。藤崎優の容態と仮面の男の襲撃があつたことを伝えることにより病院付近での戦闘への牽制。そして、闇の書の主の容態を把握することにより、来るであろう大きな戦いの時期を大まかに推測することだった。

実は既に彼女は仮面の男と闇の書の騎士達の繋がりが無いことは知っていた。いや、聞いてしたと言つたほうがいいか。



《数日前》

「なのはちゃん。貴方、あの仮面の男について知っているわね？ 私もある程度目星はつけてはいるけど…貴方、正体も知っているわね？」

「な、何のことかわからないです」

「もし話してくれるなら暫くの間病室に誰も近付けないわ」

「正体は管理局のリーゼロッテさんとリーゼアリアさんっていう猫耳生えたお姉さんたちです!!あと、クロノ君の師匠です!!」

「……あ、ありがとう」

「どういたしまして!!」

嬉々とするなのはにプレシアは引き気味で礼を言った。



「それでは面白くもない。なに、簡単な事だ

「自身の可能性を見てこい」

|||||

「こんにちは!!」

「こんにちはあ」

少女、高町なのはは現在友人の月村すずかに連れられ海鳴大学病院内のある病室、八神はやての病室へと足を運んでいた。

なのはにとってはやはやは夢で見た人物であり、はやてにとつてなのははすずかによつて聞かされていた少女だったため、最初にあつた時でも気兼ね無くお互いに話してい

た。

勿論他の少女、アリス・バニングスやフェイト・テストロッサも同様に話を盛り上げていたのだが、一番親睦を深めたのはなのはであると言っても過言ではないだろう。

「ゆっくりしてっつてな」

「ありがとう！はやてちゃん」

なのはは微笑みながら周囲を警戒する。夢では彼女の騎士たちが部屋の中にいたのだが、なのはの提案により夢での時間よりも早く病室につき、騎士たちよりも先にはやてと接触していた。

この後起こる戦闘はとても激しいものであり、知っていると言っても心の準備はして置かなければいけない。

戦闘が起こるのを知っているのはなのはだけであり準備を済ましているのは自分だけだろうと彼女は考えていた。

しかし、彼女は気づいていない。彼女の他に着々と戦いへの準備を済ましている人物はいた。

一人はプレシア・テストロッサ、彼女はなのはの動向やはやての容態からある程度の

期間を導き、それに向け準備を終えていたのだ。

後一人はとある男。その男は気だるそうに介入するタイミングを見計らっていた。

なののはにとって心残りはある。それは彼女の想い人、藤崎優の事だ。彼女は彼の事だから事件の前には目を覚ますであろうと高を括っていた。

しかし、実際はそんなことはなく、少年はまだ眼を覚ましていない。

「また藤崎君の事考えてるんやろ？」

「えへへ、バレちゃったか」

「なのはちゃんはわかりやすいねん」

はやての言葉に少しショックを受けつつなのはは笑って受け流す。

彼女のセンサーに魔力反応が進入する。数は3つ、どれも彼女の知っている魔力反応。

ヴィータ、シグナム、シャマルの3人が病室に入ってきた。

それに目を見開き驚いたのはフェイト、挨拶をしたのはすずかとアリサ、そして微笑んだのはなのはだった。

騎士たちはなのはの笑みを少し不気味に思いつつ、主を心配させまいと考え普段通りを装いさり気なくなのは達とはやての間に立ちふさがった。

それになのはは更に微笑ましげに見つめた後、何事もないようにはやてと話した。



面会時間も過ぎ、すずかとアリサと別れたのはとフェイトはとあるビルの上でシグナムとシャマルの2人と対峙していた。

沈黙が支配する中、最初に口を開いたのはフェイトだった。

「はやてが、闇の書の主」

重々しげに話すフェイトにシグナム達もデバイスを握りつつ口を開いた。



「悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするのなら、はやてちゃんのお友達でも」

なのは空を警戒しつつ、一步踏み出した。

彼女は知っている。この戦いの結末を。だからこそ防ごうと考えたのだが、彼女には具体的な解決案を思い浮かぶことは出来なかつた。

だけど、彼女はわかっている。恐らくはこの戦いの悲しみを打ち消してくれるであろう人物を。だからこそ彼女に出来る事は限られていた

《時間稼ぎ》

それが彼女の取った選択だった。

「待って、少し話を聞いてくれないかな？」

「…なんだ」

「このまま闇の書を完成させればはやてちゃんは闇の書に飲み込まれちゃうの」

なのは夢のシナリオを思い浮かべる。彼女にとって一番の不安要素は夢のシナリオとは別の道筋を辿ること。ある程度ならば大丈夫だが、あまりにも大きなズレが発生するとどうなるかは彼女にもわからない。

だから、彼女は出しゃばらない。出来るだけ、出来るだけ長く。

「貴様もそう言うのか。それで、その話の根拠は？」

「無限書庫で調べたか？」

「うおおおおお!!」

なのはの言葉を遮り少女が飛来した。

手に持った棍を振り下ろすことによつてなのはを攻撃したのだ。

それを見計らいシグナムもデバイスを起動させる。

もう既に彼女たちは戻れない場所まで来ているのだ。何を言われようと彼女たちの中ではやるべきことに変化は無かった。

「クソッ!!」

ヴィータの一撃はなのはに防がれていた。具体的には柄を掴まれることで攻撃を無力化されただけでなく、ヴィータ自身を捕まえていた。

「人が話してる時は大人しくしないとイケないよ。ヴィータちゃん」  
「うるせえ!! 離しやがれ!!」

力任せに引き抜こうとするヴィータをなのはは少し苦笑いしながらその手を離す。

彼女としてはそこまでここで戦う意味を持っていない。精々が今からくるリーゼ姉妹への攻撃までの時間稼ぎ程度にしか思っていないのだ。

それを本能的に悟っているヴィータは更に激昂する。自分たちは舐められているのだと、誇り高いベルカの騎士がこんな小娘に相手にもされていないのだと…

ヴィータはカートリッジをロードしグラーフアイゼンを構える。一撃で終わらせる意気込みで振り下ろす。

なのはは、それをただ見ていた…

「はっ！悪魔かよ」

「悪魔でいいよ。それよりも大事な事があるから」

アイゼンの一撃により発生した炎を切るようになのはは現れた。手には待機状態のレイジングハート、バリアジャケットを展開しているが、それでも尚何のアクションもなくヴィータの一撃を無傷で凌いだ。

手応えはあった。直撃はした。だけど無傷だった。

そのことにヴィータは冷や汗を流すがそれでも彼女は止まることは出来なかった。ただ、主であるはやてのために…

「てめえはここで殺す!!」

「貴方はここで止める」

戦いの幕は上げられた。



同時刻、海鳴大学病院の屋上では一つの戦いが行われていた。  
戦っているのはプレシア・テスタロッサ。その相手は新たに出てきた敵。  
突然病室に現れた彼をプレシアは攻撃した。

「喰らいなさい!!」

「うおつと!!あつぶなー」

悠々と雷撃を躲す男にプレシアは苛立ちが募る。風貌は白いローブに軽薄そうな顔立ち、背は成人男性の平均程度の男にプレシアは数ヶ月前、藤崎優と戦った際に現れた謎の男の仲間なのだと察していた。

あの時ほどの実力差は感じられないものの攻撃が一向に当たる気配がない。

「全くさ、つまんないんだよね、神様も。他の連中も」

「知らないわよ、そっちの事情なんて」

「まあ、聞きなよ」

縦横無尽に飛び回る男に舌打ちをしながらプレシアは雷撃を放つ。  
打ち続けられる雷撃を躲しながら男は語る。

「俺はさ、つまらないことはいけないと思うんだよね。後、面倒臭いこともダメだと思う」

「聞く気はないわ!!」

「だけど、神様はそんな俺に指令を出してきた。イレギュラーの少年を消せってな。でもただ消すんじゃあ面白くない。俺ってそこまで強くないし」

「だったらここで倒れなさい!!」

「おっと…で、俺は考えた。やるからには面白可笑しくしないとね。というわけで」

男の全方向からの雷撃。一つ一つの隙間を極限まで小さくしたもの。  
これを避けることはまず不可能、だからこそ男はその場に留まった。

「時間もそろそろだし…ここでお暇させていただきますわ」

雷は何かに阻まれるように消える。ある程度予測をしていたプレシアは躲かれたと  
きの為に貯めていた魔力を放出し雷撃を放った。

しかし、男に当たることはなく、既に姿を消した男のいた場所を通過しただけだった。

「…一体どこに」

『お母さん大変!!』

突然アリシアの焦ったような声色の念話がプレシアに届いた。

プレシアはそれを聞いた途端、走りだす。場所は病室、そのままアリシアへと返事を  
する。

「一体どうしたの!?!」

『優が、優が!!』

プレシアは数秒で病室にたどり着くと扉を開け放った。

病室には慌てたようにプレシアを見ているアリシアと蛻の殻になったベッドだけが

あった。



なのはとヴィータの勝負は呆気なく着いた。なのはのレイジングハートを振り下ろす攻撃を防いだヴィータはそこで一瞬安心してしまい、なのはの蹴りを腹部にもろに入られてしまった。

それによりヴィータは少しの間戦闘を行え無いほどのダメージを内臓に負ってしまった。

その後、なのはは現れた仮面の男へ不意打ちの攻撃を入れ、攻勢に移る。

彼女にとって闇の書起動までの時間稼ぎが最優先であり、その為に騎士たちの魔力を蒐集される事は許されなかった。

しかし、彼女の考えはある男によって崩されてしまう。

突然現れた闇の書の主、八神はやて。



その姿にその場にいた全員が困惑した。そう、仮面の男も同様に彼女がこの場に召喚された事に驚いたのだ。

彼らにとつての作戦は既に意味を成していないと言っても過言ではなかったが、それでもシナリオとしてはまだ八神はやてを召喚する段階ではなかった。

なのはにとつても同様で、召喚され困惑しているはやてをみて一瞬思考を止めてしまった。

そして、更に魔法陣は現れる。

そこから召喚されたのは2人。一人は笑いながら、そしてもう一人は…

「優君!!」

未だ眼を覚ましていない藤崎優だった。

「さて、ここからが本番だ」

男は呟きつつ、その手にいつの間にか持っていた闇の書を少年へと向ける。

なのはは魔力弾を展開しながら男へと突っ込む。

優と男が闇の書に取り込まれた。



に彼は座り込んでいた。

『飲み込まれたけど、取り敢えず脱出する方法考えない?』

それを聞いて彼は手に持っている物を持ったまま立ち上がった。

長い間夢を見ていたような感覚。いや、実際に彼は夢を見ていた。彼自身が転生者に身体を乗っ取られてしまった世界の夢を…

彼の中に住まう王により見せられた可能性。それを彼は見た。

酷く、苦しい世界の自分だった。信じる者は誰もいずにただ、生きているだけの世界。

それでも、その世界に住まう彼自身に彼は告げられた。

——幸せになれ、と

故に彼は立ち上がる。正気を戻し、手に持った物を地面へと叩きつけて宣言した。

「笹食ってる場合じゃない!!!」

パンダ姿の彼は次元の壁を打ち砕いた。

|||||

闇の書が起動した。いや、起動させられたといったほうが正しいか：

藤崎優と謎の男を取り込んだ事により闇の書は許容量以上の魔力を取得し、結果暴走した。

それにより闇の書の主である八神はやてにも多大な負荷がかかり、危険だと判断した闇の書本体が起動させたのだ。

そして現れたのは闇の書のもう一人の騎士、銀髪の女性だった筈なのだが、何故かその姿は取り込んだ少年に酷似していた。

体の色は黒で塗りつぶされたように色の変化は見られず、ひと目で見てもそれが藤崎優ではないと彼を知る人物たちは理解できた。

一方、高町なのはは困惑していた。あまりにも夢で見た展開とは違いすぎる現実。藤崎優というイレギュラーを考えても改変されすぎたシナリオ。

故に彼女は不安に思う。もしかしたら夢のように最高とはいえないながらも良かったと言える終わりを迎えることは出来ないのかもしれないと……

彼女の夢で見たものとは違う事は大まかに3つ。まず一つは彼女とフェイトの実力。コレに関してはプラスに働くものであり、特に困るものでもない。

次は闇の書本体の姿形。恐らくは少年の影響を受けてしまった闇の書のものであり、彼女にとっては非情にまづい展開となった。

次は他の戦力。闇の書の騎士達は全員取り込まれておらず、仮面の男達、リーゼ姉妹もプランとは違う展開に困惑していた。

「かつ」

闇の書の本体は言葉を漏らす。何かを喜んでいるかののように笑う闇の書にその場にいる全員が身構える。

「やっば、神様が作った身体だ。まるで性能が違う」

闇の書は自身の両手を見ながら嗤う。

まるで与えられた玩具に喜ぶかのように笑う闇の書に全員が不気味に思った。

「まあ、ここどこいつらを殺したら怒られるし、誰かいい的はないものか……」

それを聞いて高町なのはふと夢での出来事を思い出す。

そう、結界内にはここにいる人達以外にも2人いることに……

「いい的発見」

そしてその場所へ急ぐ。闇の書の言う的とはつまり、迷い込んだ一般人。月村すずかとアリサ・バニングスの事だった。

闇の書は手のひらを彼女たちに向けて膨大な魔力を溜めだす。

「させない!!!」

なのはの向かった先を見たフェイト・テストアロツサは直ぐ様闇の書へと斬りかかる。

攻撃を中断させなければ彼女の友人がどうなるかは目に見えているため、一段と力を

込めた一閃を放った。

「加勢するぞ!!」

シグナムもまた、突然現れ、主を取り込んだ闇の書をどうにかすべく斬りかかる。

それに誘発され、その場にいた全員。仮面の男達も闇の書を止めるために動き出した。

「なんだ、俺の邪魔をするつもりか？お前たち」

しかし。突然襲われた圧力に地面にたたきつけられてしまった。

フェイトは以前にも感じたその圧力。それによって彼女はこの闇の書がどんな人物であるかを理解した。

突然現れ、突然消えた男。

以前は優によって退けられた存在が優を乗っ取り現れた。

「ま、俺もそこまで鬼じゃない。ここは俺じゃなくこいつらの相手でもしておきな」



闇の書はそう言い指を鳴らす。その途端に地面から7人の影が現れた。

一人は剣を携えた女性形

一人は双剣を携えた男性型

一人は槍を携えた男性型

一人は巨剣を携えた巨人型

一人は刀を携えた男性型

一人は短剣を携えた女性形

一人はローブに身を包んだ女性形

人影は闇の書を守るかのように出現し、フェイト達へと威圧感を放っていた。

「ここまで再現出来るなんてな。闇の書も存外馬鹿には出来ないらしいな。まあいい、これで邪魔は入らない」

闇の書は周囲の魔力を集め、前方に形成しだす。

それは魔法。ある少女によって編み出された収束砲撃魔法。

その場にいる者達の中には直撃を受けた者達もいる魔法。

色はピンクとは違い、黒だが紛れも無く同質であるその砲撃を闇の書はアリサとすずかのいる方向へと向けていた。

「ま、散ってくれや」

砲撃は放たれた…



「させない!!!」

高町なのははありつたけの魔力を込めたデイバインバスターで迎え撃つ。スターライトブレイカーを溜める時間は無かった。それ故に収束砲撃魔法よりも砲撃魔法へ全力で魔力を注ぎうちはなった。

出来るだけ威力を落とすため…目の前の敵、闇の書は紛れも無く藤崎優を取り込んだ。故に魔力量で圧倒することはなのはにとつて不可能であった。

彼女に出来る事は威力を減らし、すずか達を助けることだけ

「ぐぐぐ…!!!」

デバイスがギシギシと震えるのがわかる。砲撃が押されているのがわかる。

それでも彼女は引くことは出来なかった…

「はあああああ!!!」

彼女は全身の魔力を放出し、砲撃を逸らした。

それを見た闇の書は面白い、と内心で言い、もう一度砲撃の準備へととりかかる。

力を確かめる。これを持って面白可笑しくこの世界を改編するために…

影が現れた…

数は3つ

先程現れた7つの影とは違う…  
黒ではない。はつきりと色を持った影

一つは、白と黒の体毛を持ったモフモフとした身体を持った影

一つは、赤い仮面に赤と紺のスーツ、背中に剣を携えた影

一つは、全身を黒の霧で覆われた鎧を纏った影

闇の書は困惑する。

こんなもの、自分で出してはいない、と。

こんなもの、自分は知らない、と

現れた3人は闇の書に立ちふさがるように顕現した。

## 第11話「総力戦」

めまぐるしく変化する戦場についていけない者は少ない。闇の書ですら、目の前に出現した3人の影を理解できていないのだ。

一番理解できている者は3人の影、理解できていない者は一般人のすずかとアリサであつた。

「なのは、なの?」

「そうだよ、アリサちゃん。色々聞きたいことがあるかも知れないけど、今は待つててね」

なのはは、困惑する友人たち2人を障壁魔法で囲う。彼女たちを逃がすのは管理局員リンディの役目。彼女たちを転移させるまでの時間を稼ぐならばこれだけで十分と判断したなのはは闇の書に立ちはだかる3人の影へと視線を向ける。

一人は見覚えがある。木刀こそ持っていないもののあの姿は間違いなくパンダ師匠の物でそれから彼女はあの影3人が優と何かしらの関係を持つっていると理解できた。

そう、この場で3人の影の他に戦況を把握しているのはなのはだった。

「何処の誰かは知らないが…今更何をしようとも無駄だ」

闇の書は手を振るう。

それにより動いたのは闇の書が召喚した7人の影。

刀を携えた影はシグナムへ

巨剣を携えた影はヴィータと仮面の男達へ

鎖のついた短剣を携えた影はフエイトへ

ローブを着込んだ影はなのはへ

双剣を携えた影は赤色の仮面を着けた影へ

槍を携えた影はパンダ師匠へ

剣を携えた影は黒い靄を纏った鎧を着た影へ

それに対して3人の影の行動は速かった。

赤色の仮面を着けた影は双剣の一撃を躲し、背中の剣、カトラスを引き抜いた後、影を切り裂いた。

双剣を携えた影は呆気なく消え去り、赤色の仮面を着けた影は腕を組み、闇の書を睨



みつけ叫んだ。

「正義の味方、アビスレッド参上!!」

瞬間、いつの間にか影を倒していた。パンダ師匠に頭を殴られた。

赤色の仮面の影、アビスレッドは痛えと唸りながら頭を抱えてパンダ師匠へと視線を向ける。

「……………」

「うっ、別にいいだろ。これ着たら言っておかなきゃいけないし…」

「……………」

「何か言えよ…って話せないんだったな。まあいいや」

アビスレッドは戦場を見渡し、状況を確認する。

一番押されているのは巨剣を持った巨人に襲われているヴィータと仮面の男達…

「さて、他の連中は大丈夫そうだし、あそこ助けに行くか」

「……………」

「調子狂うなあ」

◇

「イマイチわからなかったが、お前、ランスロットだな」

「……………」

鎧に身を包んだ影は剣を携えた影を消滅させた後、闇の書と対峙していた。

「にしても、やつぱりダメだな。影は弱すぎる。一応ヘラクレスの影はある程度の力を  
持っているようだが……………」

闇の書の視線の先には巨人の攻撃を紙一重で躲し、ナイフで斬り付けているパンダ師  
匠と、カトラスでいなしつつ切り裂いているアビスレッドがいる。

恐らくはあの巨人が倒れるのも時間の問題と言った所…他の影達と戦っている者達

も苦戦はしているものの、徐々に押し始めている有り様だ。

「まあ、あの2人は後で俺が倒すとして、まずはお前からだ。ランスロット」  
「……………」

何時までも口を開かない影に闇の書は苛立ちが募っていく。闇の書、いや謎の男は目の前の英霊が自身のプライドを傷つけている事を許せなかった。

たかが人間の分際で天使に歯向かうのか、と内心で言い捨てる闇の書は目の前の敵を徹底的に叩き潰すことを決め、魔力を練り始めた。

「さて、どこまで再現されているのかは知らないが、所詮はてめえも偽物だろ。それでもまあ、簡単にやられてはくれるなよ？」

闇の書は結界を展開させる。自分と敵だけを隔離する結界。何故彼が展開させたのかはわからないが、結界は間違いなく闇の書と鎧の影だけを取り込んだ。

これが、闇の書にとって大きなミスであったのを彼は知らない。

大きくわけて2つあるのだが、それでも彼はこの行為が自身の首を締めたのに気付か

なかった。

影の背後から鏡が現れた。

闇の書はその鏡を見て自分が勘違いしていたことに気付く。

「お前、ランスロットじゃねえのか」

「……………」

影は話さない。目の前に佇む闇の書を見つめながらその魔力を高めていく。

鏡の効果により高められた影の魔力に闇の書はたじろぐ。闇の書は影に時間を与えすぎたのだ。

後悔してももう遅い。影は自身の魔力を消費しある宝具を発言させた：

「……………結界が」

闇の書が展開した結界は上書きされていく…海鳴市の街並みが飲み込まれ、広い広い荒野へとその姿を変えていく。

この結界を闇の書は知っている。情報としてだが、その名称と内包した力を彼は知っている。

アイオニオン、ヘタイロイ

王の軍勢、征服王イスカンダルの持つ固有結界。それは彼の生前の仲間を召喚する結界。それを影は展開させた。

闇の書は影を召喚する。その数は数百を超えたもの。使えないとは言えどいらないよりはマシと考え召喚した。

そして、影の軍勢を従え目の前の敵へと視線を向ける。

そこに居た人間たちの数は26人。そのいずれも闇の書は知っていた。

15人の英雄に10人の英霊。そして1人の英霊ではないが同じ位置の者。王の軍勢はその26人を召喚していた。

「ランスロットじゃなく、お前は藤崎優だったってわけだ」

ランスロットの鎧に身を包んだ影はその兜を脱ぐ。それと同時に靄は消え、身長も成人男性程のものから小学生程の物になった。

フォーサムワンス、プロウリー  
己が栄光の為でなくにより姿形を変えていた少年は自身が召喚した者達、いや、召集に応じてくれた者たちへ感謝の念を送る。

一人だけ少年も知らない者がいるが、少年の助けを呼ぶ声に応じてくれたのはこの26人だった。

「面白い。全員ぶっ潰してやる」

闇の書は滾る。

闇の書の力で具現化した影と王の軍勢により召喚された者。その数は圧倒的なれど、力の差というならば絶望的に闇の書が不利だと、闇の書は感じていた。

これこそ戦いだと内心で呟き影の軍勢を進軍させた。

◇

結界の外、闇の書と藤崎優以外の者達は困惑していた。

それは後から現れたザフィーラの助力もあり巨人の影を倒したアビスレッド達も例外ではなく、何が起こったのかを理解できていなかったようだった。

彼らから見ると突然2人が消えたのだ。

そこまでは特に驚くことも無かったのだが、問題はその後。

八神はやてと闇の書の管制人格、そして小さな触手の塊が現れたのだ。

真相を聞いてみれば簡単な事である。闇の書が展開させた結界は彼と敵を隔離した。その結果、彼が不要と判断した3つの存在を排したのだ。

「まげー！！」

闇の書の管制人格：いや、はやてにより名付けられたリインフォースははやてを抱き、その場を離れる。

その直ぐ後触手の塊、闇の書の防衛プログラムナハトヴァールは暴走を起こし巨大化する。

「大丈夫ですか！主はやって!!」

「大丈夫か!!はやって!!」

「大丈夫だよ。それよりもナハトをどうにかせなあかんねん。皆力を貸してくれる?」

それに4人の騎士は一斉に頷き、主の周りを囲みナハトヴアールへ視線を向ける。

奇しくも夢の状況に戻った事なのは安堵の息をもらし、気を引き締める。

「最終決戦……か。燃えてきたな」

「……………」

2人の影もまた目の前の怪物との戦いに心を踊らせていた…



## 第12話前編 「夜の終わり」

「なのはちゃんとフェイトちゃんもゴメンな。うちの子達が色々迷惑かけてもって」

闇の書の管制人格、リインフォースとユニゾンしたはやては暴走するナハトヴァールを横目になのは達に話しかける。

今から行うのは最終決戦。これまで続いた闇の書の因果と向き合う戦いであり、勝つためには仲間内で争っている暇はない。

仮面の男達も同様に既にその正体を晒し、自分たちの目的を告げた後、クロノへとデバイス、デュランダルを託していた。

更には、プレシアも合流し、ここに管理局側における戦力が全て揃った。

ナハトに相対するのは計13、いや14人。

主を囲うように立つ4人の騎士、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ

その中央で佇むはやて、リインフォース

更にその横に立ちデバイスを構えているのはなのはとフェイト

フェイトの隣で拳を握るアルフにただ無言で闇の書が消えた空間を見つめるプレシ

ア

なのはの横でナハトヴァールの動きを注視しているのはユーノ

少し上空でデュランダルを構え、ナハトヴァールを睨むのはクロノ

そして、その集団から少し離れた場所にナイフを持って佇むパンダ師匠とどういいうわけか空中に浮きながら両足を開き、右手を前に出し、左手は背中のカトラスの柄を握った格好で止まっているアビスレッド

今、決戦は始まる…

◇

「光、収まった？」

「うん、まだ海に黒いのがあるけど」

管理局により、戦場から避難させられた一般人、アリサとすずかは海に蠢く怪物、ナハトヴァールを見ながら呟く。

彼女達は少ない情報を元に今起こっていることを理解しようとしていた。

「一体、なんなの。なのはとフェイトが戦っているのはわかった。けれど、相手に黒いアイツがいた…」

「どうして藤崎君が…」

しかし、いくら考えても彼女達には理解できずに、アリサはとうとう頭を掻きながらじたんだをふみ出した

「ああもう!!なんなのよ!!折角のクリスマス・イブによくわかんないことに巻き込まれて!!夢なら覚めなさいよお!!」

「あ、アリサちゃん…」

◇

彼らの作戦は簡単なものだった。

魔法でナハトヴァールを削った後、転送魔法で軌道上のアースラの目の前に移動さ

せ、アルカンシエルによる砲撃で消し飛ばす。

理論上は不可能な数値ではない。だがしかし、その作戦には問題がある。果たしてあの状態のナハトヴァールを削りきれれるかがわからないのだ。

防衛プログラムのバリアは物理と魔力の複合四層式。それを破ってから本体へ魔力を叩き込むのだが、防衛プログラムには高速治癒能力を持っている。

だからこそ、必要なのは治癒能力を超える火力。それを持っている者はなのは、その次にフェイトとプレシア。そしてはやてだった。

シヤマルにより怪我を治療された全員は、声を上げるナハトへと視線を向けた。

最初に動いたのはユーノとアルフそしてザファイラ。それぞれの魔法を完成させてナハトヴァールを取り囲む触手へと放つ。

「チエーンバインド!!」

「ストラグルバインド!!」

「縛れ!!鋼の軛!!」

3人の魔法は触手を切り裂き、なぎ払う。

次に動くのはヴィータとなのは。デバイスを構え魔力を集中させる。

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

ヴィータはデバイスを構え、高々に宣言した。

「鉄槌の騎士、ヴィータと! 鉄くろがねの伯爵、グラーフアイゼン!!」

カートリッジをロードし、通常のハンマーフォームから巨大なハンマーのギガンとフォームへと姿を変え振り上げた。

「轟天爆砕! ギガントシユラク!!」

ナハトヴァールへと振り下ろされた一撃はバリアの一層と激突しヒビを入れる。しかし、そのまま破壊までは至らずなかったが、ヴィータが間髪をいれずにもう一度振り

下ろすことによりバリアを破壊することに成功した。  
それを確認したなのはデバイスを構え宣言する。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン。行きます!!」

カートリッジをロードし、魔力を溜めレイジングハートをナハトヴァールへと構える。

「エクセリオンバスター!!!」

ナハトヴァールから砲撃を止めようとなのはへと触手が迫ってくるが、レイジングハートから放たれた魔力の伴流に弾き飛ばされる。

そして、砲撃は放たれた。

「ブレイク、シュート!!!」

ピンク色の砲撃はバリアにあたり、一瞬均衡したが、直ぐにヒビが入り砕け散った。

残りのバリアは二層。

次に動き出したのはシグナムとフェイト。丁度ナハトヴァールを挟むようになるのは達と対局の位置に移動していたシグナムは、デバイスを構え宣言する。

「剣の騎士、シグナムが魂。炎の魔剣、レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう一つの姿」

鞘を柄に突き刺し、カートリッジをロードする。

レヴァンティンに刺さった鞘の形は変わり、弓のような姿、ボーゲンフォームとなった。

「駆けよ隼!!」

魔力により生成された矢を引き、射ち放った。

放った一撃。シュツルムファルケンはバリアにあたり、ヒビを入れる。

「思ったよりも固いようだな、ならば砕けるまで穿つのみ!!レヴァンティン!!」

カートリッジをロードし矢を生成。そして、二発目のシユツルムファルケンをシグナムは放った。

既にヒビの入ったバリアは壊れ、残りのバリアは一層となった。

「フェイト・テストロツサ、バルディツシユ・ザンバー。行きます!!」

ザンバーフォームのバルディツシユのカートリッジをロードし、一回転しながら振るう。

それにより発生した魔力の伴流は再生した触手達を切り裂いた。

そして、空へとバルディツシユを構えたフェイトは高めた魔力を放出させた。

「打ち抜け!!雷刃!!」

巨大化したバルディツシユの魔力刃を振り下ろす一撃、ジエツトザンバーはバリアに接触し、破壊し、そのままナハトヴァールの腕を切り裂いた。



ナハトヴァールが苦痛の悲鳴を上げ、周囲へと砲撃を放とうと魔力を高める。

「私を忘れてもらっては困るわね!!サンダーレイジ!!」

しかし、その魔力を込めた場所をプレシアに撃ちぬかれ、攻撃を中断させられる。それでもナハトヴァールは魔力を溜め、攻撃を放とうとする。

「俺達もいるぞ!!吹き飛びな!!紅蓮襲撃!!」

「……………」

しかし、炎を纏ったアビスレッドが本体へとダメージを与え、パンダ師匠がナイフで再生する触手を片っ端から切り裂いていく。

そして、シャマルの指示により、はやてが魔力を高め、詠唱し魔法を形成する。

「彼方より来たれ、彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」

空中に展開された魔法陣より巨大な槍が顔をだす。

はやては手に持った杖を振るい槍を放った。

「石化の槍、ミストルティン!!」

6つの小さな槍に1つの大きな槍。計7本の槍はナハトヴァールを貫き、石化させていく。

しかし、石になった場所から崩れ、直ぐに再生されてしまった。

それでも、攻撃の手を休めない。クロノは自身の持つデバイスへと視線を向けたあと魔力を高め魔法を発動させる。

「悠久なる凍土 凍てつく棺のうちにて 永遠の眠りを与えよ 凍てつけ!」

ナハトヴァールの足元の海面ごとクロノの魔法、エターナルコフィンにより凍らされていく。

そして、ナハトヴァールの身体も氷で包み、その動きを止めた。

それを見計らい、なのは、フェイト、はやての3人は魔力を高めた。

「行くよ！フェイトちゃん、はやてちゃん！」

「うん！」

なのはは周囲の魔力を集める。

彼女の最大威力の魔法、収束砲撃魔法。

フェイトは自身の魔力を限界まで高める。

彼女の最大威力の魔法、近接砲撃魔法。

はやては自身の魔力により形成された魔法陣の上に立つ。

彼女の最大威力の魔法、直射型砲撃魔法。

「全力全開!!スターライト……」

「雷光一閃!!プラズマザンバー……」

「……ごめんな、おやすみな……響け終焉の笛、ラグナロク！」

極限まで高められた砲撃を3人は撃ち放った。

「「ブレイカアアア——！！！！」」

◇

3人の砲撃はナハトヴァールの本体を大きく削った。

しかし、それでもなお、核を露出させることは出来なかった。

「うそ……」

「もう、魔力が……」

「はあ……はあ……」

全てを掛けた一撃を耐えられてしまった。まだ諦めてはいないとはいえど、既にその一撃を超える攻撃を3人は行う事は出来ない程に消耗してしまった。

「そんな…」

「もう、打つ手はないのか…」

「クソ!!!」

「クッ!」

他の者達もまた、全力での戦闘により消耗していた。

「…全く、規格外の怪物にも程があるわ」

「……エイミイ、プランの変更を…」

絶望が場を包む中、彼女達の前に希望が立ちふさがる。

「…来た」

「………」

彼は現れた。

『クロノ君!! 巨大な魔力反応!!』

その場にいる全員が一点を見つめる。

そこは闇の書と鎧の影が消えた空間。

そこに、一人の少年が立っていた。

鏡を連れた彼はただナハトヴァールを見つめていた。

「全くさ、ホント主人公みたいな登場の仕方だねえ!! 優!!」

「魔力が、回復していく…」

今、全ての役者は揃った。

## 第12話後編「旅の終わり」

優が現れた事により戦況は変化する。

彼を知る者達は単純な戦力アップへの期待。それにより精神面でのリカバリーは済んだ。

更に優の周りを浮かぶ鏡、水天日光の効果が現れていた。

すなわち、この場にいる者達全員への魔力供給。効果を発言し続けている限り続く無限の魔力の供給。

それを知っていた2人の影は自身を構成する鎧を脱ぎ捨てる。

アビスレッド、パンダ師匠の両名は、それぞれコスチュームときぐるみを着ている人間だと思われていたが、実のところそれは間違いだ。

彼らはコスチュームときぐるみという器に入り込み動かしていただけであり、その中身は存在していなかった。

何故彼らがそんなことをしていたのか……単純なことだ。彼らが現世に召喚されたのは王の軍勢の副産物に過ぎず、その身体を魔力で持つて補い現界していなければいけなかった。

しかし、彼らが自身の肉体で現界し、尚且つ戦うには彼ら自身の魔力ではとてもではないが足りなかった。

だからこそ、彼らは元々ある実物のものを動かすということとで魔力消費を抑え、戦っていた。

しかし、今となつては水天日光を発動させた優がその場に存在し、その恩恵により魔力が枯渇することはなくなった。

パンダ師匠は、いち早くそのきぐるみを脱ぎ捨て、本来の姿を表す。

「全く、暑苦しいつたらない。視界も悪いし動きづらくてナイフも持ちにくい。折角戦えると思つたのにこれじゃあ寧ろストレスが溜まった程だぞ」

青の和服に赤いジャケット。ナイフを持った女性、両儀式は気怠そうに言い捨てた。

しかし、視線をナハトヴァールに向けると、今度は舌なめずりをして口角を釣り上げてギラついた眼をした笑みを浮かべる。

「だがまあ、これで思う存分やれるってわけだ」



対するアビスレッドは少し残念そうにコスチュームを脱ぐ。

現れたのは白いコートに赤い長髪の男性。背中にかけていたカトラスはいつの間にか変化し、ローレライの鍵となっている。

彼、ルーク・フォン・ファブレは血を滾らせている式にげんなりしたような顔をして呟いた。

「結構楽しかったんだけどな」

彼らの戦いの準備は終わった。



【少し前、闇の書の結界内にて】

「それじゃあまあ、行きますか！」

「先手は打たせて貰う。穿て！フルンデイング赤原獵犬」

「魔力消費が無いというわけですね…ならば、約束された勝利の剣の乱れ打ちも出来るはず!!」

「流石王！私も僭越ながら一緒に転輪する勝利の剣の乱れ打ちに挑戦したいと思います!!」

「だったら俺も父上に見習って我が麗しき父への叛逆の乱れ打ちを…」

「…私の無敵なる湖光だけビームが出ない……」

「おい、誰かこいつら止めろ」

「ふふふ、楽しいじゃない。それに私も久しぶりに色々と暴りたい気分だし」

「あんたが一番暴れたらダメでしょうが！全く、玉藻ちゃんをツツコミに回すなんて贅沢な連中ですよー。ぶん。ぶん」

「よし、行くよ！ルドガー!!」

「おう!!」

「じゃあさ、俺達も行くか！クレス!!」

「うん、行こうか!!スタン!!」

「な、なんだか大変な事になったね」

「へっ！こういう乱戦も好きだぜ」

「こんな所に私の武器が」

「おい、俺の方を見るなヘラクレス。絶対に投げるなよ？絶対だぞ？」

「それはフリと受け取ってもいいのかな？」

「やめろ」

「何かカオス過ぎるんだが」

「……………」

「で、お前さんはどうしてここに来たってわけ？俺達も初めて見るし優のやつも会ってないと思うが？」

「???あの少年が助けを求めただろう??」

「ああ……………で？」

「???」

※誰の台詞かは各自で考えてみてください。答えは次話のまえがきにでも

◇

これまで色々と遠回りしてきたけど、やっとここに戻ってくる事が出来た。

でもまあ、なんだか最終決戦っぽい雰囲気だけど、あの大きな怪物を倒せばいいのかな？

つてあそこで式さんが獲物を見る肉食動物の目で怪物を見てるし、間違いないかな……じゃあ、取り敢えずはなのはちゃん達と合流するとしよう。

転移魔法を使用しなのはちゃんの隣に移動する。

瞬間なのはちゃんが飛びかかってきたので急いでフェイトちゃんの隣へ転移。フェイトちゃんも僕のズボンを握ってきた。

一体この2人に何かあったのかな。

まあそれはおいておくとして。今の状況をユーノ君から聞き終えた僕は怪物、闇の書の防衛プログラムへと視線を向ける。そこには、次々と触手や腕を斬られている怪物の姿が……

式さん、結構鬱憤溜まっていたのかな……

まあ、作戦は聞いた。ようは巨大な砲撃魔法、いや魔力攻撃で打ち抜いて核を露出させればいいみたいだ。

「じゃあ、手伝ってくれる？なのはちゃんとフェイトちゃん」

「勿論」

じゃあ、始めようか。

僕は他の皆に離れるように言って手を出す。取り出すのは剣、早速で悪いけど使わせてもらうよ、アルトリアさん。

「ちよつと待って、うちも手伝う」

「俺にもやらせてくれ」

約束された勝利の剣を今正に取り出そうとした瞬間、後ろから声を掛けられる。

視線を向けるとそこには闇の書の主である八神はやてさんとルークさんの姿が……

「あれ？ルークさんさつきまで怪物の所にいなかった？」

「あんな刃物振り回している怖いやつがいるんだ。一度引いたんだよ」  
「そ、そうだったんだ。で、手伝わって事だけど、別にいいよ。多くても困ることはないしね」

僕の言葉に少し嬉しそうに笑みを浮かべたはやてさんとルークさん。僕達5人は未だ再生、切断を繰り返されている怪物を中心に円状になるように待機し、それぞれ魔力を高めて最大の一撃を叩き込む準備をする。

『式さん、そちらの戦況はどんな感じ?』

『ああ、てんでダメだな。弱いくせに死の線を切っても他の場所から再生しやがる。俺じゃあ仕留め切る事は出来ねえみたいだ。だから取り敢えずお前たちの攻撃は邪魔はしねえよ』

式さんは念話でそう言うとして一度怪物の足元を切り落とし距離をとった。じゃあ、今度こそやろうか…

手に持つのは聖剣。持っているだけでも圧倒されそうな力の脈動を感じる…それを僕は魔力を込めながら振り上げる

「今度は私の全力全開だけじゃない。愛を込めた一撃になるよ……スターライト……」

「きよ、共同作業……いいかもしれない……だ、だから本気でいきます。プラスマザンバー……」

「色々あったけど、それもここで終わり。今度こそおやすみ……ラグナロク！」

「俺の一撃も耐えてみな。ロスト・フォン……」

「行くよ！エクス——」

「「ブレイカアアアア——！！！！」

「ドライブ！！！」

「——カリバー！！！」

聖剣を振り下ろした。

聖剣から放たれた光は怪物を飲み込み、周囲の海水をも蒸発させている。

他の皆が放った一撃も相当な物で、なのはちゃんに至っては衝撃波でクロノ君が吹き

飛ばされる始末……

なんかやり過ぎかもしれないけど、気にしない。

後は、闇の書の騎士であるシャマルさんが核を捕まえて、転送すれば終わりだけど……うんまあ、あれだね。式さんが突っ込んでいった。

『何やってるの!?!』

『どんなに再生能力持つてようが、核が死ねばどうしようもねえんだ。なら話は簡単だろ?!』

成る程、確かにそうかもしれない。いやいやいやいや。

それはおかしい気がするよ、式さん。

「本体コード、露出……。つて、核が!?!」

『継接ぎだらけだな、こいつも!!』



煙が晴れ、闇の書の防衛プログラムが居た場所には、気怠そうに浮いている式さんの姿があつた。

## 第13話 「まさか、こんなに眠っているとは」

「ええ!? 1ヶ月も!？」

「うん。もうクリスマスだよ」

闇の書の防衛プログラムを倒した僕は一度次元航空艦アースラに来て、これまでであったことなどを聞いた。

まさか、眠っている間にそんなに時間が経ってるなんて…

両親には心配かけちゃったかな。後で謝ろう。

「それにしても、随分と都合のいいタイミングで起きたね。ホントは起きてたんじゃなの?」

「うーん。僕自身わからないからなあ。いきなり竹林に居たと思ったら、笹食べてるし」  
「はあ?」

あれは驚いたね。別の可能性の僕を見た直後にあの竹林にいたんだから。

そして、身体は勝手に笹を食べているって言う…しかもパンダの身体で。

「何か取り込まれたってのは教えてもらったから抜けだしたんだ。その時、ある人に面白いからってあんな鎧来て出てきたんだけど」

「教えてもらった？ある人？一体誰のこと？」

「それは秘密だよ」

まあ、無闇に話すわけにも行かないしね。

それよりも、なんだかあそこの一体暗いなあ。どうしたんだろ、確か闇の書の主の八神はやてさんが倒れたって話だけど…

「どうしてあそこの闇の書の騎士さんたちはお通夜みたいな空気出してるの？」

「ああ、それなんだけど」

ユーノ君は話してくれる。何でも闇の書、いや、夜天の書は随分と昔に作られたもので、現在に至るまでに誰かの悪意ある改変によってバグが発生したらしい。それで防衛プログラムが暴走したりしているんだって。

そして、その暴走プログラムは式さんが殺したんだけど、このままだとまた新しく生まれちゃうらしいんだ。で、そうならないためにも闇の書を破壊するしか無いらしいんだけど、そうしたら騎士さん達も消えるんだって。

そっか…

「ねえ、なのはちゃん」

「どうしたの？ 優君」

「あのはやてさんって前になのはちゃんが言ってたはやてちゃんって娘でいいの？」

前に興奮したなのはちゃんから零れた名前、二人はずっと昔からの友達なのかもしれない。

本当に大事な友達なのかもしれない。

「……うん。そうだよ」

「じゃあ、二人は友達なの？」

「うん!!」

やっぱりそっか。だったら、助けない理由にはならない。

僕の友達の大事な友達なんだ。その娘が悲しむのは良くないしね。

でも、僕はこの状況をどうにかする方法は思いつかない。

水天日光は生物に作用する宝具だから、夜天の書には作用しない。他の宝具や技とかも大体が攻撃なんかの戦闘用の物。

いい物が見つからない。一番いいのは夜天の書を本来の姿に戻すことだけど…

『ならば、私の力を貸そう』

ん？何か秘策があるの？エミヤさん。

『ああ、その魔導書が魔術的なものだとすれば或いはだがね…』

何でもいいよ。僕にも出来る事なの？

『勿論。君の投影魔術ならば可能だろう。では、伝えるぞ』

エミヤさんがそう言い終えると、頭にイメージが流れこんでくる。それは一つのナイフ。宝具としてのランクは高くはないけど、効果は凄いもの。

名前を破戒<sup>ルブルブ</sup>すべき全ての符<sup>レイカー</sup>。その効果は刺したものの魔術を初期化するもの。これならもし、魔導書が魔術的なものだとなれば初期化出来る…

やってみる価値はあるね。

「優君ならどうにか出来る?」

「やれるだけやってみるよ」

魔力を集中させる

創造理念——これの本来の持ち主は裏切りの魔女、メディア。彼女の生涯を象徴して生まれた宝具。

基本骨子——形状は折れ曲がったナイフ。短剣としての性能はそこまで高いものではない。

構成材質——金属。いや、錬鉄…しかし、そこには魔術の要素を組み込まれている。製作技術——短剣としての形状を作成…魔術要素は送られた物をそのまま組み込む。

投影を完了させる。僕の手には間違ひなく破戒<sup>ル</sup>すべき<sup>ル</sup>全ての符<sup>レ</sup>が存在<sup>イ</sup>していた……  
後は、成功することを祈るだけ……

「おい、何をするつもりだ！」

「……………」

夜天の書の騎士の静止の声を無視し、机に置かれた闇の書へナイフを振り下ろす。  
闇の書は光を一瞬放ったかと思えば、直ぐに収まった……これは、成功したのかな

「信じられん……闇の書、いや夜天の書から闇が消えた……」

「それは本当か!？」

「って事は……」

「ああ、もうこの闇の書は本来の夜天の書に戻った……」

少し汗かちやったかな。気合入れて投影したし、無理もないか。  
でも、案外簡単に事が済んじやったね。

『存外そうでもない。本来ならば破戒<sup>ル</sup>すべ<sup>ル</sup>き全ての符<sup>イ</sup>を投影するのは難しい。解決できたのは偏に君のお陰、というわけだ』

そうなんだ。でも僕一人じゃあきつと何も出来なかったよ、ありがとう。エミヤさん。

「一体、何をしたんだ。ただその変わったナイフで闇の書を突き刺しただけに見えたが……」

「秘密だよ。でも良かったよ。成功するかは僕もわからなかったし」

「……そうか。感謝する」

そう言い頭を下げてきた騎士さんに少し照れくさくなって頭を掻いていると突然後ろからなのはちゃんが抱きついてきた。

僕は少しよろけそうになったけど、そのままの姿勢でなのはちゃんへと顔を向ける。

「ありがとう!!優君!!」

「大事な友達が助けたがっていたからね。僕も出来る限りのことをするのは当たり前だ



「よ」

「……友達、か。ねえ優君」

なのはちゃんは少し沈んだ声で話す。どうしたのかな。何か悲しいことでもあったのかな…

「どうしたの？なのはちゃん」

「また今度でいいから、私の話聞いてくれる？」

「う、うん」

話ってなんだろう…なんか随分と思いつめた顔しているけれど…

『……君は私以上に唐変木というわけか』

え？唐変木？

## 後日談「返事」

夕暮れが差す公園：既に他の子達は家へと帰っている時間帯：僕はブランコに座っていた：

覚悟はしていたつもりだった。それでも尚僕に襲いかかる喪失感に涙がこみ上げそうになる。

『元氣だせよ。こうなるってことも考えて無かったわけじゃないんだろ?』

うん。それでも悲しいことは悲しいかな：

たつた一人：されど一人：僕は友人を失った。

理由は単純なもの：僕は自分の秘密を話した。

結果的に拒否され、僕は記憶の改竄を行うこととなった：玉藻さんがしてくれただ、それでも人の記憶を弄んだ罪悪感は凄まじい：

彼には既に僕と喧嘩して仲が悪くなったと植え付けてしまった。皆は仕方ないと言ってくれるけど、それでも僕にはこらえきれない：

空を見上げる。紅く染まった雲に少し紫がかった空……この世界に僕だけしかない  
錯覚してしまう程の孤独……

その日、僕は泣いた。

◇

「皆に集まってももらったのには理由があるの」

ある日、僕たちはなのはちやんの家呼び出され、唐突にそう言われた。

集まったメンバーは僕を入れて13人。内訳は、フェイトちゃんにアリシアちゃんと  
はやてさんとその騎士達5人。アリサちゃんとすずかちゃん。そして僕とユーノ君と  
クロノ君だ。

正直、女の子ばっかで居心地が悪いと感じる……でもどうしても来てほしいとなのは  
ちゃんに言われ、僕はやってきた。まあ、男一人だったらこなかったかもしれないけ  
れど……

「私はこれから秘密を話します」

なのはちゃんが僕達の前に立つてそう話す。アリサちゃんとすずかちゃんに魔法について話すならわかる。2人はこの前の事件に巻き込まれていたらしいから…だけど僕達に話す秘密ってあるのかな？

「まず最初に、私は魔導師だということはアリサちゃんとすずかちゃん以外の人は知ってるよね？」

「うん」

「やっぱりあれは夢じゃなかったのね」

何かそれ以外に言うことってあるのかな…

もつと重大な…何かを…

「私が魔導師になったのはユーノ君にあつたからなんだけど…」

「そうだね。あの時に僕がなのはを巻き込んだんだ」

「うん。だけどねユーノ君。一つ謝っておかなきゃいけないの」

「なんだい？なのは」

「実はそれ以前に魔法の存在を私は知ってたんだよ」

「ええ!？」

確か、僕がなのはちゃんに魔力を放出してるのに気付いたのは5歳の時だったかな…  
その時に皆が宿ったんだけど…

「実は小さい時に夢で自分の未来を見たの。その時は唯の夢だと思ったけど夢で起こったことが現実でも起きるようになったの。そして、未来の私は魔法を使っているって何となく使ってみたら使えたんだ」

「なんとなくって…」

「で、私はその夢が本当にこれから起きることだと知って行動してきた…」

そうだったんだ…なのはちゃんも色々あったんだね。

でも夢で自分の未来を見る、かあ。一度見てみたいなあ。

「ちよつと待つて。だったらうちらの事も知ってたん？」

「うん。夢で見たよ。だからヴィータちゃんとかの襲撃を予測出来たんだ」  
「…そんな理由があつたのかよ…」

随分と細かい所まで覚えているんだね。何処かにメモでもしてるか、僕みたいに忘れないって体質かつてどこかな…

それにしてもなのはちゃんは凄く勇氣があるな…

「でも、実を言うと今の状況と夢の時の状況は色々違うんだ…」

「違う?…」

「うん。例えば、夢の中ではアリシアちゃんやプレシアさんは次元の狭間に落ちてしまったたり、ラインフォースさんは助かっていなかったり…」

「………」

そうなんだ…でもそれってもしかして僕が関わっていることなんじゃ…

「私も夢で見たからそんな事は起きないようにって行動したんだけど…上手く行かなかったの…」

「でも、現に私やお母さんは生きているよ？」

「……………夢では、優君がいなかったから…」

「!？」

……………そう、か…

そうなんだ……………

「私は最初優君を見た時は、私と一緒にで未来の夢をみていた子だっと思ってた…魔法のことをしている事にも気付いて、将来的に管理局か何処かで働いていた人なのかと思ってた」

「……………」

「でも流石にそこまでの實力を持って管理局にいた私の耳に入らないわけがない……………だから、それは違うと最近思った…」

「じゃ、じゃあ優は…」

「……………」

「私は知りたい。優君が何者かを…」

隠すなんて今更出来ない…か。

『何でしたらまた私が記憶を変えますよ？』

いや、いいよ。話さないといけない気がするし…

「…… はあー」

息を吐く。それによって場の空気が緊張したのがわかった。

全員が僕を見ている。すずかちゃんやアリサちゃんはあまりついていけないようだけど、それでもある程度は理解して話を聞いているみたいだ…

「僕は、普通の人間じゃない」

「……」

「僕が5歳の時、いきなり頭の中にあるイメージが流れた」

「…イメージ？」

「そう。英雄たちの話。こことは違う世界を救った人達の人生が……」



突拍子もない事だとはわかっている。だけど、僕にはそれ以外に表現できる言葉が浮かばない。

全部本当にあつたことだから…

「その後に急に悪意を感じた。咄嗟に僕は拒絶したんだけど、それによつて悪意は居なくなつたんだ」

「…悪意…か」

「でも、僕にはそれによつて変わったこともあつたんだ…」

僕にとっては結果的には良かったこと、だけどそれは普通に考えれば異常な事…

「僕に沢山の英雄たちの意識が宿つたんだ」

「英雄の意識」

「うん。そして、身体にも変化があつた。具体的には肉体的に凄く強くなったのと、凄く大きな魔力を手に入れたこと。あと、物を忘れられなくなつたこと」

物を忘れられないというのは英雄王さんが宿ったらしいけれど、前者2つは皆とは関係がない。

でも、一つだけわかってることはある。

「さっき言った悪意。英雄さん達から聞いた話だけど、神様にこの世界に転生させられた存在らしいけど、僕の予想では、その悪意のために僕は異常とも言えるほどの身体になっただんだと思う」

神の使いは僕のことを器と言っていたところから考えて間違っではない筈。

「それから、僕は英雄さん達に強くなったほうがいいと言われて修行を続けてきたんだ」

「……なあ、一ついい？」

「いいよ。はやてさん」

「結局の所、その悪意つてもんがやって来なかった世界がなのはちゃんの夢で、やってきたのがこの世界ってわけなん？」

うん。そうなんだ。確かにその解釈で正しい。  
だけど

「そこにもう一つ加えるよ。僕が悪意を拒絶出来たって事もあるね」

「どういうこと？」

「僕は、中にいる英雄さんの一人に他の僕の可能性を見せられた。そこは悪意を拒絶できなかつた僕がいる世界だったよ」

「どんな世界やったん？」

「少ししか見ていないけれど、悪意に身体を奪われた僕は、魔法に巻き込まれた時に身体を奪い返していた。それから悪意の持つていた知識を元に行動していた」

悪意が持つていた知識を僕が見たわけではない。その世界の藤崎優がそう思っていた事を感じたんだ。

そして、僕にはあの世界の僕がそんな行動をした理由がわかる。悪意により全てを失った僕は他の人が僕みたいな思いを抱くのが我慢できなかったのだろう。

「行動か、どんな事をしたの？」

「テストロッサ家の幸せを願った。ジュエルシードの魔力を使って願いを叶えていた」  
「私達の？」

「ジュエルシード？」

「簡単にいえば人の願いを歪めて叶える願望機。だけど、あの世界の僕は正しい願望機を使うことでその願いを叶えたんだ」

代償は苦しい戦いだっただけけど、それでも願望機は正しくあの世界の僕の願いを叶えていたかな。

「で、フエイトちゃん達は幸せになれたかはわからないけれど、間違いなく願いは成就されたと思うね」

「そうなんだ」

まあ、僕はその後に捕まっただけだね。

それからどうなったかは僕にはわからない。だけど、確かにあの世界の僕は僕に幸せになつてと伝えてきたんだ。

「まあ、そこで重要なのは悪意が持っていた知識って事だけど、僕の考えではなのはちやんが夢で見た知識と一緒になんだと思う」

「……」

「さて、これくらいかな。僕の秘密は」

伸びをして皆の顔を見る。

複雑そうな顔してるね。無理もないか。いきなりこんな訳もわからない話を聞かされて…

話を切り出したなのはちやんですら頭を傾げているし…

「優、一つ聞いてもいいかな？」

「どうしたの？ ユーノ君」

「どうして優はそれを誰にも話さなかったんだい？」

どうして…か。

既にそれにたいしての答えはわかりきっているかな。

「怖かったから」

「え？」

この前、拒絶されたばっかだからかな：酷く怯えている自分がわかる。話すことによつて僕の周りから人がいなくなることを恐れている。

「僕は自分のことを人外だつて思っていた。人として生まれて怪物になつてしまったのだと：でも、ある英雄さんに僕は人間だと教えてもらえた。だから今では自分を人間だと断言できるんだけど、それでも怖いんだ」

「……………怪物：：か」

「すずか……………」

「僕のことを怖がる人はいる。僕から離れていく人もいる。そんな僕は他の人が離れることを怖がつたんだよ」

ずっと周りに隠して生きていく事はできたんだと思う。

少し変な人間として生きていくことはできたんだと思う。

「じゃあ、どうして教えてくれたの？」

「聞き出したなのはちゃんが聞く？」

なのはちゃんは少し申し訳無きそうに頭を掻いていた。

まあ、怖かったと言つても。いつか僕は話していたと思う。

皆を騙して生きていくことは多分耐え切れないから……

「結局の所、僕はみんなを騙して生きていたんだ。騙して、笑つて、僕は生きていたんだ

」よ

「……………」

「だから、これで僕は帰るね。今までありがとう」

席を立ち上がつて鞆を持つ。これで僕はまた友達を失つた……

喪失感に支配される心。涙がこみ上げそうになる目。

本当にどうしようもなく弱いな。僕は……

いつかはそんな僕の隣を歩いてくれる人が現れるのかな……

『ああ。絶対現れるさ。案外近くにいるのかもしれないぜ?』

それってどういう…

「待って!」

部屋を出た所で呼び止められる。声の主はなのはちゃんにフエイトちゃん。

どうして呼び止めるのだろうか。もう彼女達は僕とは関わりが無いはずなのに。

「何処に行こうとしてるの?」

「……家だよ?」

「もしかして、もう会わないつもりなの?」

「うん。騙してた奴とはいたくないでしょ」

「確かに黙ってた事は悲しかった。だけど会えなくなるのはもつと悲しいよ」

なんで?普通なら怒るはずなのに…何で悲しむの?



「それに、私が聞いたから優君は答えたんだよ。優君がどうして黙ってたかはわかるし、それを言わされた優君は悪くないよ。」

「それでも」

「言っておくけど、優君がなんて言おうと私は離れる気はないよ」

「私も。だって、優には色々お世話にもなったし…」

どうしてこの2人はそこまで僕に笑いかけてくれるのかな。

どうして

どうして…

『お前さんを見てくれてるからだよ』

「僕は…」

「あのね、優君。どうして私達が離れていくと思ったの？」

「実際に離れていったから…」

「そうなんだ…でも私達が離れていくのはあり得ないよ。だって私は優のことが好きだから」

「私も、優君のこと好きだよ」

「僕もなのはちやん達はいい子だとは思ってる。だからこそ…」

「優君は勘違いしてるよ。私達はね。優君と結婚したいって思ってるんだよ?」

「へ?」

結婚? 確かになのはちやんがそんな事言ってたようなきもするけど…

好きってもしかして…

『やっと気づきやがったか』

もしかして、皆知ってた?

『傍から見たらわかりやすかったしね』

それなら言ってくれたらよかったのに… ってちよつと待って

なのはちやんは私達って言ったよね? じゃあ…

「もしかして、フエイトちゃんも？」

「…う、うん」

……これってどういうこと？

何で2人が僕に求婚してるの？結婚って日本じゃあ1人としか出来ないのに…

『悩むのはいいがよ、返事してやりな』

あ、うん。それもそうだね…

「へんじしたほうが、いいよね？」

「え!？」

「う!？」

「え？何その反応」

予想外だったのかな。そっか。今思えば結構告白まがいなこと言っていたような気がする…

「た、確かに返事は嬉しいけど」

「まだ心の準備が…」

「……ごめんね2人共これまで気付かなくて」

「返事するの!?!」

「だって…」

これは伝えておかないといけないし。変に曖昧にするのは2人に失礼なんだよね。

「僕は実を言うとなのはちゃんやフェイトちゃんの事をそんな対象に見たことは無かったんだ。でもだからと言ってどんな気持ちで結婚したいってことなのかもわかっていない」

「……………」

「だから、まだ僕は結婚できる決心はついていないけれど、仲良くしてくれたら…嬉しいかな…」

『それって曖昧にしてるのと変わんねえぞ』

でも、僕の本心を言葉にしたらこうなんだよ。  
僕自身全く考えていなかったことだし…

『優さん？後ですこーし、お話しましょうね？』

なんだろう。少し玉藻さんが怖いんだけど…



「あ、あの主？」

「黙つとき！今ええとこなんやから!!」

「なあなあ、一体どうしたんだよ」

「じつとしておきなさいヴィータ。なのはの一世一代の舞台なんだから」

「それを言ったらフェイトもだよ！」

「覗き見してもいいのかな…」

「バレたら怒られるだろうけど、取り敢えずはほとぼりが冷めてから僕達も優と話せば

いいだろう」

「そうだね。全く、隠し事くらいで大きく捉え過ぎだよ。確かに衝撃的だったけど、それでも僕達が優を嫌いにはならないよ」

「なのはちゃんいいなあ。あんなに大胆になれて」

「すぐかも行つてきていいのよ？」

「なのはちゃんに悪いよお」

「フェイトがいる時点ではにはどうでも良い事なのかもしれないけど……」

「人間とは面白いのだな」

「……………」

「ええい！みんな煩いで!!」

「はやてが一番興奮してるんじゃないか？」

「だって、生の告白シーンやで？うちまでドキドキしてきたわ！」

高町なのによる大粛清があつたのはまた別の話

# 番外編：もしも優が聖杯戦争に召喚されたなら

——それはとんでも無いほどのイレギュラーだった

——本来そこに現れるべきなのは金髪碧眼の少女

——しかし、全てを悟ってしまったからこそ彼女は拒否した

——故に彼は現れた

「ん？ここは一体…それに君は…」

「…い、どもっ…」

|||||

◇

ふむ、はてさて何やらおかしなことになってしまったようだ。私はいや、この外見ではこの口調は似合わないな。僕は突然召喚された。その際にいきなり頭のなかに叩き

こまれたような単語がいくつかあるけど。まあそれは置いておくとして  
確か僕は家で寝ていたはずなんだけど、誰か知ってるかな？

『わからねえな。あとその口調も随分と久しぶりに感じるぞ』

そうだねユーリさん。だって普段から威厳を出すためにやれっちはやてちゃんが言うんだから仕方ない。

まあ、それは置いておいて今日の前には怪我してる青年がいる。取り敢えず治癒功で傷を回復させてから今いる場所、蔵のような場所から出るために扉へ向かう。

その際に青年は啞然とした表情でこちらを見ていたけど、はっとしたように立ち上がった。

「外には危ない奴が！」

「知ってるよ。いや、感じてるって言ったほうがいいかな。」

扉に手を置いて押す。

なんとなくだけど理解はした。僕はこの人を守らなければいけないって



「安心していいよ。今君の目の前にいるのはとある世界では最強と謳われた人間だ」

蔵の外にでると見知った顔がいた。蒼いタイツに赤い槍を携えた偉人。クーフーリンが。

あれ？でもクーフーリンさん普通にいるのに

『気にすんな。あれは正真正銘俺だがこの俺じゃない。遠慮なしにぶっ飛ばせ。むしろぶん投げろ』

まあ、敵だって言うなら構わないか。

「よう坊主、さっきの奴がマスターだとは驚いたがよりにもよってお前みたいな子供がサーヴァントだとはな。通りで逃げるわけだ」

「……………全く、なつてないね。そんなものかい？君は見た目だけで相手の実力を測るような人物では無かったはずだよ？」

流石は偽物、いや。作られたまやかしか  
ならばこそ遠慮することなどはない。

「ハッ！俺の事を知ったような口調だが、生憎と俺の記憶ではお前とは面識がねえ。真名は聞く気はないが、クラスを……教えてくれるわけもないか」

「別に僕の真名を知られようと関係は無いんだけどね。ここはルールに則って隠すとしてよいか。だけどクラスまで隠したら僕のことを呼びにくいでしょ？だから教えてあげる。僕のクラスはジョーカー。まあ端的に言えばイレギュラークラスって事だね」  
「それなら相手に不足はねえ。構えな、坊主。」

全く、偽物でもクーパーリンさんは好戦的なのに変わりはないか。

そこんところどう思う？

『ああ、ダメだなありや。なんでかは知らねえが手加減してるみたいだ。とてもお前の相手が務まるわけねえよ。』

そうだよな。普段のクーパーリンさんの方が数倍は威圧を感じるよ。

クラスに縛られてるのもあるだろうけど、それ以外にも何かしらの制約はかかってそうだね。

「ケツ！構えねえってんならこつちから行くぜ。不確定要素は排するに限るからな。悪いがこれでしまいだ。ゲイ…」

はいはい、アイアスアイアス

『ちよ、おま!!』

「ボルク!!」

偽物さんが放った刺し穿つ死棘の槍は僕が投影した盾、熾天覆う七つの円環に防がれた。本来ならば防げないはずの一撃。因果の逆転という必中の槍は何故かはわからないけど熾天覆う七つの円環なら防具ことが可能だ。

まあ、実際食らっても問題ないけどね。だって十二の試練もあるし

『俺の槍が型なしじゃねえか。正直凹むぜ』

「躲すどころか防ぎやがったとは。貴様、一体何者だ!!」

「だから言ったでしょ。ジョーカーだって。じゃ、今度はこっちのばん」

元気だしてよクーパーリンさん。いつもの事でしょ？

結局は槍での白兵戦はそっちのほうが上なんだからいいじゃん。

『それとこれとは別の話なんだよ。もういい、お前アレ使え』

……了解

「なっ！離せ!!」

僕は偽物さんの両足を掴む。偽物さんと言えどクーパーリンさんはクーパーリンさんだ。だからこの宝具が効果的。

「まてまてまて！」

「とんでけ!!」

回転して突撃する槍兵

「なはああああああああ!!」

偽物さんは星になった。

在りし日のクーフリーンさんを思い出すね

『言うな』

◇

「あいつは…」

蔵から青年が出てきた。赤い髪に学生服、魔力も感じるね。

あと、この家も魔力を感じる…ん？外にエミヤさんと知らない人の魔力もあるか。

「なあ、お前は一体何なんだ？」

「さあ？イマイチ僕も現状はつかめてないからね。聞くのならもうすぐ来る人達にでも聞こうか」

「?!何をいつて「衛宮君!!」」

エミヤ？へえ、珍しいこともあるものだね。奇しくもエミヤつて人が3人現れたつてわけだ。一人は偽物さんだけど。

「遠坂？どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもない！つて、あんたサーヴァント召喚したの!？」

ふむふむ、僕はサーヴァントと言うのか。サーヴァント、従者つて意味。そして僕とエミヤ青年に少し繋がりを感ずることからエミヤ青年が僕の主つてところか。

「な、なんのことだよ。」

「いや、エミヤ青年。その女性の言つてゐることは多分本当だよ。だって僕と君に繋がりを感ずるからね」

「…あんた、サーヴァントのくせに何も知らないの?」

「うんそうだね。僕は家でゆつくり寝ていた筈だけど、気がついたら身体が小さくなつてここにいたんだよね」

「つまり、実年齢は違うってことか」

「…英霊ってわけじゃないの?」

英霊、僕の中にいる人達の事だね。じゃああれかな?この人達は英霊をサーヴァントとして使役して何かをしているのかな。

まあ、さっきのクローリン（偽物）さんが襲ってきたところから戦いだらうけど。

「全く、貴方は随分とイレギュラーなようね。衛宮君」

「まだ把握できていないんだ。全部教えてくれないか?」

「僕からも頼むよ。代わりと言っちゃあ何だけど僕の事話してあげるからさ」

「…マスターが変わり者ならサーヴァントも変わり者なのね。いいわ、ついてきなさい」

◇

「そう、アンタはやつぱり英霊つてわけじゃないんだ。異世界の魔導師ねえ」  
「そうだよ。これでも組織一の実力者だったからね」

情報は得た。代わりに僕の名前とか教えてあげた。

強さと言われても具体的にと言われても答えられなかった。抽象的ならとある世界で最強つて言われていたと言えただけだね。

「クラスはジョーカー。切り札つて意味か…何か胡散臭いわね。ステータスも見えないし」

「あ、見えたほうがいいか。」

僕は己フォース、サムワンス、グロウリーが栄光の為に外す。確かこれつけてたら僕の正体とか隠蔽されちゃうんだよね。まあ、別に見られても構わないし。これつけてたの色々とやらかすのをバレないようにだしね。普段から鎧を見えないように調整してたから視覚的には僕が藤崎



優だっつてのはわかるけれど…

「オンオフ出来るんだそのステルス。って、いいの？見ても」

「自分では見ることも出来ないし見られても関係ないからいいよ」

「じゃあお構いなく」

【ジョーカー】

マスター：衛宮士郎

筋力：A++

魔力：EX

耐久：A

幸運：EX

敏捷：A+

「……」

あれ？どうしたんだろ、目をこすっているけど。

彼女はもう一度こちらに視線を向ける。

また眼を擦った。

そしてもう一度見た。

「…意味分かんないわよ！あんた!!」

「な、なに？どうしたの？」

「はあ？はあ!?はああああ!!何よこの反則みたいなステータス!!衛宮君みたいなへつぼこがマスターでこんなステータスありえないでしょ!!」

「へつぼこって…」

一体どうしたんだろ。そんなに息を荒らげて。

そんなに僕のステータスがおかしかったのかな。

それにエミヤ青年も地面に手をついてうなだれちゃったよ。確かに彼は魔力量も乏しいけどさ。

「まあ、些細な事は置いておいて。実は僕その聖杯つてのには興味がないんだよね」  
「どうして？」

「いや、だつてさ。夢とか願いつて自分で叶えるものじゃない」

「いやいや、叶えられない願いだつてあるでしょ。死んだ人を生き返らせたいとか」

「蘇生は出来るよ」

「は？」

まあ、基本的には使用するつもりはないけどね。あまり蘇生に使つたら玉藻さんに怒られるし。正座させられるし。

「…頭痛い。もうあなたの勝ちでいいんじゃない？」

「そんな凄いのか？ ジョーカーは」

「凄いなんでもんじゃないわよ。反則反則。チートよこんなの」

チートとは心外だな。確かに幼少期の時点で多少のアドバンテージはあつたけどこ  
れでも修行したりしたんだからね？ それに…

「大丈夫だつて。エミヤさんだつたら戦い上手いからやられちゃう事もあるし」

「…俺？」

いやいや、違うよエミヤ少年。  
今言ったエミヤは…

「いや、こつちこつち」

この赤い方だから。

「…アーチャー？」

「………貴様何故それを？」

「いや、だって知り合いだからね」

取り敢えずエミヤさんを召喚する。

光を纏ってエプロンを着けてお玉とフライパンを持ったエミヤさんが現れた。

「ふむ、どうした？優。いきなり呼び出すとは珍しいな」

「ごめんね？少し話したいから呼んだんだよ」

僕がそう言うときエミヤさんは唾然とした顔のエミヤ青年達を見ていく。そして再度僕の方へ視線を向けると難しい顔をして頷いた。

「まさか生前の自分と並行世界の自分と合うことになるとはな」

「なん…だと?」

へえ、偽物さんって平行世界の英霊なんだ。弱体化してるのはサーヴァントって形にいるからなのかな

「って、生前の自分?」

「ああ、その赤髪の少年が生前の私、衛宮士郎だ」

これは驚きだ。まさかこんなことがあるなんて思いもしなかった。

いわばあれだよな? いきなりアーサー・ペンドラゴンさん本人にあつちやうような…いつでも会えるからありがたみがいまいちわからないや。

「お、おれ？」

「一体どういうこと？アーチャー」

「やれやれ、まさかこんな事になろうとはな。確かに私は衛宮士郎の成れの果てだ」

「ふむ、その様子から見てお前も正義の味方にはなれなかった口か」

「ふん。お前もか。ならわかるだろ？私の目的を」

目的か、なんだろうな。正義の味方になりたいんだっいたらパンダ師匠なりきりセットかしてあげようかな。結構子供たちにも人気はあるし、気にいるかもしれない。

「まるでわからんな。俺は自分の夢をこいつに託した。」

エミヤさんに頭をなでられる。夢かあそんな話し聞いたこと無いんだけどなあ。勝手に決められちゃってるよ、まあいいけど。勝

「……」

「私は今は料理の道を究めんとしている。お前とはまた違うさ。平行世界の私」

「……ほんと頭いたい。なによ、平行世界のアーチャー？アーチャーが衛宮君の成れの果

て？つて、ちよつと待ちなさいジョーカー。あんたまさか他にも英霊と知り合いで召喚できるんじゃないでしょうね？」

「知り合いならいるさ。有名ドコロつて言ったらアーサー王とか英雄王ギルガメッシュとかかな。それに召喚も出来るよ。」

「」

「」

「全く、相変わらず君はマイペースだな優。と、そろそろ帰らせて貰うぞ。あまり遅くなるとアルトリアがゴネる」

「うん。ありがとうエミヤさん」

エミヤさんは光を纏って消えた。

何度目かわからない沈黙と唾然とした空気。

どうしてそんな顔をしているのだろうか。わかんないや。







キャスター「私と宗一郎様の夢は誰にも邪魔させない!!」

優「え？あ、はい。邪魔する気ないよ」

キャスター「え？」

ランサー「リベンジといかせて」

優「はいはい。ブーメランブーメラン」

ランサー「ぬわあああああああああ!!!」

アーチャー「ランサーが死んだ!!」

英雄王「小生意気な小僧め、私の宝物庫を無断で使用するとはな。万死に値するぞ不敬!!我が引導を渡してやろう。エヌマ・エリシュ!!」

AUO『我が許可したのだ!問題はあるまい!いけ!いけ!私の雑種!』

優「もちろん!乖離剣エア!!」



## 死合

「はあ、はあ」

一体どれだけの間戦い続けただろうか：

手に持った約束された勝利の剣を地面に突き刺し、膝をついて息を整える。

眼前に広がる大地は焼けただれ、草木などもなぎ倒された酷い有様となっていた。足に力を入れて立ち上がる。相手はまだ倒れていない。

多分まだまだ健全だと思う。

「ほんと、厄介：」

自分の体は既にながたついていて、今にも倒れ込みそうになる。だげど踏ん張る。

目の前の敵を倒すため：

「もう終わり？」

「まだだよ、なのはちゃん」

飛んでくる魔力弾の一つを躲す。それを読んでいたのか、立ち止まった場所にも魔力弾が飛んできた。

それを約束された勝利の剣で叩き切ることで防ぐ。

そのまま飛び上がることで背後から迫っていたフェイトちゃんの攻撃を躲す。

どれだけ攻撃されてもこちらからの攻撃は一撃で終わらせるつもりだ…

一撃で、意識を奪う…

命を取ることはまず考えていない。

骸骨を発動させてクルスニクの鍵を手を持つ。バックステップで攻撃を躲しつつなのはちゃん達から距離を取る。

—— 殺せ

頭に響く声を霧散させるように頭を振って状況を確認する。

既に全員が揃っているようで、なのはちゃんとフェイトちゃんのもの他にもはやてちゃんと守護騎士さん達、クロノくん、ユーノ君、プレシアさんにアルフさんが僕と対峙していた…

——奪え

「うるさい」

頭を手で抑えて呟くことで声を押さえつける。

僕の意味を乗っ取ろうとするな。僕は僕、藤崎優だ！

——貪れ

「消えろ」

距離を詰めてくるシグナムさんへ蒼破刃を放つことで牽制する。

——犯せ

「黙れ」

頭を抑えて座り込み、約束された勝利の剣と骸殻が消えた。響く声は予想以上に頭にダメージを与えているようだ。

——知っているだろ？ 感じているだろ？

「……」

フェイトちゃん振り下ろしてくるバルディツシユを蔵から取り出した短刀で止める。

ああ、僕はどうしてこんなに我慢していたのだろうか……

どうして身を任せていなかったのだろうか……

——その身は、ただ■■■に特化した刃

「故に必要なのは敵と武器」

フェイトちゃんの首筋へと短刀を伸ばすが躲され、距離を取られてしまう。それを冷めた目、いや、覚めた目で見つめた僕はただはつきりと自覚する。

——意識が／反転／する

「吾は面影糸を巣と張る蜘蛛…ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ」

世界が継ぎ接ぎに包まれたのがわかった。

ああ、そうだ、そうだった。世界はこんなにも脆くて壊れやすい…  
今にも空は落ちてきそうだし、地面なんて無いに等しい…

そう、世界なんてこんなに死であふれているんだ…

「これで…トドメ!!」

「遅い」

赤い少女の槌を殺す。

「クツ!!まだまだあ!!」

「斬刑に処す」

追撃に蹴りを放ってきた赤い少女を殺した…

「ヴィータ!!!よくも!!」

突っ込んできた炎の騎士の一撃を躲し、死を見つめて短刀を伸ばす…

「話にならない。来世からやり直せよ、お前」

殺した

「ヴィータ!!シグナム!!」

「やっと理解したか?俺がアンタらの敵なんだって…ついでもう一つ理解していけ…これが、物を殺すということだ」

地面に短刀を突き刺し崩壊させる。



足場が崩れたことにより一瞬反応の遅れた連中へと肉薄し、その死を見つめた。

「弔毘八仙、無情に服す……!」

連中、黒い少年に赤い狼、そして小動物の死を一刀で薙ぐ。

「みんな!!」

そのまま、瓦礫を足場に跳び上がって残りの相手へと肉薄する。

「蹴り穿つ!!」

雷の女を蹴り飛ばし、崩壊した地面に着地する。

視線を相手に向けるとこちらを睨んでいるだけ……なんて無様な連中だ……

まるで的だな……

短刀を持つ手を上に掲げて口角を上げる。

「じゃあな、地獄に行ったら閻魔によろしく言っておいてくれ…極死——」

未だに動かない白の少女へと短刀を投げる。

それに気付いた黒の少女は短刀を叩き落とした。それに安堵している白の少女の頭を掴んだ…

「——七夜」

首を引き抜いた。

「夢かあ、びつくりしたなあ」

寝床から身体を起こして確認する。

全く、どうして僕がなのはちゃん達と殺し合いしてたんだよ。

原因が検討もつかないや。

「…?!」

あれ？何か視界に黒いものが見えた気が…

気のせいかな…



『あぶねえあぶねえ。もう少しで至ってたぞあれ』

『なんとか戻せたけど、いきなりで驚いたわ。何が原因で目覚めそうになったのかしら』

『さあな。にしても、心臓に悪いぜ、全く』

『まあ、結果的には大丈夫だったからいいじゃない』

『お前って結構適当だよな』

## 数年後

少し肌寒くなってきたな……やっぱり着込んできたほうが良かったかな。

「目標の鎮圧に成功」

「了解。ゆっくり帰って来るんだ。今日は君の好きなチーズハンバーグだ」

念話通信を終え、立ち上がる。

眼前に広がるのは既に意識を失った動物。肩に担いで、歩く。

これで今日の仕事は終わり……つと。

明日は確か小テストがあつたかな。早めに帰ってゆっくり休んだほうが良さそうだ。闇の書事件から5年が経ち、僕も中学生になった。今は中学生に通いながら管理局の仕事をこなしている。

と言つても別に管理局に所属しているわけではない。どちらかと言えば同盟のようなもの。つい2年ほど前に夢の世界で皆と王様の蔵にあつた人生ゲームをしてた時に、

それを傍観していた王様がいきなり会社を設立すると宣言し、次の日の朝に王の軍勢の効果で出てきた王様が、一日で会社を立ち上げてしまった。

名目は警備会社。名前はG I L S O C K。会社の警備員はクーフリーンさん。いつも会社の傍らにある警備員室いぬごやの前でイライラして立っている。王様と賭け事をして負けたらしい。

まとめ役は主にエミヤさん。さっきの通信もエミヤさんだ。時々仕事終わりにご飯を作ってくれる。凄く美味しい……

で、管理局からの依頼を僕とスタンさん達がこなしている。何故管理局から依頼が来るのが不思議に思うかもしれないけど、クロノ君の話によると、この会社の人員はとんでも無い人での構成で、潰しが利かないからだと言っていた。だから、敵対よりも同盟という形を取ったのだろう。意外だったのは王様が同盟の件を承諾したことだ。

まあ、ここまで言うておいてだけでも一つ不可解なことがあると思う。社員が僕に宿っている人達だつてことだけど、別に受肉したわけではないと言っている。王の軍勢とはまた別口から僕とのパスを繋いで、僕の魔力を消費して現界するのだという。流石にあまりに宝具を使われると少し疲れるけど、普通に戦うくらいなら僕は同時に30人程なら現界出来るらしい。しかも、魔力源は僕だけど、媒体を他に置くことで、本来なら僕の近くでしか活動できないのを普通に活動できるようにしたらしい。

これを承諾した人達はみんな会社内で各々好き勝手しながら仕事をしている。僕も無理にならない程度に仕事をしているよ。

なのはちやん達は管理局に入った。はやてちやんは半強制的なのだけど、なのはちやんは前に言っていた夢での事に関係があるらしい。

よりよい未来を手に入れたいと言っていた。

フェイトちゃんには既に管理局に入っていた為、今はその3人とヴォルケンリッターの皆でミッドチルダで頑張ってるらしい。

ああ、プレシアさんはこの会社にいます。管理局に関わってはいるけれど、他の所にいるよりは管理局の権力に対抗できるとの事で王様から説明を受けていた。

それに納得してプレシアさんは主に魔法関係の管理を行っています。

一部の営業先、名前を言ってしまうえばバニングス家と月村家に高町家なのだけど、魔法を知っている家の警備にプレシアさんの魔法や、玉藻さんの呪符を使っている。

アリシアちゃんは魔法が使えないながらも強くなりたいたらしく、色々な人に戦い方を教わっていた。フェイトちゃんもよくなのはちやんに追い付きたいと言っていたので似た者姉妹って言えるのかな。

両親には既に僕の事を話した。母さんは驚いていたけど父さんは何故か驚いてなかった。

理由を聞いたら、僕のことは変わっていると感づいていたらしい。だけど、どんな人間でも自分の息子だと心構えをしていたらしく、驚きを外に出すほどじゃなかったらしい。

そして、この会社で手伝いという名目で働くことを許してもらった。僕の好きに生きていいと母さんに撫でられながら言われた時は嬉しかった。

みんなが現界するようになって僕の修行も進んでいる。この前はカルナさんと戦った。呼んだら出てきてくれるんだけど、カルナさんは自分の考えを伝えるのが苦手みたいで、いつも修行では模擬戦だけになっちやうだよね。

まあ戦い方はあまり参考にはならないけれど、物凄く強いから、その分対策とかを考える等の修行ができています。

管理局員に討伐した動物を渡して一息つく。

管理局員は一言礼をいうと転移していった。僕も直ぐ様会社のエントランスに転移



した。

次元世界間を超える転移はプレシアさんと一緒に開発して編み出した。これによって、色々と行動できる範囲が増えたのは嬉しい。色々な世界はいい刺激になるし、きれいな所も多いので僕自身心が安らぐ。

実は給料もしつかりと貰っている。あまり確認してないけれど、王様が会社にいるだけでお金が向こうからやってくる不思議には驚いたなあ。だって、お金を落としていたのを交番に届けたらその1割、100万円とかいうとんでもない金額がやってきたり。クーフリーンさんが宝くじ勝ったら2等が当たったりした。まあ、クーフリーンさんの方はアルトリアさんの食事代で消えたけど……

エレベーターで事務室の階まで上がる。このビルは王様が買い取ったビルで広々としたものになっています。

最上階は全部打ち抜かれて王様の私室みたいなものになっているけど、一応は社長室扱いだ。

もう少しで事務室につくというところで、エレベーターは加速した。

ああ、王様のお呼びかというのを理解した。このように度々僕がエレベーターにのるタイミングで王様はどうやってかわからないけどエレベーターを最上階まで動かして

僕を呼ぶ。

今度は一体何の用事なのだろうか……

「おお、きたようだな。喜べ、もう少しで管理局とか言う我等に張り合っている畜生共を掌握出来るぞ」

「……同盟相手だった筈なんだけど」

「知らぬな、我がただそのような契約を結ぶと思うか？安心しきっている輩をどん底に叩き落す位の事はするに決まっておろう」

なんとという酷い言い分。流石王様

「しかし、未だに全てを掌握するというのは困難だ。割合的には7割ほどしか掌握しておらぬ」

「その割合はどうやって算出したの？」

「簡単だ。システム面での掌握は貴様に先日やらせたことだが……株を手放さないのだ」

ちよつと待つて、僕そんなこと聞いてないんだけど

「言つておらぬからな。先日ゲームをやらせただらう？」

「それつてマインスイーパーだったけど……」

「それこそがハッキングよ。システムのセキュリティという地雷を踏まらずに最深部まで到達し、クリアという掌握を貴様が行つたのだ」

……ごめんなのはちゃん達。僕君達の職場にとんでもないことしちゃつたみたい。

「ふはははははは！ まあよい。今は完全掌握とはいつておらぬがこのまま着々と罫り殺しにしてやろうぞ」

# 魔法少女リリカルなのはStrikers

## 第1話「派遣魔導師」

あたし、スバル・ナカジマが機動六課に初めて訪れてから一週間が経った。なのはさんの教導はとも大変だけど、苦にはならない。今は未だ実感できないけれど段々と強くなれると言われた。

なのはさんのようになるにはまだまだ道は険しいけれど、一步一步着実に前に進んでいけばいつか追いつけると信じている。

だけど、そんな思いを胸に今日の訓練はどんなのだろうかと思わしていたあたしにシグナム副隊長は今日は訓練がないと言った。正直訓練を休むよりもっと強くなりたいのだけれど、なにやら大事な人が来るそうで、今日は模擬戦を見るらしい。

見ることも訓練の一つだといえそうだけれど、あたしのような戦闘スタイルの人は中々ないから参考になるとは思えない。

でもよっぽど凄い人なのだろうか、今日はなのはさんを含めあたし達フォワードチームを除いた隊長たち皆がそわそわしている。

フェイト執務官にいたってはコーヒーに砂糖を入れすぎて微妙な顔をしていた。流

石に10個角砂糖入れたら変な味になりますよ。

なのはさんも落ち着かない様子で入口の方をチラチラ見ているし……一体どんな人が来るのだろうか。凄い偉い人が来るのだったら大変だ。

少し隊長達の緊張があたしにも伝わってきた。そして入り口に視線を向けると、誰かが入ってきた。

「ただいま！」

大きな声で入ってきたのは八神部隊長。まだ例の人は来ていない様子だけど、なのはさん達は八神部隊長に詰め寄っていった。

一体どうしたのだろうか。

「どうだった!？」

「ばっちり!私やつぱり持ってるわ！」

「と言う事は！」

何やら興奮した様子ではしゃいでいるなのはさん達。よほど嬉しい事があったのだ

ろう。いつもの格好いいのはさんとはまた違った可愛いのはさんがそこにはいた。

「あ、あの。何かあったのですか?」

「ん? そう言えばキャラ達には話してなかったね」

オドオドした様子のキャラに嬉しそうに笑っているフェイトさんが話してくれた。

何でも各部隊に1〜2人程度外部から派遣された魔導師が所属するらしい。その選抜は部隊長によるくじ引きで早い者勝ちだったらしいのだけど、うちの六課にはその中でも特に凄い人が来るそうだ。

いや、でも派遣魔導師って初耳だけど、一体どう言った人達なのだろうか……

あたしがそんな疑問を持っていると、資料を持ったヴィータ副隊長がやってきて教えてくれた。

「ああ、GILSOKっていう会社があつてな、表向きは警備会社だが裏では管理局からの依頼を受け持っている傭兵団なんだよ」

「え!? まさかその人達が派遣魔導師として所属するのですか!」

あれ？ティア知ってるの？あたし初めて聞いたんだけど…

「スバルにも話したでしょ！兄さんを助けてくれた人が働いている会社のこと！」

ああ、そう言えばそんな気もする。確か違法魔導師追跡任務中に相手魔導師にもう少しの所でやられそうになったのを助けられたんだっけ…

確か大きな槍を持った男性に助けられたんだっけ？もしかしたらその人がここに所属するのも知れないのか。

「でも、どうして派遣魔導師を各部隊に配置させるのですか？」

「管理局全体戦力の底上げだろう。所属こそしていかないが、あいつらは私達の味方だ。立場が少し変わっているってだけでやってることは私達と大差ないんだよ」

「なるほど、吸収つてやつですか？」

「……ま、まあ。そうとも言えるな！（どちらかと言えば潜りだけだ）」

最後の方は何を言っているかは聞こえなかったけど、大方の理由はわかった。けど、どうしてなのはさん達はあんなに喜んでるのだろうか。強力な魔導師が所属す

るっただけじゃなさそうだけど。

「それにしてもあいつが来るのか、今度という今度は倒させてもらうぞ」

「ヴィータ副隊長はその新しく来る人と戦ったことがあるのですか？」

「ああ、全く歯がたたなかつたけどな」

「「え!? 本当ですか!」」

「しかもあれだぞ? 私一人じゃなくてシグナムやザフィーラとシャマル、そしてはやての5人がかりでだぞ?」

……にわかには信じがたいけれどヴィータさんが嘘をつくとは思えない。だとしたら本当の事なのだろうけどとても普通の人間とは思えない。もしかしたら私と一緒にような……それはないか。

だけど、ますますわからなくなってきたぞ。多分男の人なのだろうけれど、物凄い大男なのかもしれない。

でもそれだったらなのはさん達が喜ぶとは思えないし……

「みんなあー! 今から訓練場の方へ移動するぞー!」



まあ、百聞は一見にしかずってなのはさんが教えてくれたし、自分の目で見定めよう。凄いい人が入ってくれるのならあたしも嬉しいし。出来れば拳で戦ってくれる人だったら色々聞けるから嬉しいな。

◇

私達4人は訓練場の少し離れたビルの上から見ているように言われた。回りには他の機動六課の人達も見学に来ている。

どうやら隊長達全員と新しく入ってくる人達が模擬戦をするらしい。試合形式はビルの立ち並ぶフィールドでのゲリラ戦。どう考えても隊長達側が負けることなどはあり得ないけれど、モニターに移る隊長達はとても真剣な目で試合の始まりの合図を待っていた。

合図を出すのは3つの明かり。こちらのモニターにも表示された明かりが一つ一つ点灯していく。

明かりが点灯していくと同時に隊長達が魔力を高めているのがわかった。隊長達の布陣は見た感じ……

前衛にフェイト執務官とシグナム副隊長、中央、おそらくは遊撃役になのはさんとヴィータ副隊長、そして後衛にリインフォース曹長とツヴァイ曹長の二人とユニゾンしているはやて部隊長としている。

とてもじゃないがこの布陣に一人では対抗できるとは思えない。

「一体どんな人なのよ、その派遣魔導師って」

「わからないよ。でも、隊長達の表情からは余裕が見えないね」

ゴクリとつば飲み込みモニターを凝視する。

3つ目のあたりが点灯した。それと同時に前衛の二人の前に何かが現れる。マントを着てフードで顔を隠した何か。

そしてその何かが現れて間髪入れずにシグナム副隊長が斬りかかった。

マントの人はひらりと剣を躲す。フェイト執務官もシグナム副隊長と挟み込むように斬りかかるが躲されてしまう。

多分今まばたきをしていたら何が起こったのかわからなかっただろう。

前衛の二人は攻撃が躲されたことに動揺する様子もなく更に追撃を続ける。だけど、あたらない。

7回、フェイトさん達がそれぞれ攻撃を繰り出した回数だ。決して規則的な機動ではなく、フェイントを織り交ぜた攻撃なのに、掠りもしない。

フェイトさん達は8回目の攻撃を繰り出したあと、マントの人から離れた。それと同時にヴィータ副隊長がデバイスを巨大化させて振り下ろしている。

ちらりとなのはさんを見ると、レイジングハートの先に魔力を集中させて砲撃の準備をしていた。その後方でははやて部隊長が2つの本を持って魔法の詠唱をしている。

ヴィータ副隊長の振り下ろしはマントの人の逃げ場を与えずに接近する。いくらあれだけ動けると言ってもあれでは……

すぐに地面に叩きつけられるのだろうと思ってみていたが、そんなことはなく、左手一本だけで攻撃を止めていた。しかも立っている地面に少しも衝撃が伝わっていないのかひび割れすらしていない。

「あれ、本当に人間？」

「すごい……」

思わず口から言葉が出てしまった。其れほどまでに目の前の状況は信じられない。ヴィータ副隊長がカートリッジを装填しさらに魔力による押しつぶしを試みているが効果は薄そうだ。

寧ろこのままでは押し返されるのではないだろうか……

だけど、その前にフェイトさんが横から現れ、薙ぐように斬りつける。マントの人はそれを足で受け止めた。

いや、本当に意味分かんないんだけど、シグナム副隊長の斬り付けももう一つの手で止めてるし。え？あんなこと出来るの？

『流石というべきだな！』

『……………』

『じゃあ、ここからが本番！』

3人が離れた。マントの人は追撃を加える様子もなくそこに立ったまま動かない。

そこになのはさんの砲撃が降り注いだ。以前見たデイベインバスターよりも高密度で広範囲な砲撃魔法。あんなものをくらってしまっただけは一溜まりもないはずだけど

……

『……………』

当然のように砲撃を手刀で切り裂いている。

あれだけの魔力を物ともしないなんて……モニターとは別に魔力光がここからでも確認できるほどの……

『行くで！同時詠唱：D E ・ A D E ・ H ・ M ・ R 』

今度ははやて部隊長が魔法を放った。様々な砲撃や槍の形をした光を撃ち放っている。

「嘘でしょ、信じられない」

「どうしたのティア？確かに信じられないような光景だけど」

「はやて部隊長、あれだけの規模の魔法を複数、しかも全部完全にコントロールして放っている」

それがどれだけ凄いかはまいちわからないけど、そんな魔法の嵐にもともしていないマントの人は規格外ってレベルじゃないだろうか。

『ああ、やつば強いなあ』

『そうだね、でもまだ負けていない。でしょ？なのは』

『うん。だけど、このままじゃジリ貧で何も出来ずに負けてしまう』

『ならやることは一つだな』

『最大火力による波状攻撃だ。トドメは任せたぞ？なのは』

隊長達が話し合っている間もマントの人は特にアクションを起こす様子もなかった。まるで攻撃を待っているかのように……

「ねえティア。あれって幻影じゃないの？」

「違うわよ。もし幻影だったら隊長達の攻撃を受け止めたり、砲撃を切り裂いたりなんて出来ないから」

確かに、ティアの幻影だったらすり抜けるだろう。じゃあやっぱり生身で戦っているのか……

隊長達が弾みをつけるように接近する。それぞれのデバイスから魔力を放出させながら斬りかかっている。

あんな戦い方では無駄に魔力を消費するだけで意味が無いと思うけど、一体どういった意図があるのだろうか。

なのはさんだけ、少し離れた位置に移動して砲撃準備している……

「あれは、収束魔法。なるほど、だから他の隊長達はあんな戦い方を」

「収束魔法？」

「周囲の魔力を取り込んで発動する魔法よ。自分の魔力の消費が少ないから使い所のいい魔法ね」

周囲の魔力を取り込む。だから隊長達はあんなに魔力をまき散らして……あれ？

「ねえティア、あのマントの人、魔力感じれる？」

「……………いいえ」

え？まさか魔力で強化も何もせずには戦っているの？

じゃあ、まさかとは思っていたけど隊長達手加減されている？

……本格的に人間が怪しくなっていた。

『紫電一閃！』

シグナム副隊長の一撃を指で挟むように止める。普通なら触るだけでもダメージ負う筈なんだけど……

『ギガントハンマー！』

いや、デバイスの一撃を素手で殴って止めるって……

『雷光一閃！』

何も言わない。フェイトさんの砲撃を手で受け止めてる光景なんてあたしには見え



ない。

『クラウ・ソラス!』

あ、はやてさんの砲撃は避けた。あれは食らったらダメなのかな……正直平気そうだけど……

『みんな、巻き込んだらごめんね! スターライト……』

『ちよつと待て!』

レイジンググハートの先が痛いほど光を放っている。隊長達は射線から離れようと急いで退避しました。

『ブレイカー!!!!』

モニターからとてつもない光が放たれた。



「目が、目があああ」

「クツ、たかがメインカメラをやられただけだ！」

咄嗟に目を庇えたから良かったものの、庇え無かった人達は目を押さえ悶えている。地面をゴロゴロと転がったりしているところから相当なダメージだったのだろう。

モニターからは砂嵐しか映し出されていない。多分なのはさんの砲撃で周囲のサーチャーが全部壊されたのだと思うけど。

「……ティアア」

「…………スバル」

「機動六課って過剰戦力なんじゃ…………」

## 第2話 「成長」

「え？じゃあ隊長達はリミッター解除していなかったのですか？」

「当たり前だろ、流石に模擬戦ぐらいじゃあ解除させてもらえねえよ。まあ、なのはとはやてに關してはリミッターの意味は殆ど無いんだけどな」

「まあ、なのはは周囲の魔力使うの上手いし、主は私とツヴァイの2人とのユニゾンで魔力量増えるからな」

ん、結構このクッキー美味しいな、どこのクッキーだろう。

「じゃあ、隊長達が不利だったのですか？」

「そうでもないぞ、あいつはある事情で魔法を使えない状態で模擬戦をしてたからな、どちらかと言えばこちらの方が圧倒的に有利だった」

「やっぱり生身で戦っていたんだ」

あ、この紅茶は海鳴市で売ってる葉だ。これからは僕が買いに行かなくちゃいけない

かもしれないな。

「あ、あの！」

「ん？」

「お久しぶりです！あの時はありがとうございました！」

ああ、どこかで見たことあると思つたらあの時研究所から助けたエリオ君か。確かプレシアさんに任せたんだっけ。F計画の被害者だから面倒を見るって言つて。

頭に手を載せて撫でておく。結構これは色んな人に評判がいいからこうしておけば問題ないだろう。

「ねえ優君はミッドチルダで何処で寝泊まりするの？」

「ん、ミッドチルダにある家だよ」

「いつの間に家なんて持ったの？」

「大体一週間前に建てたね」

まあ、家というか会社支部としての扱いなんだよね。土地を王様が買って、みんなで

建てた。エリザさんが勝手に監獄城チエイテを建てようとした時は玉藻さんがブチ切れたっけ。

何故かみんなはすごいノリノリで作業していたんだよね、最初の一週間くらい。けどだんだん面倒くさくなつたみたいで、結局ボクがネロさんの宝具とエミヤさんに教わつた投影を使ってビル建てたんだよね。王様の命令で建物の高さは他の建物よりも高くしろとか言われた。だから王様が買った土地より随分と面積としては狭くした。隣接しちゃうとビルのせいで日陰になっちゃうからね。まあ、土地の面積が広がつたらそこまで考えなくても良かったけどな。

「また私達の家にも遊びに来なよ」

「うん、それがいいね。3人で一緒に寝よ?」

「いや、それはダメだよ」

流石に恋人になつたからって、いやなつたからこそ不埒な関係はダメって玉藻さんが言つてたしね。何故か言つた瞬間にヘラクレスさんが玉藻さんにクーフリーンさんを投げていたけど。

それにしても、どうして2人恋人がいるって言うのとエミヤさんは微妙な顔をするのだ

ろうか。別に複数人と結婚するのもおかしいってわけじゃないのに。メディアアさんに相談して教えてもらったし、王様も僕は何人も娶るのが普通だって言ってたし。

「ええ、一緒に寝ようよ」

「あんまりラブラブな空気を見せつけんといってくれへん？結構独り身の私としてはくるもんがあるんねんで？」

「はやてちゃんも一緒に付き合っちゃえばいいのに」

「何言ってるんよ、確かに一番近しい男って言ったら優君とかやけど、流石に親友の恋人には……」

「大丈夫だよ、優君も洗の……カウンセリングで複数人と付き合うのは普通だって気付いたんだからー」

「ちよつと待って、今不穏な事言いかけへんかった？具体的には洗脳って」  
「何言ってるかわかんないかなーって」

ね。いまいち何について話してるかわからないけど、あれだね。みんな仲が良いって事だね。

「なあシグナム、あれ優のやつまた見当違いの事考えてないか？」

「そうだな。ああやって納得したように頷いてる時は基本的に考えを放棄した時のあいつがする動作だ」

「あ、あの……あの人となのはさん達ってどんな関係なのですか？」

「恋人二人恋人未満一人だな。主も素直になればいいのに」

「……………」

なんだろう、シグナムさん達からの視線が変だ。3人の仲が良くて嫉妬したのかな。確かシグナムさん達ははやてちゃんが好きだった筈だし、あんまり同性と仲良くしてるのは見てられないのかな。

でもなのはちゃんとフェイトちゃんは同性に興味はあまりないって言ってたし大丈夫だと思うよ？

まあ、ネロさんとかと仲良く話してたら怪しまないといけないだろうけどね。

「ああ、そう言えばフェイトちゃん。どっちみち3人では寝れないでしょ。今日はアリシアちゃんがそっちに泊まりに行くって言ってたし」

「そういえばそうだった！ どうしようなのは！ 姉さんの為にハンバーグ作らないと！」



「え？うん。もう材料は昨日一緒に買いに行ったよね？」  
「そうだった！」

フェイトちゃんも結構抜けているところがあるなあ。  
ん？メールが来てる。何々？

|||||

From ルドガー・ウィル・クルスニク

To 藤崎優

面接合格

ミッドチルダ支部近くのレストランの面接に合格しました。

時間があればまた来てください。場所は□□です。

追伸

色々あつて20万ほど借金しそうになりましたが、エミヤのお陰で助かりました。

|||||

ルドガーさんおめでとう。でもまた借金背負いそうになったのかあ。ルドガーさ

んって結構不運？

「じゃあ、事後処理班も帰ってきたし自己紹介やな。みんな！ちよつと集まって！」

ん、そう言えばまだしてなかったね。でも自己紹介かあ、何も考えてなかったけど、どうしようかな。

「今日から機動六課に配属することとなった派遣魔導師の藤崎優や。今は訳あって魔法使えやんけど、実力はさつき見てもらった通り相当なものや。ほい、挨拶しい」

「警備会社GILSOK所属藤崎優です。あまり器用ではないけど、精一杯働くので仲良くしてくださいね」

「ついでになのはちちゃんとフェイトちゃんの彼氏や」

……さつきまでのざわつきが止んだ。一体どうしたの？

「「ええええええ!!」」

「まあ、そうなるわな」

「本当ですか!?!なのは隊長!」

「うん、そうだよ」

「確か隊長達は第97管理外世界の出身。あそこは一夫多妻が普通なのか!」  
「いや、フェイト隊長は違った筈だ」

うーん、何でみんないきなり叫んだの? そんなに驚くことだったかな……

「管理局のエース達の恋人がぽつと出てきたんだ、仕方ないだろ」

「ああ、成る程。合点があったよ、ヴィーチャちゃん」

「あはは、こうなると思ってたわ」

「これで自己紹介になるのかな」

「仕方ない。みんな!このままやと埒が明かんやろから質問し!」

成る程、自己紹介のあとは大体質問タイムがあるからね、そっちのほうがちからの事を伝えやすいし、簡単に知りたいことを教えられるね。

「じゃあ、お三方の馴れ初めとかは……」

「ん、なのはちやんとは幼稚園で会って、フェイトちゃんとは小学生の時に会ったね」

「あの、どちらが告白したのですか！」

「なのはちやんとフェイトちゃんからだね。だいぶ待たせちゃったけど、返事はちゃんとしたよ」

「一緒に住んでるとか？」

「いや、僕は会社で用意した住居に住むよ」

「どうして今は魔法使えないのですか？」

「ちよつと魔力使えずちやつて、使えないというよりも使わないって感じかな」

「で、デートとかするのですか？」

「最近してないね。どうする？なのはちやん、フェイトちゃん」

「明日一緒にご飯食べに行こう！」

「了解」

何だかなのはちやんとフェイトちゃんの事に関することが多いね。やっぱりエースの恋人っていうのは珍しいからかな。

……  
それから、昼ご飯にみんなで親睦会を開いた。えっと、仕事はしなくていいのかな

## 第3話 「見本？」

機動六課に所属してから一週間が経とうとしていた。

魔力の方は皆を現界させる分は差し引いても普通に戦う程度には回復してきてる。

水天日光を使えばいつでも魔力を全開にできるけど、何故か魔力の修行という事で使うのはダメって言われている。

まあ、そんなこんなで王様に報告したり、機動六課の整備士さんのお手伝いしたりして過ごしている。

だけど、今日はなのはちゃんとフェイトちゃんから頼みがあると云われ、機動六課のはやてちゃんがいる部屋に連れてこられた。

「え？ 教導を手伝ってほしい？」

「そう。あの子達もある程度はマシになってきたけど、若干伸び悩んでいる子もいるみたいなんだよね。だからここらで優君みたいな人を目標にしてくれないかなあって思っって教導の手伝いをして欲しいんだ」

「優の力はとんでもないからこそ慢心を持たないでくれると思うんだ。だから手伝って

くれるかな?」

「というわけで、頼むで優君」

「別に構わないんだけどさ。具体的にはどうしたらいいの?」

「そうだね。今あの子達も受けてるプログラムを受けてもらった後、あの子達と軽く模擬戦してあげてくれないかな」

「わかったよなのはちゃん」

「ありがとう優。私は他に仕事あるから見に行けないけど、頑張つてね」

「フェイトちゃんも頑張るんだよ」

というわけで、僕は急遽新人たち、エリオ君達の教導を手伝うこととなった。

移動した場所の前になのはちゃん達と模擬戦した場所。確か機動六課の特別な訓練施設だそうで。色々な地形での戦闘を行える場所だった。

今ここに居るのはなのはちゃんにメカニツクのシャーリーさん。エリオ君とキャロちゃんにスバルちゃんとティアナちゃん。

まずは今日することをなのはちゃんが説明する。

最初に僕が何回か訓練の手本を見せるみたい。やり方は逐次変えてほしいとの事だ。

訓練内容は自律行動型の魔導機械の捕獲か破壊。数は一回の訓練で20個、制限時間は15分。

「じゃあ、みんな。参考になるかはわからないけど、強い人とか上手い人の動きを見るのも訓練になるからしっかり見学するんだよ？」

「「「はい!!!」」」

えっと、取り敢えず僕は訓練所の中心まで移動する。行く前になのはちゃんに渡された記録端末を首から下げておいた。

エリオ君達はなのはちゃんが飛ばしているサーチャーのモニター越しに見るんだって。

『準備ができ次第教えて下さい。魔導機械を召喚します』



さて、確認だ。

僕に与えられている時間は30分。その間に出来れば沢山の戦い方をしてほしいと言われている。

「いけます」

『わかりました。5秒後に訓練範囲内の中に魔導機械を点在させますので、好きなタイミングで開始してください』

最初は捕獲から始めようか。魔力量に心配は無い。

息を吐き、探知結界を展開する。

訓練施設内での動いている存在の確認。

何かが出現した。数は20個。全てを補足完了。

直ぐ様バインドで縛り上げる。

「終わりました」

『え?』

魔力はそんなに減ってないから他にも色々出来るかな。

『優君、ちよつとやり過ぎだよ』

「そうかな？まあもうこのやり方はしないよ」

バインドと探知結界を消す。これで魔導機械を補足できていない状況になった。

10秒待つ。今の間に魔導機械は動いて逃げるだろう。鬼ごっこみたいなものだと考えれば少し童心に帰れるなあ……

「さて……」

木刀を投影し、ビルを駆け上がる。

上から見下ろしたほうが補足出来やすい。見敵必殺。わかりやすい戦い方だ。

風を切る音が聞こえる。何かが移動しているみたいだ。まあ、音の方向はわかるけど距離はわからない。

ビルの壁を蹴り、音が聞こえた方向へ向かう。空中をラウンドシールドという足場を

蹴って移動する。

廃墟ビルの隙間、3体発見。

ラウンドシールドを蹴り、急降下。

地面に着地すると同時に魔導機械に肉薄し、木刀を突き刺す。

あちや、破壊できたけど折れちゃった。魔力で強化していたはずんだけど……まさかこの前言っていた魔力無効化なのかな。

まあ、投影すればいくらでもできるからいつか。

木刀を両手に投影。直線およそ200m先に2体を目視。地面を蹴って一気に距離を詰める。

反撃に魔力弾が飛んで来るのを紙一重でかわし、木刀を突き刺す。

直ぐ様突き刺した木刀を破棄し、新たな木刀を投影しつつ反対の手に持った木刀でもう一体を破壊する。

次のターゲットは……上空に違和感。

見上げると1体の魔導機械がいる。木刀を投擲し、破壊した。

付近にはもういないかな。

再度ビルを駆け上がり今度は屋上に到着する。  
弓を投影し、木刀を矢に変形させ構える。

魔導機械8体を補足、及び射線が通っている。

キリキリと音を立てながら引き、矢を放った。

直ぐ様投影し補填。発射。補填。発射。

8体の撃破を確認。残りは6体。外にはいない。恐らくはビルの中かな。

探知結界……いや、使わないでおこう。

ここは……自分の信じるままに放つ。

矢を投影……

今回は特別製。一射だけの矢。

ただの矢では意味が無い。力を秘めた矢。魔力を消費し、投影する。

それは因果を逆転させる力を秘めた槍。狙った獲物を何処までも追い続ける宝具。

英雄、クーフーリンさんの持つ槍、ゲイ・ボルグ……矢に変形……火のルーンを刻み

……

放った。

◇

訓練を開始してからもうすぐで30分が経過する。

見せたやり方は12通り。これで最後になるだろう。

宝具の投影でだいぶ魔力を消費したけど、まだ余裕はある。

時間が足りないから探知結界を展開する。

魔導器界の場所の補足を完了。

手のひらに魔力弾を精製。数は一つ。でもただの魔力弾ではない。魔力を無効化にされるのに対応するために何層にも魔力をコーティングしたものだ。層の数は余分に見て30層。

放つ。

障害物を無視し、魔導機械を破壊する。探知結界で確認しながら魔力弾を操り破壊していく。

ものの30秒。魔力弾を放ってから20体の魔導機械を破壊した時間。

『お疲れ様優君。これで終わりだよ』

「こんな感じでよかったかな？」

『ちよつとやり過ぎかもしれないけど、色々な戦い方を見るって目的は達成されたから上々だよ』

訓練施設の風景が元に戻っていく。

取り敢えずなのはちゃん達のいる場所に向かう。

着くと、何故か暗い顔をしている4人の姿が……一体何があったのだろうか。

「ほらほら、みんな落ち込まない。流石に優君の真似をしろとは言わないけど、色々と参

「考になる事はあったでしょ?」

「確かにそうですが。あの練度、正直自信無くします」

ああ、なるほど。この訓練よくやっているから初めてやる僕が何回もクリアするのはちよつと複雑なのかな。悪い事しちやつたかなあ……

「あ、あの」

「ん?どうしたの?ティアアナちゃん」

「最後の多重弾核射撃魔法、コツとか教えてもらえますか?」

えっと、最後のつてことはあの何層もの魔力で包んだ魔力弾のことか。

「うーん。ティアアナちゃんは少しは使える?」

「はい。一応使えますけど、まだまだ未熟で……」

「見せてくれないかな?」

「わかりました」

ティアナちゃんが銃型のデバイスを構えて魔力弾を生成する。そして魔力の層で包もうとしているんだけど、結構時間かかってるね。

「……できました」

包めた層は一層。これじゃあ一気に多くの魔導機械を破壊することは出来ないね。

「そうだね。そのまま保っていてね」

「はい」

「肩の力を抜いて。魔力を少し力任せに込めちゃってるよ」

「……………」

「魔力で包む場合は、弾の周りに貼り付けていくんじゃない、一度魔力を弾の周りに散らせてから圧縮してごらん。慣れたら周囲の魔力も取り込んで層を作れるから」

「……………」

お、2層目が形成されだした。中々筋が良いね、この子。

魔法に大切なのはイメージ。この多重弾核射撃魔法って言うのもイメージが大切だ。



僕の場合、魔力で包むというよりは包んでいる魔力を濃くするってイメージで行っている。

「で、出来た……」

お、2層目が形成されてる。これって凄いいんじゃないかな。

「出来ました!」

「良かったね。じゃあ取り敢えずそれは危ないから消しちやおうね」

「はい!」

ちゃんと消せるんだ。魔法を任意で消すって案外難しかったりするのにな、何だかんだ言つてはやてちゃんが見つけてきた子っていうのは伊達じゃないんだね。

「良かったね、ティアナ。他の皆も優君に聞きたいこととかあれば今のうちに聞いといてね。10分後に訓練を再開します」

なのはちゃんがそう告げると、残りの3人が一斉に近寄ってきた。